

清武町埋蔵文化財調査報告書 第12集

S U D A K I

# 須田木遺跡

清武町第2工業団地造成工事に伴う埋蔵文化財調査報告書

2004

清武町教育委員会

# 序

本町は、黒潮洗う日向灘に近く、温暖な気候は日南山塊を育み、その山や海の恵みに私たちの生活はずっと支えられてきました。

今以上に温暖であったとされる縄文時代の遺跡が町内には多数所在しますが、その中のひとつである須田木遺跡の発掘調査を行いました。

須田木遺跡の調査については、限られた時間のなかでいかに調査を行うかという大きな課題を抱えて開始されました。考えられうる手法について検討を加え、町及び町議会の理解とご協力を頂き、さらに県教育委員会からは調査員の派遣という多大なご支援を受けて調査を無事終了することができました。

調査に於いて、縄文時代の早期から平安時代にかけての人々の生活の跡が確認されました。特に縄文時代に位置付けられる集石遺構に関しては172基もの数に上り、全国最大級の大きさのものも確認されるという成果を得ることが出来ました。

この度、その須田木遺跡の発掘調査報告書を刊行する運びとなりました。ご協力頂いた関係各位に御礼を申し上げるとともに、この報告書が歴史研究、特に全国的に注目を受けている南九州の早期縄文文化研究の一助となることを期待します。

平成16年3月

清武町教育委員会

教育長 湯 地 敏 郎

# 例 言

1. 本書は、清武町第2工業団地造成工事に伴う、須田木遺跡の発掘調査報告書である。
2. 調査は清武町教育委員会が主体となり、宮崎県文化課、宮崎県埋蔵文化財センターより調査員の派遣を受けて行った。
3. 本書の遺構実測は面高哲郎・石川悦雄・永友良典・菅付和樹・吉本正典・鳥原孝仙・山田洋一郎・小山博・  
が行った。また集石遺構の平面図作成には  
写真解析図化機を用いた。
4. 遺物・図面の整理は清武町埋蔵文化財センターにて、伊東但・井田篤・秋成雅博・富田卓見・鈴木資子・河野雅人・若杉知和・  
が行った。
5. 本書に撮影した遺構写真は永友・吉本・鳥原・山田・小山・伊東が行った。
6. 本書に撮影した遺物写真は秋成・富田が撮影を行った。
7. 本書に使用した記号は以下のとおりである。  
SA：竪穴住居跡 SI：集石遺構 SC：土坑 SE：溝状遺構 SX：不明遺構
8. 本書に使用した土器の実測図の断面は須恵器を黒塗りにそれ以外のものは白抜きとした。
9. 本書に使用した方位は第4・40・57図は真北で、その他の図面は磁北である。また、レベルは海拔絶対高である。
10. 本書の作成にあたって以下の方々から貴重なご指導とご助言をいただきました。記して感謝申し上げます。（敬称略）  
永友良典（宮崎県立総合博物館）、松本茂・藤木聡・今塩屋毅行・高木祐志（宮崎県埋蔵文化財センター）、森田浩史・金丸武司（田野町教育委員会）、島田正浩・廣田晶子（高岡町教育委員会）、梅木謙一（松山市生涯学習振興財団）
11. 本書の執筆・編集は秋成・伊東が行い、各分担は目次に示している。
12. 本書にかかる遺物・写真・図面等の資料は清武町埋蔵文化財センターに収蔵・保管している。

# 目 次

第1章	はじめに	(伊東)	1
第1節	調査に至る経緯		1
第2節	調査の経過と組織		1
第3節	地理的歴史的環境		2
第4節	調査の概要と基本層序		2
第2章	古代の調査	(秋成)	6
第1節	竪穴住居について		6
第2節	土坑について		14
第3節	包含層出土の古代の遺物について		19
第3章	弥生時代の調査	(秋成)	26
第1節	竪穴住居について		26
第2節	土坑について		37
第3節	包含層出土の弥生土器について		42
第4章	縄文時代後期の調査	(秋成)	49
第1節	土坑について		49
第2節	包含層出土の縄文時代後・晩期土器について		49
第5章	縄文時代早期の調査		53
第1節	集石遺構について	(伊東)	53
第2節	土坑について	(伊東)	52
第3節	包含層出土の縄文時代早期の土器について	(秋成)	92
第6章	その他の遺構・遺物について	(秋成)	103
第1節	その他の遺構(溝状遺構・不明遺構)について		103
第2節	柱穴について		103
第3節	包含層出土石器について		108
第4節	旧石器時代の遺物について		119
第7章	まとめ	(秋成・伊東)	122
付編	自然科学分析調査報告書	(株式会社 古環境研究所)	126
調査抄録			155

# 挿 図 目 次

第1図	須田木遺跡位置図	3	第37図	SC-33及びSC-33出土遺物実測図	49
第2図	須田木遺跡周辺地形図	4	第38図	包含層出土縄文時代後・晩期土器 実測図①	50
第3図	須田木遺跡基本土層模式図	5	第39図	包含層出土縄文時代後・晩期土器 実測図②	51
第4図	アカホヤ層上面遺構配置図	7	第40図	集石遺構配置図	56
第5図	SA-1及びSA-1出土遺物実測図①	8	第41図	SI-1・2・5・6・8・15実測図	58
第6図	SA-1出土遺物実測図②	9	第42図	SI-9・11実測図	59
第7図	SA-1出土遺物実測図③	10	第43図	SI-10・172・175・176実測図	60
第8図	SA-1出土遺物実測図④	11	第44図	SI-12・13実測図	61
第9図	SA-1出土遺物実測図⑤	12	第45図	SI-14・17実測図	62
第10図	SA-1出土遺物実測図⑥	13	第46図	SI-19・21実測図	63
第11図	SA-1出土遺物実測図⑦	14	第47図	SI-16・20・23~25・27実測図	64
第12図	SC-50及びSC-50出土遺物実測図①	15	第48図	SI-28・30~33実測図	65
第13図	SC-50出土遺物実測図②	16	第49図	SI-34~36・38実測図	66
第14図	SC-5・6・7出土遺物実測図	18	第50図	SI-37・39・40・44実測図	67
第15図	包含層出土土師器実測図	20	第51図	SI-41・42・46・48~50実測図	68
第16図	包含層出土土師器・須恵器実測図	21	第52図	SI-51~53・55・58~60・124実測図	69
第17図	包含層出土須恵器・土錘実測図	22	第53図	SI-61・62・64~67・71・72実測図	70
第18図	SA-2及びSA-2出土遺物実測図①	27	第54図	SI-73~77・79及びSC-44実測図	71
第19図	SA-2出土遺物実測図②	28	第55図	SI-82~84・87・88・98・99実測図	72
第20図	SA-3及びSA-3出土遺物実測図	29	第56図	SI-90・92実測図	73
第21図	SA-4及びSA-4出土遺物実測図①	30	第57図	SI-101~120・170実測図	74
第22図	SA-4出土遺物実測図②	31	第58図	SI-93・96・97・152実測図	76
第23図	SA-4出土遺物実測図③	32	第59図	SI-100・102・103・105・107実測図	77
第24図	SA-4出土遺物実測図④	33	第60図	SI-104実測図	78
第25図	SA-5及びSA-5出土遺物実測図	34	第61図	SI-110・111・113~115実測図	79
第26図	SA-6実測図	35	第62図	SI-112実測図	80
第27図	SA-6出土遺物実測図	36	第63図	SI-117~120実測図	81
第28図	SC-34~36・38実測図	38	第64図	SI-121~123・125・127実測図	82
第29図	SC-39~41実測図	39	第65図	SI-128・129・132~136・ 138・139実測図	83
第30図	SC-42及びSC-34~36・38 出土遺物実測図	40	第66図	SI-142~149・153実測図	84
第31図	SC-39・41出土遺物実測図	41	第67図	SI-154~160実測図	85
第32図	SC-42・1出土遺物実測図	42	第68図	SI-161~164・171・173実測図	86
第33図	包含層出土弥生土器実測図①	43	第69図	集石遺構出土遺物実測図①	87
第34図	包含層出土弥生土器実測図②	44	第70図	集石遺構出土遺物実測図②	88
第35図	包含層出土弥生土器実測図③	45			
第36図	包含層出土弥生土器実測図④	46			

第71図 集石遺構出土遺物実測図③	89	第82図 包含層出土石器実測図①	109
第72図 集石遺構出土遺物④・SC-43及び SC-43出土遺物実測図	90	第83図 包含層出土石器実測図②	110
第73図 SC-44出土遺物実測図	91	第84図 包含層出土石器実測図③	111
第74図 包含層出土縄文時代早期土器実測図①	93	第85図 包含層出土石器実測図④	112
第75図 包含層出土縄文時代早期土器実測図②	94	第86図 包含層出土石器実測図⑤	113
第76図 包含層出土縄文時代早期土器実測図③	95	第87図 包含層出土石器実測図⑥	114
第77図 包含層出土縄文時代早期土器実測図④	96	第88図 包含層出土石器実測図⑦	115
第78図 包含層出土縄文時代早期土器実測図⑤	97	第89図 包含層出土石器実測図⑧	116
第79図 SE-2~4出土遺物実測図	104	第90図 包含層出土石器実測図⑨	117
第80図 SX-1及びSX-1出土遺物実測図	105	第91図 包含層出土石器実測図⑩	118
第81図 柱穴出土遺物実測図	107	第92図 旧石器時代遺物実測図	119

## 表 目 次

表 1 古代遺構内出土石器計測表	22	表12 縄文時代早期遺構内出土石器計測表	100
表 2 古代土器観察表①	23	表13 縄文時代早期土器観察表①	100
表 3 古代土器観察表②	24	表14 縄文時代早期土器観察表②	101
表 4 古代土器観察表③	25	表15 縄文時代早期土器観察表③	102
表 5 弥生土器観察表①	47	表16 溝状遺構・SX-1・柱穴内出土土器 観察表	106
表 6 弥生土器観察表②	48	表17 溝状遺構・柱穴内出土石器観察表	106
表 7 弥生時代遺構内出土石器計測表	48	表18 包含層出土石器計測表①	120
表 8 縄文時代後・晩期土器観察表	52	表19 包含層出土石器計測表②	121
表 9 集石遺構計測表①	98	表20 旧石器時代遺物計測表	121
表10 集石遺構計測表②	99		
表11 集石遺構計測表③	100		

## 図 版 目 次

カラー図版 1 須田木遺跡全景①・SI-101~120・170①	129
カラー図版 2 SI-112・SI-112半截	130
カラー図版 3 SI-104・SI-104調査風景	131
図版 1 アカホヤ層上面調査区北側・SA-1・SC-50・6・7	132
図版 2 SA-2~6・SC-1・34・39	133
図版 3 SC-40・41・柱穴検出状況・SC-33・SE-3土層断面	134
図版 4 SI-1~3・5・8・9・11・12	135

図版 5	SI-13~15・17・19・19上部礫除去後・23・24	136
図版 6	SI-30・31・33・35・37・37配石・38・39	137
図版 7	SI-41・50・59~61・64・73・78	138
図版 8	SI-79・82・90・92・93・97~99	139
図版 9	SI-101~120・170②・100・102・103・107	140
図版10	SI-104半截・104・104配石・112半截・112配石	141
図版11	SI-113~115・118・119・121・122・133~135・144	142
図版12	SI-147・149・151・154・155・157~159	143
図版13	SI-160・164・須田木遺跡全景②	144
図版14	SA-1出土遺物①・②・③	145
図版15	SA-1出土遺物④・⑤・SC-50出土遺物①・②・③・④・SC-7出土遺物①・ 包含層出土土師器①	146
図版16	SC-50・5・6・7出土遺物・包含層出土土師器・土製品・包含層出土土師器②・ 包含層出土須恵器・SA-2・3出土遺物	147
図版17	SA-2出土遺物・SA-4出土遺物①・②・③・④	148
図版18	SA-4・5出土遺物・SA-6出土遺物①・②・③・SC-34出土遺物・SC-38・41出土遺物	149
図版19	SC-41出土遺物・SC-35・36・1出土遺物・包含層出土弥生土器①・②	150
図版20	SC-33出土遺物・包含層出土縄文後・晚期土器・集石遺構内出土遺物・SC-44出土遺物①・②	151
図版21	SC-43出土遺物 包含層出土縄文早期土器①・②・③	152
図版22	SE-2~4・SX-1・柱穴内出土遺物・包含層出土石器①・②	153
図版23	包含層出土石器③・SI-101~120・170調査風景	154

# 第1章 はじめに

## 第1節 調査に至る経緯

平成8年初旬、清武町内において第2工業団地造成の計画が急遽浮上し、当該計画地内に周知の埋蔵文化財包蔵地須田木遺跡が所在していたことから清武町教育委員会ではその取り扱いについて事業主体である清武町土地開発公社との協議を開始した。

造成工事は14haに及ぶ範囲において行われ、須田木遺跡の所在する丘陵を大規模に削平するというもので、町教育委員会は急遽、遺跡の範囲や性格の把握のため平成8年4月24・25日の期間で16ヶ所のトレンチを設定して試掘調査を実施した。その結果、畑の耕作や削平などにより一部影響を受けているものの約13000㎡の範囲において縄文時代早期を中心とした遺跡の存在が確認された。

この結果を受けて、遺跡の保存についての協議が重ねられたが、事業計画自体に変更の余地は無く、発掘調査を行って記録保存とする事となった。

## 第2節 調査の経過と組織

工業団地造成計画は誘致の関係から完成期限が設けられており、さらに用地の買収や開発にかかる関係法許認可の見通し後の発掘調査開始という制約から十分な調査期間の確保は見込めない状況にあった。

また町教育委員会の調査体制も他に3遺跡約21000㎡の調査が当年度すでに計画されており、それまでの1名体制から新たに1名の調査員を確保してこれに対応するところであった為、新たな調査に対応する余力も無かった。

このため、県文化課に調査員の派遣を御願ひしたところ、山積する業務の調整をおこなって、常時4名、延べ9名の調査員を派遣していただける事となった。

調査組織は以下のとおりである。

### 調査主体

清武町教育委員会

教育長	黒崎 改司
教育次長	谷口 忠誓
社会教育課長	戸高 輝利
課長補佐兼文化係長	落合 兼雄
文化係主任	川越 健（庶務担当）
文化係主任	伊東 但
嘱 託	井田 篤

### 調査担当

宮崎県教育庁文化課

埋蔵文化財係長	面高 哲郎
---------	-------



埋蔵文化財係主査	石川 悦雄
埋蔵文化財係主査	永友 良典
埋蔵文化財係主査	菅付 和樹
埋蔵文化財係主査	柳田 宏一
文化財係主事	吉本 正典

#### 宮崎県埋蔵文化財センター

調査第1係主査	鳥原 孝仙
調査第1係主任主事	山田洋一郎
調査第1係主事	小山 博

### 第3節 地理的・歴史的環境

須田木遺跡は、県央宮崎平野の南部、清武町大字加納字須田木に所在し、清武川左岸に沿って清武町を東西に分断する丘陵の町域最東端部に位置する。海岸線までの距離は約4.5kmである。

丘陵は多数の谷により枝分かかれし、それぞれの丘陵上の平坦部には遺跡が確認されている。須田木遺跡の谷を挟んだ南側の丘陵上には昭和54年に調査され、縄文時代早期の土器群や石器が多数出土した辻遺跡と若宮田遺跡が所在し、宮崎市との市町境を越えてさらに東に延びる丘陵内約2kmの距離には県内では貴重な資料である古代の須恵器窯、松ヶ迫窯跡が所在する。また清武川が形成した沖積平野を挟んだ対岸には宮崎学園都市遺跡群の所在した熊野台地を望むことができる。

須田木遺跡の立地する丘陵先端部も東から中央に谷が切り込み、遺跡の東半分は二肢に分かれていて、遺跡全体はちょうど東に足を向けたズボンのような形状となっている。遺跡内はほぼ平坦で標高は約50m、周囲の低地との比高差は約30mで、眺望が開け太平洋を望むことができる。

遺跡の東側は一旦丘陵が低くなっており、江戸時代前期（寛永17年）に恒久、赤江方面の農業用水路として開削された松井用水路が横断している。現在、偉人として顕彰されている松井五郎兵衛儀長が命を掛けて行ったこの事業の難所がちょうど遺跡の東裾部分で「須田木の岡」と記録されている。

また遺跡は幕藩期の飢肥藩清武郷の中心で、武家屋敷が軒を連ねた中野地区から連続する丘陵上に位置し、藩士の馬や鉄砲などの調練場であったと伝えられる場所であったが、それを裏付けるように球形の鉛弾が数個出土している。

### 第4節 調査の概要と基本層序

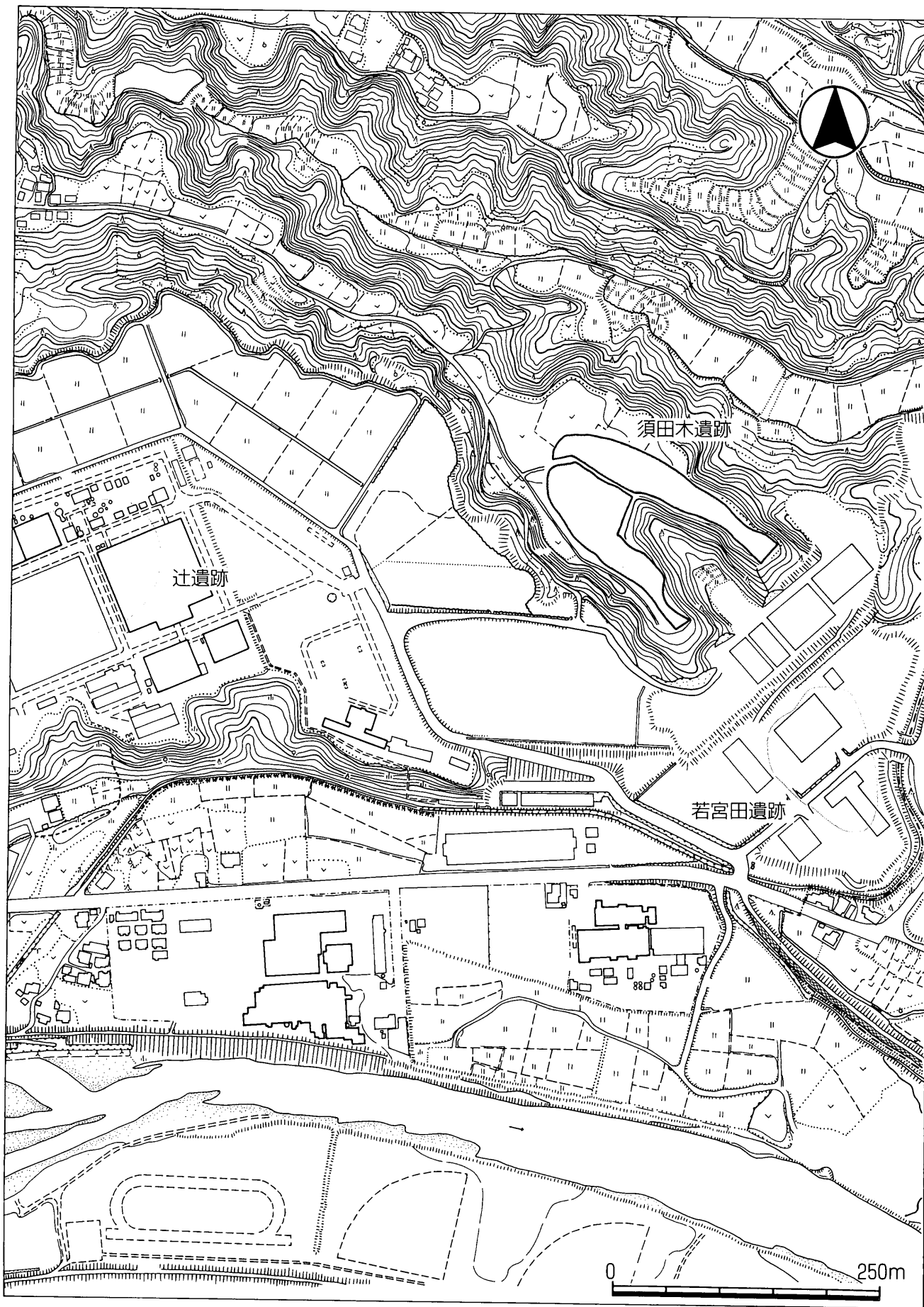
数度に渡る協議の結果、調査期間は9月初めから11月末日までの約3ヶ月間という大変厳しいものとなった。これに対処すべく4名の調査員に80名の作業員という体制のほか、記録作業の効率化のため光波測距機とコンピューターを利用した遺跡測量システムを新たに導入して平成8年9月2日から調査を開始した。

調査区の基本層序は耕作土直下に黒色土、その下位に所謂二次アカ層、さらにアカホヤ層、暗褐色硬質土層、茶褐色土層、暗褐色硬質土層、明黄白色粘質土層、礫層と続くものであった。同じ丘陵の上流部に所在する船引地区遺跡群の基本層序と比べて、二次アカによる要因かアカホヤ層が明瞭でなく、アカホヤ層直下層も黒味が弱いため、全体的に色相変化の乏しい感覚を受けるものであった。



- |             |            |           |              |             |
|-------------|------------|-----------|--------------|-------------|
| 1. 須田木遺跡    | 2. 若宮田遺跡   | 3. 辻遺跡    | 4. 菖蒲迫遺跡     | 5. 中原遺跡     |
| 6. 槍ノ内第2遺跡  | 7. 槍ノ内第1遺跡 | 8. 古陣遺跡   | 9. 傘松遺跡      | 10. 中ノ尾第2遺跡 |
| 11. 中ノ尾第1遺跡 | 12. 清武城跡   | 13. 不動迫遺跡 | 14. 札立第1遺跡   | 15. 札立第2遺跡  |
| 16. 下猪ノ原遺跡  | 17. 園田遺跡   | 18. 長嶺遺跡  | 19. ぎこもん屋敷遺跡 | 20. 町ノ前遺跡   |
| 21. 福神屋敷遺跡  | 22. 岡ノ屋敷遺跡 |           |              |             |

第1図 須田木遺跡位置図 (S= 1/25000)



第2図 須田木遺跡周辺地形図 (S= 1/5000)

また、下層の礫層は船引地区遺跡群では見られず、近辺では中野地区や本遺跡の約1km上流部で清武川と合流する水無川両岸に見られるもので、水無川右岸の丘陵上ではこの礫層の下層からAT層が確認されている。

須田木遺跡の現状は畑地で、調査はこの耕作土の除去から開始したが、平坦に見られた調査区は元来起伏があったようで、二次アカホヤ層から残存していたのは北西部と中央の谷の延長部に限られ、他は耕作土直下にアカホヤ層下位の層が露出し、集石遺構や焼石が多数散乱する状況であった。

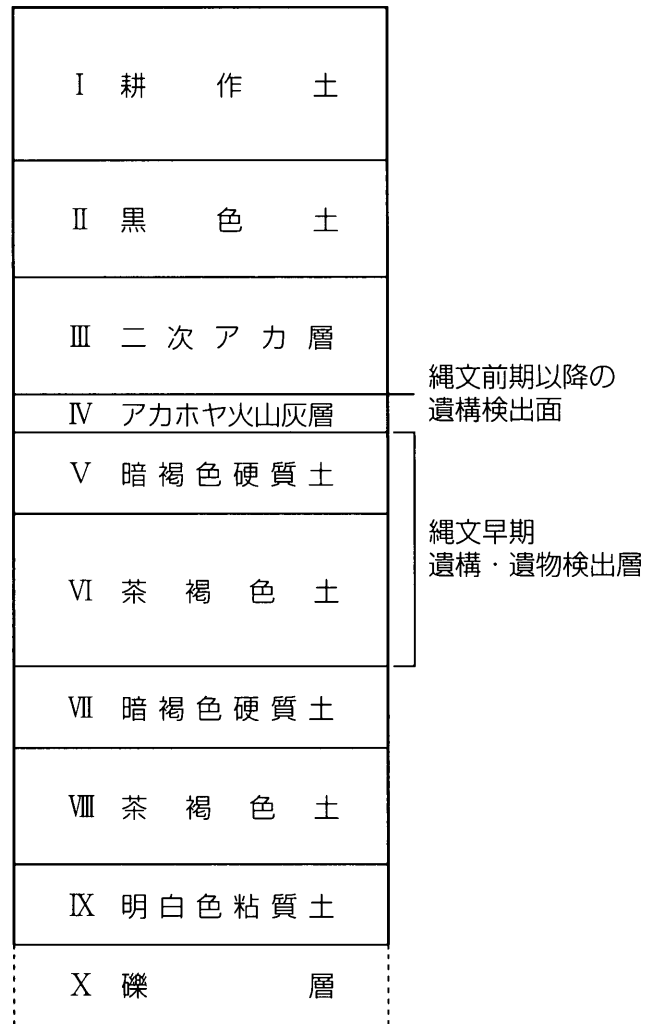
このため定石どおりアカホヤ層上層の調査から進める事とし、二次アカホヤ層を下げながら遺物の取り上げをおこない、アカホヤ層を遺構確認面として精査をおこなった。この結果弥生時代の竪穴式住居跡5軒と土坑22基。歴史時代の竪穴式住居跡1軒と土坑4基。縄文時代後期の土坑1基外時期不明の土坑4基を検出した。

この後、順次調査をアカホヤ層下位に移したが、日を増して検出される集石遺構の数が増加し、最終的に172基という全国最多規模の検出数となった。

予想外の集石遺構数からその記録作業が調査の進行を圧迫する状況となる中、大半の集石遺構が未記録のまま調査期限が迫り、新たな対策と調査期間の延長の協議が開始された。調査期間については延長となり、集石遺構の記録については新たに航空写真解析図化機を購入して写真測量で対応する事となった。

具体的な記録方法については調査員間で協議を重ね、平面図については公式レンズデータのある航測カメラ（ハッセルブラッドMkW）を使用して、3mの高度から80%ラップを基準に1モデル撮影として作図することとし、このため出来る限り下部の石を露出させる必要から発電機と掃除機を導入して礫間の埋積土を除去する事とした。断面図については基本的に1方向作成とし、内部礫の半截をおこなって礫の充填状況を写真で記録して見通し図に替え、内部礫及び掘り込みの断面のみ手実測で作図する事とした。完掘を行い、配石がある場合は掘り込みと共に作図する事とした。

これにより当初期限後手付かずであった約120基の集石遺構の記録作業を進め、平成9年2月20日をもってすべての調査を終了した。



第3図 須田木遺跡  
基本土層模式図 (S= 1/30)

## 第2章 古代の調査

### 第1節 竪穴住居について

#### ■SA-1 (第5～11図・表1～3)

SA-1は3.9m×4.1mの不整形な方形プランを呈し、検出面からの深さは0.3mを測る。北東側に煙道を持つ竈を付設する。煙道の長さは0.3mで先端部の深さは0.5mを測る。柱穴は床面より4本検出された。柱穴の規模は四本とも径0.15m程度で深さは床面より0.1m程度のものであった。

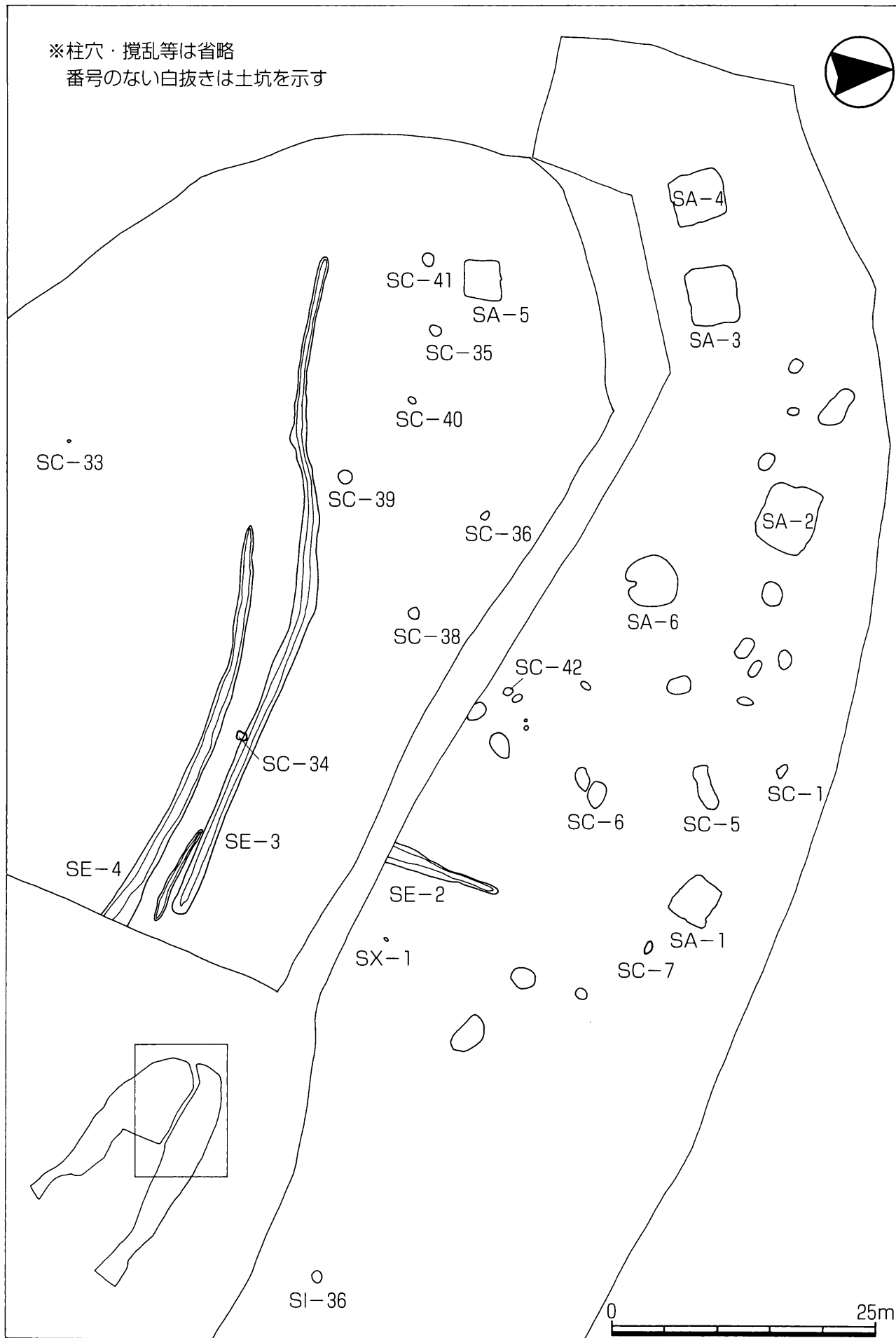
床面及び埋土中からは多量の土師器片・須恵器片が出土し、また石器・軽石・鉄器などが数点出土している。住居址自体の残存状況はあまり良好ではなく南側の立ち上がりや竈付近に攪乱をうける。また、床面中央部には焼土および炭化物の分布が見られた。

また、中央のやや東側にSA-1とは切り合い関係が把握できていないが、土坑(SC-50)が存在する。このSC-50はこの住居址に付設する施設ではないと考えられる。

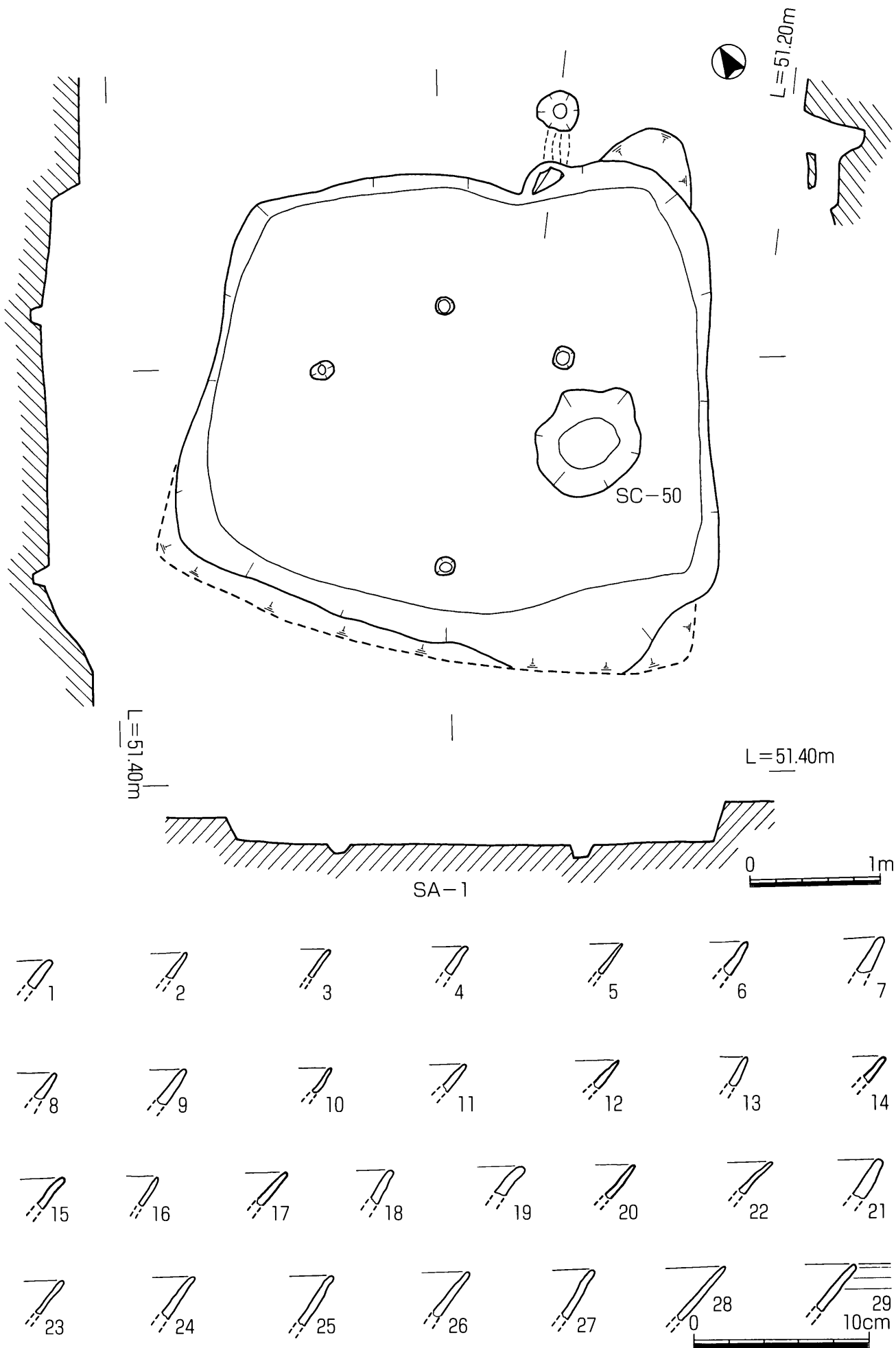
SA-1の出土遺物についてはSC-50との切り合い関係を把握できていないまま遺物を取り上げたので、遺物の平面分布上SC-50にかからなかった遺物をSA-1の出土遺物として報告を行う。

1～44は杯の口縁部片である。34・40のように稜線を明瞭に残すものもある。30・39・41は内面に丹塗りが見られる。44は焼けひずんでいるが内外面にヘラ記号が見られる。45～52は杯の底部片である。全てヘラ切り後ナデ調整を行う。53～58は杯の破片である。54～58は図面上ではほぼ完形になる資料で、体部は全て直線的である。また底部は全てヘラ切り後ナデ調整を行う。59・60は高台付き椀の底部片である。60は不明瞭であるが内面に丹塗りを施した痕跡がみられる。61～63は椀の口縁部片である。64・65・68・69は皿の口縁部片である。66は皿の底部である。67・70は図面上ではほぼ完形になる皿の破片である。71は鉢の口縁部片である。二次的な焼成をうけたためか外面は剥落が著しく、色調の変わる部分もある。72は鉢の底部片である。底部はヘラ切り後ナデ調整を施し、煤が付着している。73は図面上ではほぼ完形になる鉢の破片である。内外面ともに胴部下半～底部はミガキ調整を施している。74～82は甕の口縁部片である。83・84は甕の口縁部～頸部片である。85～96までは甕の胴部片である。85～87は叩き調整を行わないもの、88は内面に平行線状の当て具痕を残すもの、89～93は外面に叩き調整を施すもの、94～96は外面に叩き調整、内面に当て具痕を残すものである。97・98は甕の口縁部～胴部上半部まで復元できる破片である。97は外面が煤で覆われている。98は内面に削りの痕跡を著しく残している。99は甕の破片である。二つの破片で接合はしなかったが同一個体と思われ、図面上では完形に復元できる。100～115は布痕土器の口縁部片・胴部片である。116～118は布痕土器の破片で図面上ではほぼ完形に復元できる。101・104・106・114・116は二次的な焼成のためか風化・赤化が著しい。

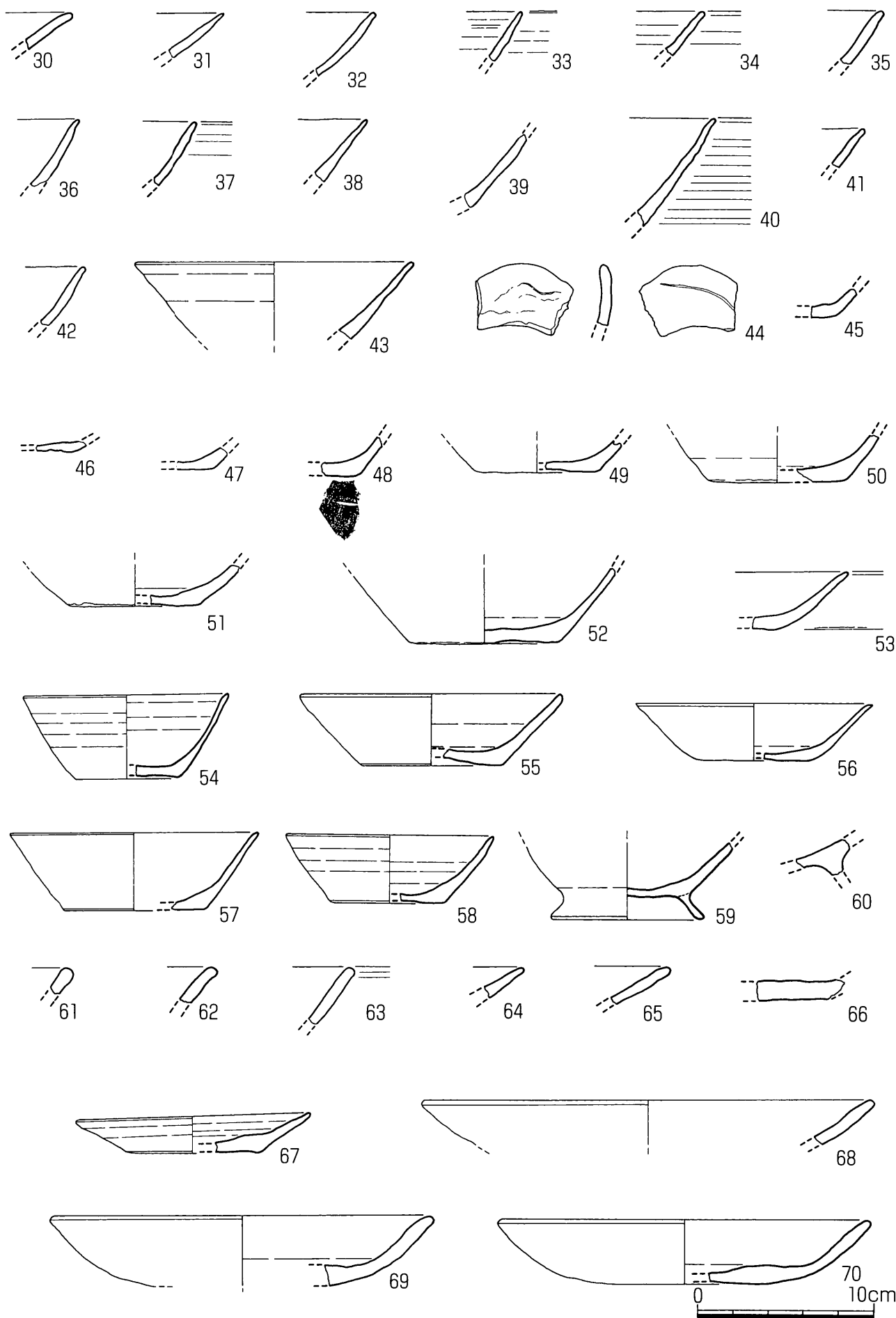
119～131までは須恵器である。119・120は杯の口縁部片である。121～123は鉢の底部である。124は甕の口縁部である。125は大甕の頸部で、焼けひずんでいる。126～128は大甕の胴部片である。いずれも内面に放射状の当て具痕、外面に格子状の叩き目を残す。また、外面に自然釉が付着する。129は壺の頸部～底部片である。欠損が著しいが鏝付きで、少なくとも二個以上耳がついていたであろう。焼成時にひび割れを起こし、内面に自然釉が付着している。また、焼けひずみも著しい。外面



第4図 アカホヤ層上面遺構配置図 (S=1/500)

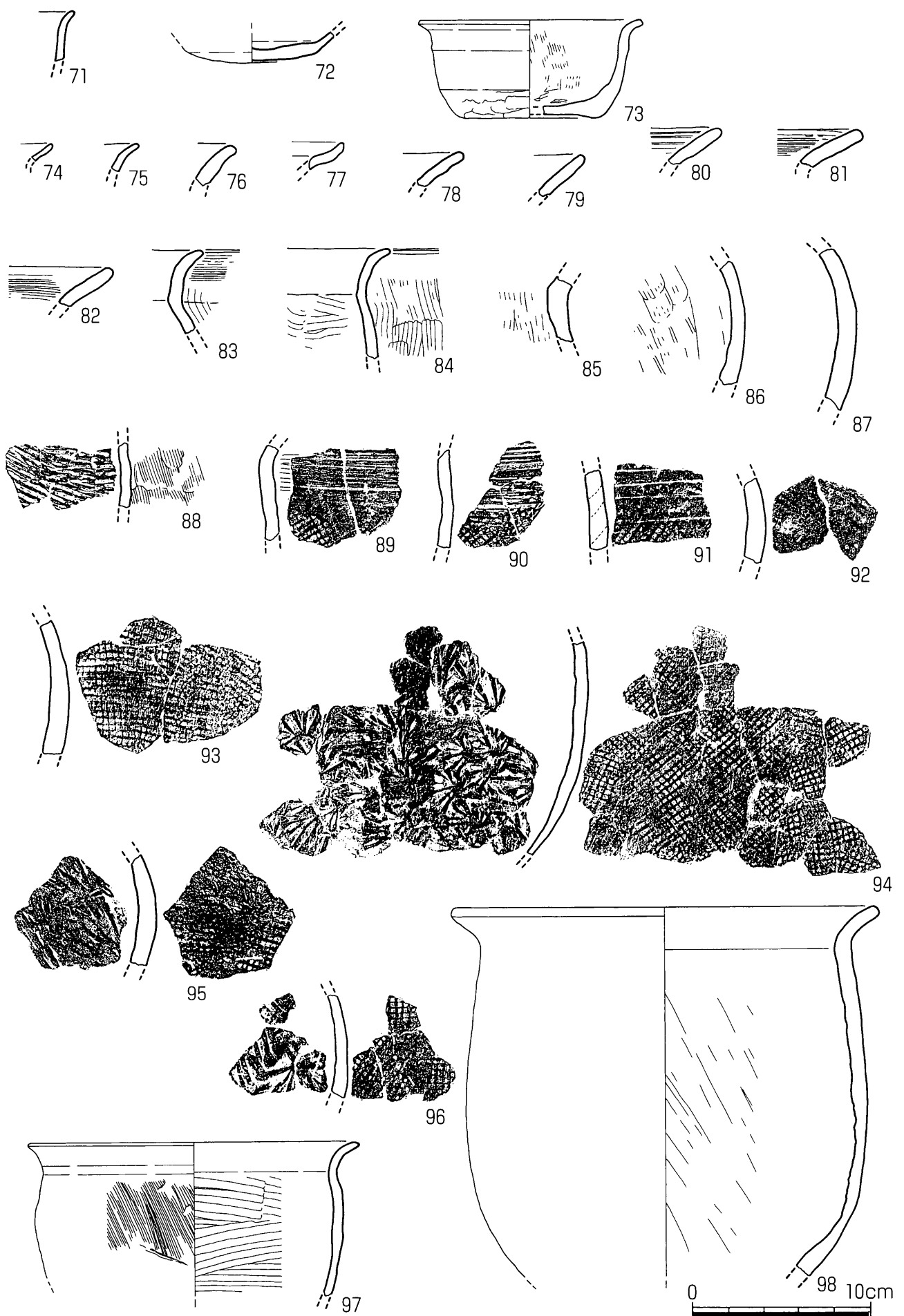


第5図 SA-1及びSA-1出土遺物実測図① (S=1/40, 1/3)

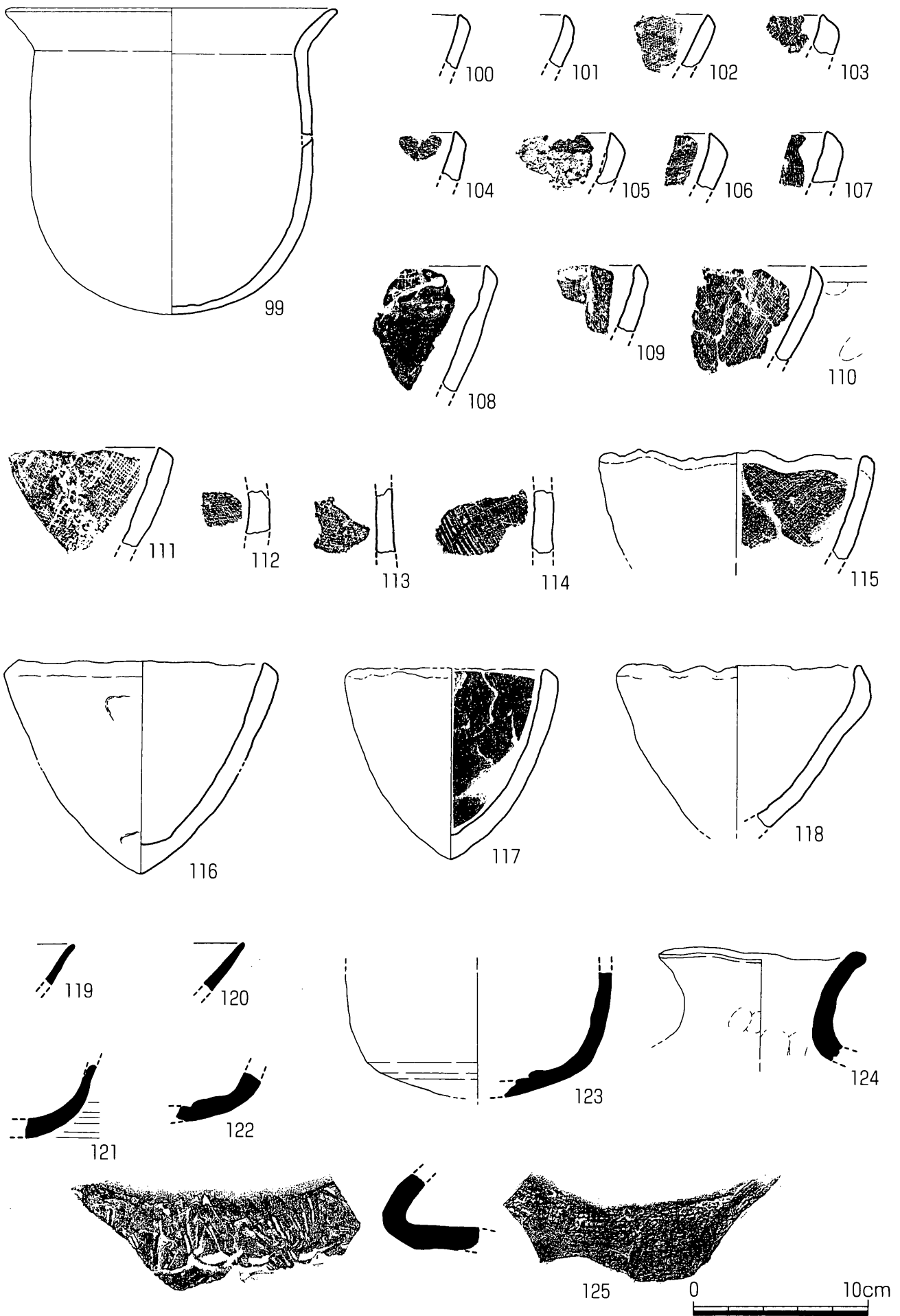


第6図 SA-1 出土遺物実測図② (S= 1/3)

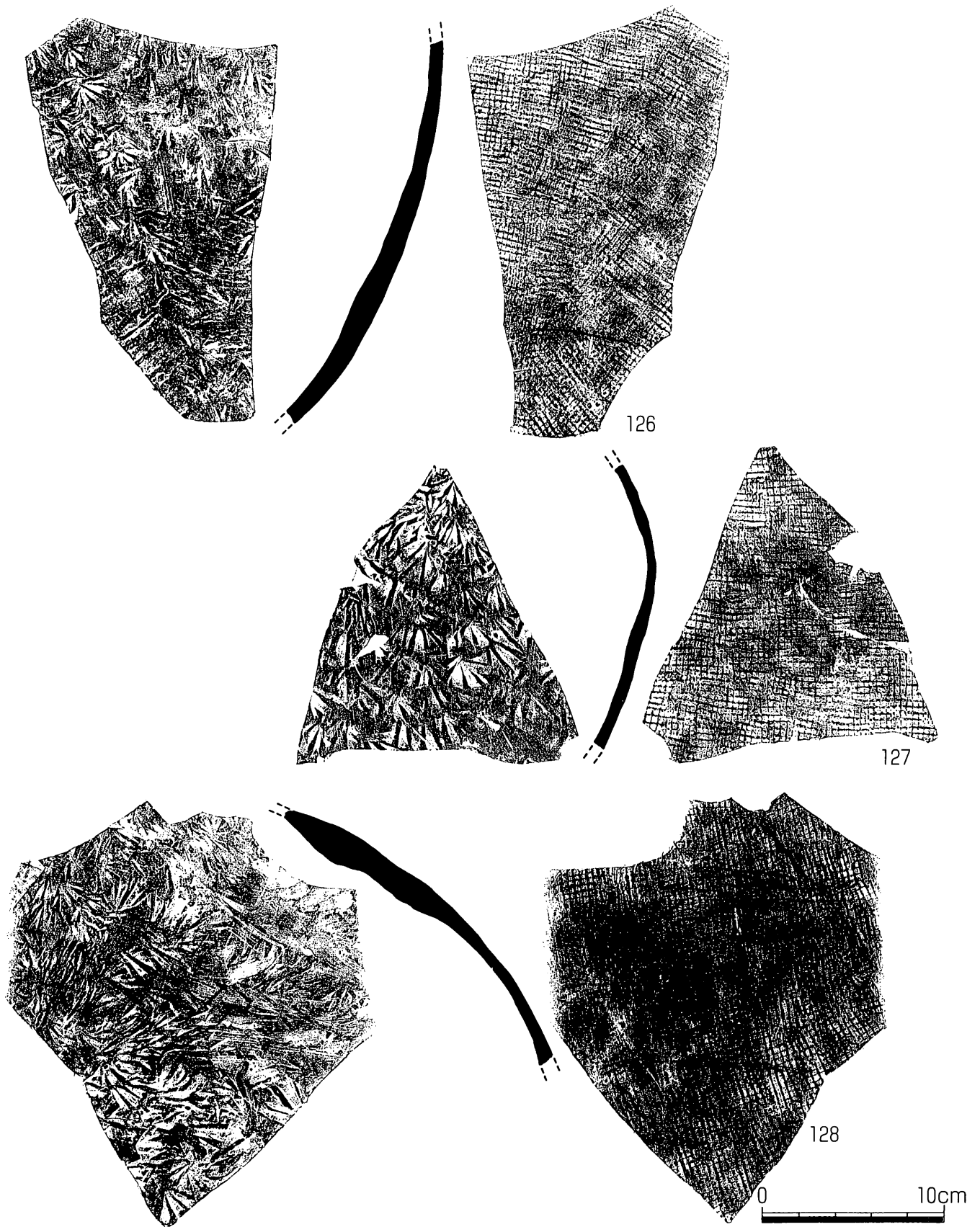




第7图 SA-1出土遺物実測図③ (S= 1/3)

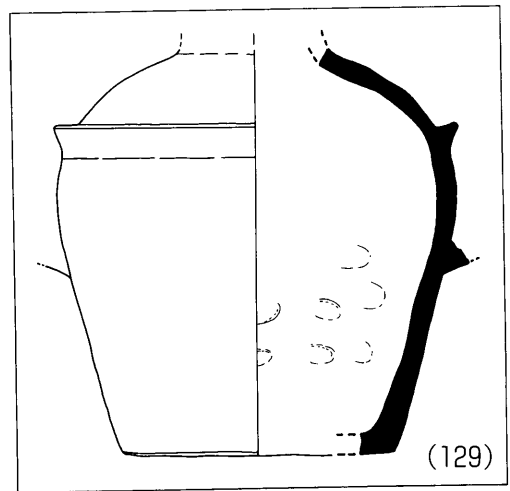
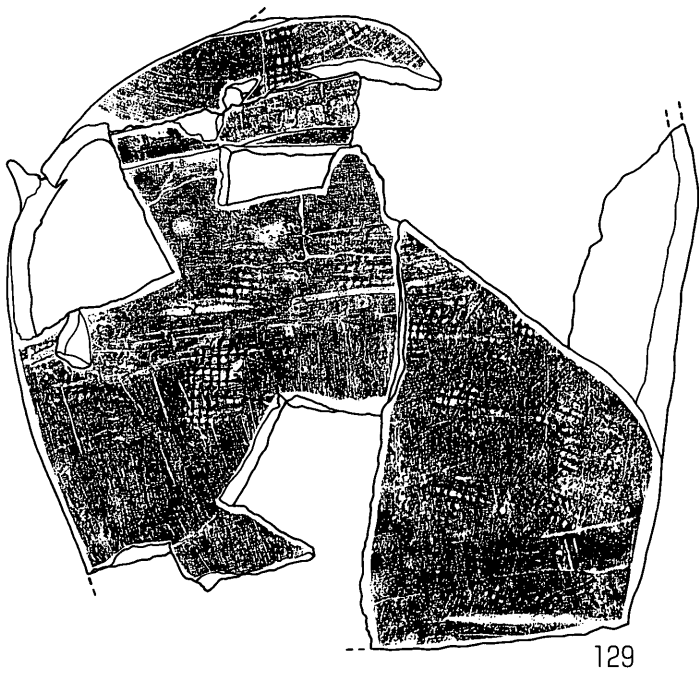


第8图 SA-1出土遺物実測図④ (S=1/3)

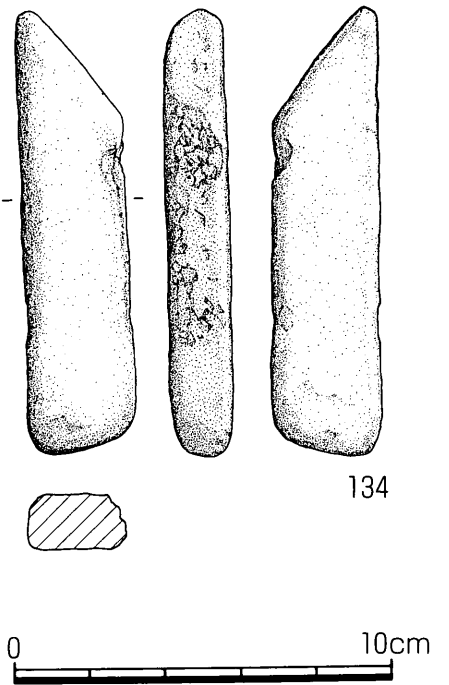
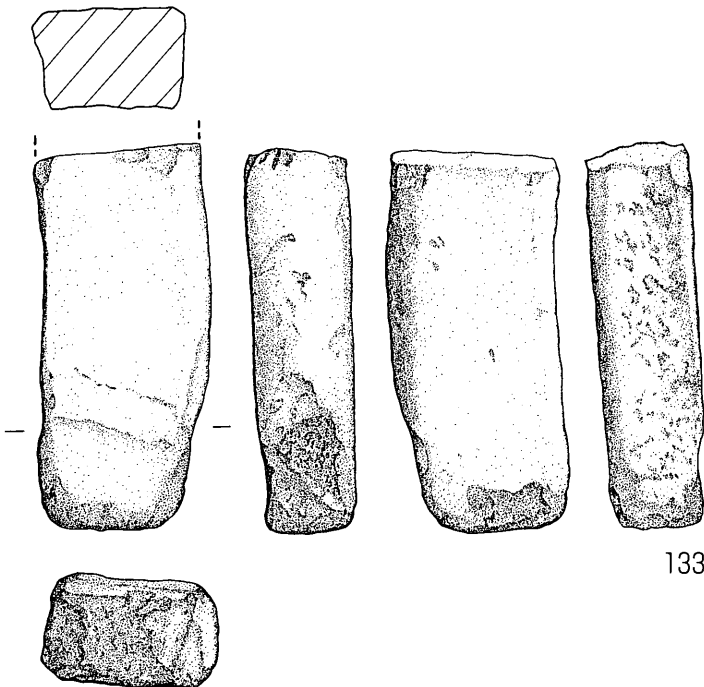
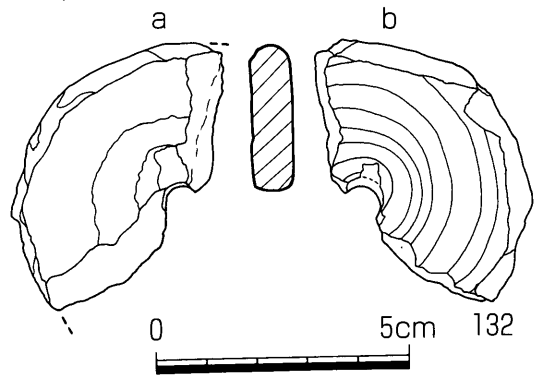
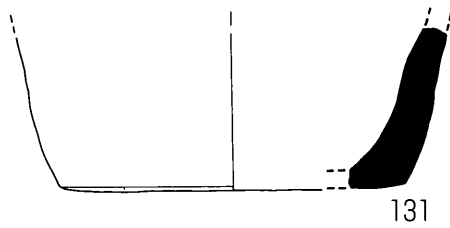
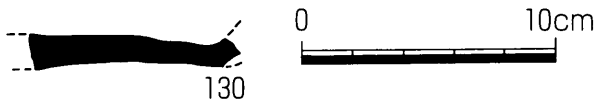


第9図 SA-1出土遺物実測図⑤ (S=1/3)

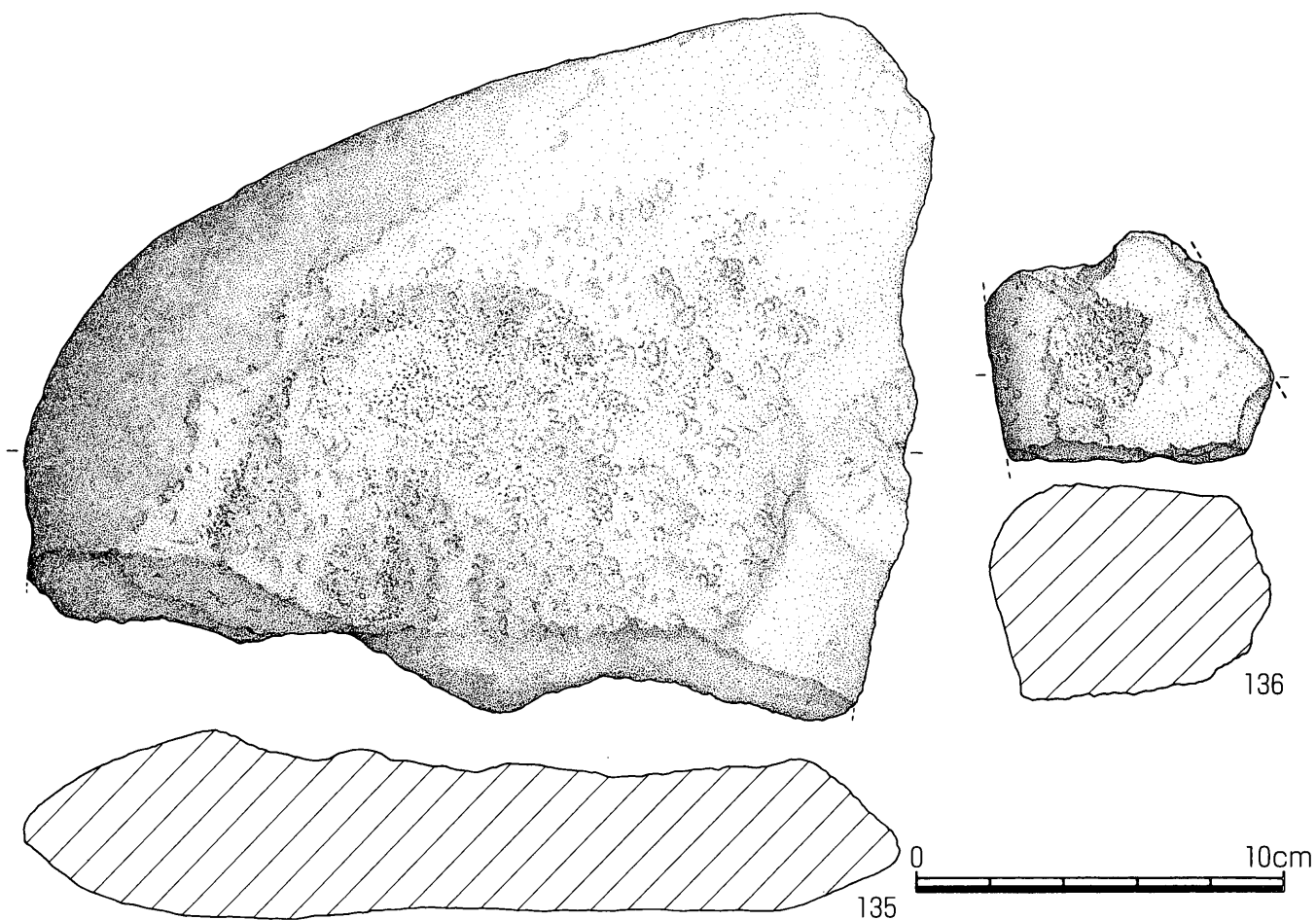
の胴下半部は叩き調整の後削りを行い、上半部は叩き調整の後横ナデを施す。130・131は壺の底部である。130は内面に窯の壁体が付着している。



129復元実測図 (S= 1/5)



第10図 SA-1 出土遺物実測図⑥ (S= 1/3, 2/3, 1/2)



第11図 SA-1出土遺物実測図⑦ (S=1/2)

132は土製の紡錘車である。a面にはヘラ切りの痕跡がb面にはナデの痕跡が明確に見られる。

133～136は石器である。いずれも焼けており赤化している。この住居址に伴うものであるかは不明である。133・134は敲石である。いずれも柱状の砂岩礫の端部・側面を使用する。135は砂岩礫の台石である片面は打痕が著しく、反対の面は石皿として使用されたようである。136は砂岩製の凹み石である。

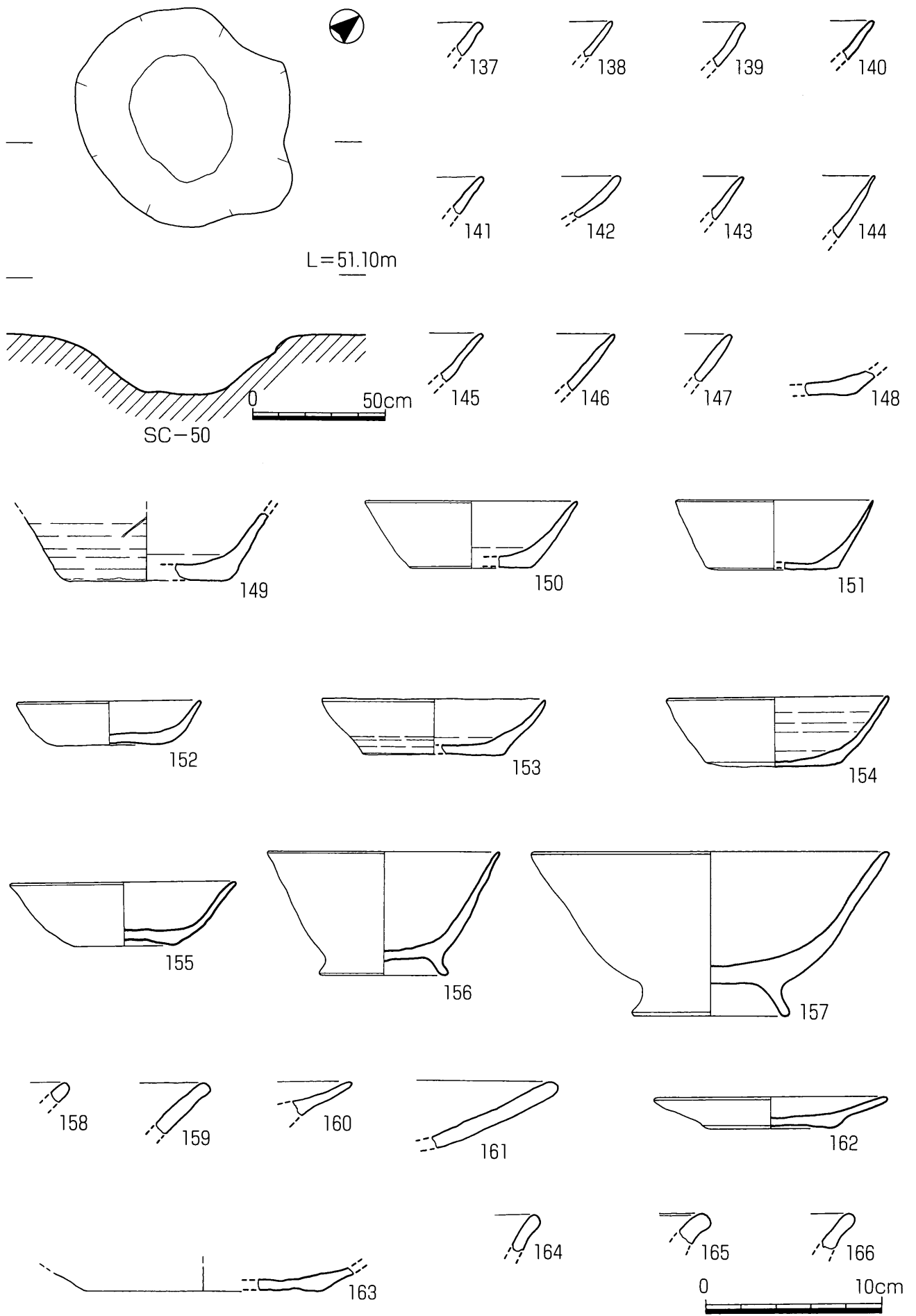
## 第2節 土坑について

### ■SC-50 (第12図・表3・4)

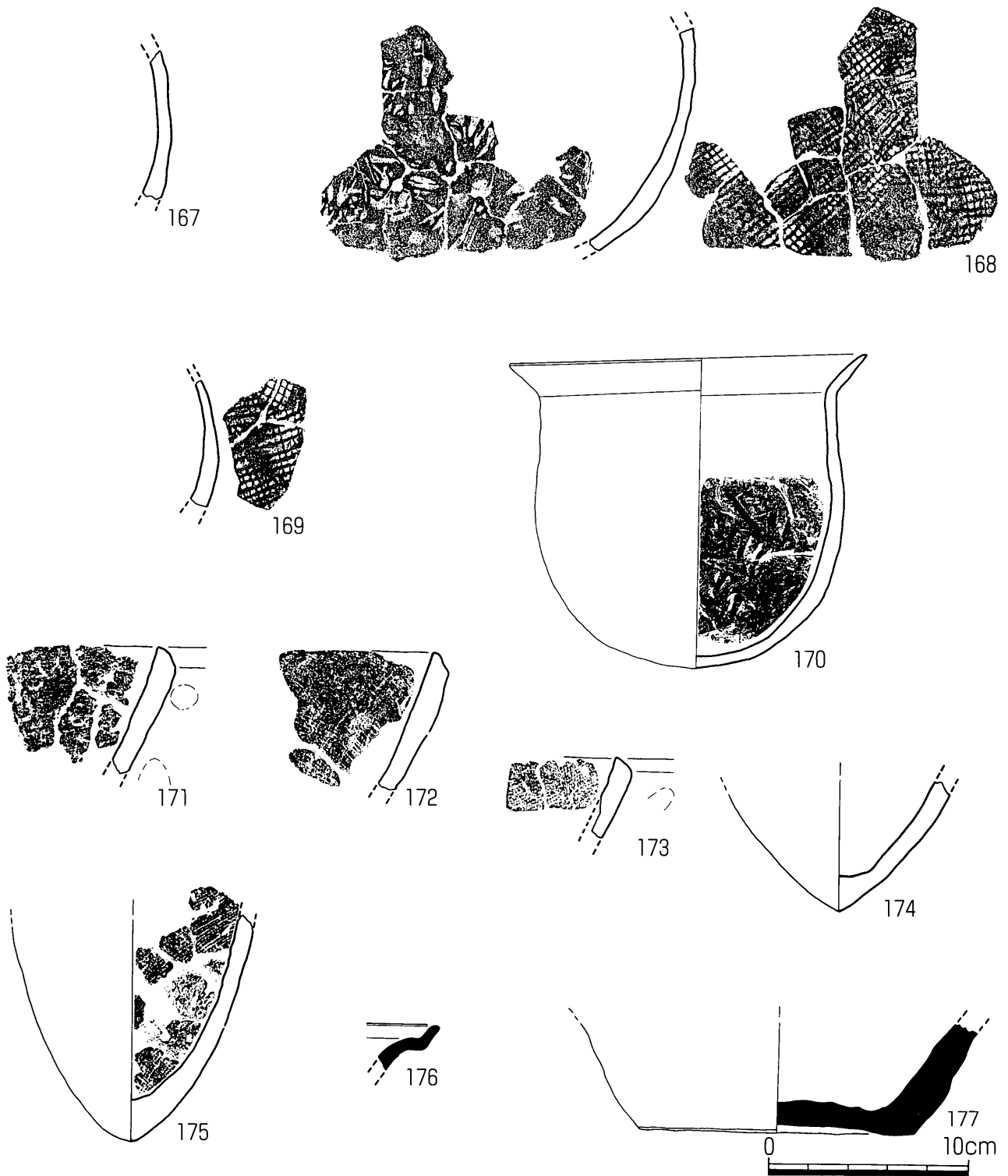
前述したが、SA-1との前後関係は不明であり、SA-1の中央のやや東側に位置する。径約0.85mの不整円形プランを呈し、SA-1の床面より0.25m深いところに床面をもつ。埋土中からは二次的に焼けたような土師器片・須恵器片が多量に出土した。また床面にも焼土が確認された。

前述の理由により、SA-1の遺物の平面分布の中で本遺構の上に分布があった遺物をSC-50の出土遺物として報告する。

137～170は土師器である。137～147は杯の口縁部片である。145は不明瞭であるが内黒の黒色土器片で、146・147には内面に丹塗りが施されている。148・149は杯の底部である。両者ともヘラ切り後ナデ調整が行われている。149は体部の稜線が明瞭で、ヘラ記号が見られる。150～155まで杯の破片であるが、図面上は完形に復元できる。いずれも底部はヘラ切り後ナデ調整を行う。155は焼けひずんでいる。156・157は高台杯の椀の破片である。図面上では完形となる。158・159は椀の口縁部片である。



第12図 SC-50及びSC-50出土遺物実測図① (S= 1/20, 1/3)



第13図 SC-50出土遺物実測図② (S= 1/3)

160・161は皿の口縁部片である。162は皿である。163は皿の底部でヘラ切り後ナデ調整が行われている。164～166は甕の口縁部片である。167～169は甕の胴部片である。167は内外面にナデ調整、169は外面に叩き、168は外面に叩き調整を、内面は当て具痕をナデ消している。170は完形の甕である。内面は放射状の当て具痕の後ナデ調整を行っている。

171～175は布痕土器である。171～173は口縁部片で174・175は底部である。172・175は二次的な焼成のためかかなり赤化している。

176・177は須恵器である。176は壺の口縁部片で自然釉が内外面に付着している。177は壺の底部片である。

#### ■SC-5 (第14図・表1・4)

4.26m×1.56mの不整長楕円形プランを呈する。検出面からの床面の深さは0.37mを測る。埋土中からは土師器片・須恵器片・土錘・石器・鉄滓が出土した。また炭化物が多量に検出された。

178は杯の口縁部片である。179は二重口縁壺の口縁部片である。外面には自然釉の付着が、内面には窯の壁体の付着が見られる。180は杯の底部片である。181・182は管状土錘である。181は中央部に最大径がみられる。

183は打製石鏃である。184は磨製石器片である。頁岩製で全ての面に研磨痕がみられる。185はスクレイパーである。チャート製で背面右側縁側に刃部を形成する。183～185は流れ込みによるものであろう。

#### ■SC-6 (第14図・表4)

1.05m×0.85mの不整円形プランを呈する。検出面からの床面の深さは0.6mを測る。埋土中からは土師器片・炭化物が出土した。また、床面には炭化物が密集して堆積していた。

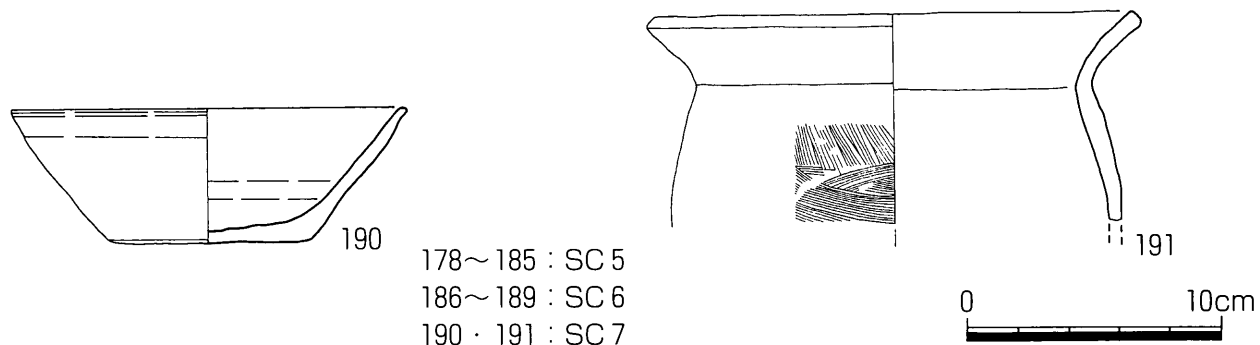
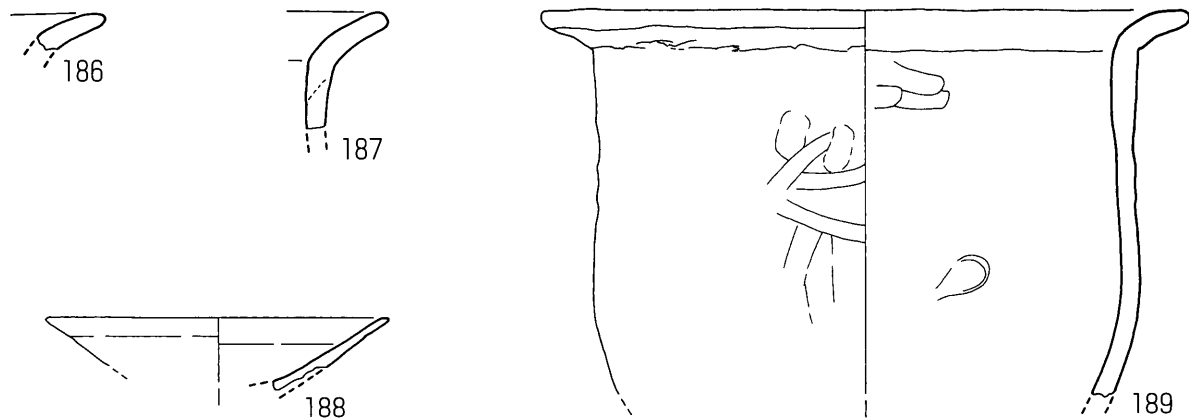
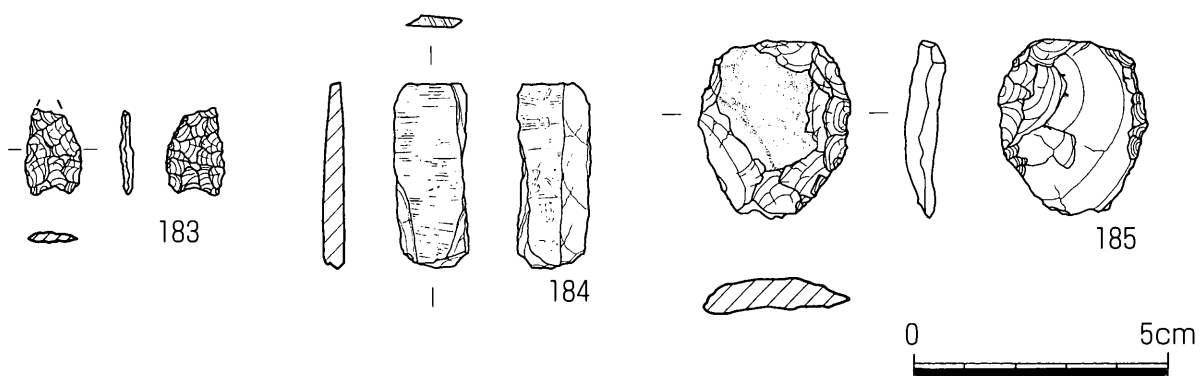
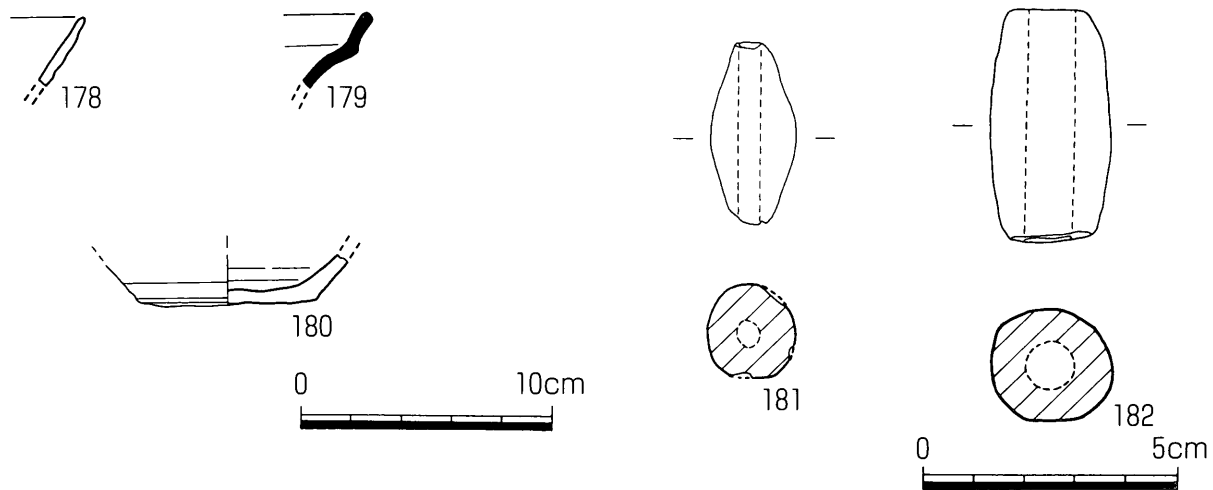
186・187は甕の口縁部片である。188は杯の口縁部～体部片である。189は甕の口縁部～体部片である。

#### ■SC-7 (第14図・表4)

1.4m×0.66mの不整楕円形プランを呈する。検出面からの床面の深さは0.2mを測る。床面付近より土師器杯の完存品が出土している。他にも埋土中から土師器片が出土した。

190は完存の杯である。底部外面はヘラ切り後ナデ調整を施す。二次的な焼成を受けているのか、部分的に変色している。191は甕の口縁部～体部片である。





178~185 : SC 5  
 186~189 : SC 6  
 190・191 : SC 7

第14図 SC-5・6・7出土遺物実測図 (S= 1/3, 2/3)

### 第3節 包含層出土の古代の遺物について

第3層から古代に該当すると考えられる遺物が多量に出土したのでここでまとめて報告する。

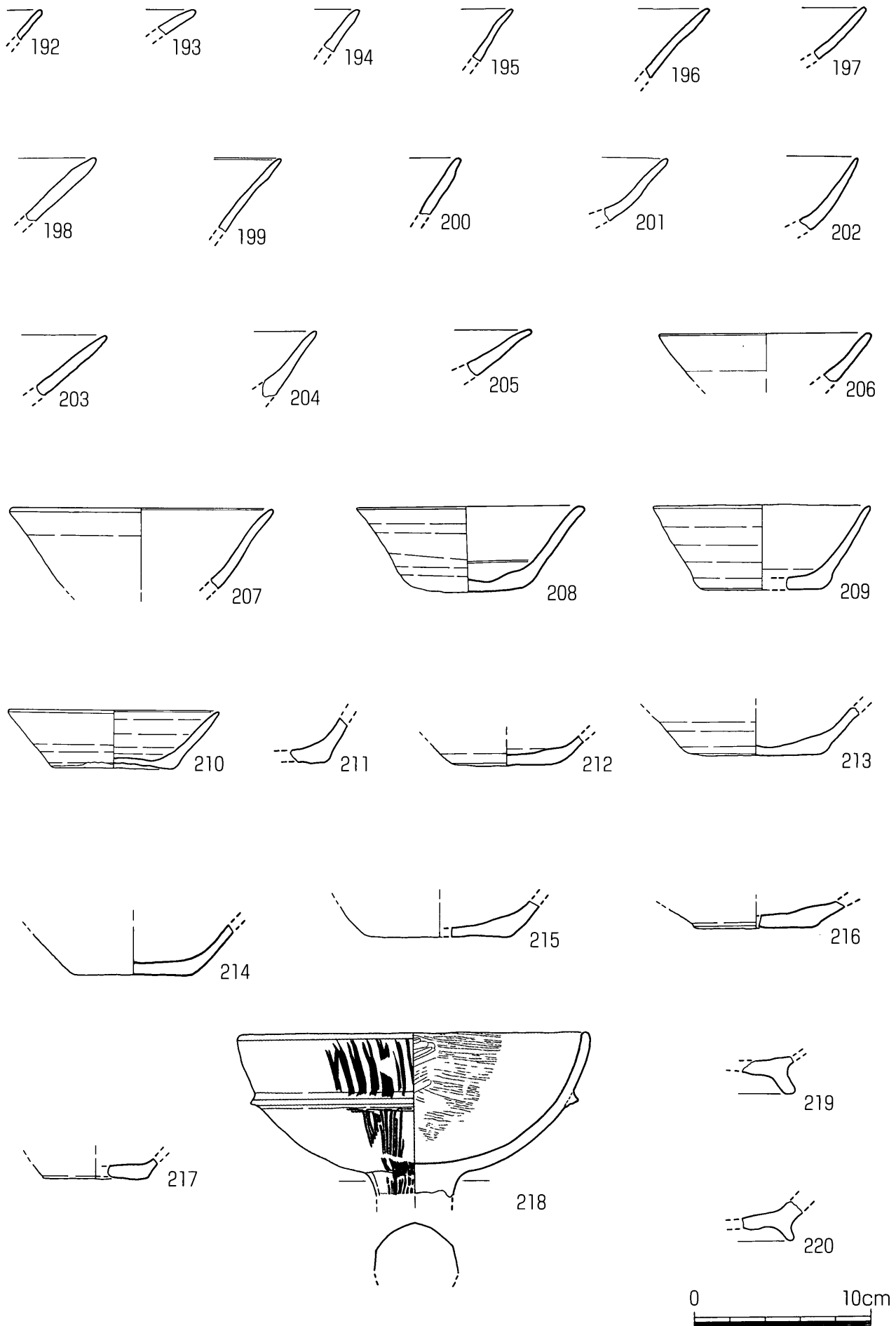
(第15～17図・表4)

192～236は土師器である。192～207は杯の口縁部～体部片である。200は内面に煤の付着している。また二次的な焼成を受けたのか、口唇部に変色している部分が見られる。201は外面に煤の付着が見られる。202・205は不明瞭ではあるが内面に丹塗りの痕跡が見られる。208は完形の杯である。209・210は図面上では完形になりえる杯の破片である。209は体部に明瞭に稜線を残す。211～217は杯の底部片である。213は底部に穿孔の痕跡がみられる。215は不明瞭ではあるが内面に丹塗りの痕跡が見られる。210・211・216の底部外面はヘラ切りで、その痕跡が明確に確認される。208・209・212～215・217の底部外面はヘラ切りの痕跡が不明瞭であり、ヘラ切り後ナデ調整を施していると考えられる。218は丹塗り磨研の高杯の破片である。杯部と脚部の二つの破片で接合はしなかったが同一個体と思われ、図面上では杯部と脚部の復元は可能である。杯部には縦方向の暗文が施されており、突帯が1条めぐる。脚部には不明瞭ながら縦方向に稜線が走り、鈍い八角形を呈するようであるが、破片のため正確には断面形状は不明である。この資料については破片であり、全体の形状・模様などが正確に把握できなかったため、古代の土器と一緒にここに紹介したが、暗文は北部九州の弥生土器である須玖式に施されているものと似ており、弥生土器の可能性も考えられる。219・220は高台付碗の底部片である。底部外面はナデ調整である。221～223は皿の口縁部片である。224・225は図面上で復元できる皿の破片である。224の底部外面はヘラ切り後ナデ調整を施している。225の底部外面はヘラ切りである。226～231は甕の口縁部片である。230・231の内面には横方向の刷毛目の痕跡が明瞭に確認できる。232は甕の胴部片である。内外面共に叩きの痕跡が明瞭に確認できる。233・234は鉢の口縁部～胴部片である。両者共に内面に横方向の削りの痕跡を著しく残している。235・236は土師器の底部片である。器種は鉢であろうか。両者共に底部外面はヘラ切り後ナデ調整を行っている。

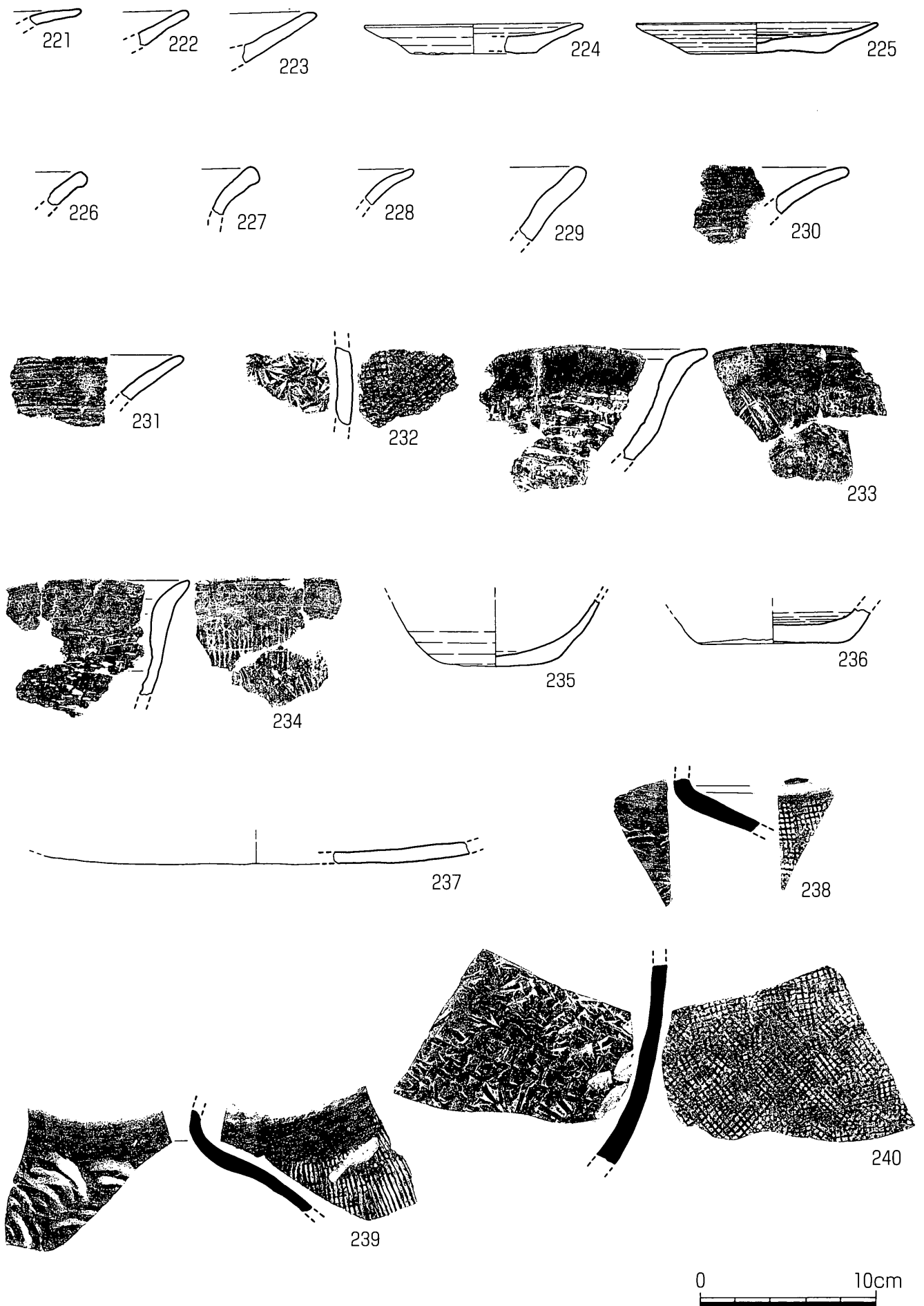
237は黒色土器A類の底部片である。破片のため器種の決定が困難ではあるが盤と思われる。

238～245は須恵器である。238・239は甕の頸部～胴部片である。238は外面に格子状の叩き目を施す。239は内面に同心円文の当て具痕・外面に平行線状の叩き目を施す。240～242は甕の胴部片である。3者とも外面には格子状の叩き目を施す。内面については、240は放射状の当て具痕を残す。241・242は放射状の当て具痕をナデ調整により消している。243は壺の口縁部片である。244は壺の胴部片である。245は壺の胴部～底部片である。底部付近は削り、その上部にはナデ調整が施されている。

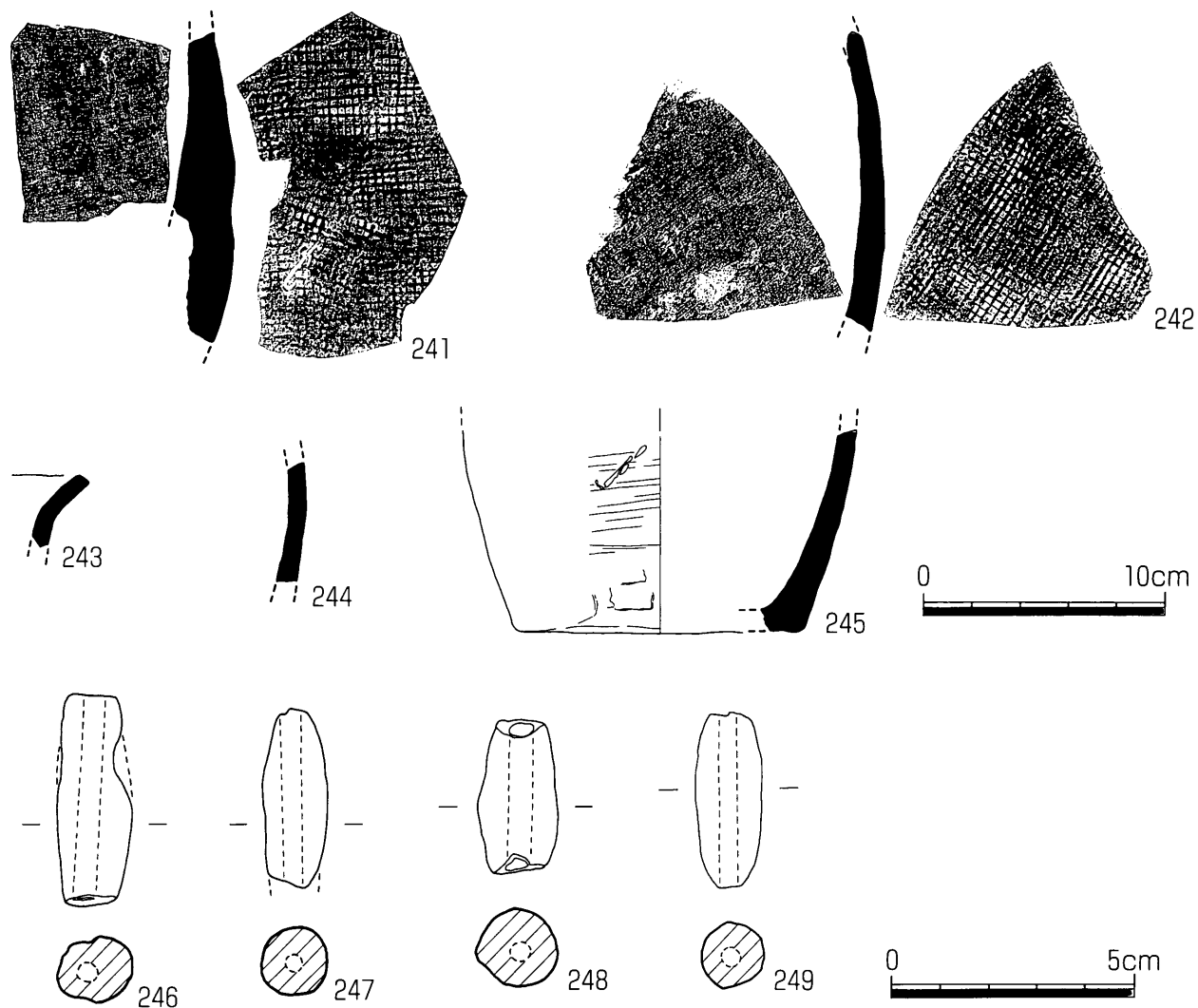
246～249は管状土錘である。



第15图 包含層出土土師器実測図① (S=1/3)



第16図 包含層出土土師器・須恵器実測図② (S= 1/3)



第17図 包含層出土須恵器・土錘実測図 (S= 1/3, 2/3)

番号	器種	出土地点	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	石 材	備 考
133	敲石	SA-1	10.25	4.7	2.6	239.4	砂岩	
134	敲石	SA-1	11.8	3	1.65	99.7	砂岩	
135	台石	SA-1	18.8	24.5	50	2520	砂岩	片面は石皿として使用
136	凹み石	SA-1	6.1	7.8	5.9	308.1	砂岩	
183	打製石鏃	SC-5	1.75	1.2	0.25	0.5	チャート	
184	磨製石器破片	SC-5	3.6	1.5	0.4	3.2	頁岩	
185	スクレイパー	SC-5	3.6	3	0.65	7.6	チャート	

表2 古代土器観察表①

番号	種類・器種	残存部位	出土地点	口径	器高	底部径	外面の調整・文様	内面の調整・文様	外面の色調	内面の色調	備考
1	土師器杯	口縁部片	SA1				横ナデ	横ナデ	橙	橙	
2	土師器杯	口縁部片	SA1				横ナデ	横ナデ	にぶい黄橙	にぶい橙	
3	土師器杯	口縁部片	SA1				横ナデ	横ナデ	橙	にぶい黄橙	
4	土師器杯	口縁部片	SA1				横ナデ	横ナデ	橙	橙	
5	土師器杯	口縁部片	SA1				横ナデ	横ナデ	橙	橙	
6	土師器杯	口縁部片	SA1				横ナデ	横ナデ	橙	橙	
7	土師器杯	口縁部片	SA1				横ナデ	横ナデ	にぶい黄橙	橙	
8	土師器杯	口縁部片	SA1				横ナデ	横ナデ	橙	橙	
9	土師器杯	口縁部片	SA1				横ナデ	横ナデ	橙	橙	
10	土師器杯	口縁部片	SA1				横ナデ	横ナデ	にぶい黄橙	橙	
11	土師器杯	口縁部片	SA1				横ナデ	横ナデ	橙	橙	
12	土師器杯	口縁部片	SA1				横ナデ	横ナデ	橙	橙	
13	土師器杯	口縁部片	SA1				横ナデ	横ナデ	橙	橙	
14	土師器杯	口縁部片	SA1				横ナデ	横ナデ	にぶい橙	にぶい黄橙	
15	土師器杯	口縁部片	SA1				横ナデ	横ナデ	にぶい橙	にぶい橙	
16	土師器杯	口縁部片	SA1				横ナデ	横ナデ	橙	橙	
17	土師器杯	口縁部片	SA1				横ナデ	横ナデ	にぶい褐	にぶい褐	スス付着
18	土師器杯	口縁部片	SA1				横ナデ	横ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	
19	土師器	口縁部片	SA1				横ナデ	横ナデ	淡橙	淡橙	
20	土師器杯	口縁部片	SA1				横ナデ	横ナデ	橙	橙	
21	土師器杯	口縁部片	SA1				横ナデ	横ナデ	にぶい橙	にぶい橙	
22	土師器杯	口縁部片	SA1				横ナデ	横ナデ	にぶい橙	橙	
23	土師器杯	口縁部片	SA1				横ナデ	横ナデ	橙	橙	
24	土師器杯	口縁部片	SA1				横ナデ	横ナデ	橙	橙	
25	土師器杯	口縁部片	SA1				横ナデ	横ナデ	橙	にぶい黄橙	
26	土師器杯	口縁部片	SA1				横ナデ	横ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄褐	
27	土師器杯	口縁部片	SA1				横ナデ	横ナデ	橙	橙	
28	土師器杯	口縁部片	SA1				横ナデ	横ナデ	橙	にぶい黄橙	
29	土師器杯	口縁部片	SA1				横ナデ	横ナデ	にぶい橙	にぶい褐	スス付着
30	土師器杯	口縁部片	SA1				横ナデ	横ナデ	橙	明赤褐	内面に丹塗り
31	土師器杯	口縁部片	SA1				横ナデ	横ナデ	橙	橙	
32	土師器杯	口縁部片	SA1				横ナデ	横ナデ	橙	橙	
33	土師器杯	口縁部片	SA1				横ナデ	横ナデ	橙	橙	
34	土師器杯	口縁部片	SA1				横ナデ	横ナデ	橙	にぶい橙	
35	土師器杯	口縁部片	SA1				横ナデ	横ナデ	にぶい橙	にぶい橙	
36	土師器杯	口縁部片	SA1				横ナデ	横ナデ	橙	橙	
37	土師器杯	口縁部片	SA1				横ナデ	横ナデ	橙	橙	
38	土師器杯	口縁部片	SA1				横ナデ	横ナデ	にぶい橙	にぶい褐	スス付着・焼き ひずみがみられる
39	土師器杯	口縁部片	SA1				横ナデ	横ナデ	にぶい黄橙	にぶい褐	内面に丹塗り
40	土師器杯	口縁部片	SA1				横ナデ	横ナデ	橙	にぶい黄橙	
41	土師器杯	口縁部片	SA1				横ナデ	横ナデ	にぶい橙	橙	内面に丹塗り
42	黒色土器杯	口縁部片	SA1				横ナデ	内黒・ミガキ	橙	灰黄褐	
43	土師器杯	口縁部片	SA1	15.7			横ナデ	横ナデ	橙	明赤褐	
44	土師器杯	口縁部片	SA1				横ナデ	横ナデ	にぶい橙	にぶい褐	内外面にヘラ記号有り
45	土師器杯	胴部～底部	SA1				横ナデ・ヘラ切り後ナデ(底部)	横ナデ	橙	橙	
46	土師器杯	底部片	SA1				横ナデ・ヘラ切り後ナデ(底部)	横ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	
47	土師器杯	底部片	SA1				横ナデ・ヘラ切り後ナデ(底部)	横ナデ	橙	橙	
48	土師器杯	底部片	SA1				横ナデ・ヘラ切り後ナデ(底部)	横ナデ	にぶい黄橙	にぶい橙	
49	土師器杯	底部片	SA1		7.2		横ナデ・ヘラ切り後ナデ(底部)	横ナデ	にぶい橙	にぶい褐	
50	土師器杯	底部片	SA1		8		横ナデ・ヘラ切り後ナデ(底部)	横ナデ	橙	にぶい褐	スス付着
51	土師器杯	底部片	SA1		7.6		横ナデ・ヘラ切り後ナデ(底部)	横ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	
52	土師器杯	底部片	SA1		8.6		横ナデ・ヘラ切り後ナデ(底部)	横ナデ	にぶい橙	にぶい黄橙	
53	土師器杯	口縁部～底部	SA1				横ナデ・ヘラ切り後ナデ(底部)	横ナデ	橙	にぶい橙	
54	土師器杯	ほぼ完形	SA1	11.7	4.7	6	横ナデ・ヘラ切り後ナデ(底部)	横ナデ	橙	にぶい褐	
55	土師器杯	ほぼ完形	SA1	13.2	4.2	7	横ナデ・ヘラ切り後ナデ(底部)	横ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	
56	土師器杯	口縁部～底部	SA1	13.4	3.2	6.2	横ナデ・ヘラ切り後ナデ(底部)	横ナデ	にぶい橙	にぶい橙	
57	土師器杯	ほぼ完形	SA1	14	4.4	8.1	横ナデ・ヘラ切り後ナデ(底部)	横ナデ	橙	にぶい黄橙	
58	土師器杯	ほぼ完形	SA1	11.8	3.9	6.4	横ナデ・ヘラ切り後ナデ(底部)	横ナデ	橙	橙	
59	土師器高台付杯	ほぼ完形	SA1			8.3	横ナデ・ヘラ切り後ナデ(底部)	横ナデ	橙	橙	
60	土師器高台付杯	胴部～底部	SA1				横ナデ	横ナデ	にぶい褐	にぶい橙	内面に丹塗り
61	土師器碗	口縁部片	SA1				横ナデ	横ナデ	灰黄褐	にぶい褐	
62	土師器碗	口縁部片	SA1				横ナデ	横ナデ	にぶい橙	にぶい黄橙	
63	土師器碗	口縁部片	SA1				横ナデ	横ナデ	橙	にぶい橙	
64	土師器皿	口縁部片	SA1				横ナデ	横ナデ	にぶい黄橙	橙	
65	土師器皿	口縁部片	SA1				横ナデ	横ナデ	橙	橙	
66	土師器皿	底部片	SA1				横ナデ	横ナデ	橙	にぶい橙	
67	土師器皿	ほぼ完形	SA1	13.3	2.1	7.8	横ナデ(体部)・ヘラ切り後ナデ(底部)	横ナデ	橙	橙	
68	土師器皿	口縁部片	SA1	25.4			横ナデ	横ナデ	にぶい橙	にぶい橙	
69	土師器皿	口縁部片	SA1	21.5			横ナデ	横ナデ	橙	橙	
70	土師器皿	ほぼ完形	SA1	21	3.6		横ナデ	横ナデ	橙	にぶい橙	
71	土師器鉢	口縁部片	SA1				風化により不明	横ナデ	にぶい褐	褐	スス付着
72	土師器鉢	胴部～底部	SA1			7.4	横ナデ・ヘラ切り(底部)	横ナデ	にぶい橙	にぶい橙	スス付着
73	土師器鉢	ほぼ完形	SA1	12.7	5.6	7.5	横ナデ(口縁部～胴部)・ヘラ削り(胴部)・ヘラ切り(底部)	ハケの後ナデ	にぶい黄橙	にぶい褐	スス付着
74	土師器甕	口縁部片	SA1				横ナデ	横ナデ	にぶい橙	橙	
75	土師器甕	口縁部片	SA1				横ナデ	横ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	
76	土師器甕	口縁部片	SA1				横ナデ	ハケ目	にぶい橙	橙	
77	土師器甕	口縁部片	SA1				横ナデ	横ナデ	橙	明赤褐	
78	土師器甕	口縁部片	SA1				横ナデ	横ナデ	にぶい黄褐	にぶい橙	
79	土師器甕	口縁部片	SA1				横ナデ	ハケ目	にぶい黄橙	にぶい黄橙	
80	土師器甕	口縁部片	SA1				横ナデ	ハケ目	灰褐	にぶい黄橙	スス付着
81	土師器甕	口縁部片	SA1				横ナデ	ハケ目	にぶい褐	にぶい黄橙	

表3 古代土器観察表②

番号	器種	残存部位	出土地点	口径	器高	底部径	外面の調整・文様	内面の調整・文様	外面の色調	内面の色調	備考
82	土師器甕	口縁部片	SA1				横ナデ	ハケ目	にぶい黄橙	にぶい黄橙	スス付着
83	土師器甕	頸部片	SA1				ハケ目・ハケ目の後ナデ	横ナデ	褐	にぶい橙	スス付着
84	土師器甕	頸部片	SA1				横ナデ(口縁部)・ハケ目(胴部)	横ナデ(口縁部)・ハケ目	にぶい橙	にぶい橙	
85	土師器甕	頸部破片	SA1				ナデ	ナデ・縦方向のハケ目	にぶい褐	にぶい橙	
86	土師器甕	胴部片	SA1				ナデ	ハケ目	にぶい橙	にぶい褐	
87	土師器甕	胴部片	SA1				格子目タタキ後ナデ	ナデ	にぶい黄褐	にぶい橙	二次焼成をうける
88	土師器甕	胴部片	SA1				ハケ目	平行線状の当て具痕	にぶい褐	にぶい黄褐	
89	土師器甕	胴部片	SA1				横方向のハケ目・格子目タタキ	ハケ目の後ナデ	橙	にぶい褐	
90	土師器甕	胴部片	SA1				沈線文・格子目タタキ	ナデ	にぶい橙	にぶい黄褐	
91	土師器甕	頸部～胴部	SA1				ナデ・沈線文・格子目タタキ	ナデ	にぶい橙	にぶい橙	
92	土師器甕	胴部片	SA1				タタキの後ナデ	ナデ	にぶい橙	にぶい橙	
93	土師器甕	胴部片	SA1				格子目タタキ	ナデ	にぶい橙	にぶい橙	
94	土師器甕	胴部片	SA1				格子目タタキ	放射状の当て具痕	にぶい黄橙	にぶい黄橙	
95	土師器甕	胴部片	SA1				格子目タタキ	放射状の当て具痕の後ナデ	にぶい黄橙	橙	
96	土師器甕	胴部片	SA1				格子目タタキ	放射状の当て具痕	にぶい黄橙	にぶい黄橙	
97	土師器甕	口縁部～胴部	SA1	18.6			横ナデ(口縁部)・ナデ(胴部)	横ナデ(口縁部)・ハケ目(胴部)	にぶい黄橙	にぶい黄橙	スス付着
98	土師器甕	口縁部～胴部	SA1	23.9			横ナデ(口縁部)・ナデ(胴部)	横ナデ(胴上半部)・ 削り(胴下半部)	にぶい橙	にぶい橙	
99	土師器甕	完形	SA1	18.6	17.4		ハケ目状の横ナデ		にぶい黄橙	にぶい黄橙	
100	布痕土器	口縁部片	SA1				ナデ	布痕(不明瞭)	橙	明赤褐	
101	布痕土器	口縁部片	SA1				ナデ	布痕(不明瞭)	明赤褐	明赤褐	二次焼成をうける
102	布痕土器	口縁部片	SA1				ナデ	布痕(不明瞭)	明赤褐	明赤褐	
103	布痕土器	口縁部片	SA1				ナデ	布痕	にぶい褐	明赤褐	
104	布痕土器	口縁部片	SA1				ナデ	布痕(不明瞭)	明赤褐	橙	二次焼成をうける
105	布痕土器	口縁部片	SA1				ナデ	布痕(口縁部のみ確認、他の 部分は剥落している)	明赤褐	赤褐	
106	布痕土器	口縁部片	SA1				ナデ	布痕	橙	明赤褐	二次焼成をうける
107	布痕土器	口縁部片	SA1				ナデ	布痕	にぶい赤褐	明赤褐	
108	布痕土器	口縁部片	SA1				ナデ	布痕(不明瞭)	にぶい橙	にぶい赤褐	
109	布痕土器	口縁部片	SA1				ナデ	布痕(不明瞭)	橙	明赤褐	
110	布痕土器	口縁部片	SA1				ナデ・指頭痕有り	布痕	にぶい赤褐	明赤褐	
111	布痕土器	口縁部片	SA1				ナデ	布痕	明赤褐	明赤褐	
112	布痕土器	胴部片	SA1				ナデ	布痕	明赤褐	灰赤	
113	布痕土器	胴部片	SA1				ナデ	布痕	明赤褐	灰赤	
114	布痕土器	胴部片	SA1				ナデ	布痕	にぶい褐	にぶい褐	二次焼成をうける
115	布痕土器	胴部片	SA1	14.6			ナデ	布痕	明赤褐	にぶい褐	
116	布痕土器	ほぼ完形	SA1	14.2	12.3		ナデ(不明瞭)・指頭痕有り	布痕(不明瞭)	橙	明赤褐	二次焼成をうける
117	布痕土器	ほぼ完形	SA1	11	10.9		風化により不明	布痕(不明瞭)	明赤褐	にぶい橙	
118	布痕土器	ほぼ完形	SA1	18.6			ナデ	布痕	明赤褐	橙	
119	須恵器杯	口縁部片	SA1				横ナデ	横ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	
120	須恵器杯	口縁部片	SA1				横ナデ	横ナデ	灰黄	暗灰黄	
121	須恵器鉢	底部片	SA1				横ナデ・ヘラ切り後ナデ(底部)	横ナデ	にぶい黄橙	にぶい褐	
122	須恵器鉢	底部片	SA1				横ナデ・ヘラ切り後ナデ(底部)	横ナデ・指頭痕有り	にぶい橙	にぶい橙	
123	須恵器鉢	底部片	SA1				横ナデ・ヘラ切り後ナデ(底部)	横ナデ・指頭痕有り	にぶい橙	にぶい黄褐	
124	須恵器甕	口縁部片	SA1	11.3			ナデ・指頭痕有り	ナデ・放射状の当て具(肩より下)	黄灰	黄灰	焼きひずみが見られる
125	須恵器甕	頸部片	SA1				横ナデ・格子目タタキ	放射状の当て具痕	灰黄褐	灰黄褐	焼きひずみが見られる
126	須恵器甕	胴部破片	SA1				格子目タタキ	放射状の当て具痕	褐灰	灰	
127	須恵器甕	胴部破片	SA1				格子目タタキ	放射状の当て具痕	黄灰	灰	
128	須恵器甕	胴部破片	SA1				格子目タタキ	放射状の当て具痕の後ナデ	灰黄褐	褐灰	
129	須恵器甕(二耳壺?)	頸部～底部	SA1			17.9	タタキの後、削り、ナデ(胴部 下半部)・横ナデ(胴部上半部)	横ナデ・指頭痕有り	褐灰	灰褐	焼きひずみが見られる・スス付着
130	須恵器壺	底部片	SA1				ナデ・指頭痕有り	ナデ	にぶい黄	褐灰	
131	須恵器壺	底部片	SA1			13.8	ナデ	横ナデ	褐灰	黄灰	焼きひずみが見られる
132	土製紡錘車	破片	SA1				ヘラ切り(a面)	横ナデ(b面)	にぶい橙	にぶい橙	
137	土師器杯	口縁部片	SC50				横ナデ	横ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	
138	土師器杯	口縁部片	SC50				横ナデ	横ナデ	橙	橙	
139	土師器杯	口縁部片	SC50				横ナデ	横ナデ	にぶい黄橙	にぶい橙	
140	土師器杯	口縁部片	SC50				横ナデ	横ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	
141	土師器杯	口縁部片	SC50				横ナデ	横ナデ	橙	にぶい橙	
142	土師器杯	口縁部片	SC50				横ナデ	横ナデ	橙	橙	
143	土師器杯	口縁部片	SC50				横ナデ	横ナデ	にぶい褐	にぶい褐	
144	土師器杯	口縁部片	SC50				横ナデ	横ナデ	橙	橙	
145	土師器杯	口縁部片	SC50				横ナデ	内黒・ミガキ	にぶい橙	褐	
146	土師器杯	口縁部片	SC50				横ナデ	横ナデ	にぶい橙	橙	内面に丹塗り
147	土師器杯	口縁部片	SC50				横ナデ	横ナデ	橙	橙	内面に丹塗り
148	土師器杯	底部片	SC50				横ナデ・ヘラ切り後ナデ(底部)	横ナデ	橙	橙	
149	土師器杯	底部片	SC50			9.6	横ナデ・ヘラ切り後ナデ(底部)	横ナデ	橙	にぶい褐	外面にヘラ記号有り
150	土師器杯	ほぼ完形	SC50	12	3.8	7.1	横ナデ・ヘラ切り後ナデ(底部)	横ナデ	橙	にぶい黄橙	
151	土師器杯	ほぼ完形	SC50	11.2	3.9	7.4	横ナデ・ヘラ切り後ナデ(底部)	横ナデ	橙	明赤褐	
152	土師器杯	ほぼ完形	SC50	10.4	2.5	7	横ナデ	ヘラ切り(底部)	橙	橙	
153	土師器杯	ほぼ完形	SC50	12.7	3.2	8.2	横ナデ・ヘラ切り後ナデ(底部)	横ナデ	橙	橙	
154	土師器杯	ほぼ完形	SC50	12.5	4	7.4	横ナデ・ヘラ切り後ナデ(底部)	横ナデ	にぶい橙	にぶい橙	
155	土師器杯	ほぼ完形	SC50	12.8	3.6	6.2	横ナデ・ヘラ切り後ナデ(底部)	横ナデ	橙	にぶい褐	焼きひずみが見られる
156	土師器高台付杯	ほぼ完形	SC50	13.2	6.9	7.1	横ナデ・ヘラ切り後ナデ(底部)	横ナデ	にぶい黄橙	明赤褐	内面に丹塗り
157	土師器高台付杯	ほぼ完形	SC50	20.2	9.3	8.6	横ナデ	横ナデ	橙	橙	
158	土師器碗	口縁部片	SC50				横ナデ	横ナデ	明褐灰	にぶい褐	
159	土師器碗	口縁部～胴部	SC50				横ナデ	横ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	スス付着
160	土師器皿	口縁部～胴部	SC50				横ナデ	横ナデ	橙	橙	
161	土師器皿	口縁部片	SC50				横ナデ	横ナデ	にぶい橙	にぶい橙	
162	土師器皿	完形	SC50	13.1	1.8	6.7	横ナデ	横ナデ	橙	橙	
163	土師器皿	胴部～底部	SC50			13.6	横ナデ・ヘラ切り後ナデ(底部)	横ナデ	橙	にぶい橙	
164	土師器甕	口縁部片	SC50				横ナデ	横ナデ	にぶい褐	灰黄褐	
165	土師器甕	口縁部片	SC50				横ナデ	横ナデ	にぶい橙	にぶい橙	
166	土師器甕	口縁部片	SC50				横ナデ	横ナデ	にぶい黄橙	にぶい橙	

表4 古代土器観察表③

番号	器種	残存部位	出土地点	口径	器高	底部径	外面の調整・文様	内面の調整・文様	外面の色調	内面の色調	備考
167	土師器甕	胴部	SC50				横ナデ	横ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	
168	土師器壺	胴部	SC50				格子目タタキ	放射状の当て具痕の後ナデ	にぶい橙	にぶい黄褐	
169	土師器甕	胴部	SC50				格子目タタキ	ナデ	にぶい褐	橙	
170	土師器甕	完形	SC50	17.9	15.4		横ナデ(口縁部~上胴部)・ナデ(下胴部~底部)	横ナデ(口縁部~上胴部)・放射状の当て具痕の後ナデ(上胴部~底部)	灰黄褐	にぶい黄橙	
171	布痕土器鉢	口縁部~胴部	SC50				指ナデ・指頭痕有り	布痕(不明瞭)	明赤褐	明赤褐	
172	布痕土器鉢	口縁部~胴部	SC50				ナデ	布痕(不明瞭)	明赤褐	明赤褐	二次焼成をうける
173	布痕土器鉢	口縁部	SC50				ナデ	布痕	明赤褐	明赤褐	
174	布痕土器鉢	胴部~底部	SC50				ナデ	布痕(不明瞭)	橙	明赤褐	
175	布痕土器鉢	胴部~底部	SC50				ナデ	布痕	明赤褐	明赤褐	二次焼成をうける
176	須恵器壺	口縁部	SC50				横ナデ	横ナデ	赤灰	灰褐	自然釉・スス付着
177	須恵器壺	胴部~底部	SC50		14.1		横ナデ(胴部)・ナデ(底部)	横ナデ(胴部)・ナデ(底部)	褐灰	褐灰	
178	土師器杯	口縁部片	SC5				横ナデ	横ナデ	橙	橙	
179	須恵器碗	口縁部片	SC5				横ナデ	横ナデ	暗灰黄	暗灰黄	窯の壁体付着
180	土師器杯	底部片	SC5		7.1		回転ナデ・ヘラ切り後ナデ	横ナデ	橙	にぶい橙	
181	土錘	ほぼ完形	SC5						灰褐		
182	土錘	完形	SC5						にぶい橙		
186	土師器甕	口縁部片	SC6				横ナデ	横ナデ	灰褐	灰黄褐	スス付着
187	土師器甕	口縁部片	SC6				横方向のハケ目の後ナデ	横方向のハケ目の後ナデ	にぶい黄褐	にぶい黄褐	
188	土師器杯	口縁部~杯部	SC6	13.4			横ナデ	横ナデ	橙	橙	
189	土師器甕	口縁部~胴部	SC6	25.3			横ナデ(口縁部)・ケズリとナデ(胴部)	横ナデ(口縁部)・ハケとナデ(胴部)	にぶい黄褐	にぶい黄橙	スス付着
190	土師器杯	完存	SC7	15.6	5.2	8.2	横ナデ	横ナデ	橙	橙	二次焼成をうける
191	土師器甕	口縁部~胴部	SC7	19.1			横ナデ(口縁部)・ハケ目(胴部)	横ナデ(口縁部)・ナデ(胴部)	にぶい黄褐	橙	スス付着
192	土師器杯	口縁部片	Ⅲ				横ナデ	横ナデ	明黄褐	橙	
193	土師器杯・皿	口縁部片	Ⅲ				横ナデ	横ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	
194	土師器杯	口縁部片	Ⅲ				横ナデ	横ナデ	にぶい黄褐	にぶい黄橙	
195	土師器杯	口縁部片	Ⅲ				横ナデ	横ナデ	にぶい橙	にぶい橙	
196	土師器杯	口縁部片	Ⅲ				横ナデ	横ナデ	にぶい橙	にぶい橙	
197	土師器杯	口縁部片	Ⅲ				横ナデ	横ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	
198	土師器杯	口縁部片	Ⅱ				横ナデ	横ナデ	にぶい褐	にぶい黄褐	
199	土師器杯	口縁部片	Ⅲ				横ナデ	横ナデ	にぶい橙	黄褐	
200	土師器杯	口縁部片	Ⅲ				横ナデ	横ナデ	にぶい橙	にぶい褐	スス付着
201	土師器杯	口縁部片	Ⅲ				横ナデ	横ナデ	にぶい褐	にぶい褐	スス付着
202	土師器杯	口縁部片	Ⅲ				横ナデ	横ナデ	にぶい橙	にぶい橙	内面に丹塗り(不明瞭)
203	土師器杯	口縁部片	Ⅲ				横ナデ	横ナデ	にぶい黄褐	にぶい橙	
204	土師器杯	口縁部片	Ⅲ				横ナデ	横ナデ	にぶい橙	にぶい黄褐	
205	土師器杯	口縁部片	Ⅲ				横ナデ	横ナデ	橙	橙	内面に丹塗り(不明瞭)
206	土師器杯	口縁部片	Ⅱ	11.7			横ナデ	横ナデ	橙	橙	
207	土師器杯	口縁部~胴部	Ⅲ	14.8			横ナデ	横ナデ	橙	にぶい黄橙	
208	土師器杯	完存	Ⅲ	12.8	4.8	6.9	横ナデ・ヘラ切り後ナデ(底部)	横ナデ	明黄褐	にぶい黄褐	
209	土師器杯	ほぼ完形	Ⅲ	12.3	4.7	7	横ナデ・ヘラ切り後ナデ(底部)	横ナデ	黄褐	にぶい黄褐	
210	土師器杯	ほぼ完形	Ⅲ	11.9	3.2	7	横ナデ・ヘラ切り(底部)	横ナデ	橙	にぶい橙	
211	土師器杯	底部片	Ⅲ				横ナデ・ヘラ切り(底部)	横ナデ	にぶい橙	にぶい褐	
212	土師器杯	底部片	Ⅲ		6.2		横ナデ・ヘラ切り後ナデ(底部)	横ナデ	にぶ黄	にぶ黄褐	
213	土師器杯	底部片	Ⅱ		7.5		横ナデ・ヘラ切り後ナデ(底部)	横ナデ	にぶい黄橙	明赤褐	
214	土師器杯	底部片	Ⅱ		6.6		横ナデ・ヘラ切り後ナデ(底部)	横ナデ	橙	にぶい橙	
215	土師器杯	底部片	Ⅲ		8		横ナデ・ヘラ切り後ナデ(底部)	横ナデ	にぶい橙	にぶい橙	内面に丹塗り(不明瞭)
216	土師器杯	底部片	Ⅲ		7		横ナデ・ヘラ切り(底部)	横ナデ・ヘラ切り	にぶい黄橙	にぶ黄	
217	土師器杯	底部片	Ⅱ		5.9		横ナデ・ヘラ切り後ナデ(底部)	横ナデ	にぶい橙	明赤褐	
218	高杯	底部片	Ⅵ	19.4			縦方向のミガキ	横・斜方向のミガキ	明赤褐	明赤褐	丹塗り・暗文有り
219	土師器高台付杯	底部片	Ⅲ				横ナデ	ナデ	にぶい褐	にぶい褐	
220	土師器高台付杯	底部片	Ⅲ				横ナデ	ナデ	にぶい黄褐	にぶい黄橙	
221	土師器皿	口縁部片	Ⅲ				横ナデ	横ナデ	にぶい橙	にぶい橙	
222	土師器皿	口縁部片	Ⅲ				ナデ	ナデ	橙	橙	内面に丹塗り(不明瞭)
223	土師器皿	口縁部片	Ⅲ				横ナデ	横ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	
224	土師器皿	完形	Ⅱ	12.4	1.7	7.4	横ナデ・ヘラ切り後ナデ(底部)	横ナデ	にぶい褐	にぶい褐	
225	土師器皿	ほぼ完形	Ⅲ	13.7	1.7	8.3	横ナデ・ヘラ切り(底部)	横ナデ	橙	にぶい橙	
226	土師器甕	口縁部片	Ⅲ				横ナデ	横ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	
227	土師器甕	口縁部片	Ⅲ				横ナデ	横ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	
228	土師器甕	口縁部片	Ⅲ				横ナデ	横ナデ	にぶ黄	にぶい黄橙	
229	土師器甕	口縁部片	Ⅲ				横ナデ	ナデ	にぶい黄橙	橙	
230	土師器甕	口縁部片	Ⅲ				横ナデ	ハケ目	にぶい黄橙	にぶい黄橙	
231	土師器甕	口縁部片	Ⅲ				横ナデ	ハケ目	にぶい橙	にぶい黄橙	
232	土師器甕	胴部					格子目タタキ	放射状当て具痕	灰黄褐	にぶい黄橙	
233	土師器鉢	口縁部~胴部	Ⅲ				横ナデ(口縁部)・ナデ	横ナデ(口縁部)・ヘラ削り	にぶい黄橙	にぶい黄褐	
234	土師器鉢	口縁部片	Ⅲ				横ナデ(口縁部)・ハケ目	横ナデ(口縁部)・ヘラナデ	暗灰黄	にぶい黄褐	
235	土師器鉢?	胴部~底部	Ⅲ		5.8		横ナデ・ヘラ切りの後ナデ(底部)	横ナデ	橙	にぶい橙	
236	土師器鉢?	底部	Ⅲ		8.9		横ナデ・ヘラ切りの後ナデ(底部)	横ナデ	にぶい黄橙	灰黄	
237	黒色土器盤	底部破片	Ⅲ				ナデ	内黒・横ナデ	にぶい橙	灰	
238	須恵器甕	頸部~胴部	Ⅲ				横ナデ(頸部)・格子目タタキ(胴部)	同心円文の当て具痕の後ナデ	灰	暗灰黄	
239	須恵器壺	頸部	Ⅲ				横ナデ・平行線状のタタキ	横ナデ・同心円文の当て具痕	灰	灰	
240	須恵器甕	胴部	Ⅲ				格子目タタキ	放射状の当て具痕	灰黄	にぶい黄橙	
241	須恵器甕	胴部	Ⅲ				格子目タタキ	放射状の当て具痕の後ナデ	灰	灰	
242	須恵器甕	胴部	Ⅱ				格子目タタキ	放射状の当て具痕の後ナデ	暗灰	灰	
243	須恵器壺	口縁部片	Ⅱ				横ナデ	横ナデ	褐灰	灰	
244	須恵器壺	胴部	Ⅲ				横ナデ	横ナデ	灰	灰	スス付着
245	須恵器壺	胴部~底部	Ⅲ		11.9		ハケの後横ナデ	横ナデ	灰	褐灰	
246	土製品土錘	ほぼ完形	Ⅲ						灰褐		
247	土製品土錘	ほぼ完形	Ⅲ						にぶい赤褐		
248	土製品土錘	ほぼ完形	Ⅲ						褐灰		
249	土製品土錘	ほぼ完形	Ⅲ						灰		1/4程度欠損



## 第3章 弥生時代の調査

### 第1節 竪穴住居について

#### ■SA-2 (第18・19図・表5・7)

5.3m×6.5mの不整隅丸方形のプランを呈する。間仕切り壁とベット状遺構を有する住居跡で検出面からベット状遺構の床面は深さ0.15m～0.35mを測る。この住居跡の中央部はさらに床面が深くなっており、検出面からの深さは0.7mを測る。床面には径0.3m～0.2m、深さ0.14m～0.35mを測る柱穴が不規則に6本検出された。

埋土中及び床面中央部付近からは弥生土器片が多量に出土している。間仕切り壁は北西部に見られ、ベット状遺構は北東部が最も高くなっていた。

250は完存の小型の鉢形土器である。251～253は甕の底部片である。254は完形・255は完存の甕である。両者共に断面がくの字の口縁部を持ち、内外面に斜め方向の刷毛目調整を施す。底部は上げ底である。256・257は短頸壺である。256は口縁部外面に沈線文が見られ、凹線文土器の影響を受ける資料であると思われる。また内面には円形の記号文を施す。258は壺の頸部片である。記号文を施す。259は長頸壺である。口縁部及び頸部には沈線文が見られ、凹線文土器の影響を受ける資料であると思われる。また記号文も見られる。底部は凸レンズ状である。

260は緑色を呈する頁岩製の磨製石鏃の未製品である。261は敲石である。両面の中央部に打痕が観察される。

#### ■SA-3 (第20図・表5)

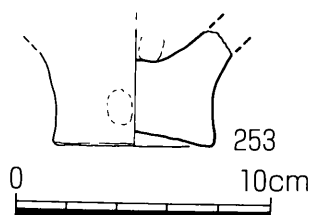
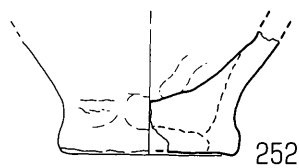
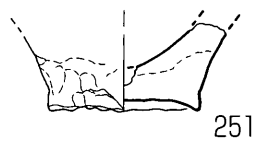
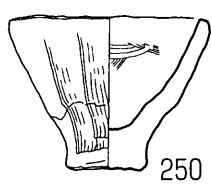
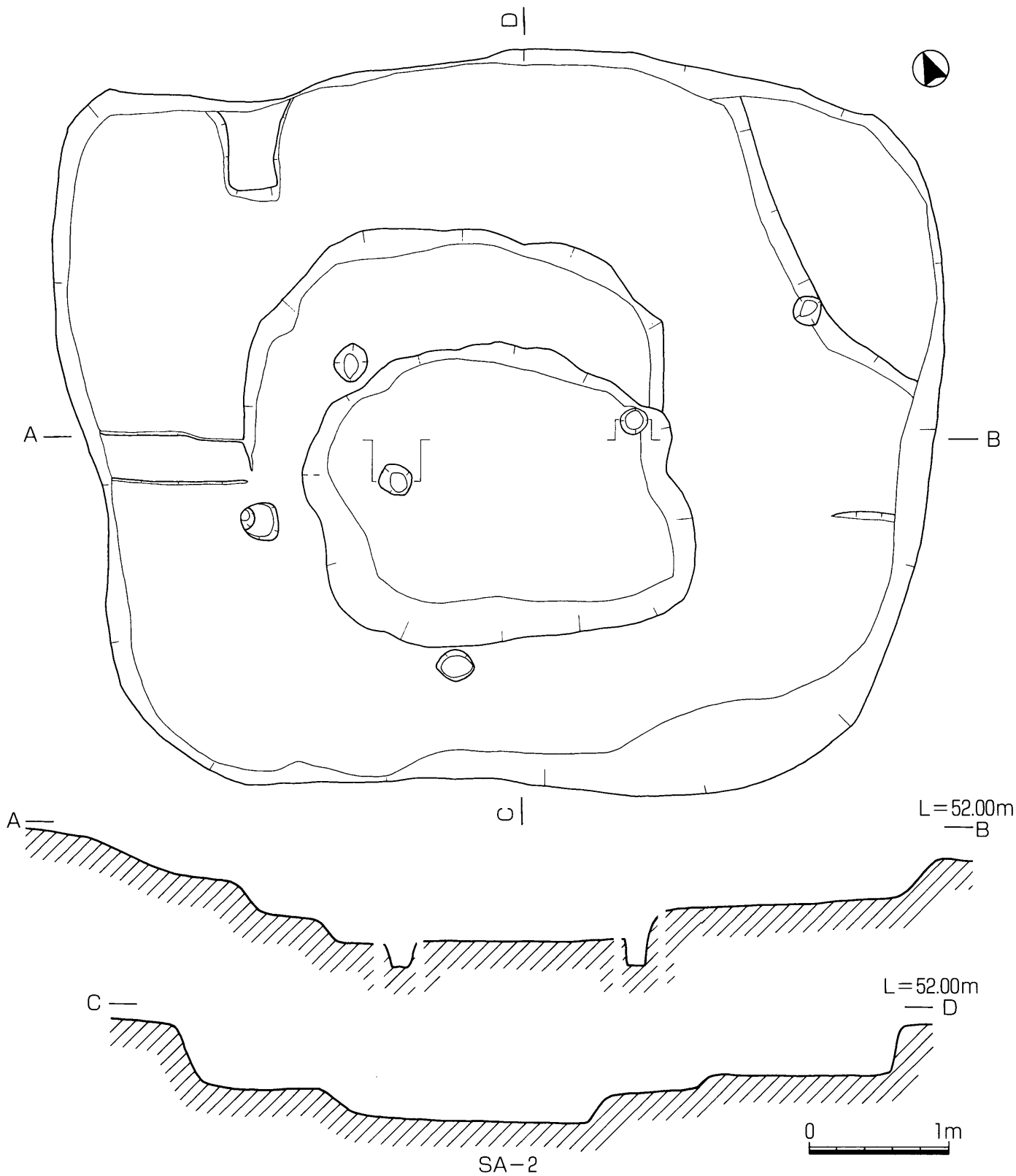
5.08m×5.62mの不整隅丸方形プランを呈する。検出面から床面の深さは0.18mを測る。柱穴は不規則に配置されており、様々な規模のものが16本確認された。大きいものは径0.25m～0.35m、深さ0.3m～0.5mを測る。小さいものは径0.2m以下で深さは0.15m以下のものであった。埋土中からは弥生土器片が出土した。

262・263は甕の胴部片である。262は記号文が観察される。263は1条の突帯がめぐる。264は甕の口縁部～胴部片である。くの字状の口縁部で、胴部には縦方向の細かい単位の刷毛目調整を施す。265は縄文土器深鉢の底部片である。縄文時代後期に該当する資料であると思われ、流れ込みであろう。

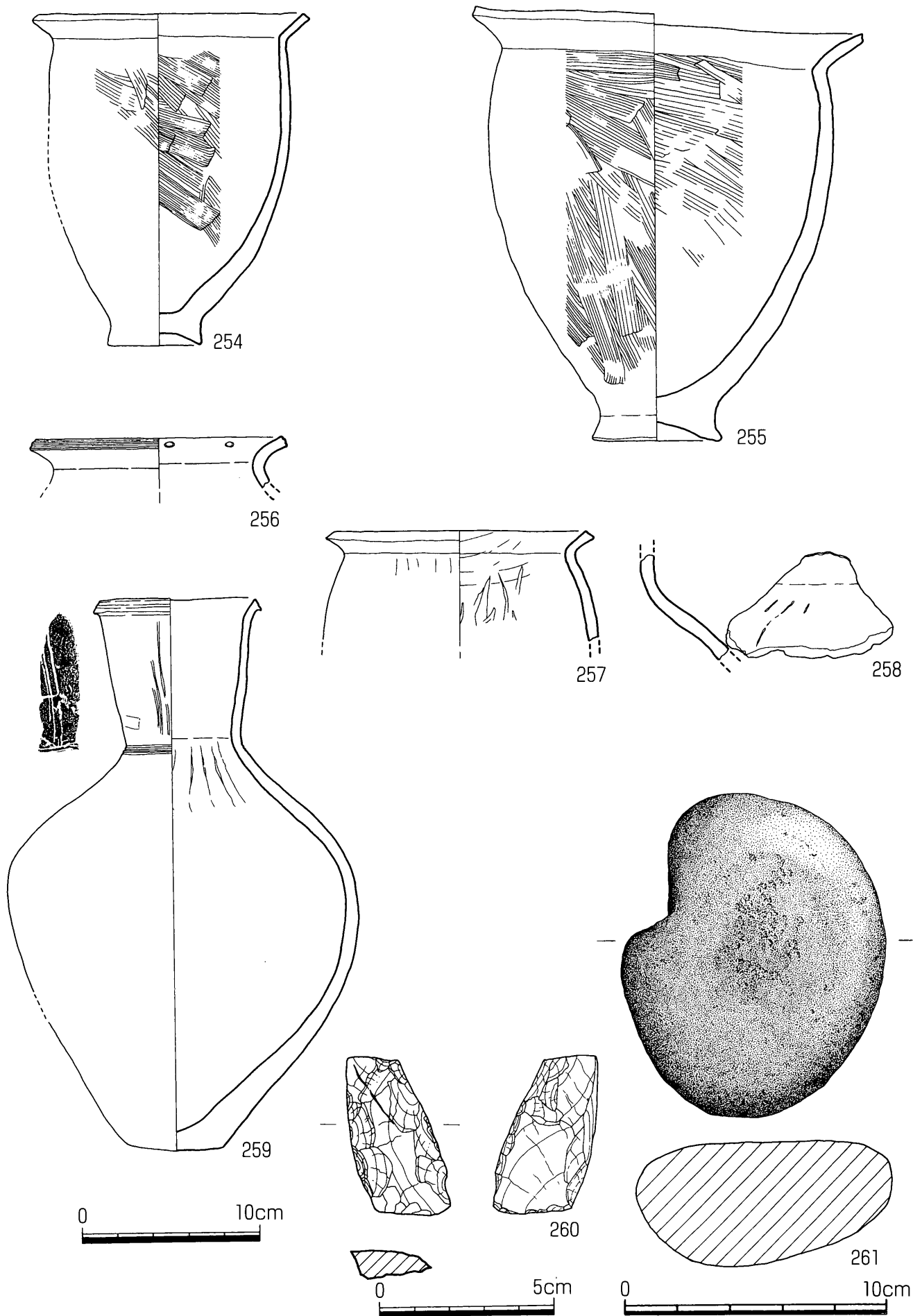
#### ■SA-4 (第21～24図・表5・7)

4.67m×5.27mの隅丸方形プランを呈する。検出面からの床面の深さは0.18mを測る。柱穴は不規則に配置されており、9本が検出された。径0.15m～0.25m、深さは0.25m～0.35mを測る。埋土中及び床面の北西部～南東部にかけては多量の弥生土器片・敲石2点が出土した。

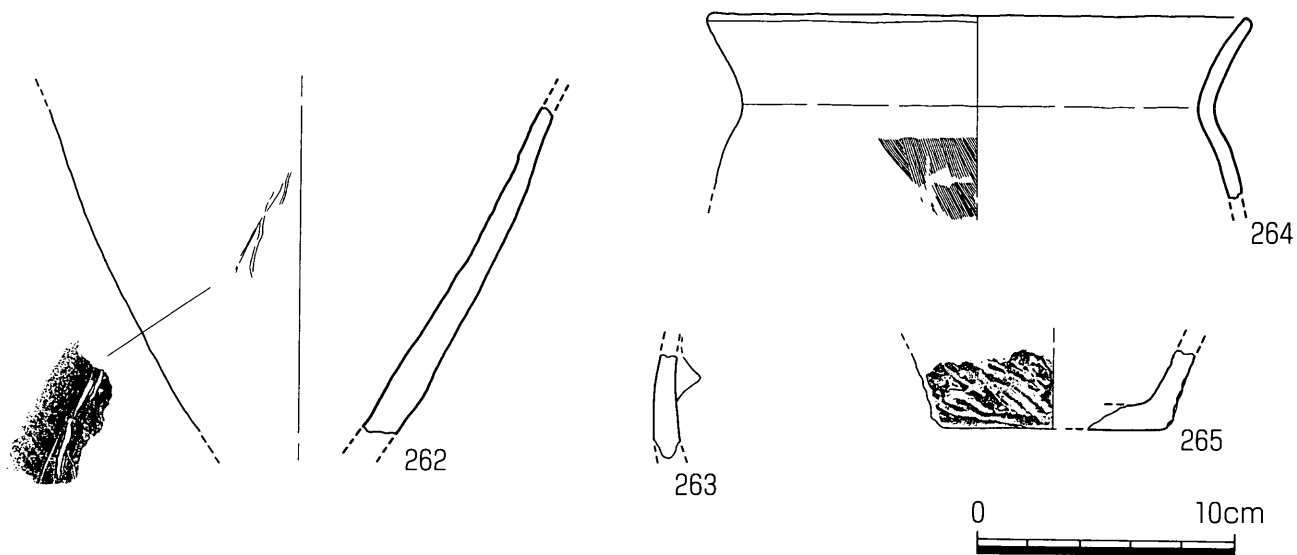
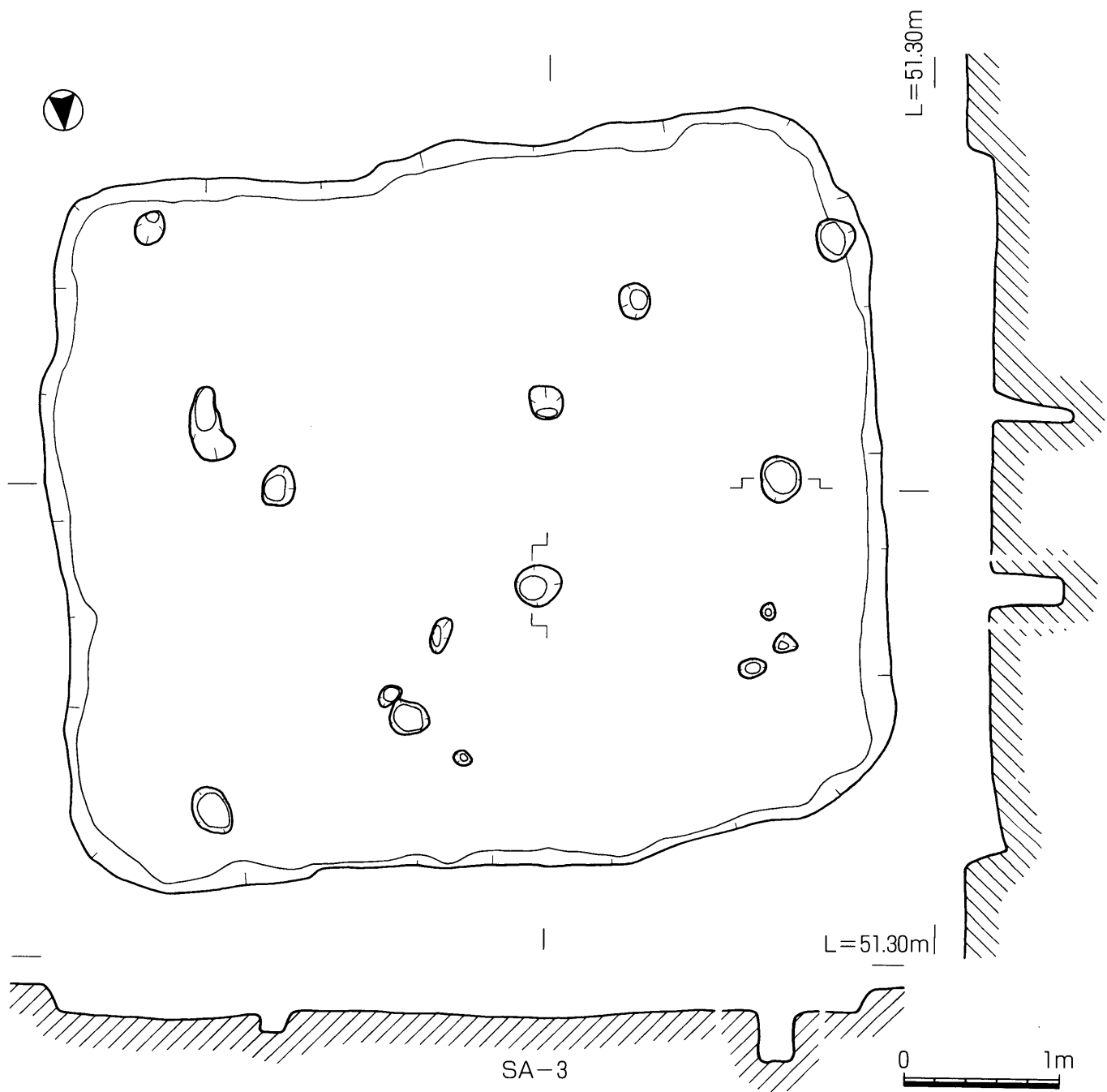
266～268は甕の口縁部片である。いずれも断面形は逆L字形を呈する。272は甕の底部片で、やや上げ底気味に作られている。269・270は甕の胴部片である。271は大型の壺の口縁部片である。口縁部を肥厚させるもので円形浮文が施文されている。273～276は壺の頸部～胴部片である。273は屈曲部に1条の突帯を巡らす。274と275はおそらく同一個体で図面上において復元可能である。276は頸部に1条・胴部2ヶ所に2条の突帯を巡らす。かなりの大型品である。277は大型の壺の底部片である。



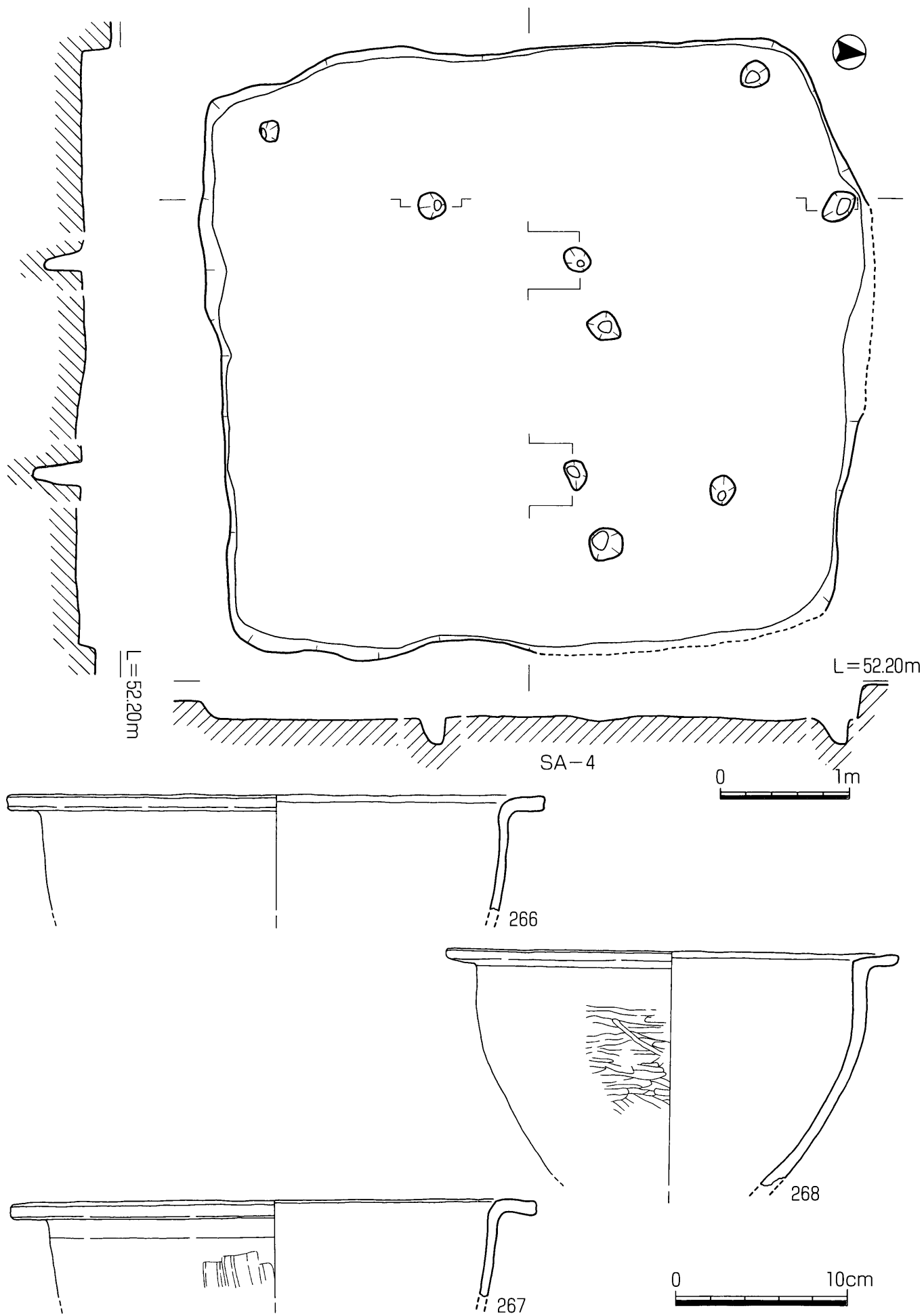
第18図 SA-2及びSA-2出土遺物実測図① (S= 1/40, 1/3)



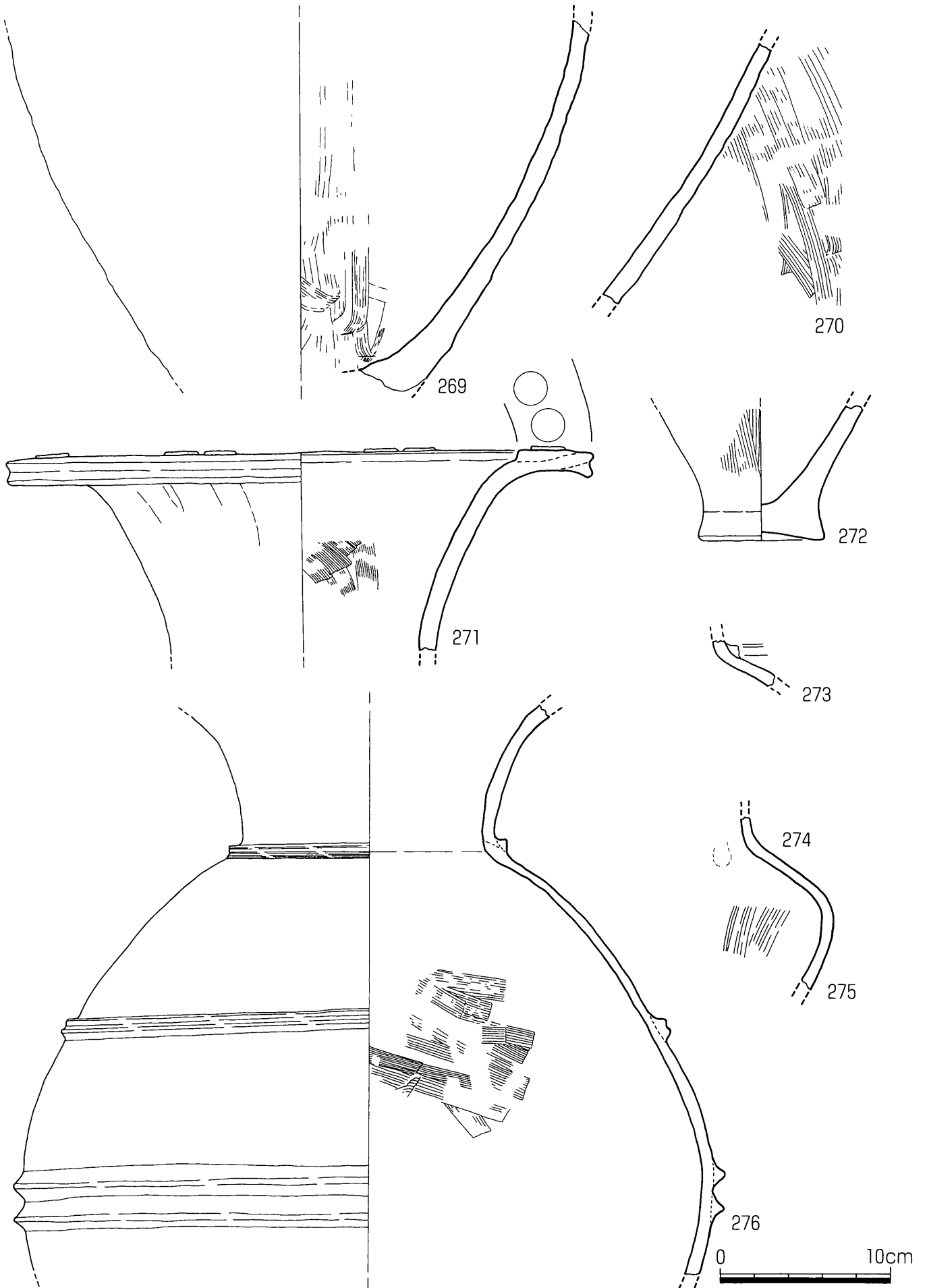
第19図 SA-2出土遺物実測図② (S= 1/3, 2/3, 1/2)



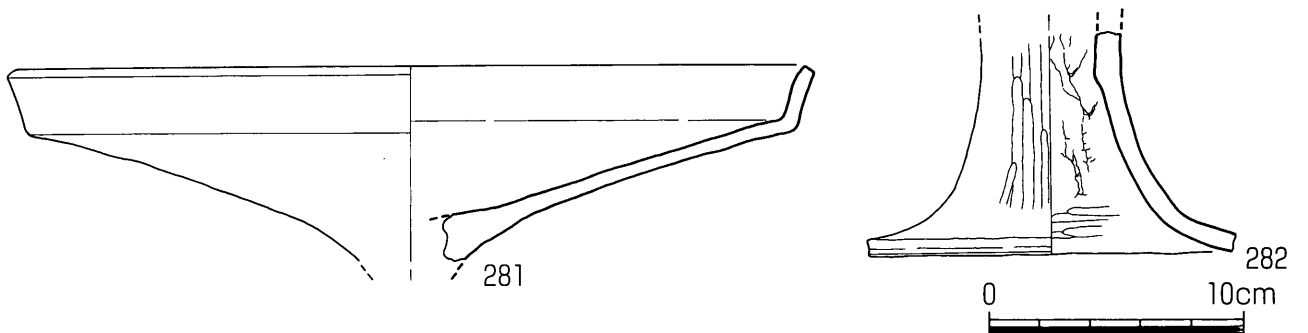
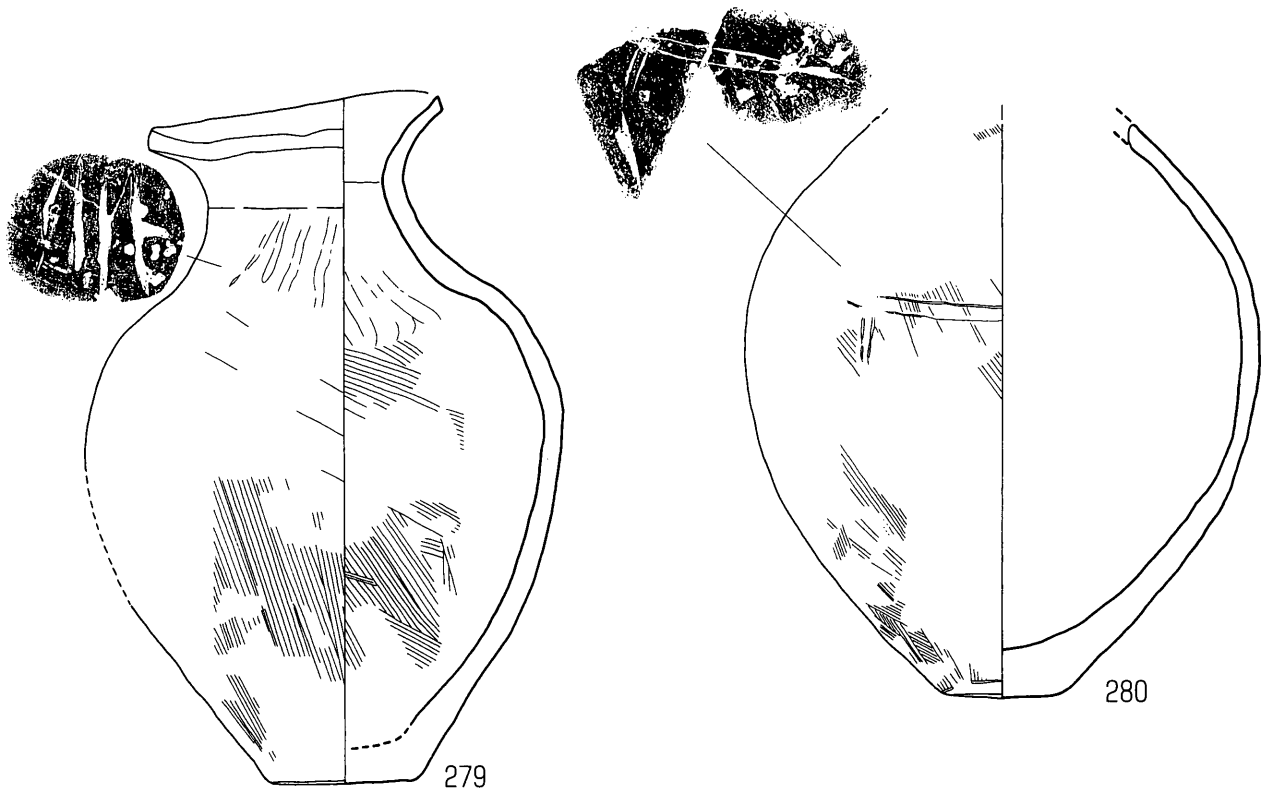
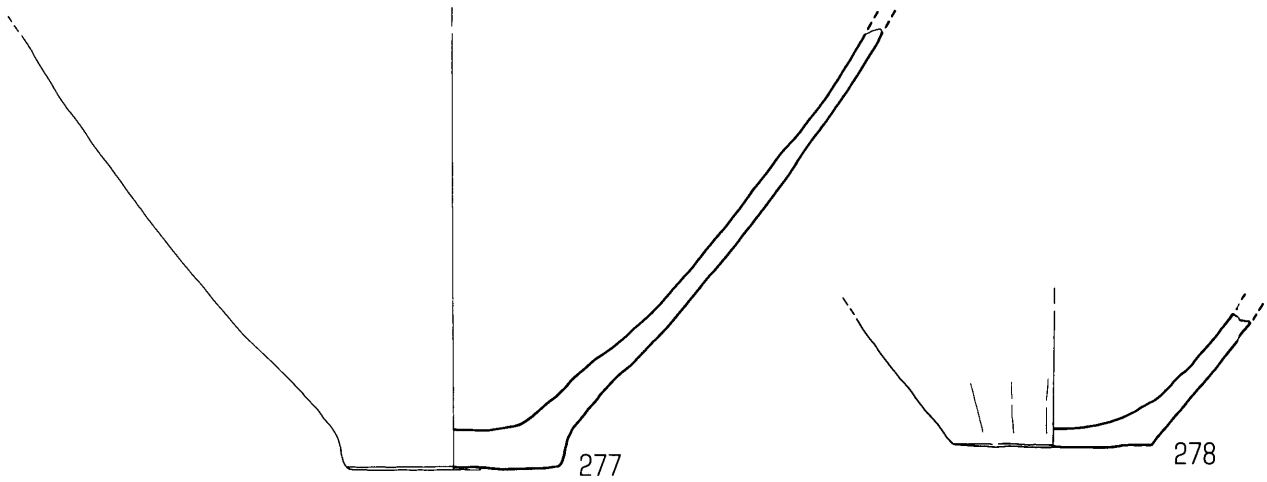
第20図 SA-3及びSA-3出土遺物実測図 (S= 1/40, 1/3)



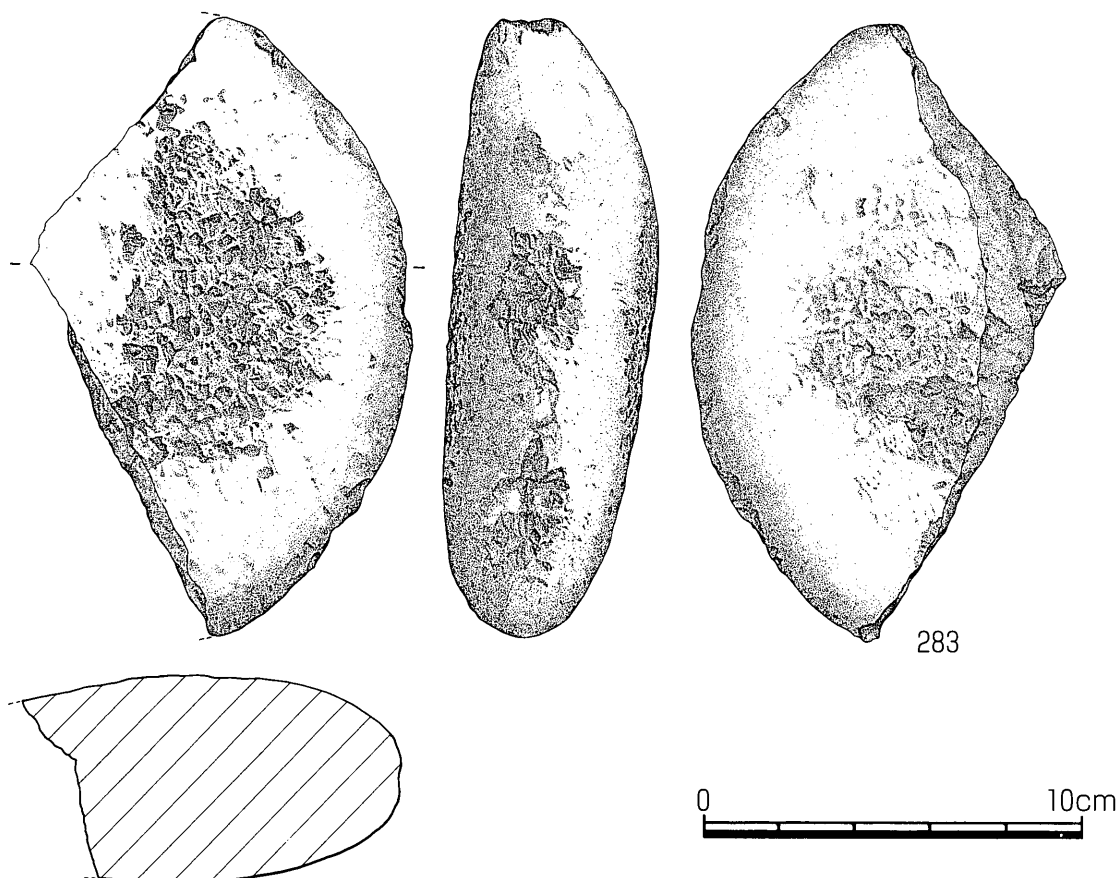
第21図 SA-4及びSA-4出土遺物実測図① (S= 1/40, 1/3)



第22図 SA-4出土遺物実測図② (S=1/3)



第23图 SA-4出土遺物実測図③ (S= 1/3)



第24図 SA-4 出土遺物実測図④ (S=1/2)

278は壺の底部片である。279は完形の壺である。頸部に記号文が施されている。全体的にややひずんでいる。280は壺の胴部～底部片である。胴部には記号文が施されている。281は高杯の杯部片である。282は高杯の脚部である。283は敲石である。2個出土したが、そのうちの1つを図示した。両面及び側面に打痕が明瞭に確認できる。割れ口にも打痕が見られるため最初から破碎された礫を使用したものではないだろうか。

■SA-5 (第25図・表5)

3.62m×3.75mの方形プランを呈する。東側にやや突出する部分がある。検出面からの床面の深さは0.2mを測る。床面中央部西側に径0.12m、深さ0.21mの柱穴が1本検出された。南西部に大きく攪乱を受ける。埋土中からは弥生土器片が出土した。

284は壺の頸部片である。3条の突帯がみられる。285は壺の胴部～底部片である。外面は横方向のミガキ調整により丁寧に仕上げている。底部は平底で最大径が胴部中央よりやや下に見られる。

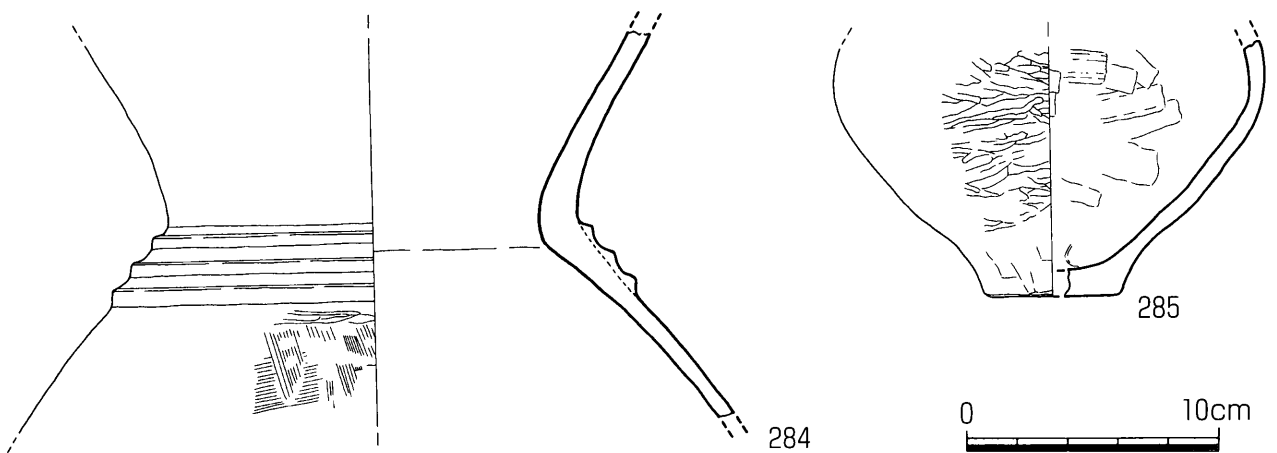
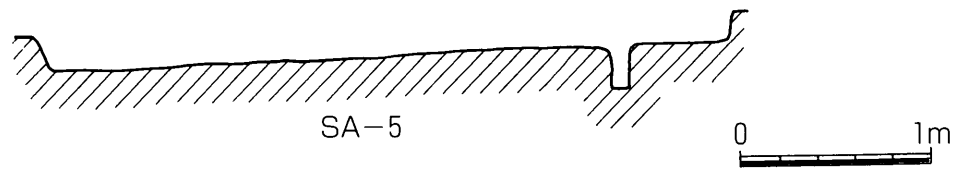
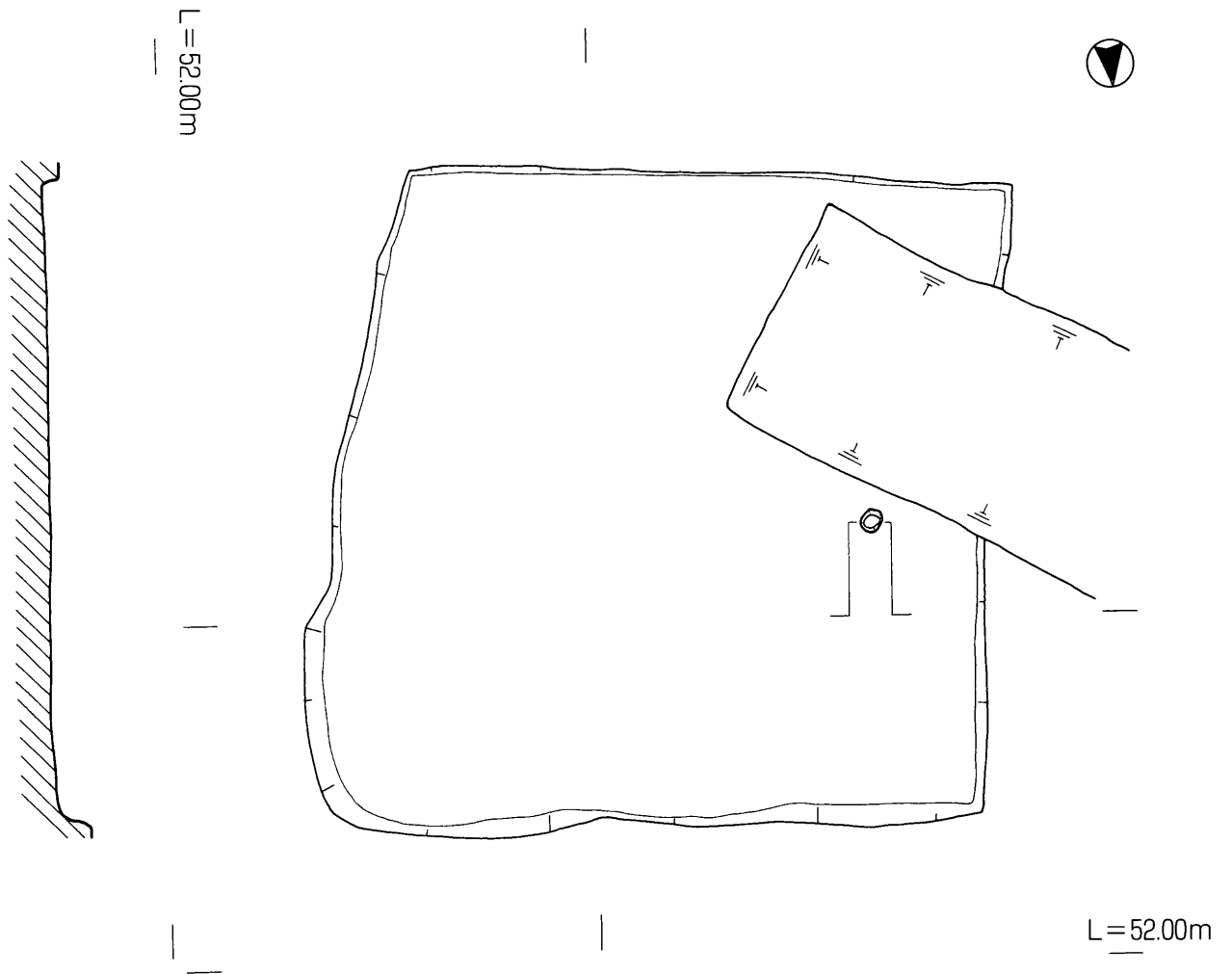
■SA-6 (第26・27図・表5・7)

径4.94mの不整円形プランを呈する。南側に間仕切りをもつ突出部を有する。検出面からの床面の深さは0.17mを測る。径0.15m程度、深さ0.24m程度の柱穴が二本中央部に並んで検出された。

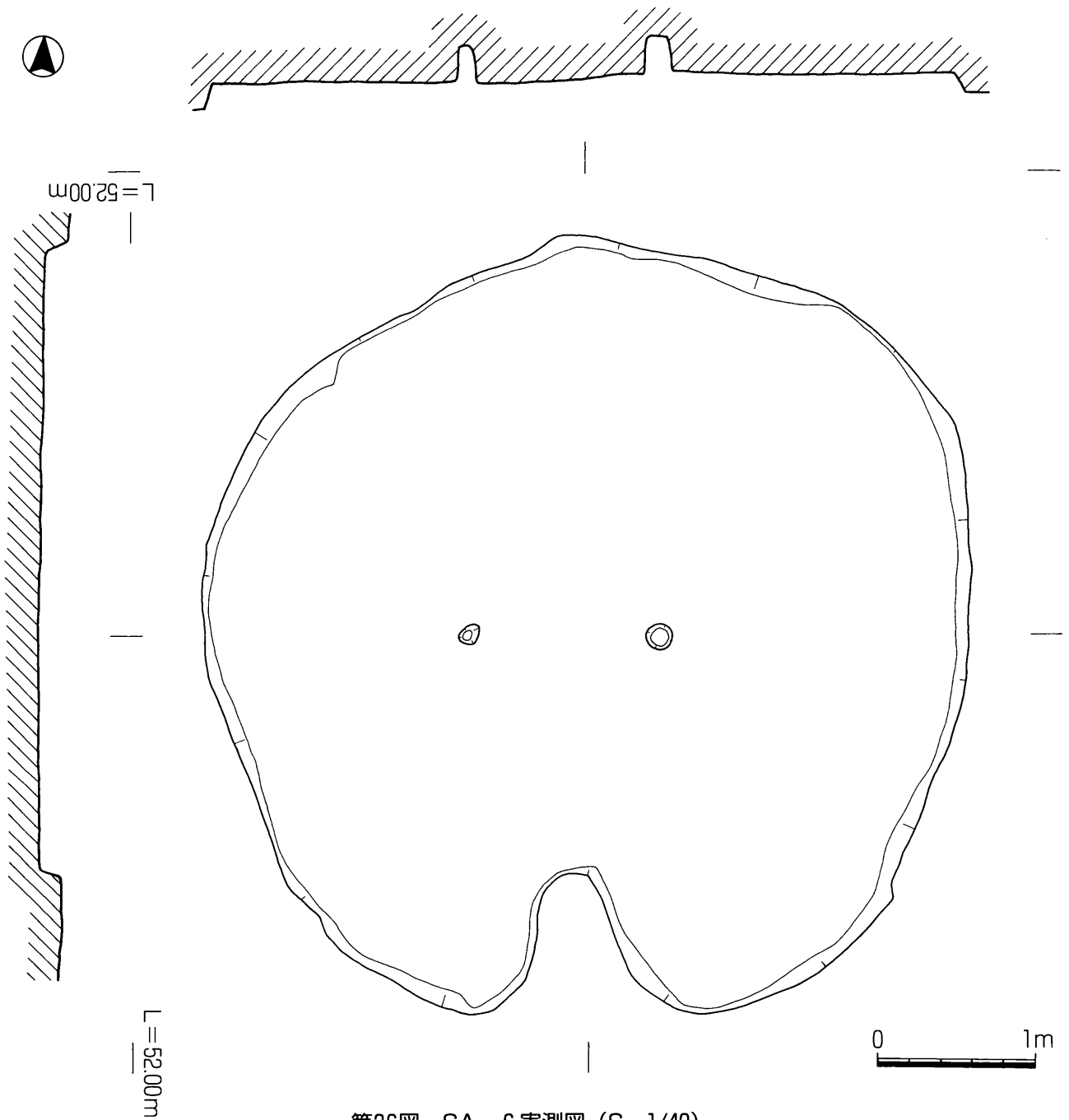
埋土中及び床面中央やや西側から弥生土器片が集中して出土した。また数点の石器・少量の炭化物も検出された。

286は下城式系の甕の口縁部片である。287は山之口式系の甕の胴部片であり、胎土に金雲母が多



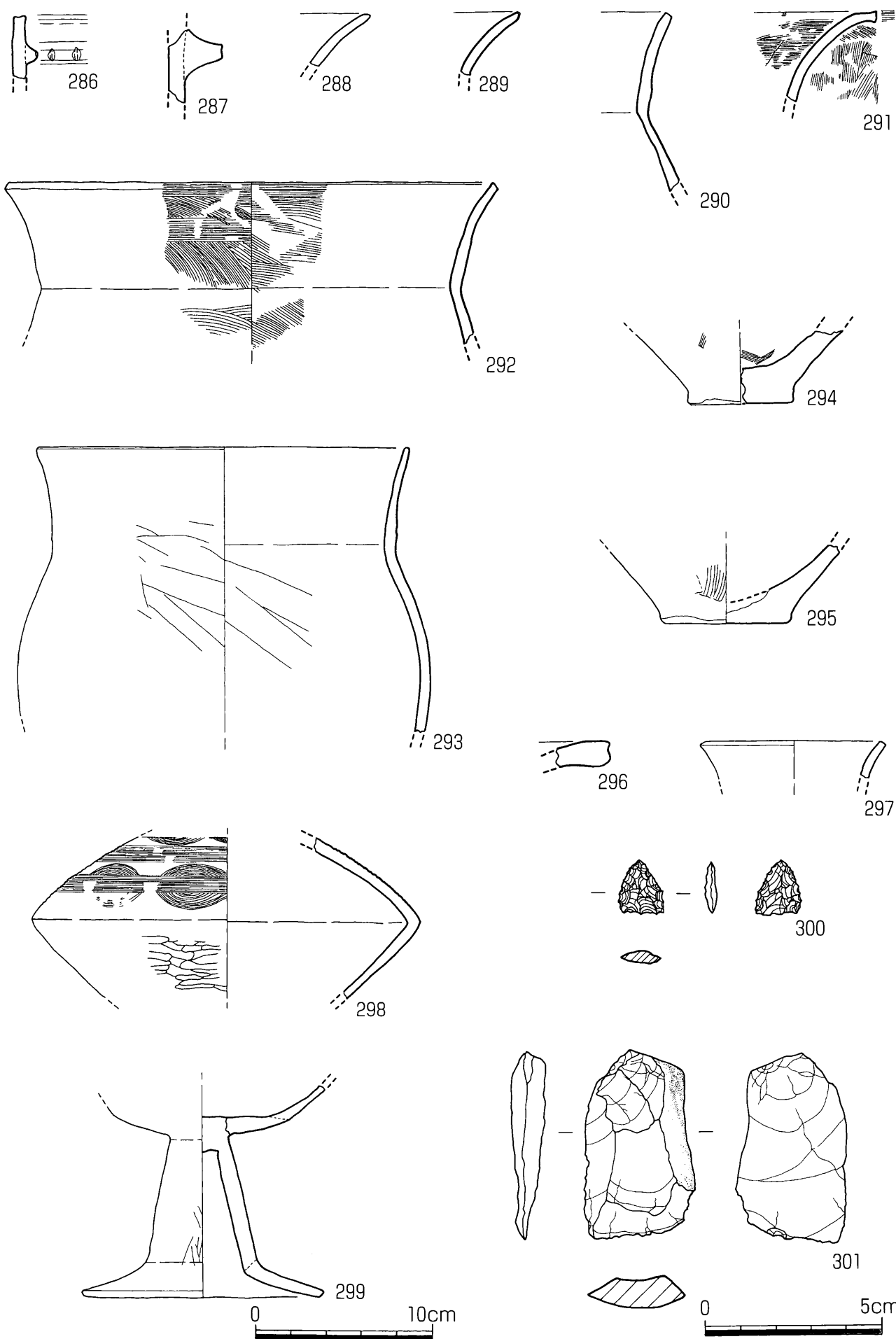


第25図 SA-5及びSA-5出土遺物実測図 (S= 1/40, 1/3)



第26図 SA-6 実測図 (S=1/40)

くみられる。288~291は甕の口縁部片である。292・293は甕の口縁部~胴部片である。頸部付近~胴部にかけては非常に細かい単位の刷毛目調整が行われている。294・295はおそらく甕の底部片である。両者共に平底を呈する。296・297は壺の口縁部である。296は口縁部を肥厚させるタイプのものである。298は免田式長頸壺の胴部片である。299は高杯の杯部~脚部である。脚部については完全に残存する。300は打製石鏃である。301は自然面を有する不定形な縦長剥片である。



第27图 SA-6出土遺物実測図 (S= 1/3, 2/3)

## 第2節 土坑について

### ■SC-34 (第28・30図・表5)

径0.4mの不整円形プランを呈する。検出面からの床面の深さは0.3mを測る。甕が1個体横倒しになり、つぶれた状態で検出された。そのほかに遺物は出土しなかった。

302は完形の甕である。内外面の調整は刷毛目で口縁部はくの字状を呈し、底部は上げ底である。

### ■SC-35 (第28・30図・表5)

1.4×1.09mの不整楕円形プランを呈する。検出面からの床面の深さは0.42mを測る。埋土中及び床面からはわずかに弥生土器片が出土した。

303は壺の口縁部片である。304は壺の底部片である。303は不明瞭だが内外面に、304は外面に朱が塗布されている。

### ■SC-36 (第28・30図・表5)

径1.3mの不整円形プランを呈する。検出面からの床面の深さは0.43mを測る。南部側に大きく攪乱を受けていた。埋土中及び床面からは弥生土器片が出土した。

305は縄文土器の口縁部である。おそらく後期のものであると思われるが、流れ込みであろう。306は中溝式の口縁部である。断面形は逆L字形を呈する。

### ■SC-38 (第28・30図・表5)

北東側にわずかに突出部をもつ径1.36mの不整円形プランを呈する。検出面からの床面の深さは0.31mを測る。床面南東部に径0.2m、深さ0.14mの柱穴が1本検出された。埋土中及び床面北側～西側にかけて弥生土器片が出土した。

307・308は中溝式の口縁部～胴部片である。307は断面形が逆L字形を呈し、308はくの字状である。308は口縁部と胴部の二つの破片で接合はしていないが、図面上では復元が可能であった。

### ■SC-39 (第29・31図・表5)

径1.83mの不整円形プランを呈する。検出面からの床面の深さは0.23mを測る。床面東側に径0.25m、深さ0.08mの柱穴と0.36×0.28mの楕円形プランの深さ0.74mを測る柱穴が1本ずつ検出された。また床面西側には径0.4m、深さ0.6mの二段掘りの柱穴が1本検出された。埋土中及び床面の南側、柱穴からは弥生土器片が出土した。

309・310は甕の口縁部片である。両者共に断面形は逆L字形を呈する。

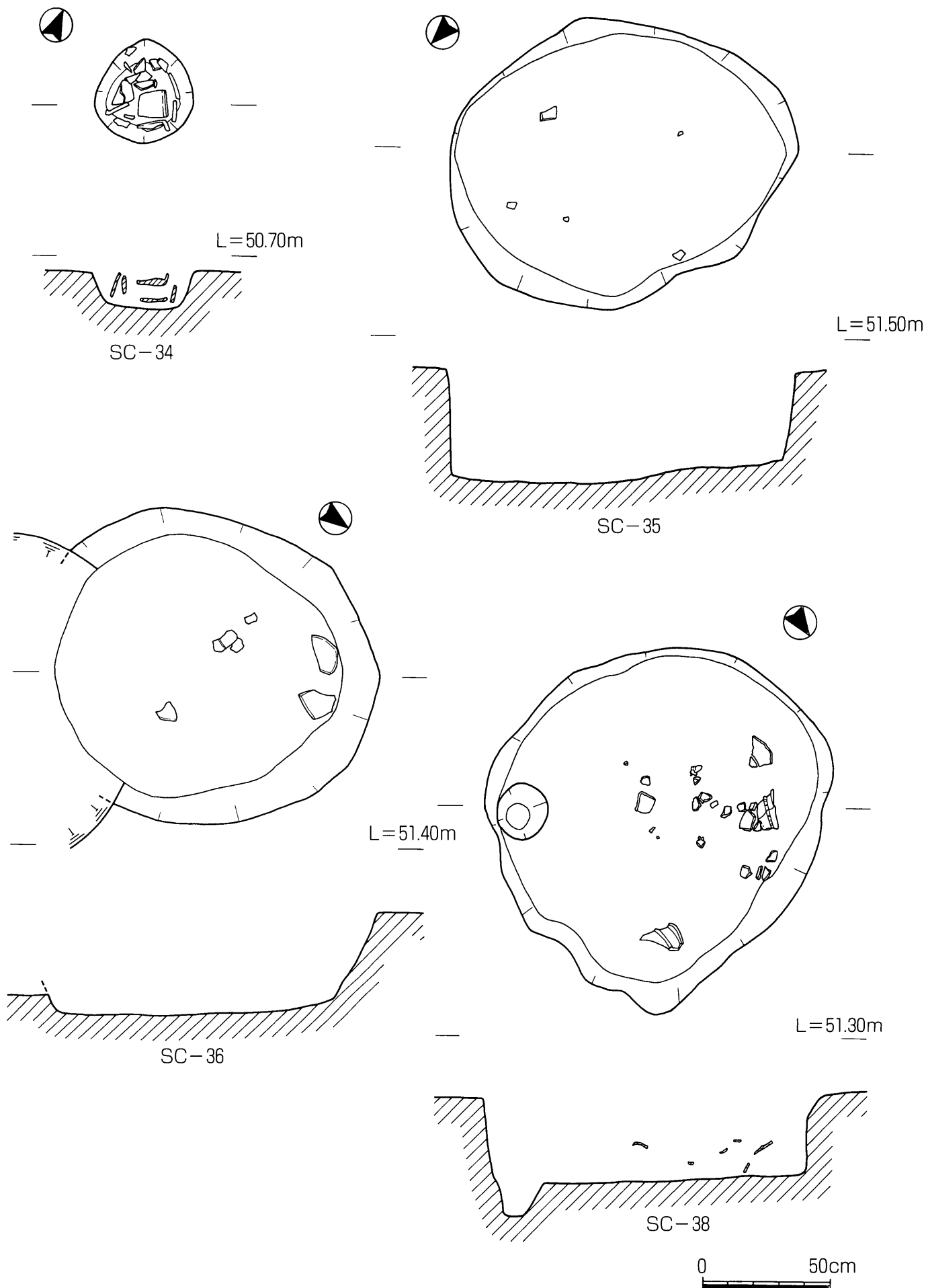
### ■SC-40 (第29・31図・表5)

1.18m×0.85mの不整楕円形プランを呈する。検出面からの床面の深さは0.12mを測る。床面中央部に径0.2m、深さ0.3mの柱穴が1本検出された。また、埋土中及び床面からは弥生土器片が数点検出された。

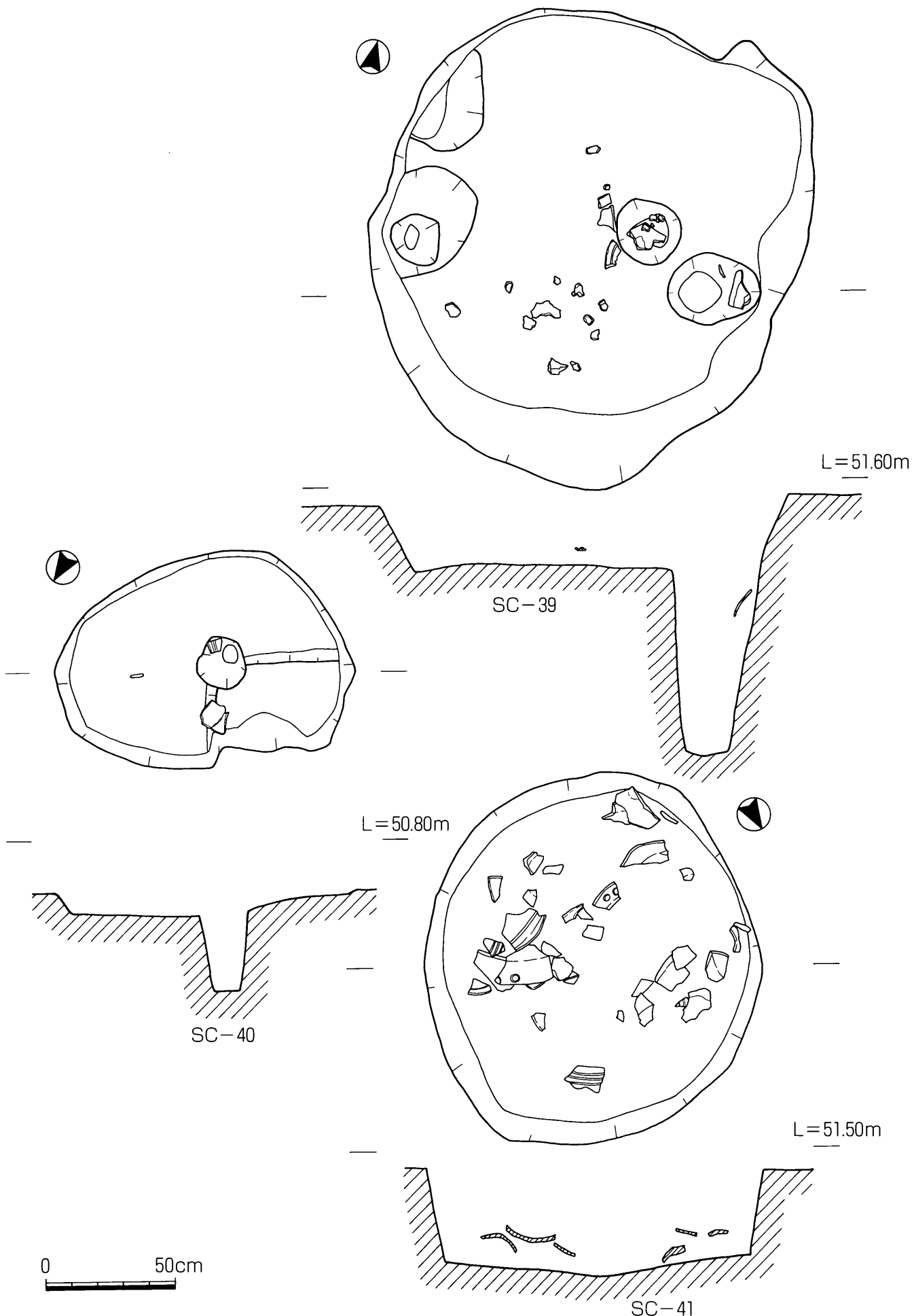
### ■SC-41 (第29・31図・表5)

径1.43mの不整円形プランを呈する。検出面からの床面の深さは0.45mを測る。埋土中及び床面からは弥生土器片が多量に出土した。

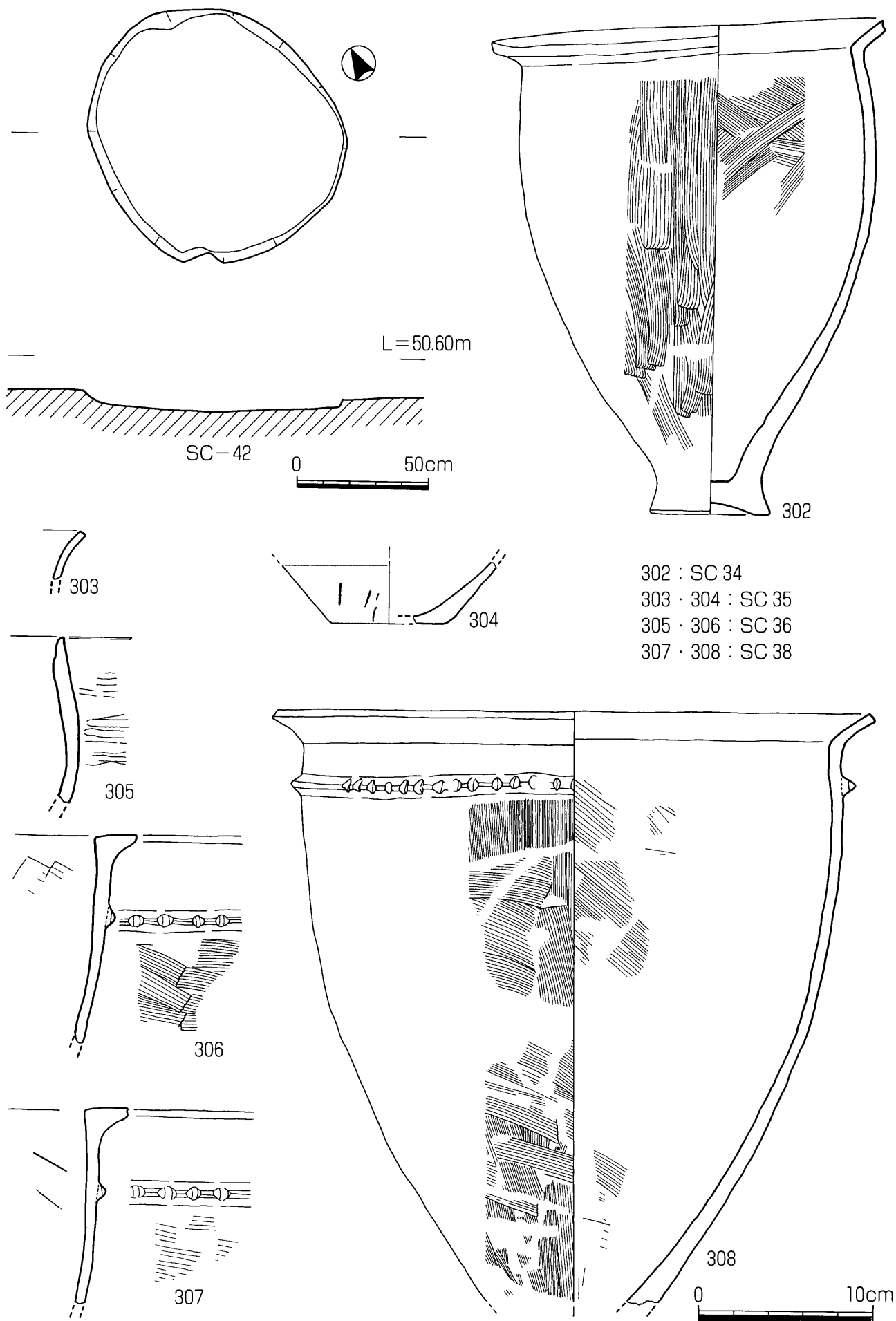
311は甕の胴部片である。312は口縁部と底部の二つの破片で接合はしていないが図面上ではほぼ完形となる甕である。口縁部は逆L字形を呈し、口縁部のやや下に1条の突帯を巡らす。313は大型の壺の口縁部～胴部片である。口縁部を肥厚させ、円形浮文を施す。頸部には1条の突帯、胴部には



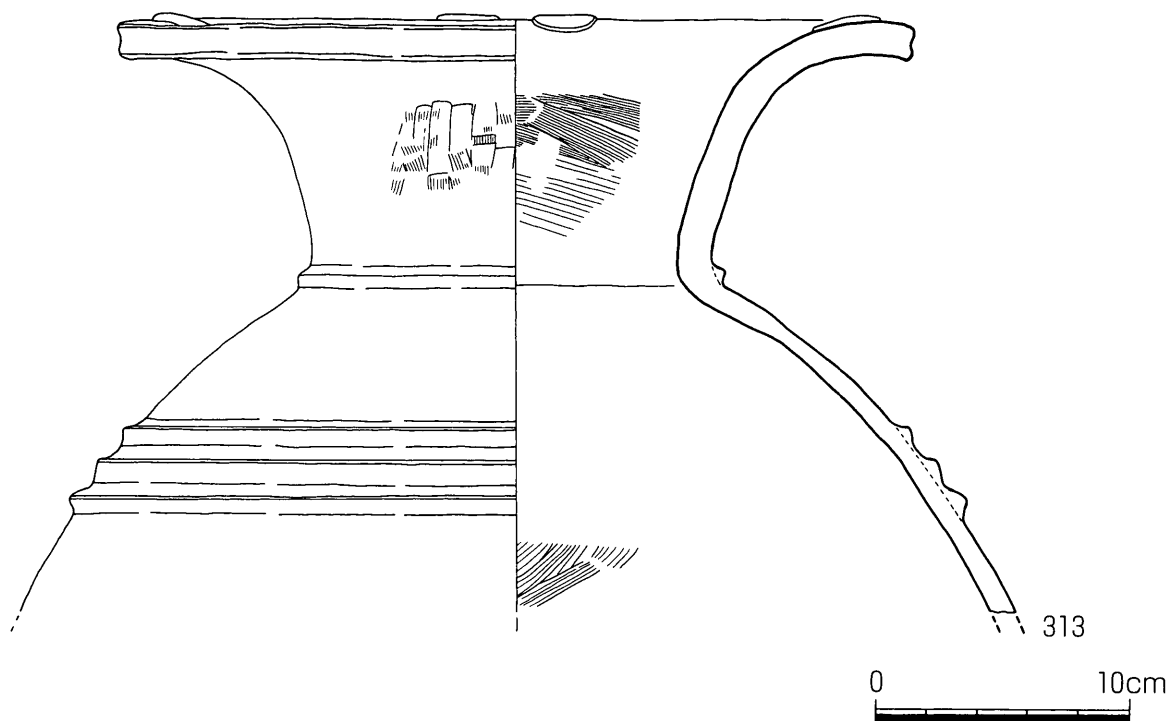
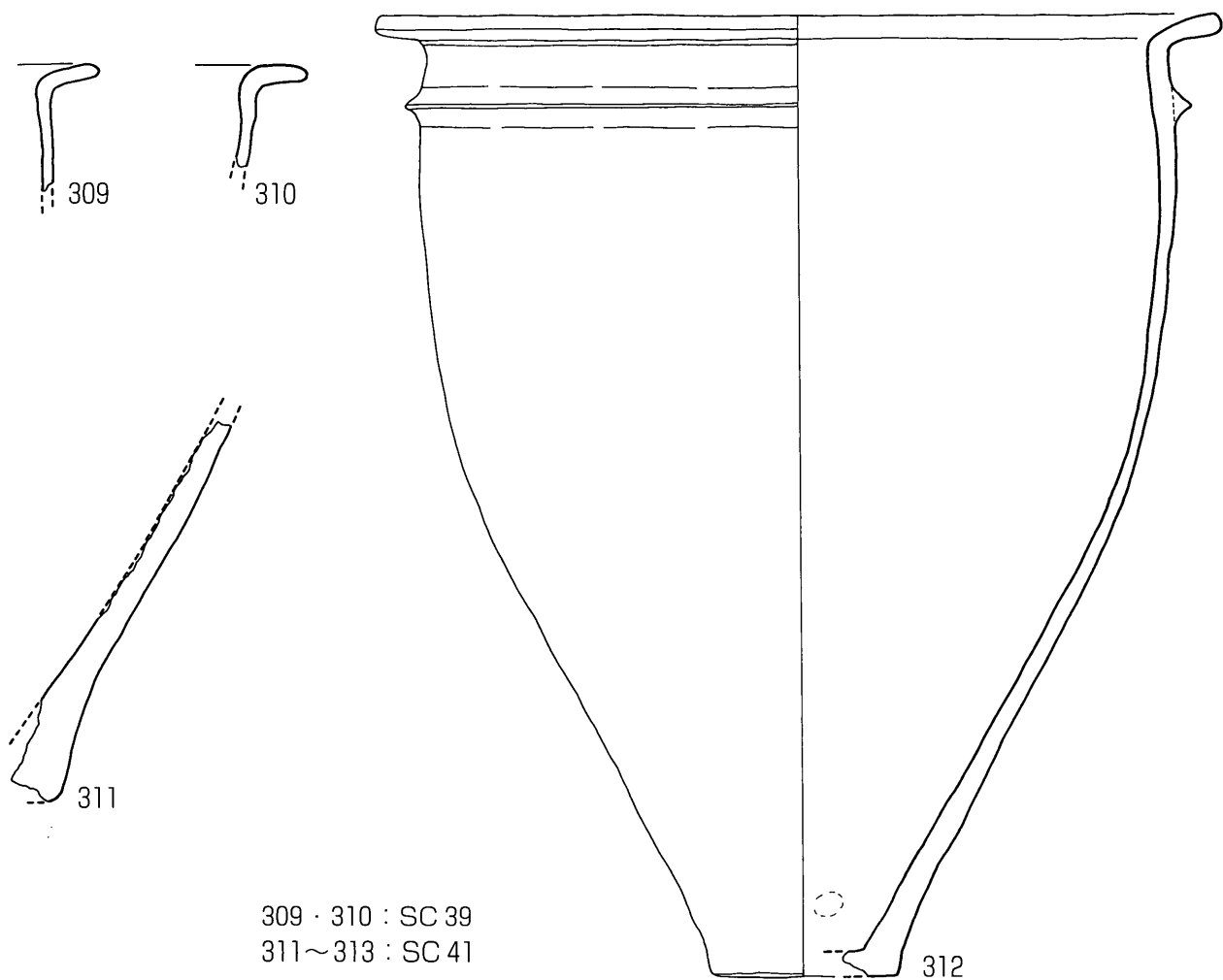
第28図 SC-34~36・38実測図 (S=1/20)



第29図 SC-39~41実測図 (S=1/20)

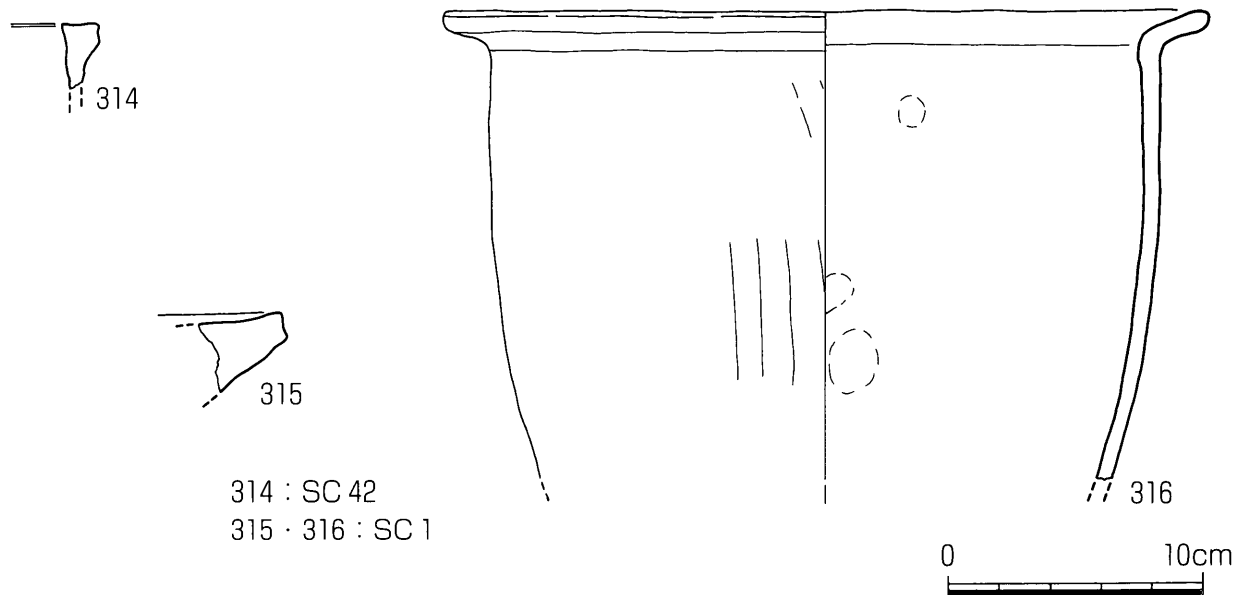


第30図 SC-42及びSC-34~36・38出土遺物実測図 (S= 1/20, 1/3)



第31図 SC-39・41出土遺物実測図 (S= 1/3)





第32図 SC-42・1出土遺物実測図 (S=1/3)

3条の突帯を巡らせる。

■SC-42 (第30・32図・表5)

径1mの不整円形プランを呈する。検出面からの深さは0.07mを測る。埋土中から弥生土器片が1点のみ出土した。

314は甕の口縁部片である。口唇部は肥厚させ、断面形は逆L字形を呈する。

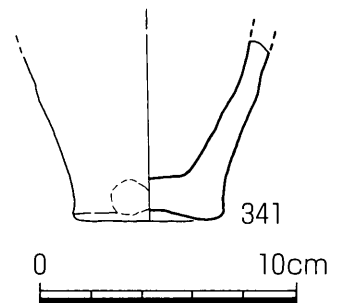
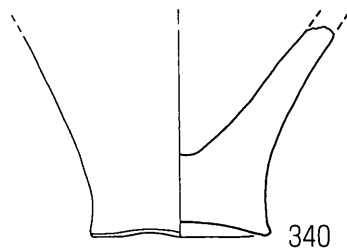
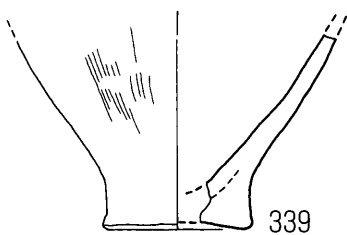
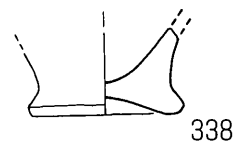
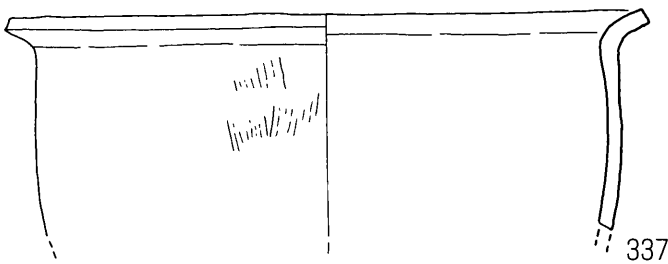
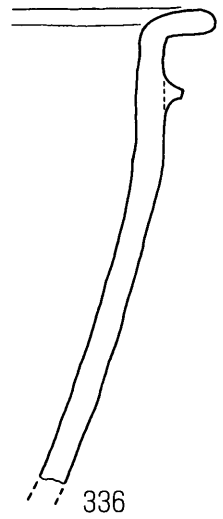
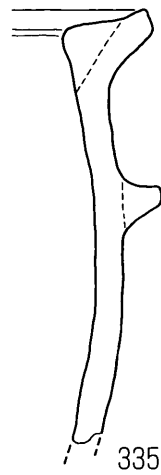
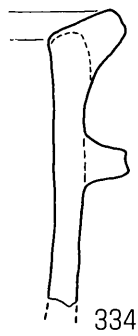
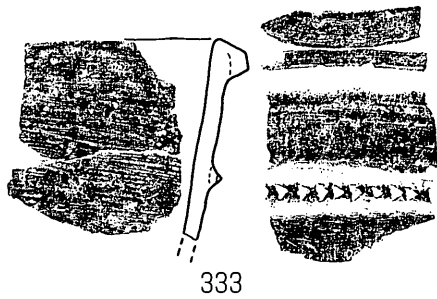
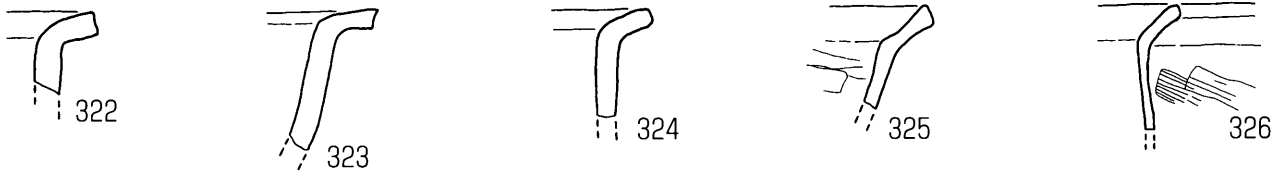
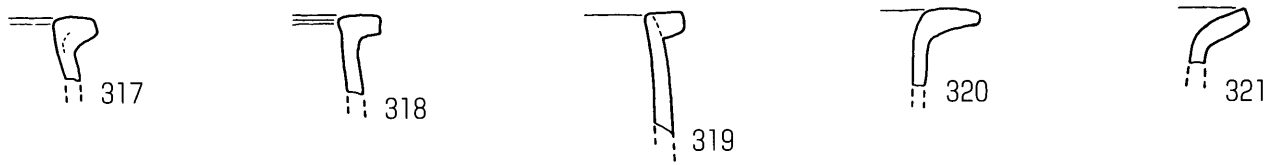
■SC-1 (第32図・表5)

1.47m×0.77mの不整楕円形プランを呈する。検出面からの床面の深さは0.9mを測る。埋土中より扁平な礫(長さ24cm・幅14cm・重量3.1kg)及び弥生土器片が出土した。315は山之口式の甕の口縁部片であろうか。胎土には金雲母が含まれている。316は甕の口縁部～胴部片である。断面形は逆L字形を呈する。

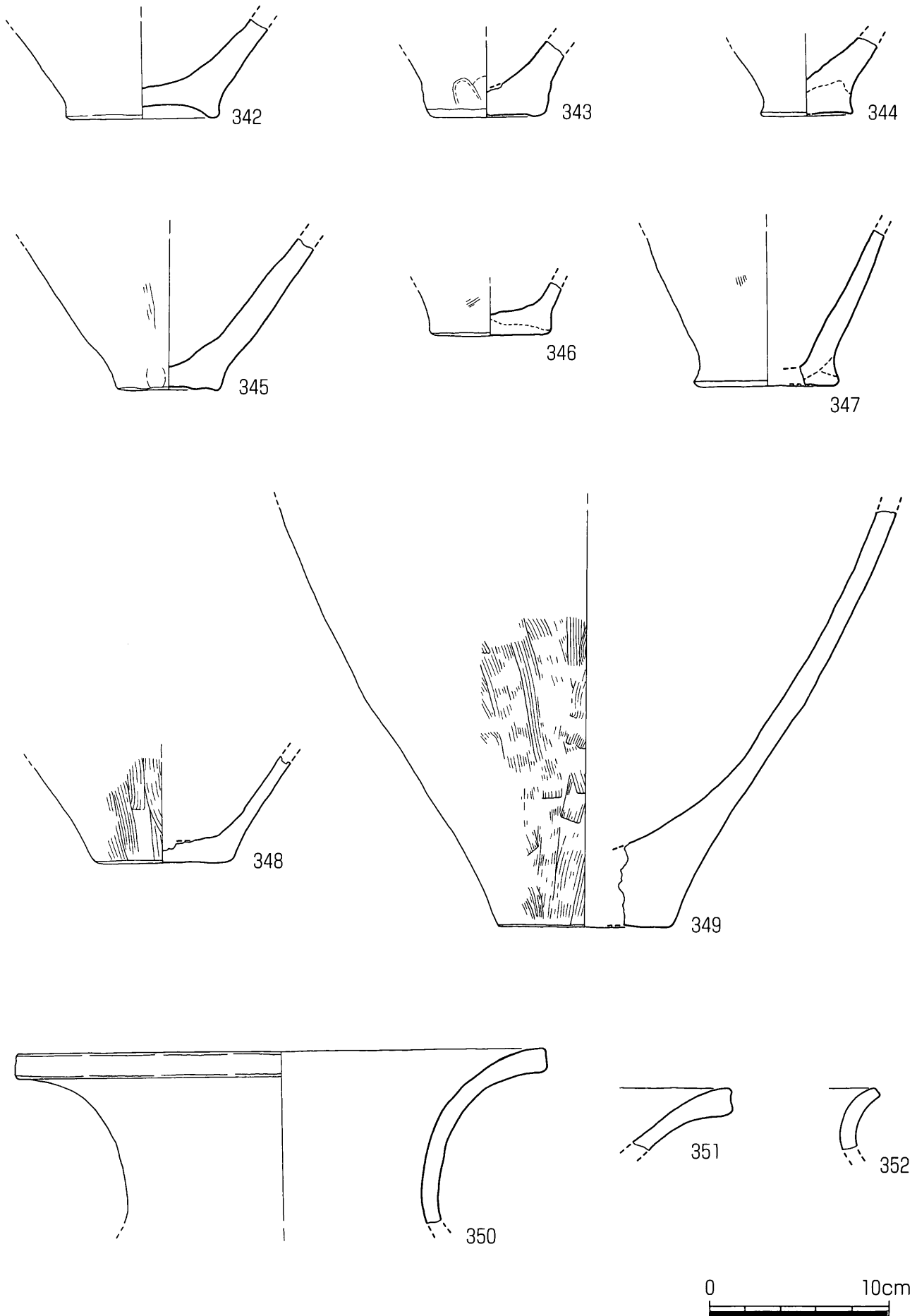
### 第3節 包含層出土の弥生土器について

第3層から弥生時代中期～後期に該当すると考えられる土器が多量に出土したのでここでまとめて報告する。(第33～36図・表5～6)

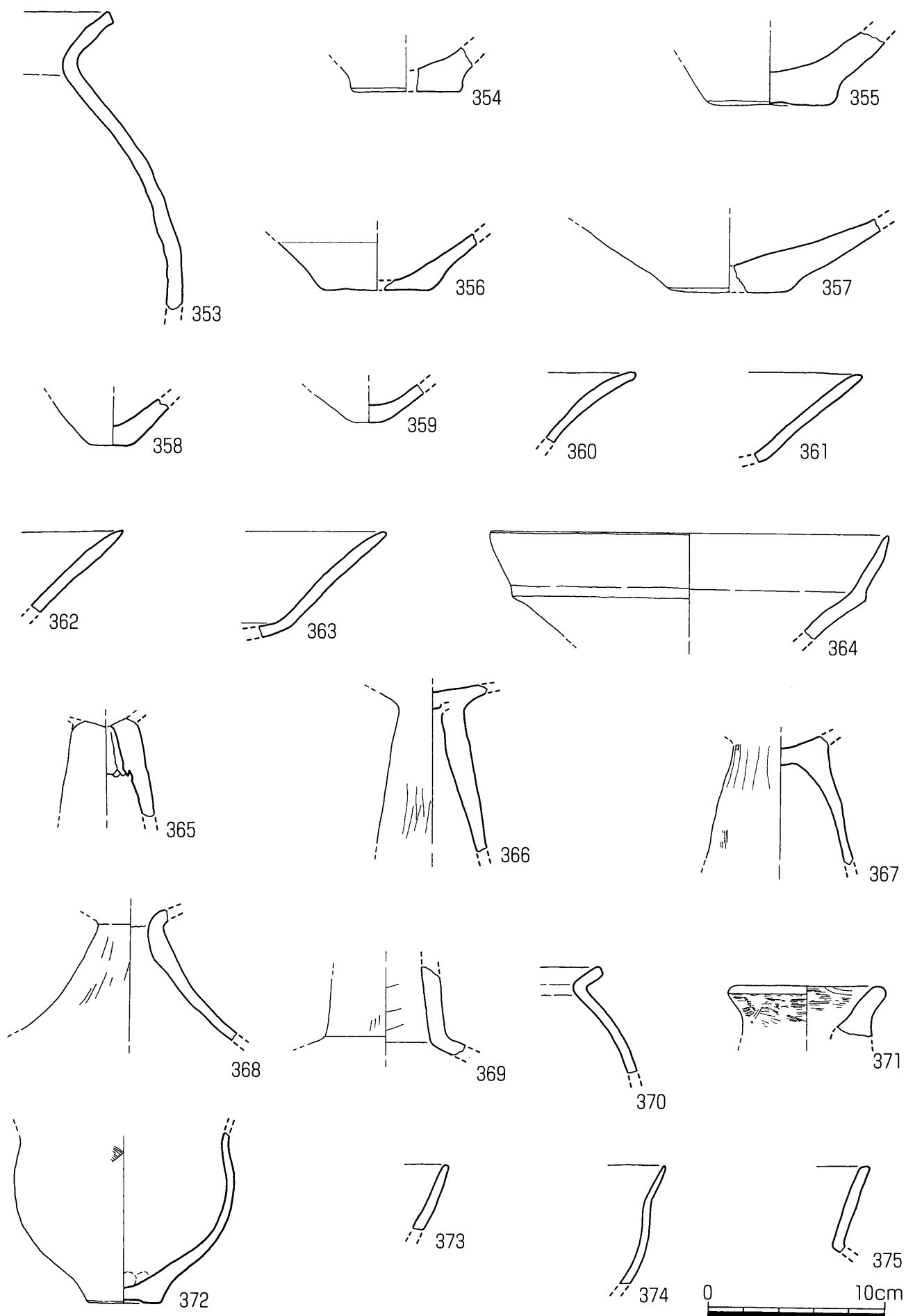
317～332は甕の口縁部片である。317～324は逆L字型、325・326はくの字状、327～332は緩やかなくの字状を呈するものである。333～337は甕の口縁部～胴部片である。333は中溝式の甕で口縁部を肥厚させるものである。334・335は胎土に金雲母を含み、山之口式系の甕と考えられるものである。336は胴部に1条の突帯を巡らす。337は無紋の甕で口縁部はくの字状を呈する。338～349は甕の底部片である。338～342は上げ底状、343～345はやや上げ底状、346・347・349は平底状を呈する。349は胎土に金雲母を含み、山之口式系の甕と考えられるものである。350～352は壺の口縁部片である。350・351は口縁部を肥厚させるタイプのものである。353は壺の口縁部～胴部片である。354～359は壺の底部片である。354～356まで平底状、357は凸レンズ状、358・359は尖底状を呈する。356は外面に赤色顔料を塗布する。360～364は高杯の口縁部片である。360・361・363は外反



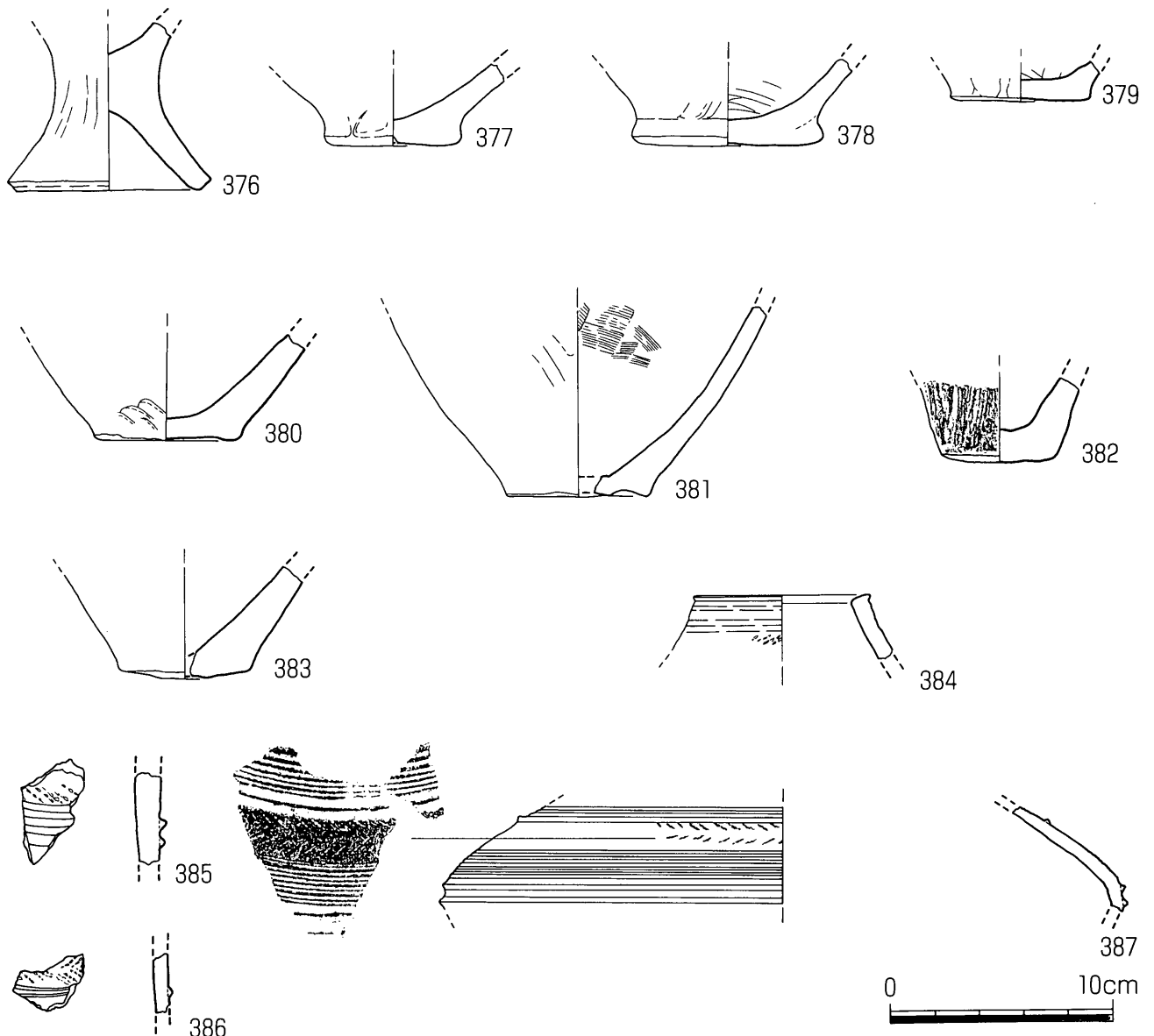
第33图 包含層出土弥生土器実測图① (S=1/3)



第34图 包含層出土弥生土器实测图② (S= 1/3)



第35图 包含層出土弥生土器実測图③ (S= 1/3)



第36図 包含層出土弥生土器実測図④ (S= 1/3)

するもの、362は直線的な形で、364はやや内湾しながら口唇部にいたるものである。365～369は高杯の脚部片である。370は短頸壺の口縁部～胴部片である。371は器台の破片であろうか。372は小型の鉢である。373～375は小型丸底壺の破片であろうか。373はかなり薄手に成形されている。376～383は弥生土器の底部片である。器種の判別が困難なものを集めた。376は脚台付きの甕の底部だろうか。377～379は平底状、380・381はやや上げ底状、382・383は凸レンズ状を呈する。

384～387は凹線文土器である。同一個体の可能性が高いが接合できなかった。器形は脚台付き壺であろうか。いずれの個体にも貝殻による刺突文がみられる。387の上部に施された沈線とその下に施された沈線とは沈線の間隔が違うため、異なる原体で施文したと思われる。

表5 弥生土器観察表①

番号	器種	残存部位	出土地点	口径	器高	底部径	外面の調整・文様	内面の調整・文様	外面の色調	内面の色調	備考
250	小型鉢	完存	SA2	7.4	6.1	2.7	ナデ(口縁部)・ハケ目(胴部)・指押さえ(底部)	ナデ(口縁部)・指押さえの後ナデ(胴部)	浅黄橙	灰白	スス付着
251	甕	底部	SA2			5.8	ナデ・指押さえ	ナデ	にぶい橙	褐灰	
252	甕	底部	SA2			6.8	ナデ・指押さえ	ナデ	にぶい橙	褐灰	
253	甕	底部	SA2			5.9	指押さえの後ナデ	指押さえ	灰白	灰	
254	甕	ほぼ完形	SA2	15.1	18.6		ナデ(口縁部)・ハケ目(胴部)・ナデ(底部)	ナデ(口縁部)・ハケ目の後ナデ(胴部)	橙	にぶい橙	スス付着
255	甕	完存	SA2	21.9	24.1	7.1	ナデ(口縁部)・ハケ目(胴部)・指押さえ後ナデ(底部)	ナデ(口縁部)・ハケ目(胴部)	にぶい褐	にぶい赤褐	
256	短頸壺	口縁部～頸部	SA2	13.9			ナデ	ナデ	にぶい橙	橙	記号文有り・凹線文土器の影響を受ける
257	短頸壺	口縁部～頸部	SA2	14.4			ナデ(口縁部)・ハケ目の後ナデ(頸部)	ナデ(口縁部)・ハケ目の後ナデ(頸部)	にぶい橙	褐灰	スス付着
258	壺	頸部	SA2				ナデ	ナデ	橙	橙	記号文有り
259	長頸壺	完形	SA2	8.8	34.4	5.3	ナデ	ハケ目(頸部)	にぶい橙	褐	記号文有り・凹線文土器の影響を受ける
262	甕	胴部	SA3				ナデ	ナデ	にぶい黄橙	にぶい褐	全体にスス付着 記号文有り
263	甕	胴部	SA3				ハケ目の後ナデ	ナデ	にぶい褐	にぶい橙	
264	甕	口縁部～胴部	SA3	21.2			ナデ(口縁部～頸部)・ハケ目(胴部)	ナデ	にぶい褐	にぶい橙	スス付着
265	縄文土器深鉢	底部	SA3			8.9	貝殻条痕	風化により不明	にぶい赤褐	にぶい赤褐	
266	甕	口縁部	SA4	30.9			ナデ	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	スス付着
267	甕	口縁部～胴部	SA4	30.1			ナデ(口縁部)・ハケ目(胴部)	ナデ(口縁部)・ハケ目(胴部)	にぶい黄橙	褐灰	
268	甕	口縁部～胴部	SA4	24			ナデ(口縁部)・ミガキ(胴部)	ナデ	にぶい褐	にぶい褐	スス付着
269	甕	胴部	SA4				風化のため不明瞭	ハケ目	にぶい黄橙	にぶい橙	
270	甕(山之口式)	胴部	SA4				ハケ目	ナデ	にぶい褐	灰黄褐	
271	広口壺	口縁部～頸部	SA4	34.1			ナデ(口縁部)・ハケ目の後、ナデ(頸部)	ナデ(口縁部)・ハケ目(頸部)	にぶい黄橙	にぶい黄橙	円形浮文有り・スス付着
272	甕	底部	SA4			7.4	ナデ・ハケ目	ナデ	にぶい黄橙	褐灰	
273	壺	肩部	SA4				ナデ	ナデ	にぶい黄橙	灰黄褐	
274	壺	頸部～肩部	SA4				風化により不明	ハケ目・指押さえ	にぶい橙	褐灰	No.275と同一個体
275	壺	胴部	SA4				ハケ目の後ナデ	ハケ目	にぶい橙	暗灰	No.274と同一個体
276	壺	頸部～胴部	SA4				ナデ	ナデ(頸部)・ハケ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	スス付着
277	壺	胴部～底部	SA4			8.6	ナデ	ナデ	にぶい橙	灰黄褐	スス付着
278	壺	底部	SA4			8	ハケ目の後ナデ	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄褐	スス付着
279	壺	完形	SA4	11.4	26.7	6	ナデ(口縁部～胴部)・ハケ目(胴部～底部)	ハケ目	にぶい橙	にぶい橙	記号文有り
280	壺	胴部～底部	SA4				ハケ目	風化により不明	にぶい橙	黒褐	記号文有り
281	高杯	口縁部	SA4	31.2			ナデ	ナデ	にぶい橙	にぶい橙	
282	高杯	脚部	SA4			14.3	ミガキ・ナデ	ミガキ	にぶい黄橙	にぶい橙	
284	壺	頸部～胴部	SA5				ナデ(頸部～肩部)・ハケの後、ミガキ(胴部)	風化により不明	にぶい黄橙	にぶい黄橙	
285	壺	胴部～底部	SA5			5.4	ミガキ(胴部)・ハケ(底部)	ハケの後ナデ	にぶい褐	にぶい黄褐	スス付着
286	甕(下城式)	口縁部	SA6				ナデ	ナデ	褐	にぶい褐	
287	甕(山之口式)	胴部	SA6				ナデ	斜方向のナデ	褐	にぶい褐	
288	甕	口縁部	SA6				ナデ	ナデ	にぶい褐	橙	
289	甕	口縁部	SA6				ナデ	ナデ	にぶい橙	にぶい橙	
290	甕	口縁部	SA6				ナデ	ナデ	灰褐	にぶい褐	スス付着
291	甕	口縁部	SA6				ナデ(口唇部)・ハケ目(口縁部)	ハケ目	明赤褐	明赤褐	
292	甕	口縁部	SA6	27.4			ハケ目	ハケ目	にぶい橙	にぶい橙	
293	甕	口縁部～胴部	SA6	20.9			ナデ(口縁部)・ハケ目(胴部)	ナデ(口縁部)・工具による削り(胴部)	にぶい褐	にぶい橙	スス付着
294	甕	底部	SA6			5.7	ハケ目	風化により不明	にぶい橙	暗灰	
295	甕	底部	SA6			6.8	ハケ目・ナデ	風化により不明	にぶい橙	灰	
296	甕	口縁部の小片	SA6				ナデ	ミガキ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	
297	壺	口縁部	SA6	9.9			ナデ	ナデ	にぶい橙	黄褐	
298	長頸壺(免田式)	胴部	SA6				ミガキ	風化により不明	にぶい橙	褐灰	重弧文・沈線文
299	高杯	杯部～胴部	SA6			13.4	ナデ(杯部)・ナデ(裾部)・ミガキ(脚部)	ナデ	にぶい赤褐	にぶい赤褐	
302	甕	完形	SC34	22.3	27.8	6.6	ナデ(口縁部)・ハケ目(胴部)	ナデ(口縁部)・ハケ目(胴部)	にぶい黄橙	にぶい橙	スス付着
303	壺	口縁部	SC35				ナデ	ナデ	にぶい褐	にぶい黄褐	
304	壺	底部	SC35			6.7	ナデ	ナデ	明赤褐	灰白	外面に丹塗り
305	縄文土器深鉢	口縁部～胴部	SC36				ナデ	ナデ	明褐灰	灰黄褐	
306	甕(中溝式)	口縁部～胴部	SC36				ナデ(口縁部)・ハケ目(胴部)	板ナデ	黄灰	にぶい褐	スス付着
307	甕(中溝式)	口縁部～胴部	SC38				ナデ(口縁部)・ハケ目(胴部)	板ナデ	にぶい褐	褐灰	スス付着
308	甕(中溝式)	口縁部～胴部	SC38	33.9			ナデ(口縁部)・ハケ目(胴部)	ナデ(口縁部)・ハケ目(胴部)	にぶい褐	褐	スス付着
309	甕	口縁部～胴部	SC39				ナデ	ナデ	灰黄褐	にぶい黄橙	
310	甕	口縁部～胴部	SC39				ナデ	ナデ	にぶい黄褐	にぶい橙	
311	甕	胴部	SC41				ナデ・ミガキ	風化により不明	にぶい黄橙	灰黄褐	
312	甕	ほぼ完形	SC41	34	39.6	7.4	ナデ	ハケの後ナデ	にぶい黄褐	にぶい橙	スス付着
313	壺	口縁部～胴部	SC41	29.8			ナデ(口縁部～肩部)・ハケ目・ナデ(胴部)	ナデ(口縁部)・ハケ目(頸部～胴部)	にぶい橙	にぶい黄橙	円形浮文有り・スス付着
314	甕	口縁部	SC42				ナデ	ナデ	にぶい褐	にぶい褐	
315	甕(山之口式)	口縁部～胴部	SC1				ナデ	ナデ	にぶい橙	なし	
316	甕	口縁部～胴部	SC1	30			ナデ(口縁部)・ハケの後ナデ(胴部)	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	
317	甕	口縁部	II				ナデ	ナデ	にぶい赤褐	明赤褐	
318	甕	口縁部	II				ナデ	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	
319	甕	口縁部	III				ナデ	ナデ	にぶい黄褐	にぶい黄橙	
320	甕	口縁部	III				ナデ	ナデ	灰黄褐	にぶい橙	
321	甕	口縁部	III				ナデ	ナデ	にぶい褐	にぶい橙	スス付着

表6 弥生土器観察表②

番号	器種	残存部位	出土地点	口径	器高	底径	外面の調整・文様	内面の調整・文様	外面の色調	内面の色調	備考
322	甕	口縁部	Ⅲ				ナデ	ナデ	にぶい橙	にぶい黄橙	
323	甕	口縁部	Ⅲ				ナデ・ハケ目	ハケ目	にぶい黄橙	にぶい黄橙	
324	甕	口縁部	Ⅲ				ナデ	ナデ	にぶい橙	にぶい褐	
325	甕	口縁部	Ⅲ				ナデ	ナデ	にぶい黄褐	にぶい橙	スス付着
326	甕	口縁部	Ⅲ				ナデ・ハケ目	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	
327	甕	口縁部	Ⅲ				ナデ	ナデ	にぶい橙	にぶい橙	
328	甕	口縁部	Ⅲ				ナデ	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄褐	
329	甕	口縁部	Ⅲ				ナデ	ナデ	にぶい褐	にぶい橙	
330	甕	口縁部	Ⅲ				ナデ	ナデ	にぶい橙	にぶい橙	スス付着
331	甕	口縁部	Ⅱ				ナデ	ナデ	にぶい赤褐	灰黄褐	
332	甕	口縁部	Ⅲ				ハケ目の後ナデ	ナデ	にぶい橙	にぶい橙	
333	甕(中溝式)	口縁部	Ⅲ				ナデ	ナデ(口縁部)・ハケ目	にぶい橙	にぶい黄橙	
334	甕(山之口式)	口縁部～胴部	Ⅲ				ナデ(口縁部)・ハケ目(胴部)	ナデ	灰褐	灰褐	スス付着
335	甕(山之口式)	口縁部～胴部	Ⅲ				ナデ(口縁部)・ハケ目(胴部)	ナデ	褐	にぶい赤褐	
336	甕	口縁部～胴部	Ⅲ				ナデ	ナデ(口縁部)・ハケ目(胴部)	にぶい黄橙	にぶい黄橙	スス付着
337	甕	口縁部～胴部		25			ナデ(口縁部)・ハケ目(胴部)	風化により不明	にぶい黄橙	にぶい黄橙	
338	甕	底部	Ⅲ		6.2		ナデ	ナデ	にぶい褐	灰黄褐	
339	甕	底部			5.6		ハケ目・ナデ	ナデ	にぶい褐	褐灰	
340	甕	底部			6.8		ナデ	ナデ	にぶ黄	にぶ黄褐	
341	甕	胴部～底部	Ⅲ		5.7		ナデ・指頭痕有り	ナデ	にぶい黄褐	灰黄褐	
342	甕	底部	Ⅲ		8		ナデ	ナデ	にぶい赤褐	黄灰	
343	甕	底部	Ⅲ				ナデ・指頭痕有り	ナデ	にぶい褐	にぶい赤褐	
344	甕	底部	Ⅲ		5		ナデ	風化により不明	にぶい褐	黄灰	
345	甕	底部	Ⅲ		5.5		ナデ・指頭痕有り	ナデ	にぶい橙	灰黄褐	
346	甕	底部	Ⅲ		6.7		ハケ目・ナデ	ナデ	にぶい橙	にぶい黄褐	
347	甕	底部	Ⅱ		7.6		ハケの後ナデ	ナデ	にぶい橙	暗灰黄	
348	甕	底部	Ⅵ		6.7		ハケ目	ナデ	灰黄褐	黄灰	
349	甕(山之口式)	胴部～底部	Ⅲ		9.7		ハケ目	ナデ	にぶい褐	褐	スス付着
350	壺	口縁部～胴部	Ⅲ	29.4			ハケ目・ナデ	ナデ	にぶい褐	にぶい橙	
351	壺	口縁部	Ⅱ				ナデ	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	
352	壺	口縁部					ナデ	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	
353	壺	口縁部～胴部					ナデ	ナデ	にぶい褐	にぶい褐	
354	壺	底部	Ⅱ		6		ナデ	ナデ	にぶい橙	にぶい橙	
355	壺	底部			6.5		ナデ	ナデ	にぶい黄橙	暗灰黄	
356	壺	底部	Ⅲ		6		ナデ	ナデ	にぶい黄橙	にぶい褐	外面に丹塗り
357	壺	底部					ナデ	ナデ	にぶい黄橙	黄灰	
358	壺	底部	Ⅲ		2.7		ナデ	ナデ	にぶい褐	灰黄褐	
359	壺	底部	Ⅲ				ナデ	ナデ	にぶい橙	にぶい褐	
360	高杯	杯部	Ⅲ				ナデ	ナデ	にぶい橙	にぶい橙	
361	高杯	口縁部	Ⅲ				ナデ	ナデ	にぶい黄橙	橙	
362	高杯	杯部	Ⅲ				ナデ	ナデ	にぶい橙	にぶい橙	
363	高杯	杯部	Ⅲ				ナデ	ナデ	にぶい橙	橙	
364	高杯	杯部	Ⅲ	22.5			ナデ	ナデ	明褐	にぶい褐	
365	高杯	脚部	Ⅲ				ナデ	ナデ	にぶい黄橙	灰黄褐	
366	高杯	脚部					ミガキ	ナデ	にぶい橙	にぶい黄褐	
367	高杯	脚部	Ⅲ				削り	ナデ	橙	にぶい赤褐	
368	高杯	脚部	Ⅲ				ナデ	ナデ	にぶい褐	にぶい橙	
369	高杯	脚部	Ⅲ				ナデ	削り	にぶい褐	黒褐	
370	短頸壺	口縁部～胴部	Ⅲ				ナデ(口縁部)・ハケ目(胴部)	ナデ・ハケの後ナデ	にぶい橙	にぶい褐	
371	器台?	口縁部		8.1			ハケの後ナデ	ハケの後ナデ	暗灰黄	灰黄褐	
372	鉢	胴部～底部	Ⅲ		4.3		ナデ	ナデ	黄灰	暗灰黄	スス付着
373	小型丸底壺	口縁部	Ⅲ				ナデ	ナデ	にぶい黄橙	にぶい橙	
374	小型丸底壺	口縁部	Ⅲ				ナデ	ナデ	にぶい橙	にぶい黄褐	
375	小型丸底壺	口縁部	Ⅲ				ナデ	ナデ	橙	暗灰黄	
376	脚台付甕?	脚部	Ⅲ		8		ハケ目の後ナデ	ナデ	にぶい橙	にぶい黄褐	
377	弥生土器	底部	Ⅲ		5.6		ナデ・指頭痕有り	ハケ目	にぶい褐	暗赤灰	
378	弥生土器	底部	Ⅲ		8.4		ナデ・指頭痕有り	ナデ	にぶい橙	にぶい黄褐	
379	弥生土器	底部	Ⅲ		5.9		ナデ・指頭痕有り	ナデ	にぶい褐	にぶい褐	
380	弥生土器	底部	Ⅱ		6.1		ナデ・指頭痕有り	ナデ	にぶい黄橙	にぶい褐	
381	弥生土器	底部	Ⅲ		6.1		ナデ・指頭痕有り	ハケ目・ナデ	にぶい褐	にぶい橙	
382	弥生土器	底部	Ⅲ		5.1		ハケ目(胴部)・ナデ(底部)	ナデ	暗灰黄	暗灰黄	
383	弥生土器	底部	Ⅲ		5.6		ナデ	ナデ	にぶい橙	暗灰黄	
384	脚台付壺	口縁部		7.9			ナデ・貝殻刺突による羽状文	ナデ	にぶい黄橙	黄褐	凹線文土器
385	脚台付壺	胴部					ナデ・貝殻刺突による羽状文	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	凹線文土器
386	脚台付壺	胴部					ナデ・貝殻刺突による羽状文	ナデ	にぶい黄橙	黄灰	凹線文土器
387	脚台付壺	胴部					ナデ・貝殻刺突による羽状文	ナデ	にぶい黄橙	灰黄	凹線文土器

表7 弥生時代遺構内出土石器計測表

番号	器種	出土地点	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石材	備考
260	磨製石鏃未製品	SA-2	4.5	3.1	0.8	12	結晶片岩	
261	敲石	SA-2	12.4	9.8	4.7	804.6	安山岩	
283	敲石	SA-4	16.1	5.7	5.4	915.2	砂岩	
300	打製石鏃	SA-6	1.55	1.3	0.4	0.6	チャート	
301	剥片	SA-6	5.4	3.2	1	17.3	砂岩	

## 第4章 縄文時代後期・晩期の調査

### 第1節 土坑について

#### ■SC-33 (第37図・表8)

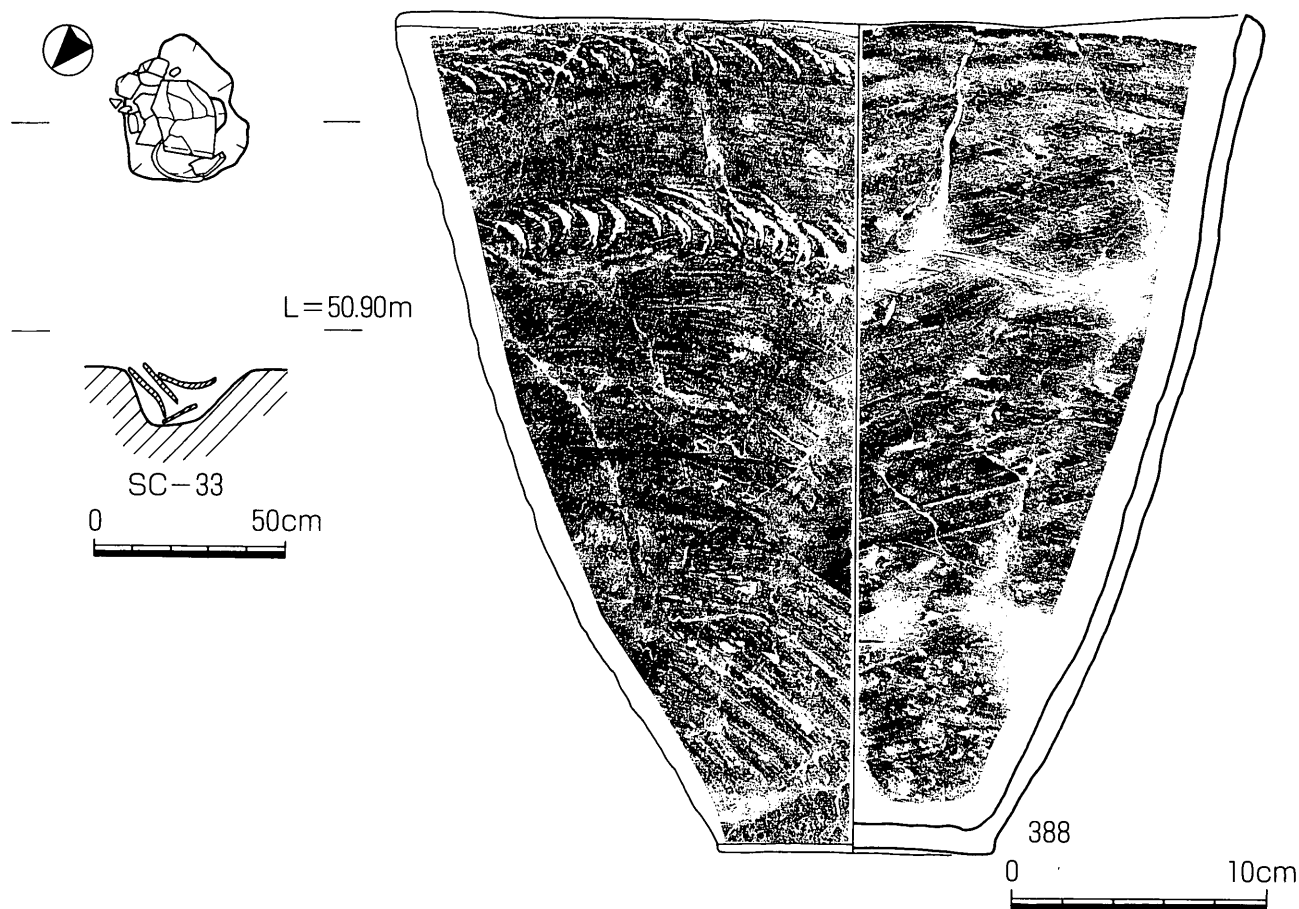
0.38mの不整形円形プランを呈する。検出面からの深さは0.15mを測る。鉢形土器が1個体破碎した状態で詰まっていた。

388は完形の深鉢である。内外面ともに貝殻条痕を施し、口縁部をやや肥厚させ貝殻刺突文を施す。胴部にも同様の貝殻刺突文を施し、底部はやや上げ底状を呈する。

### 第2節 包含層出土の縄文時代後期・晩期の土器について

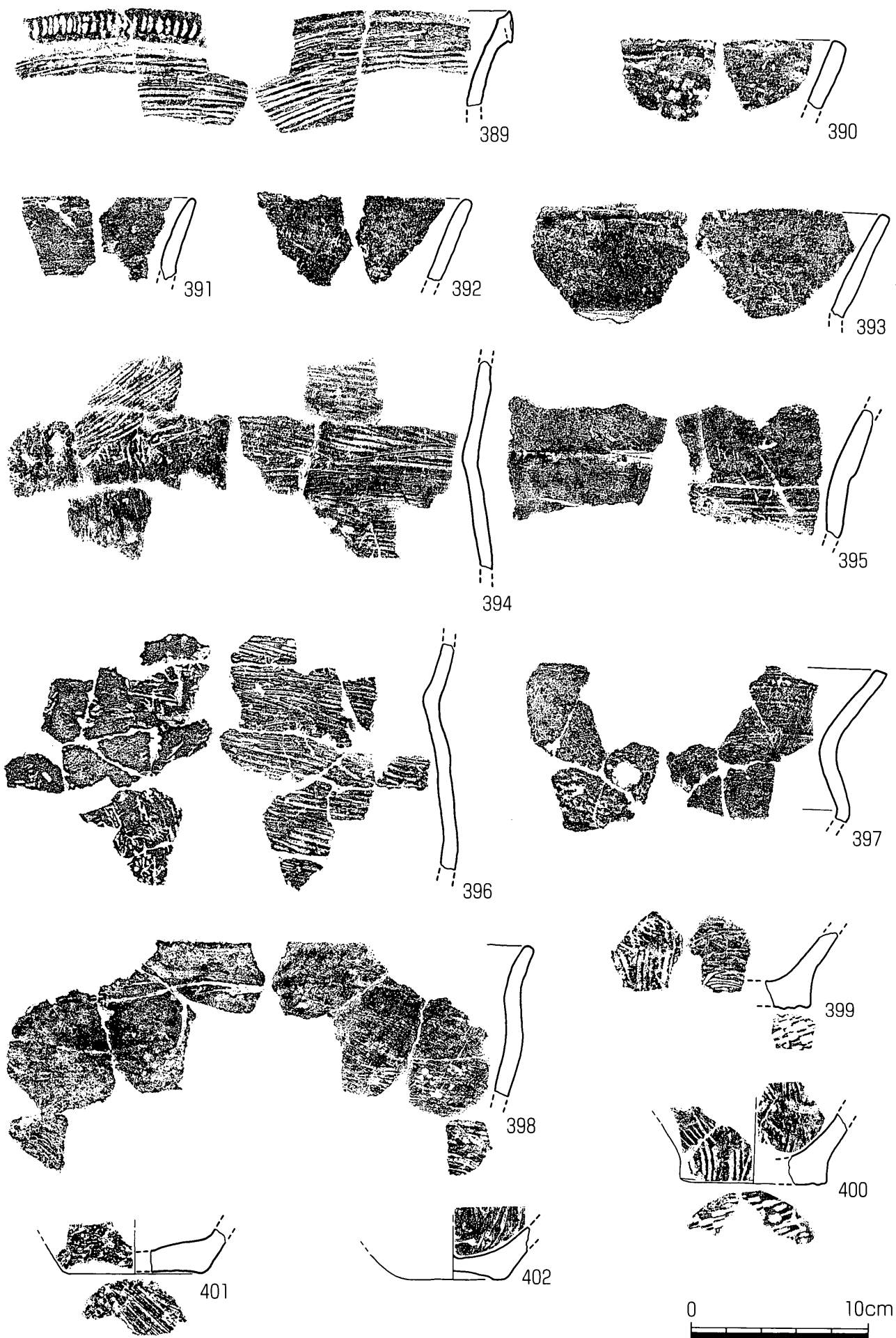
第3層から縄文時代後期・晩期に該当すると考えられる土器が出土したのでここでまとめて報告する。(第38・39図・表8)

389は深鉢の口縁部片である。口唇部を肥厚させ貝殻刺突文を施し、内外面の調整は貝殻条痕を施す。390~399はいずれも無文土器の破片である。391~393は深鉢の口縁部片である。全て内外面ともにナデ調整を施す。394~396は深鉢の頸部片である。394は内面と外面の上半部は貝殻条痕、下半部には貝殻条痕の後にナデ調整を行う。395は内面の上半部と外面はナデ調整、内面の下半部には貝殻条

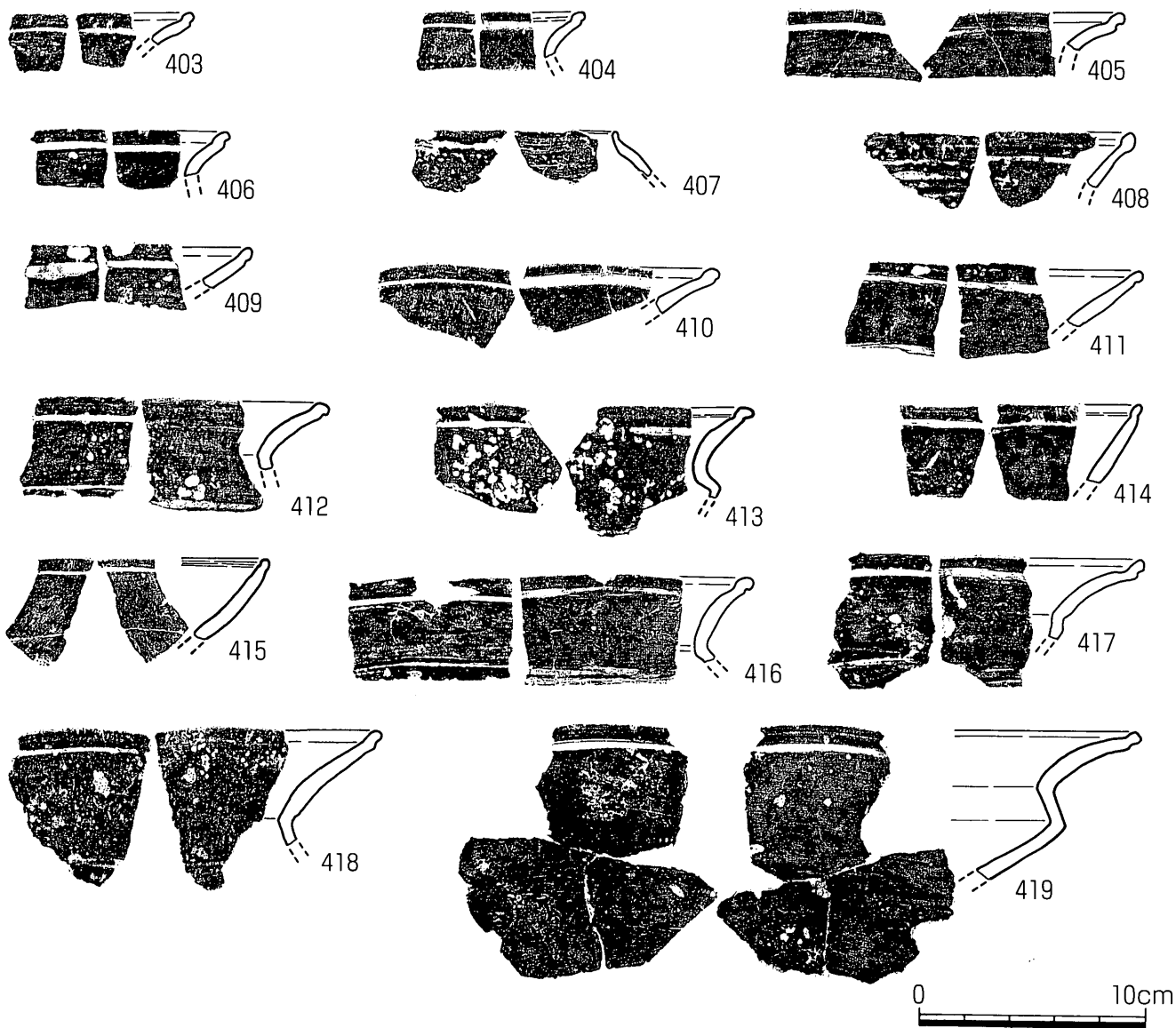


第37図 SC-33及びSC-33出土遺物実測図 (S= 1/20, 1/3)





第38図 包含層出土縄文時代後・晩期土器実測図① (S=1/3)



第39図 包含層出土縄文時代後・晩期土器実測図② (S= 1/3)

痕を施す。396は内面に貝殻条痕、外面には貝殻条痕の後ナデ調整を行う。

397・398は鉢形土器の口縁部～頸部である。398は内外面ともに貝殻条痕の後にナデ調整を施す。397も同様と思われるが、内面は風化が著しく不明瞭である。399～402は底部片である。399・400は外面に貝殻条痕・内面に貝殻条痕の後ナデ調整を行う。また網代圧痕で平底を呈する。401・402は上げ底状を呈する。402は磨研土器の底部か。

403～419は磨研土器の口縁部～胴部片である。口縁部の内外面には段もしくは1条の沈線を巡らすものばかりである。407は壺形土器の口縁部片か。413・417・419は胴部の屈曲部が残存する。いずれも稜をなし、鋭く屈曲するものである。

表8 縄文時代後・晩期土器観察表

番号	器種	残存部位	出土地点	口径	器高	底部径	外面の調整・文様	内面の調整・文様	外面の色調	内面の色調	備考
388	深鉢(納曾式)	完形	SC33	33.5	32.5	10.8	貝殻条痕・貝殻腹縁刺突文	貝殻条痕	にぶい赤褐	褐	
389	深鉢(市来式)	口縁部	III				口縁部に肥厚帯及び貝殻腹縁刺突文・貝殻条痕	横ナデ(口唇部)・貝殻条痕	褐	褐	
390	深鉢	口縁部	III				ナデ	ナデ	にぶい赤褐	にぶい赤褐	
391	深鉢	口縁部	III				ナデ	ナデ	にぶい黄褐	にぶい黄褐	
392	深鉢	口縁部	II				ナデ	ナデ	灰黄	灰黄褐	
393	深鉢	口縁部	II				ナデ	ナデ	にぶい褐	灰黄褐	
394	深鉢	頸部	III				貝殻条痕	貝殻条痕	暗灰黄	灰黄褐	
395	深鉢	頸部	III				ナデ	ナデ・貝殻条痕	にぶい黄褐	にぶい黄褐	
396	深鉢	胴部	III				貝殻条痕の後ナデ	貝殻条痕	灰黄褐	暗灰黄	スス付着
397	深鉢	口縁部～胴部	III				貝殻条痕の後ナデ	風化により不明	にぶい黄褐	にぶい褐	
398	深鉢	口縁部～胴部	III				貝殻条痕の後ナデ	貝殻条痕の後ナデ	灰黄褐	黄灰	
399	深鉢	胴部～底部	III				網代底(底部)・貝殻条痕(胴部)	貝殻条痕の後ナデ	灰黄褐	灰黄褐	
400	深鉢	胴部～底部	III			8.2	網代底(底部)・貝殻条痕(胴部)	貝殻条痕の後ナデ	灰黄褐	灰黄褐	
401	深鉢	底部	III			8	貝殻条痕の後ナデ	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄褐	
402	浅鉢	底部	III				ミガキ	貝殻条痕の後ナデ	灰黄褐	にぶい褐	
403	浅鉢	口縁部	III				ミガキ	ミガキ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	
404	浅鉢	口縁部	II				ミガキ	ミガキ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	
405	浅鉢	口縁部	III				ミガキ	ミガキ	黄灰	褐灰	
406	浅鉢	口縁部					ミガキ	ミガキ	暗赤灰	にぶい黄褐	
407	壺?	口縁部	III				ミガキ	ミガキ	にぶ黄	暗灰黄	
408	浅鉢	口縁部	III				ミガキ	ミガキ	灰黄褐	黄灰	
409	浅鉢	口縁部	III				ミガキ	ミガキ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	
410	浅鉢	口縁部	II				ミガキ	ミガキ	灰黄褐	灰黄褐	
411	浅鉢	口縁部	III				ミガキ	ミガキ	にぶい黄褐	灰黄褐	
412	浅鉢	口縁部	VI				ミガキ	ミガキ	にぶい褐	灰灰	
413	浅鉢	口縁部	III				ミガキ	ミガキ	にぶい黄褐	暗灰黄	
414	浅鉢	口縁部	III				ミガキ	ミガキ	灰黄褐	褐灰	
415	浅鉢	口縁部	II				ミガキ	ミガキ	にぶい黄橙	暗灰黄	
416	浅鉢	口縁部	III				ミガキ	ミガキ	にぶい褐	暗灰黄	
417	浅鉢	口縁部	III				ミガキ	ミガキ	にぶい黄褐	にぶい黄橙	
418	浅鉢	口縁部	III				ミガキ	ミガキ	にぶい黄橙	にぶい黄	
419	浅鉢	口縁部～胴部	III				ミガキ	ミガキ	にぶい黄褐	にぶい黄褐	

## 第5章 縄文時代早期の調査

### 第1節 集石遺構について（第40～72図・表9～13）

本遺跡のアカホヤ層下より確認された遺構の大半は集石遺構であり、また遺跡全体の主体的な遺構ともなっている。この遺構についてはポリネシア地方の民俗例や田野町天神河内遺跡の残留脂肪酸分析結果から石蒸料理の調理施設として認識されているもので、南九州を中心に多数確認されるが、関東地方までその分布は確認されている。南九州では旧石器時代末から縄文時代晩期にかけて確認されるが、縄文時代早期のものが圧倒的多数である。

南九州においては現在のところ南部東海岸、つまり宮崎県南部に検出例が集中し、さらにその中心は本町及び西に隣接する田野町となっている。本町における集石遺構の検出数は平成14年末までで734基を数え、田野町においても同程度の検出数となっている。現在継続して行われている本町北西部の船引地区遺跡群においては毎年度50基近くの新たな検出が続いている。

この集中については調査件数にも起因するものと思われ、163基が確認された県北の北方町笠下遺跡が存在し、近年百基を越える集石が検出される遺跡が北に延びる東九州自動車道の調査により確認され始めており、今後その集中域が北に広がる可能性が高い。当然、全国的に見た本県の検出数の多さについては、さらに顕著なものになると思われる。

本遺跡内においては172基の集石遺構が検出され、内アカホヤ層上における検出が2基である。

遺跡内における集石遺構の検出状況は包含層を下げる段階において礫の集まりが検出されることにより確認される。但し、単体で集石遺構と認められる場合と広範囲に焼礫が検出され、これを精査することにより単体あるいは複数の集石遺構が認められる場合がある。掘り込みを有し、内部に焼礫を包含するタイプの集石遺構が大半を占めるが、内部焼礫間の埋土が炭化物等により黒色化しているものはほとんど無く、精査により掘り込みのプランからその存在が確認されたものは皆無である。

また、内部精査についても通常は焼礫と黒色化した内部埋積土を除去して掘り込みを検出するが、本遺跡では地山と埋積土の違いが明確でなく、掘り込み内の礫のスタンプが消えるまで平滑にし、作図するほかなかった。

形態的には、掘り込みを有するものと有さないものに大別され、掘り込みを持つものは、浅いものと深いもの、さらに掘り込みの底部に配石を有するものと有さないものに細分される。そしてそれぞれに大きさの差や内部礫の密度差が存在する。

本遺跡における集石遺構の分布状況を見てみると、ある程度密集する部分が見て取れる。第40図のA～Eなどである。しかしながら前述の形態差を当てはめると単一形態のみの集まりは見られない。また、直径1.5mを超える大型のものも各密集部分に数基ずつ含まれ、集中傾向は見られない。

形態上での検出状況を見てみると、第40図のCとEの集中区については掘り込みの無いタイプの集石遺構の集中が顕著であり、それ以外のものも掘り込みを有し配石を持たないタイプのみのという傾向を見る事が出来る。この2地区については検出時、散石がほとんど見られず、単体ごとで集石遺構が検出された地区でもある。形態も比較的整っており、精査が楽だった意識が残った。

また、本遺跡の集石遺構のなかに非常に特徴的な形態のものが見られた。掘り込みを持つタイプの

なかで、すり鉢状の深い掘り込みを持つもので、SI-104、112、を代表とし、SI-9、41、92等がこれにあたる。

一般的な集石遺構に比べ大型で、すばまった底部に大型の配石を持ち、掘り込みの内面に比較的扁平な礫を敷き詰めるよう一面に配し、比較的大型の円礫で内部を充填させている。特にSI-104はその直径約2.6m、深さ約1.2mを計り、ほぼ同じ大きさのSI-112とともに群を抜いて巨大なものである。現在のところ国内最大級のものと思われる。遺跡内における分布はSI-92を除いて、調査区内で突出する南北丘陵両先端部の集石遺構集中部分（第40図のBとD）に確認されている。

掘り込み内の焼礫の状況は密に充填されるものと疎なものが見られるが、SI-104と112については密につまった内部礫の上層において中央が窪み、その部分及び上層の礫は疎の状態であることが認められた。大型ゆえに看取できた状況であろうが、あきらかに内部の礫とは礫の大きさも違うものであった。

集石遺構内からの遺物の出土は全体の約25%にあたる47基に見られた。

出土遺物は土器片、石器、剥片で、形式が判明しうる土器片はSI-9・10から下剥峰式土器が、SI-81・95から塞ノ神式土器が、SI-96から桑ノ丸式土器が、SI-11から押型文土器が出土し、天道ヶ尾式と思われる土器片がSI-34から岩本式と思われる土器片が網代底を持つ条痕文土器片とともにSI-7から出土している。いずれも小片が少数の出土であり、形式の判明しない条痕文を持つ土器片がSI-4・47・51・62外7基から出土している。

石器についてはSI-1・7から石鏃が出土し、SI-1はチャート製、SI-7は姫島産黒曜石製である。SI-7・60・100・120から磨石が出土し、SI-60と120が尾鈴酸性砂岩製、SI-7・100が砂岩製である。SI-10からは石核・スクレイパー・尖頭状石器が出土し、石核はSI-9・10、スクレイパーはSI-83からも出土している。SI-9出土の石核は黒曜石製の細石核であろう。SI-118からは頁岩製の打製石斧が、SI-4からは石皿が割れた状態で出土している。磨石、石皿はほとんど欠損品であり、内部礫として二次的に利用された可能性が強い。その他、剥片が7基から出土しており、SI-4が砂岩、SI-1・145がチャート、SI-10・159が頁岩、SI-11・175が黒曜石となっている。

## 第2節 土坑について (第54・72・73図・表13)

縄文時代早期にかかる集石遺構以外の遺構として2基の土坑が検出されている。

検出されているとは言え、遺物の出土によりその存在が窺われるものの地山と埋積土の違いが無く、遺構自体の検出が出来ず、作図も不可能なものであった。

SC-43は調査区北西部において確認されたもので、包含層を下げる段階で大型の土器片が集中して確認された。周囲の包含層からは遺物の出土がほとんどない状態での確認で、さらに土器片は平面的な出土ではなく、それぞれの高低差や立った状態の破片もあったため、遺構の存在を想定して綿密な精査をおこなったが、色調等の変化を捉えることはできず、遺構の確認は不可能であった。

出土した土器は口辺部よりやや下がった外面にナメクジ状の貼り付けを対向して2箇所にもつ下剥峰式土器(478)で、ほぼ完形に復元できるものである。不足部位はほぼ対向する口縁から底部にかけての2箇所で、縦の帯状に大きく欠損しており、通常の土器の底部や口辺部が欠損する状況とは異質の感覚を受ける。

なお、外面に炭化物の付着があった為、この炭化物を削ぎ落とし、加速器による放射性炭素年代測定をおこなった結果、 $8960 \pm 70$ BPという測定結果を得ている。

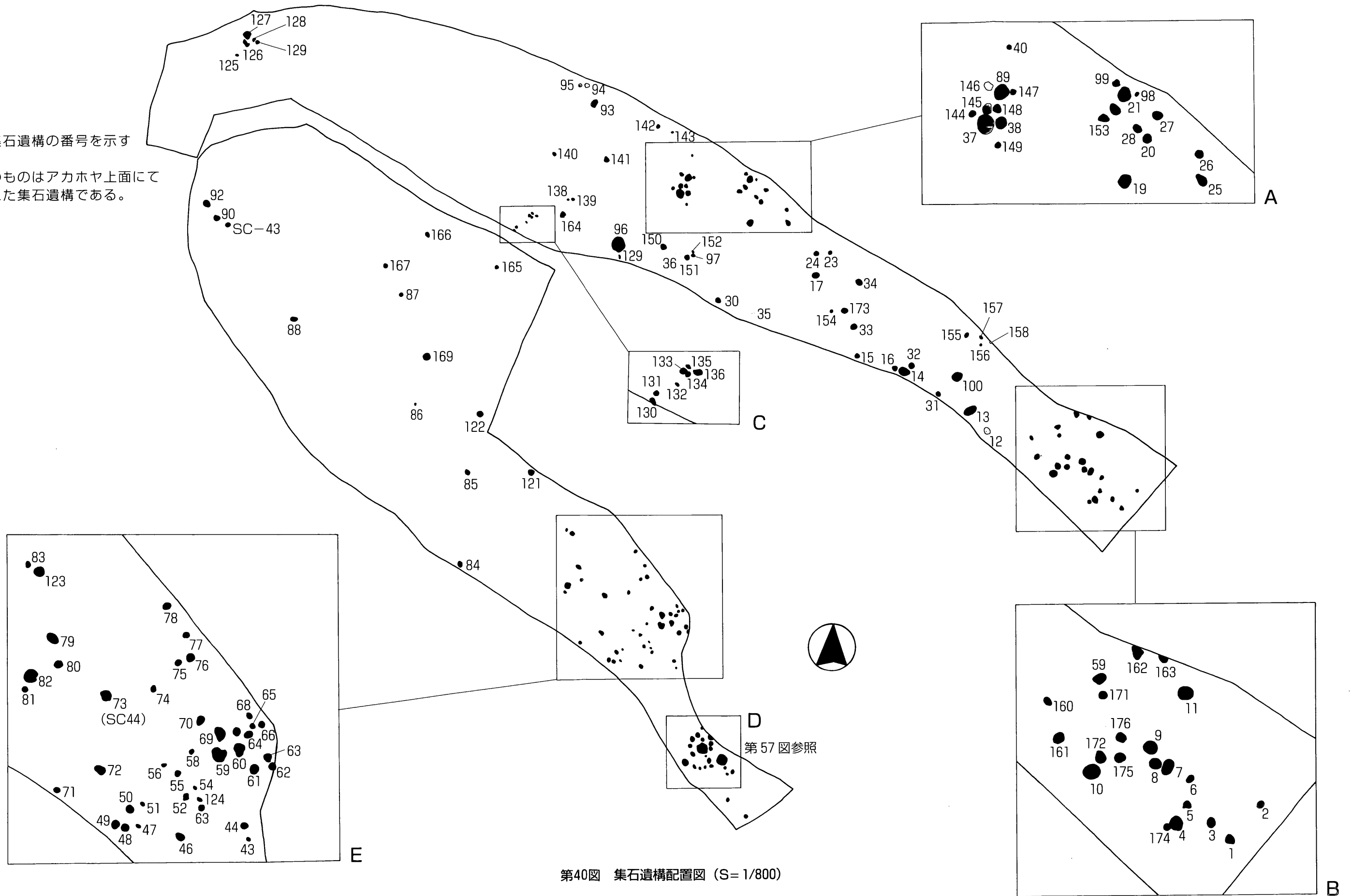
SC-44は集石遺構(SI-73)の掘り込み精査中に確認されたものである。掘り込みの精査によって土器片が出土し当初集石遺構に伴う遺物と思われたが、土器片が地山中に続き別の遺構がかみ合っていると思われる状況となった。このためプランの確認及びトレンチの設定を行ったが、SC-43同様に土質に変化は確認出来なかった。しかしながら土器片の出土状況は生活面に廃棄されたような状況ではなく大型の破片が集中する様相は遺構内遺物であることを強く感じさせるものであった。

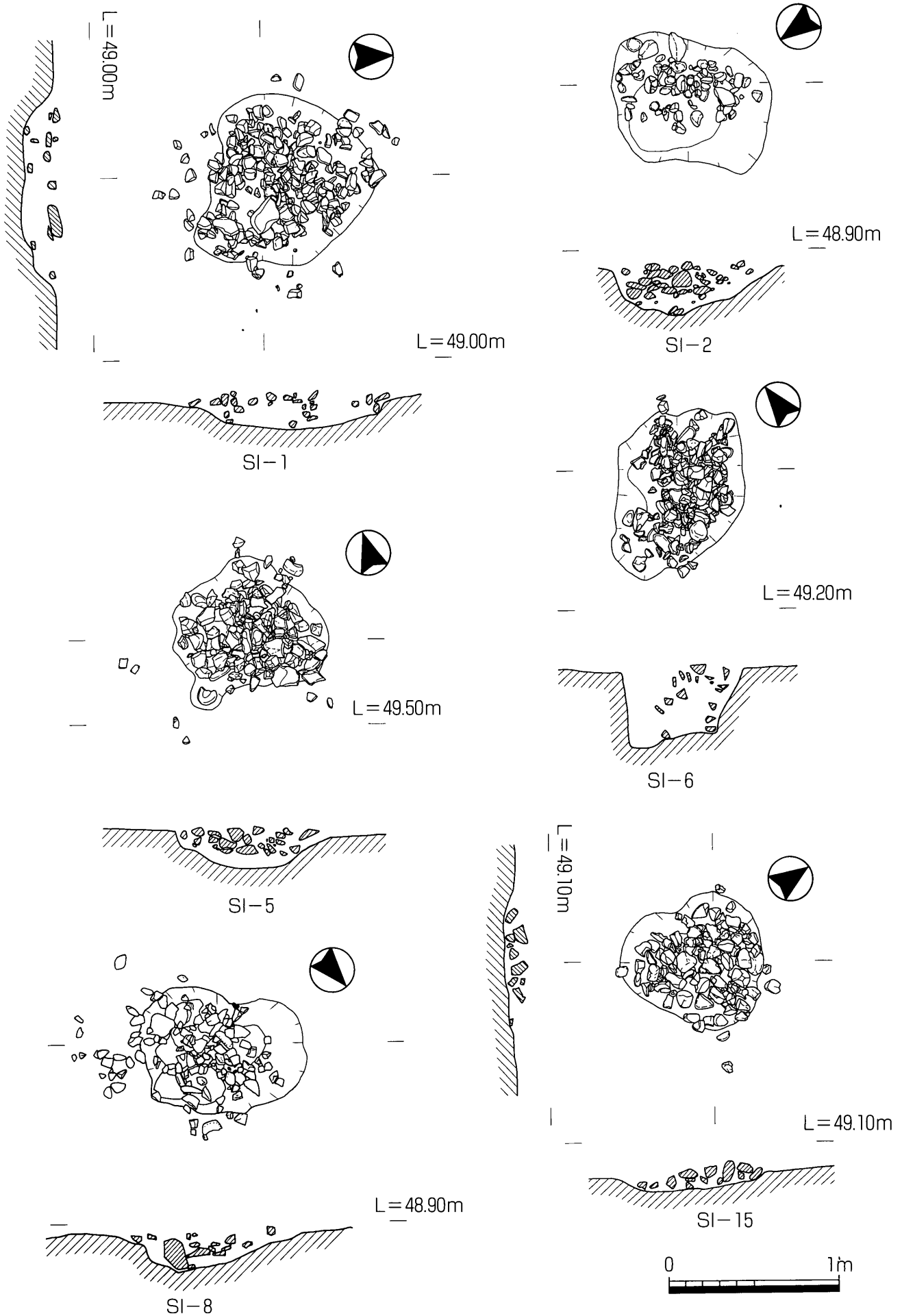
出土した土器片は撚糸文系の塞ノ神式土器で大小2個体の破片であった。比較的大型片であったが、底部が大きく欠損し、完形復元には至らないものである。

479・480は波状となる口唇部に羽状の刻みが施され、口辺は無文、胴部は縦に撚糸文帯は施文された後、横方向の沈線文帯を巡らせている。482は479・480より大型で口辺部に沈線文帯を二条持つ意外は波状の口縁と施文は479・480と共通である。なお、本土坑からは砂岩製磨石(481)も1個出土している。

※番号は集石遺構の番号を示す

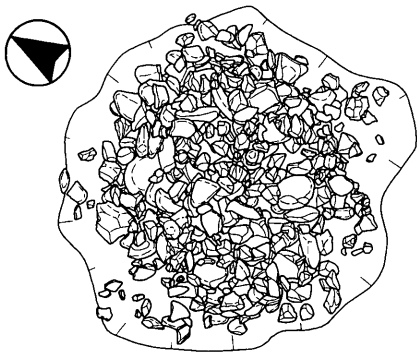
トーンのものはアカホヤ上面にて  
検出された集石遺構である。



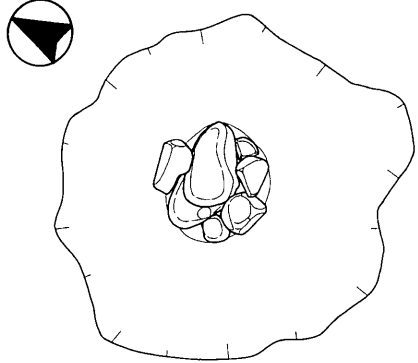


第41図 SI-1・2・5・6・8・15実測図 (S=1/30)

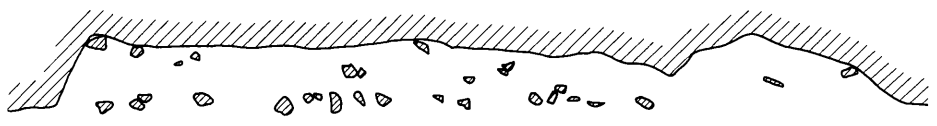
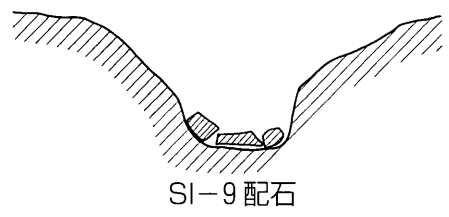
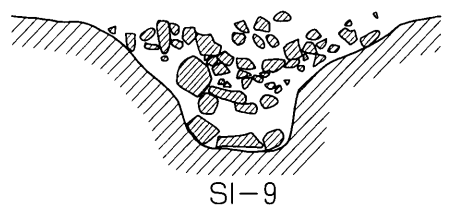




L=48.90m



L=48.90m

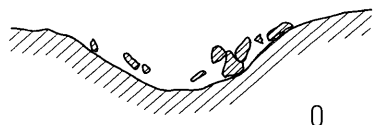
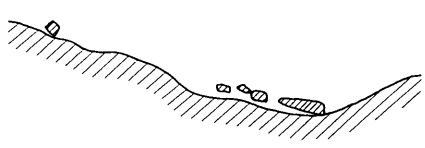


L=49.00m

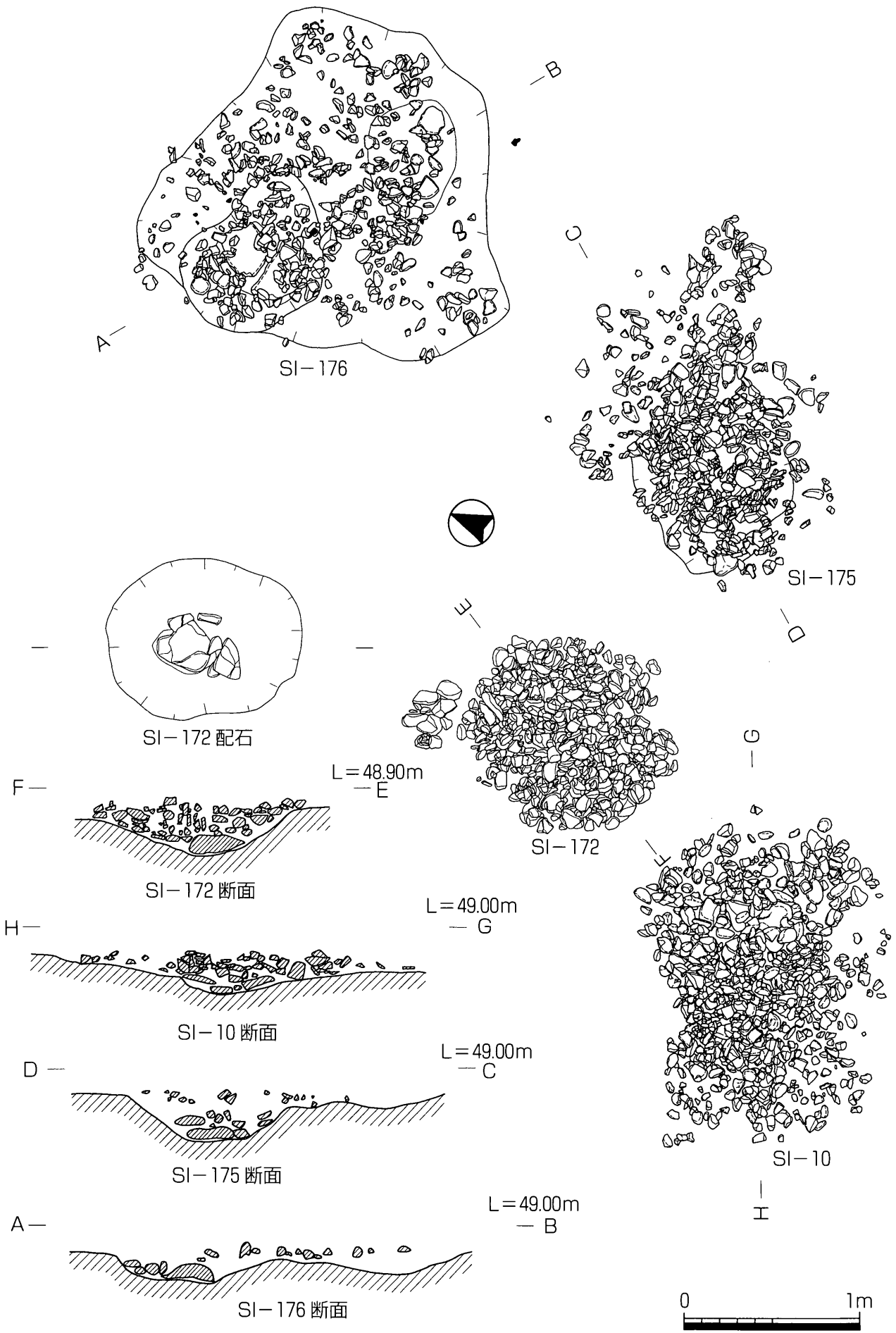


L=49.00m

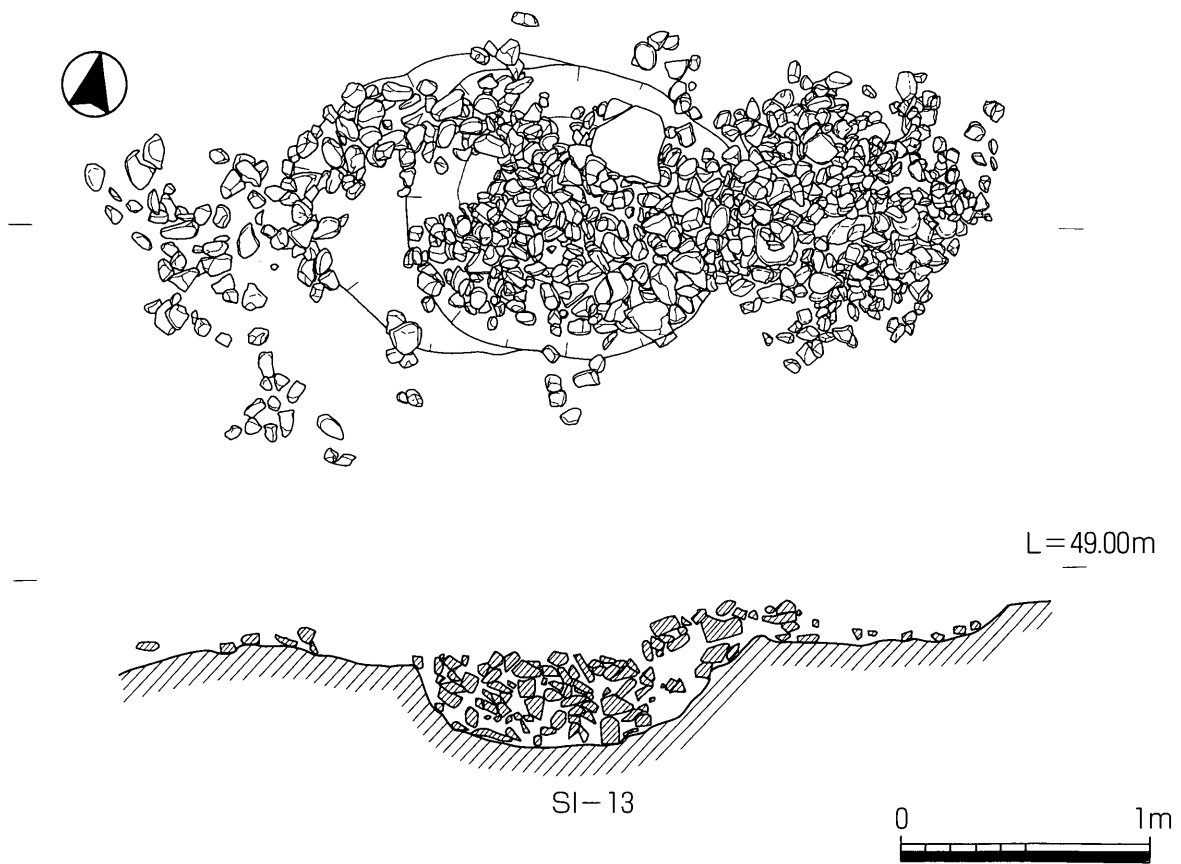
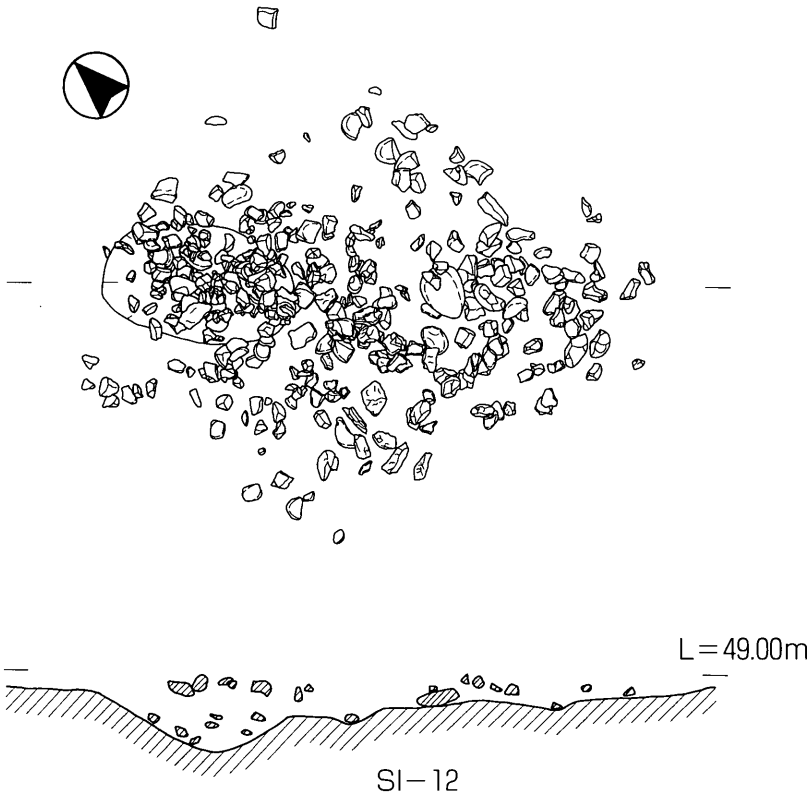
L=49.00m



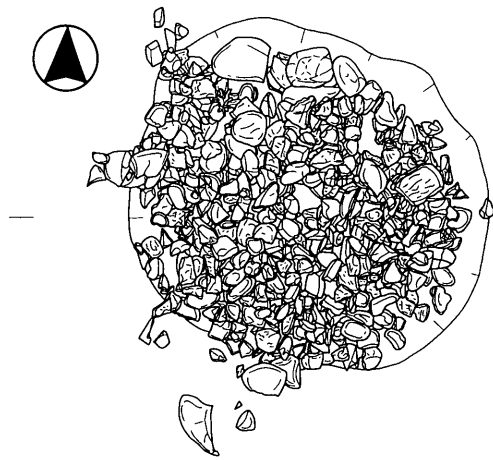
第42図 SI-9・11実測図 (S=1/30)



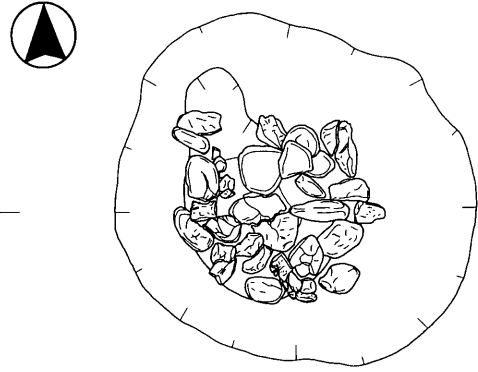
第43图 SI-10·172·175·176実測図 (S= 1/30)



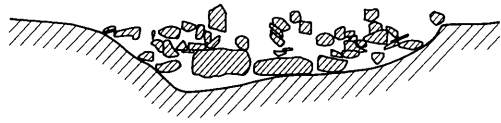
第44図 SI-12・13実測図 (S=1/30)



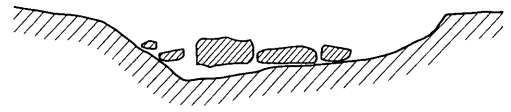
L=49.10m



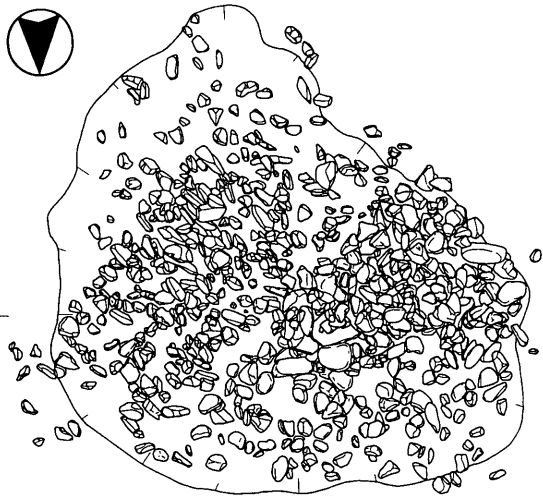
L=49.10m



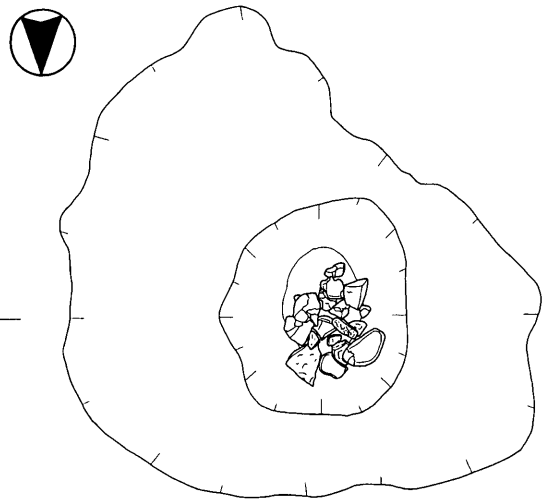
SI-14



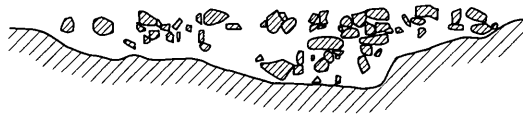
SI-14 配石



L=49.70m



L=49.70m



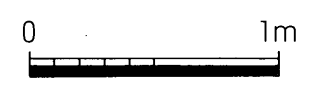
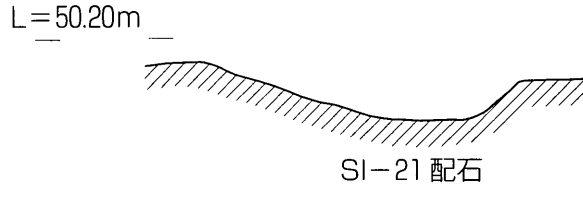
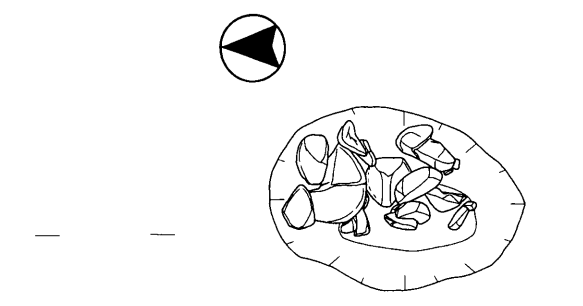
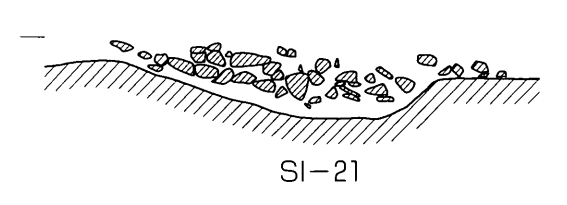
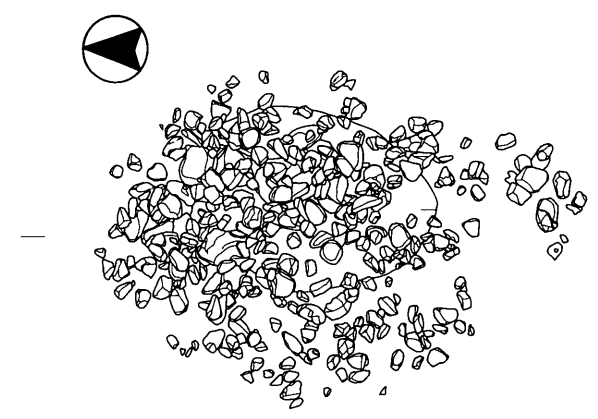
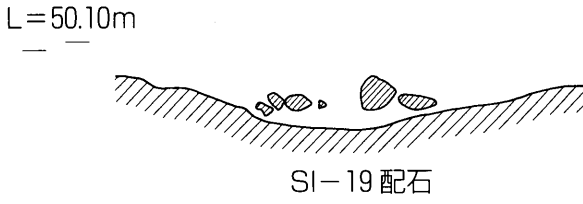
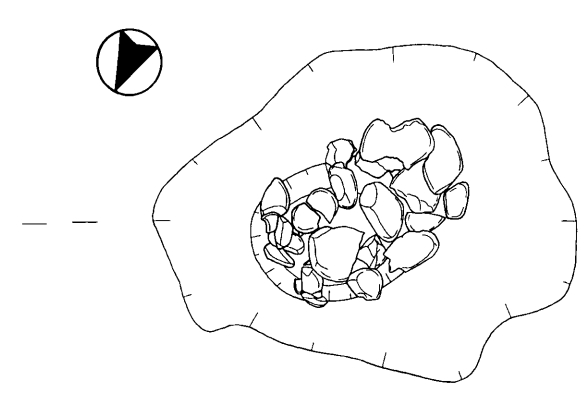
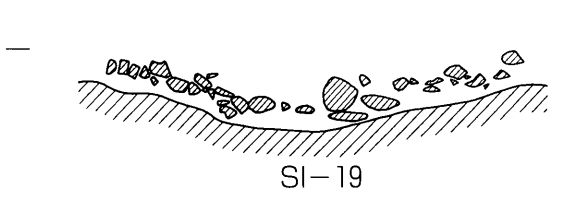
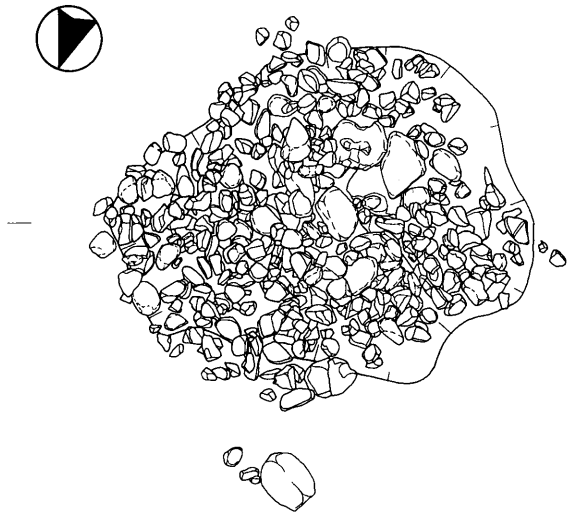
SI-17



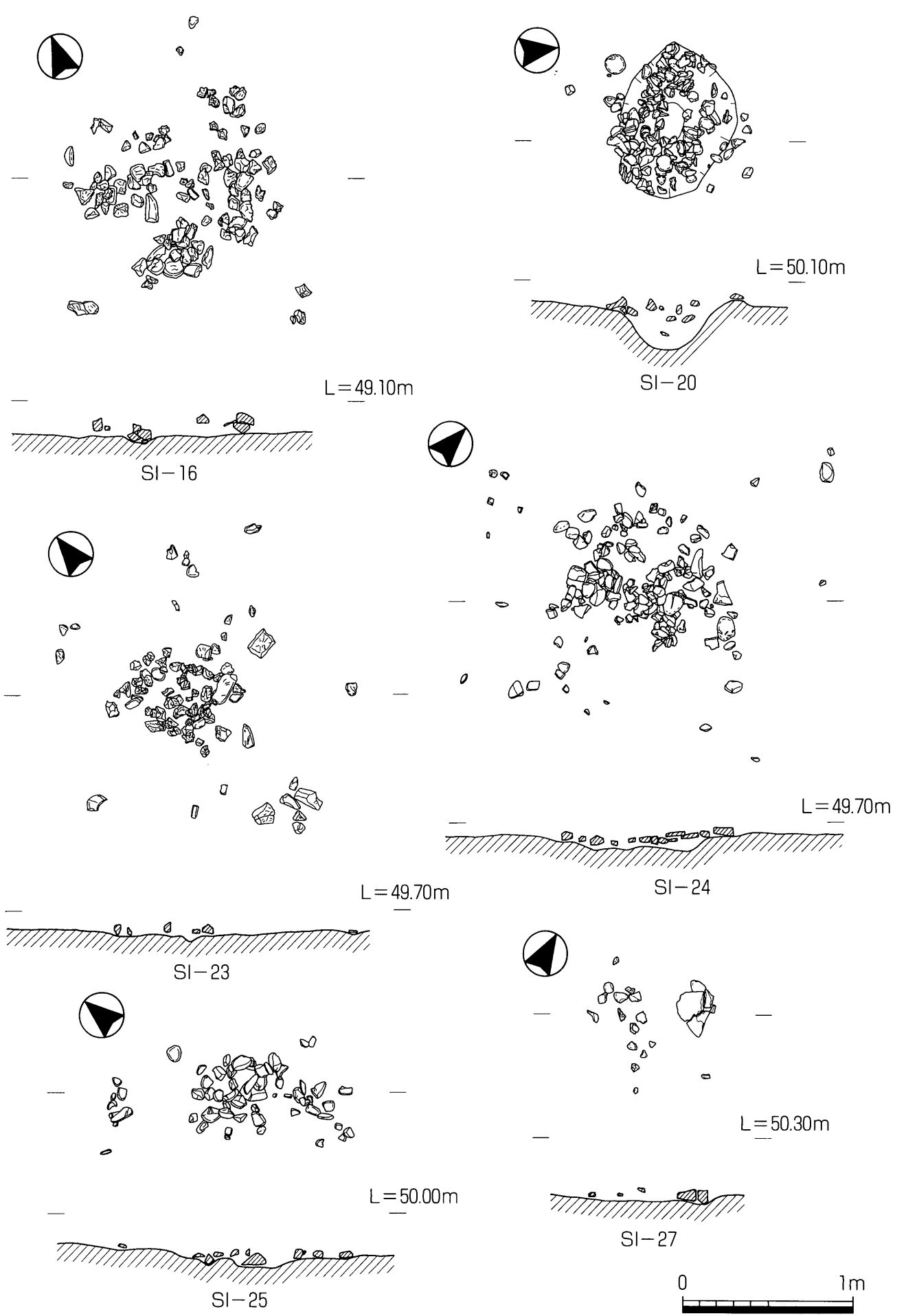
SI-17 配石



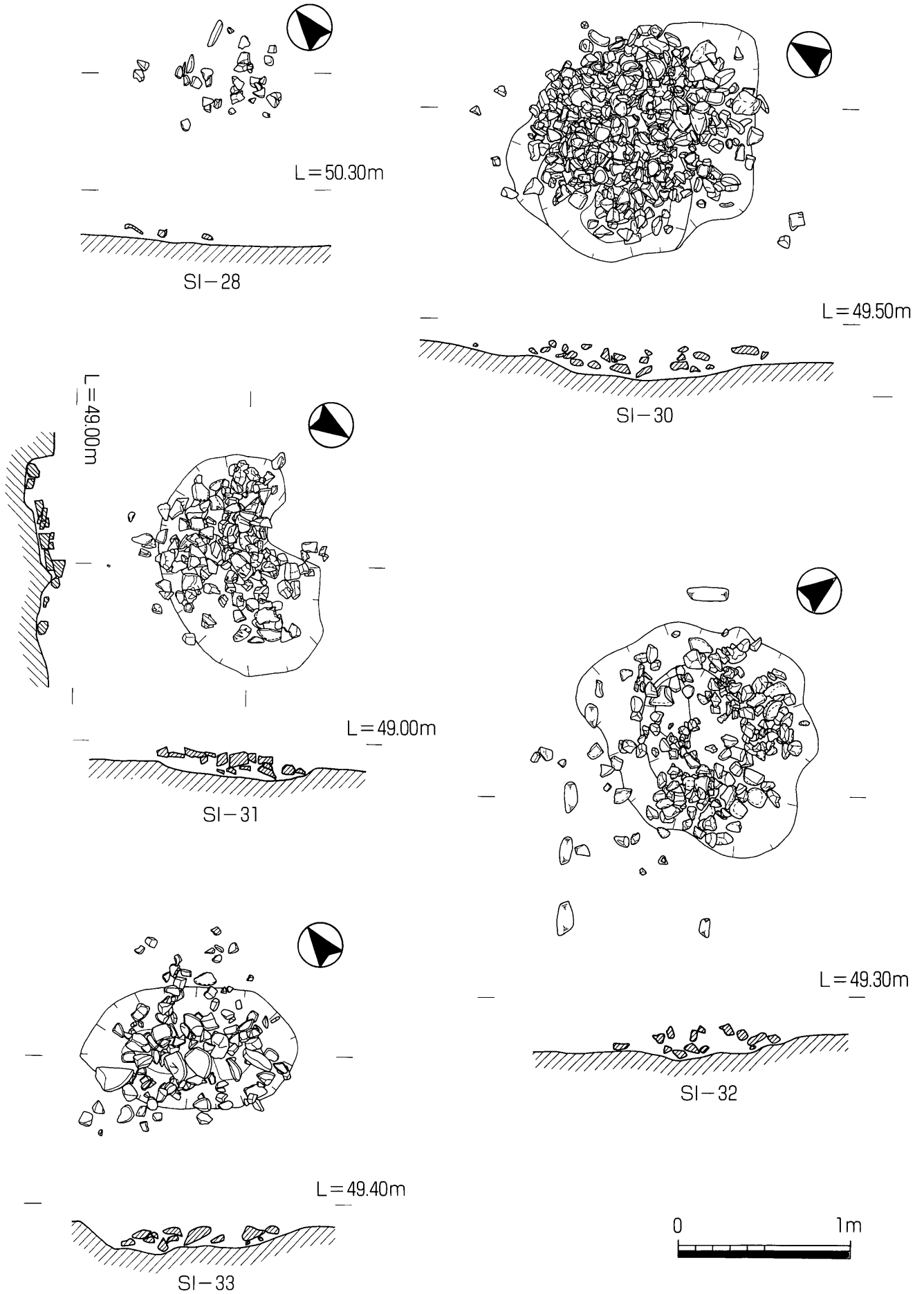
第45図 SI-14・17実測図 (S= 1/30)



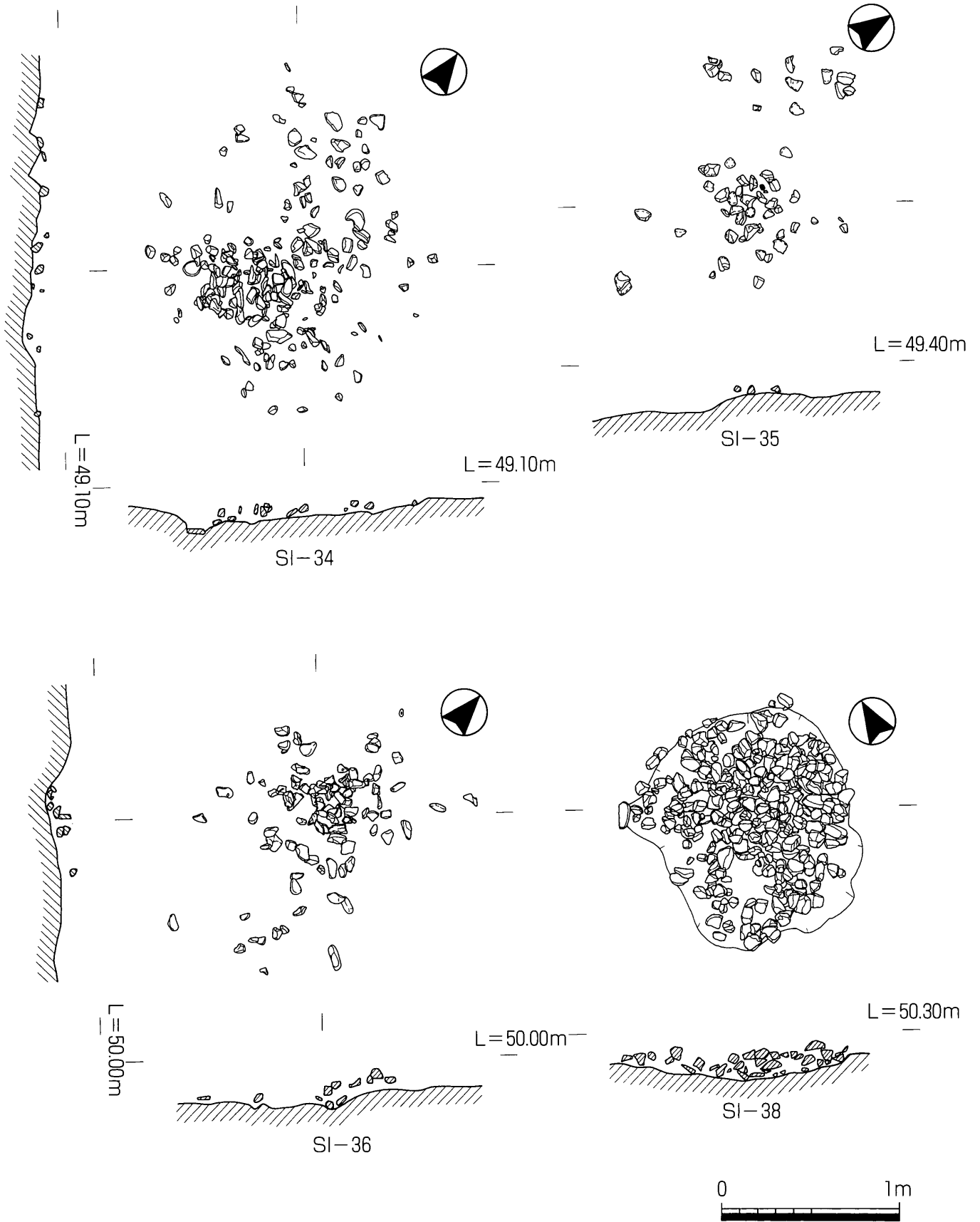
第46図 SI-19・21実測図 (S= 1/30)



第47図 SI-16・20・23~25・27実測図 (S= 1/30)

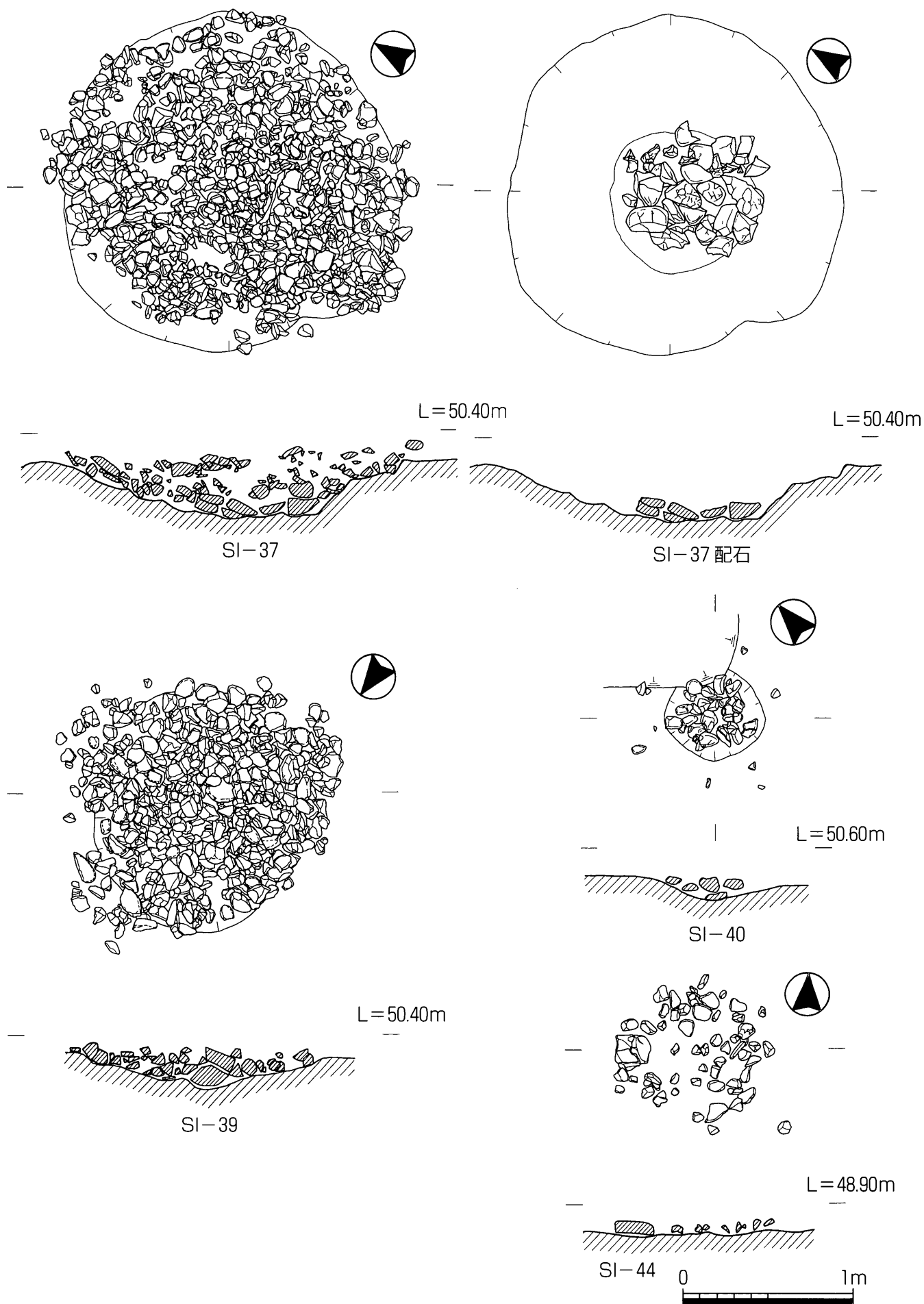


第48図 SI-28・30~33実測図 (S= 1/30)

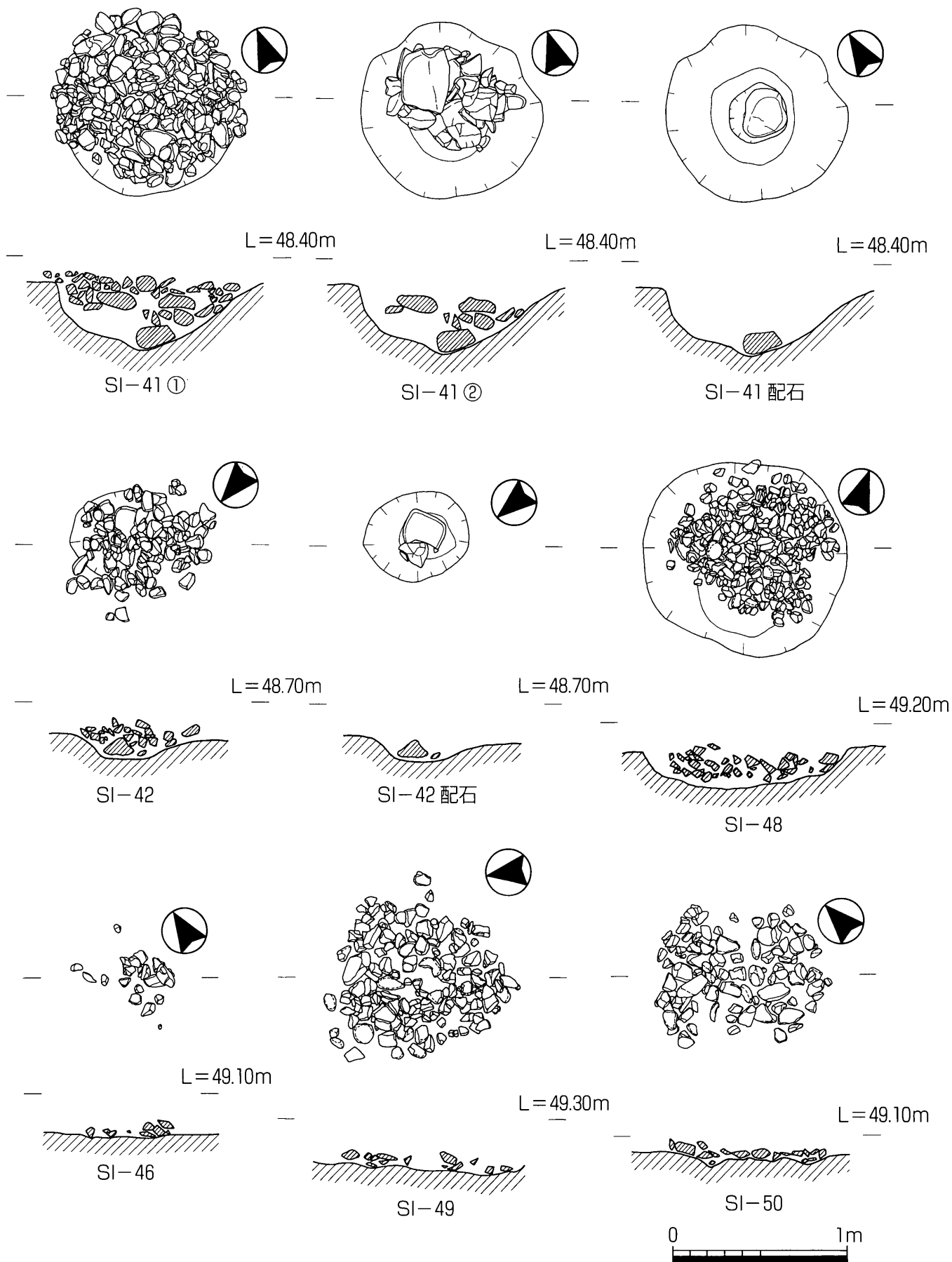


第49図 SI-34~36・38実測図 (S= 1/30)

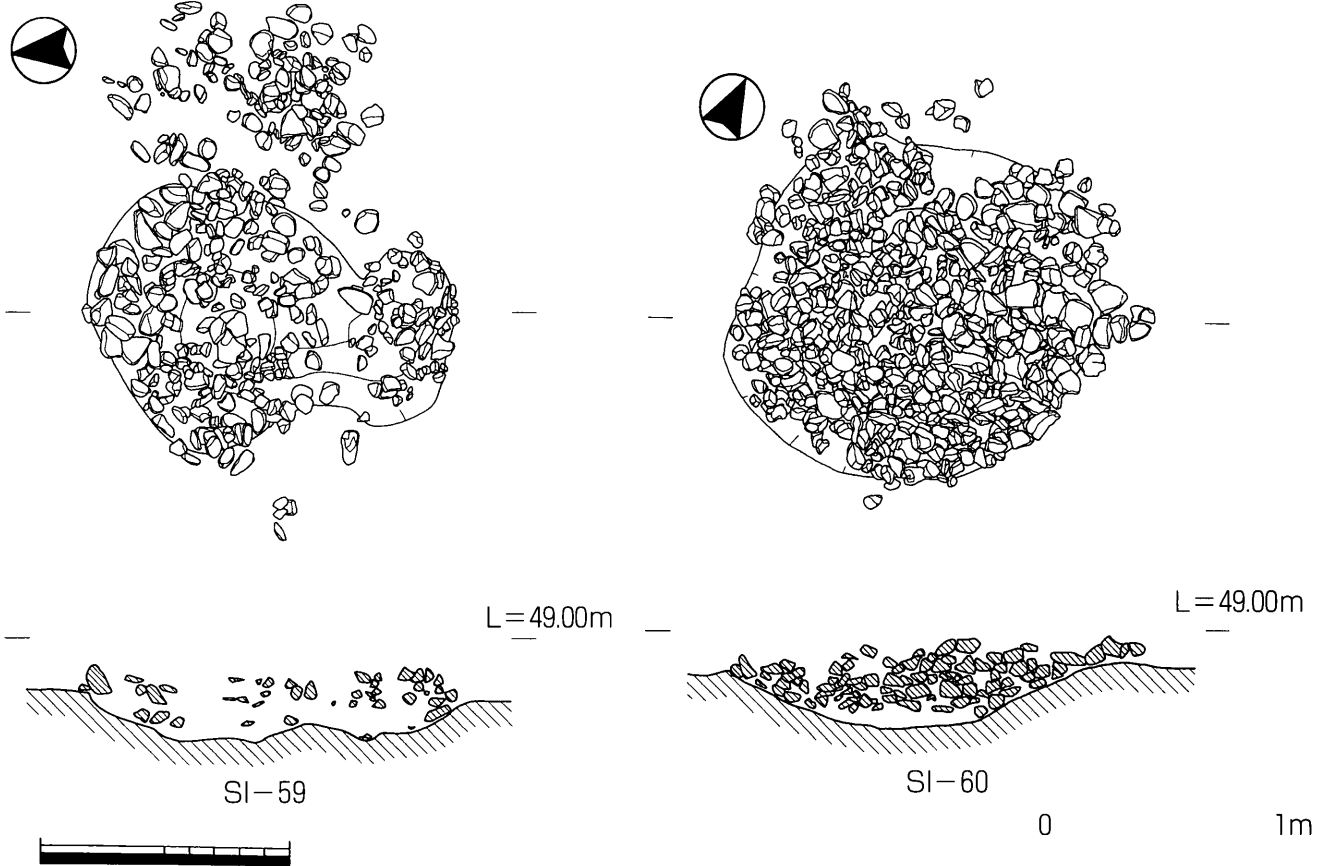
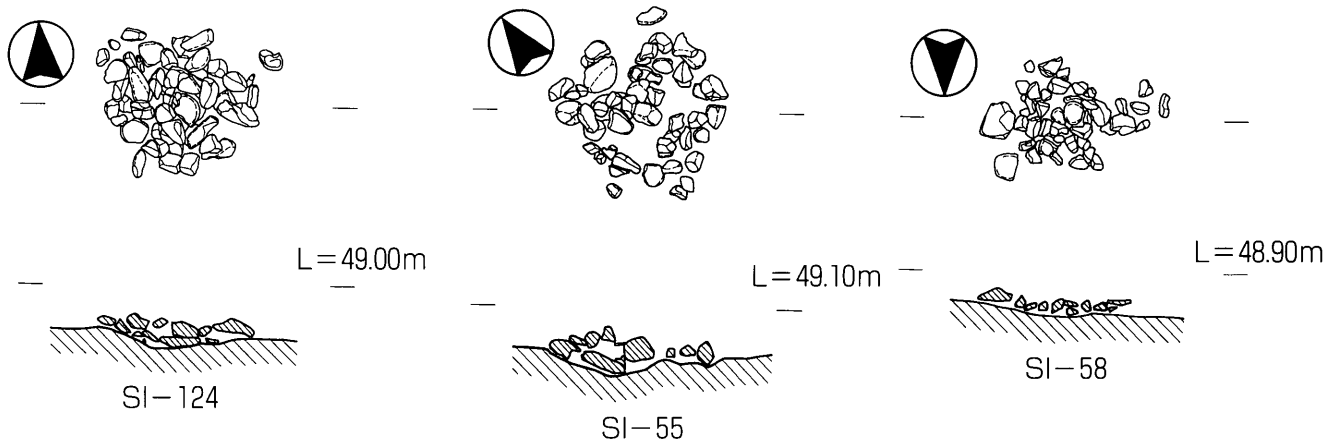
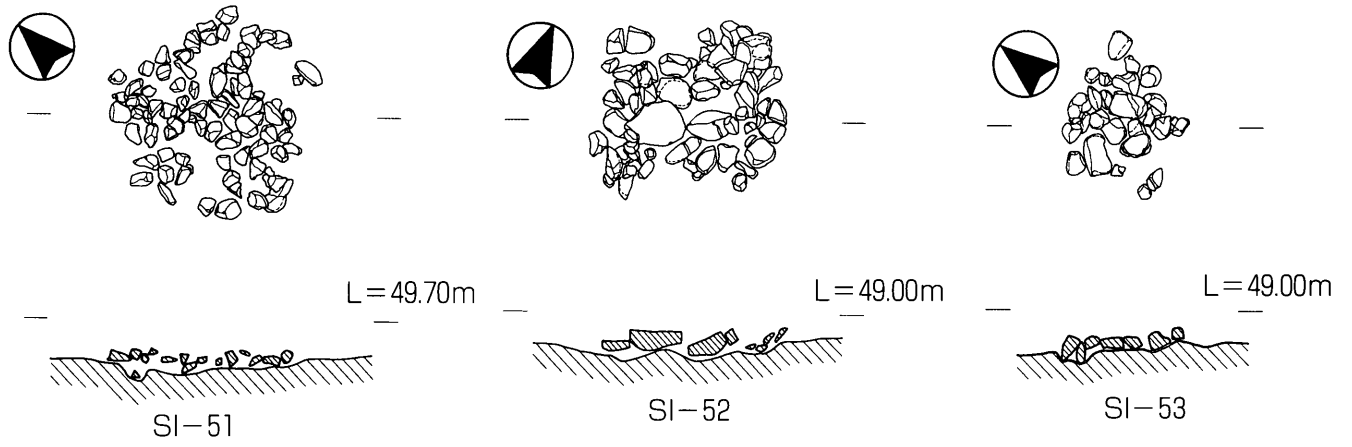




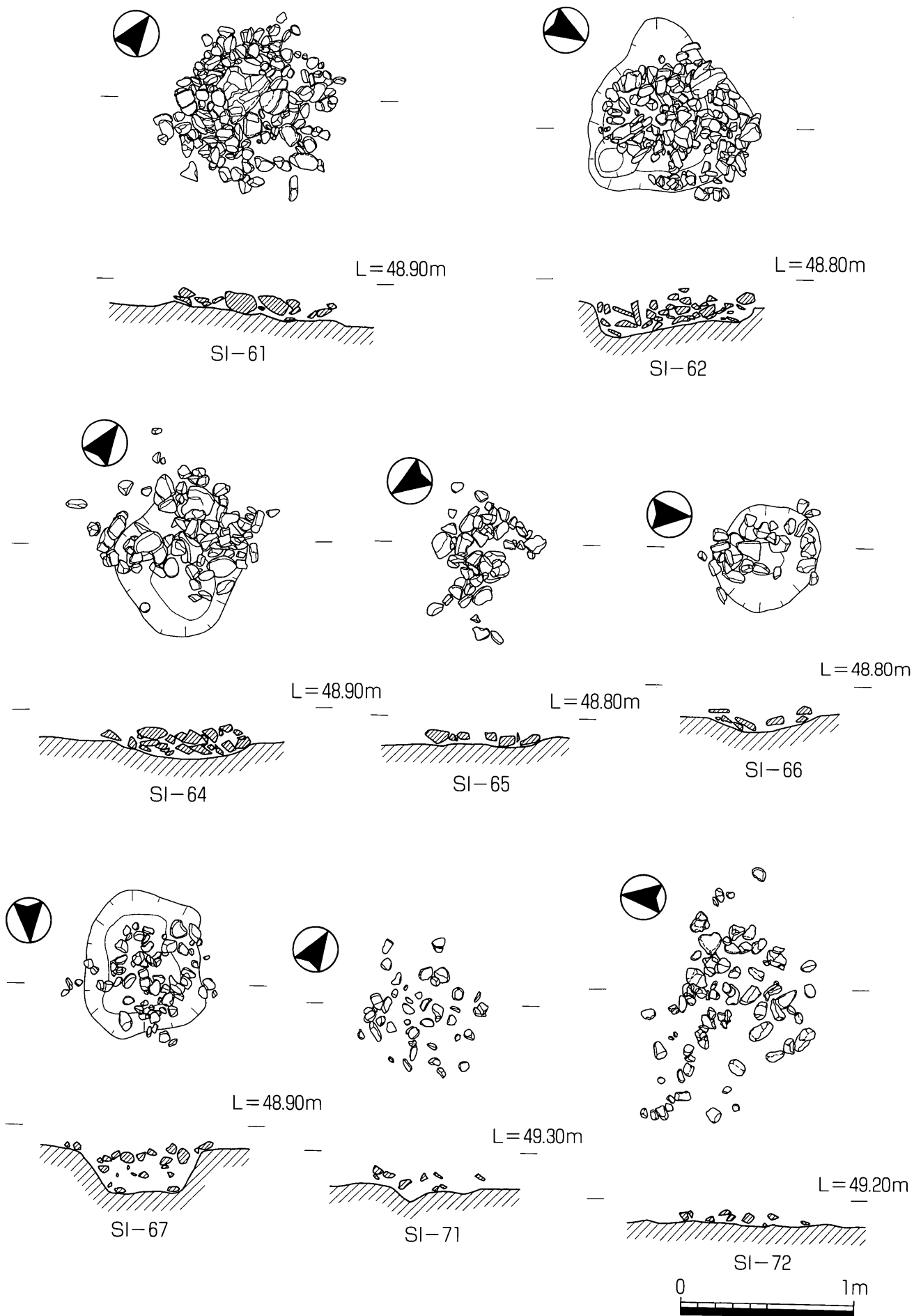
第50図 SI-37・39・40・44実測図 (S=1/30)



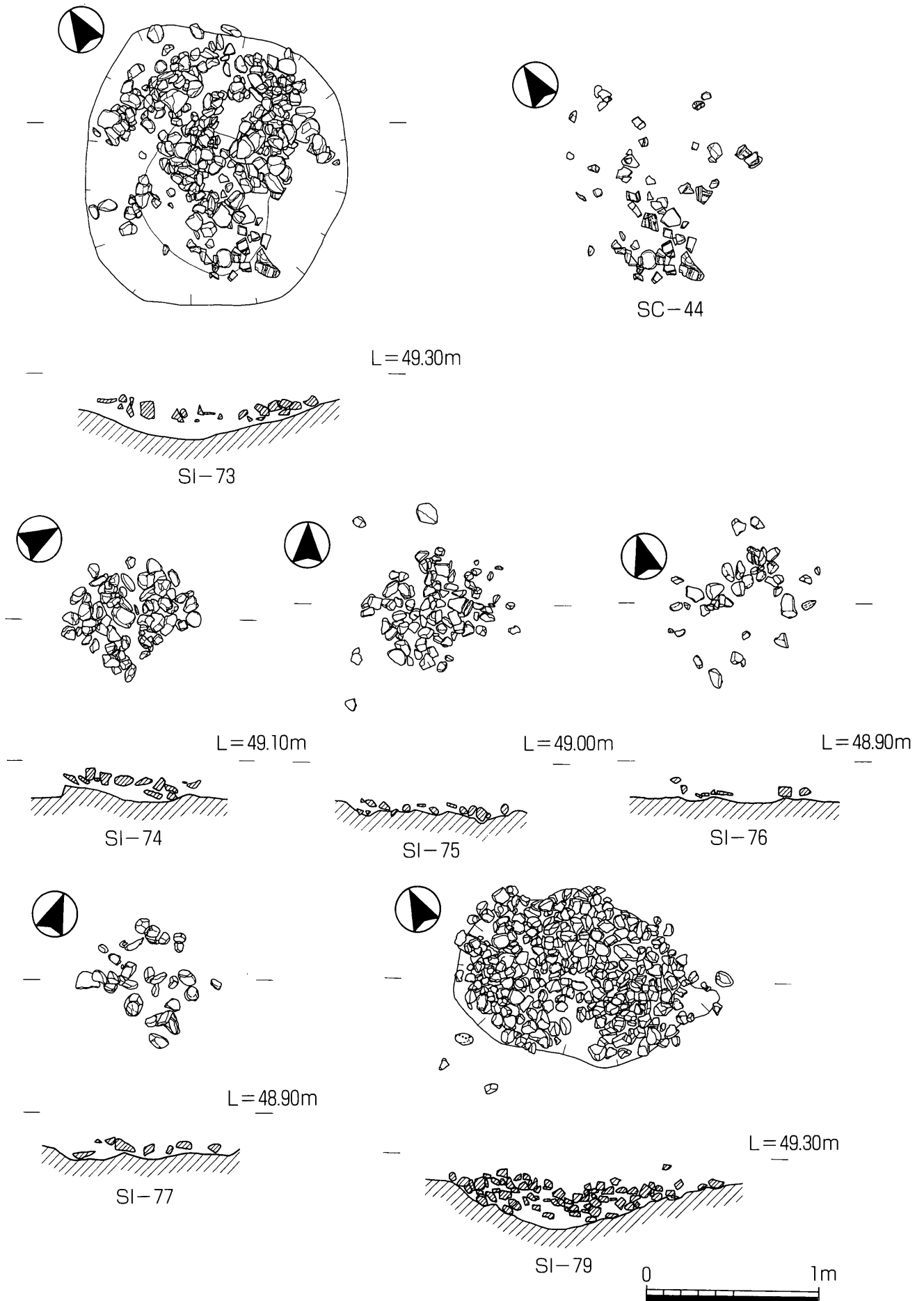
第51図 SI-41・42・46・48~50実測図 (S=1/30)



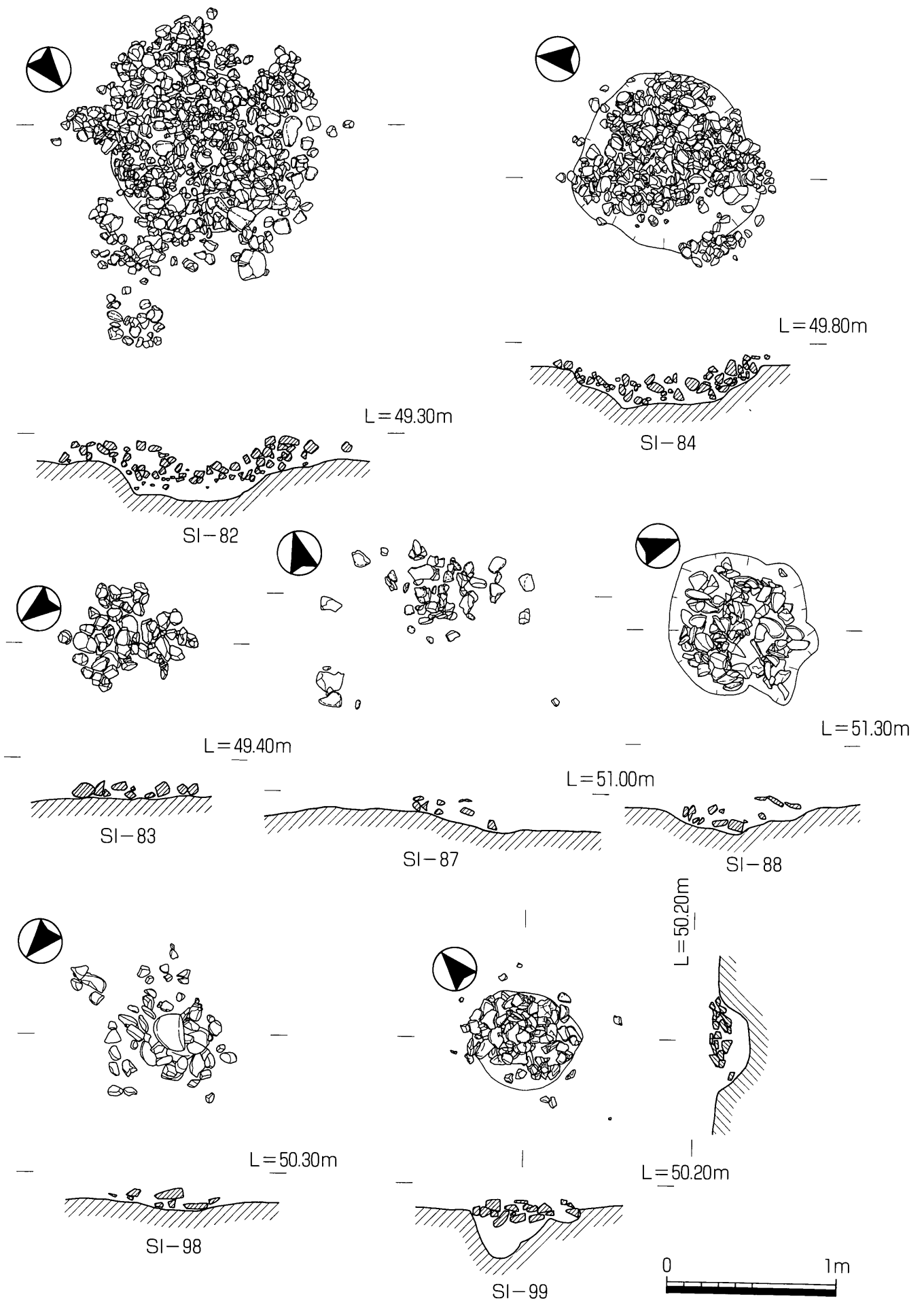
第52図 SI-51~53・55・58~60・124実測図 (S=1/30)



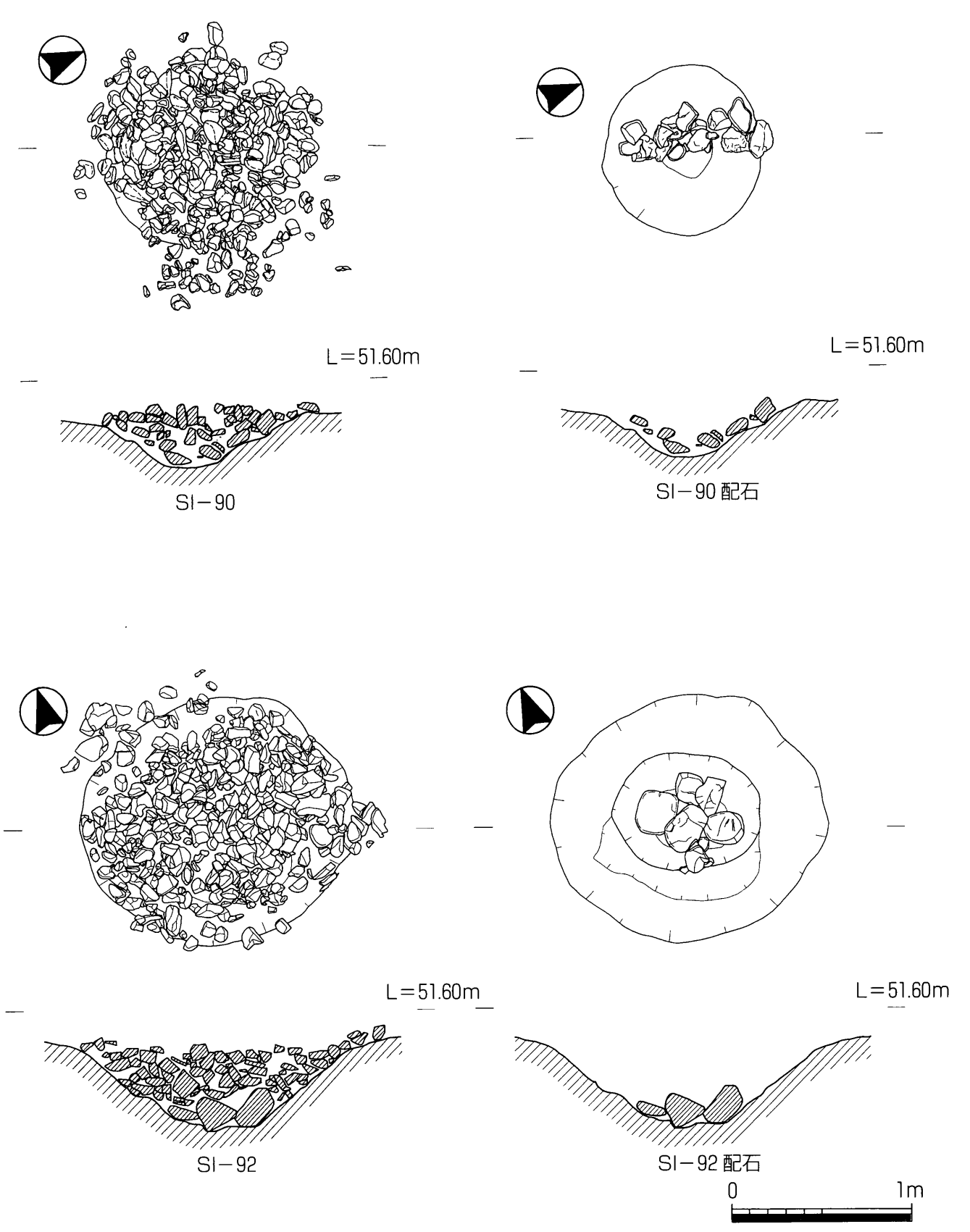
第53図 SI-61・62・64~67・71・72実測図 (S=1/30)



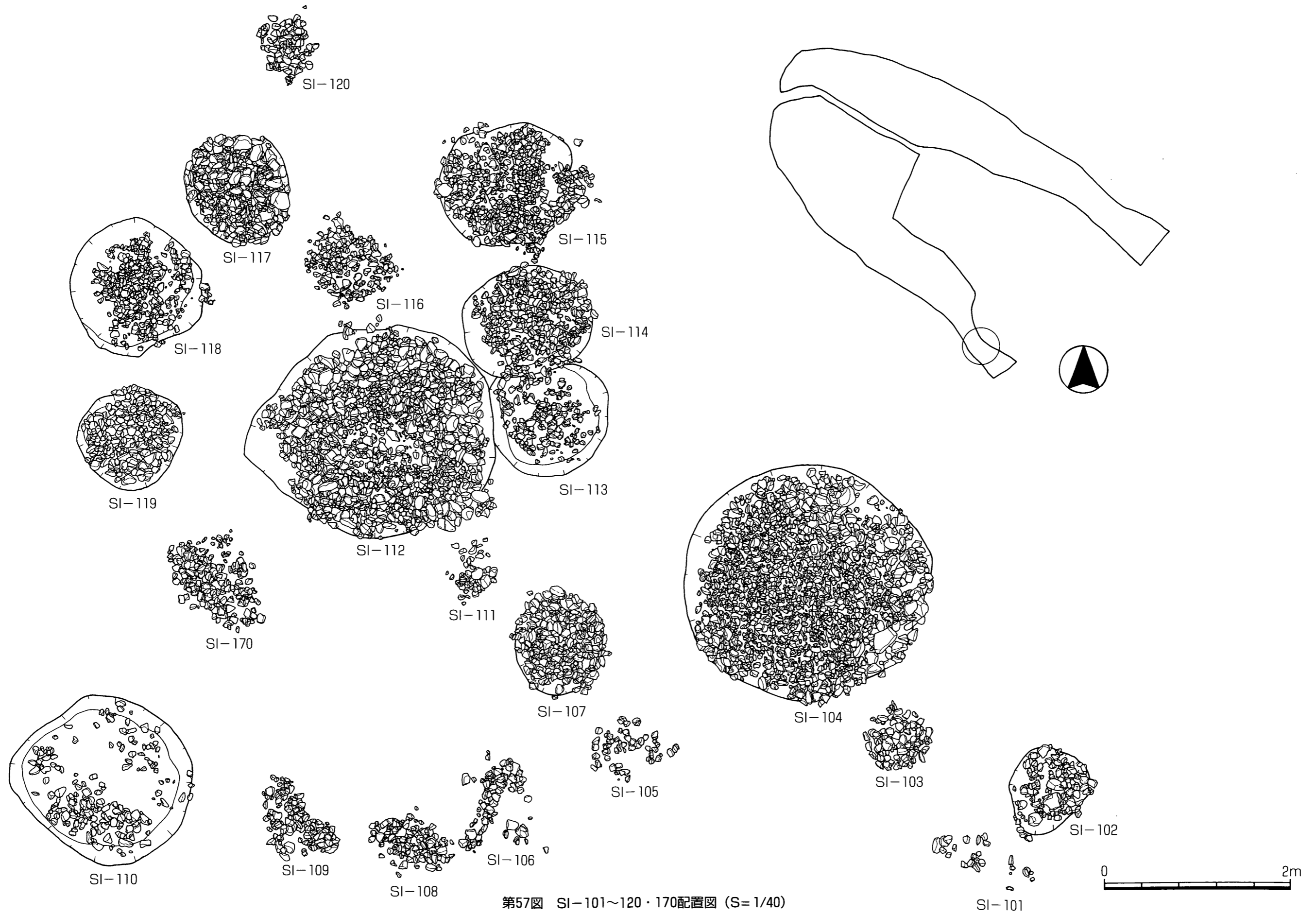
第54図 SI-73~77・79及びSC-44実測図 (S= 1/30)



第55図 SI-82~84・87・88・98・99実測図 (S= 1/30)



第56図 SI-90・92実測図 (S=1/30)

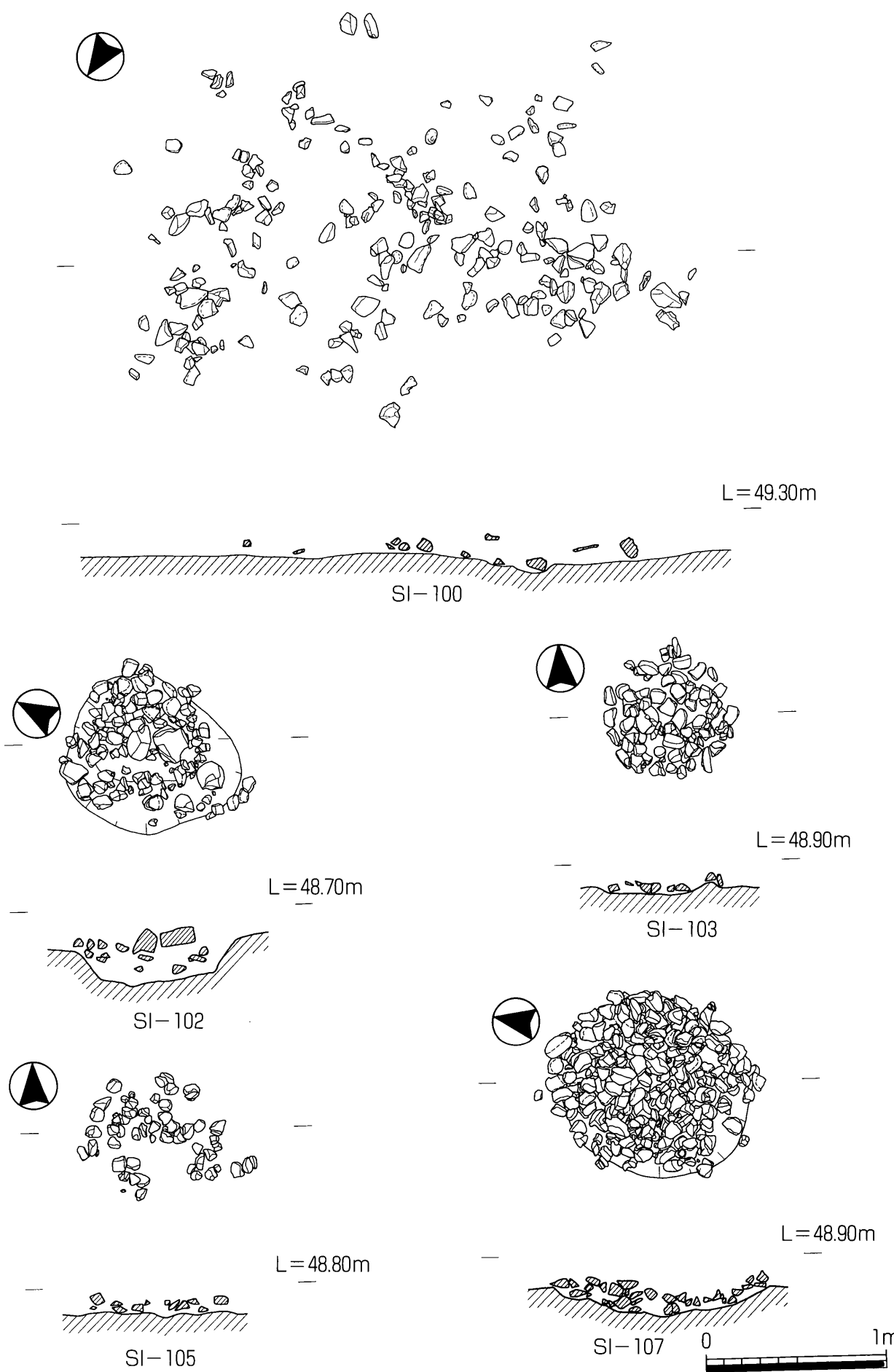


第57図 SI-101~120・170配置図 (S=1/40)

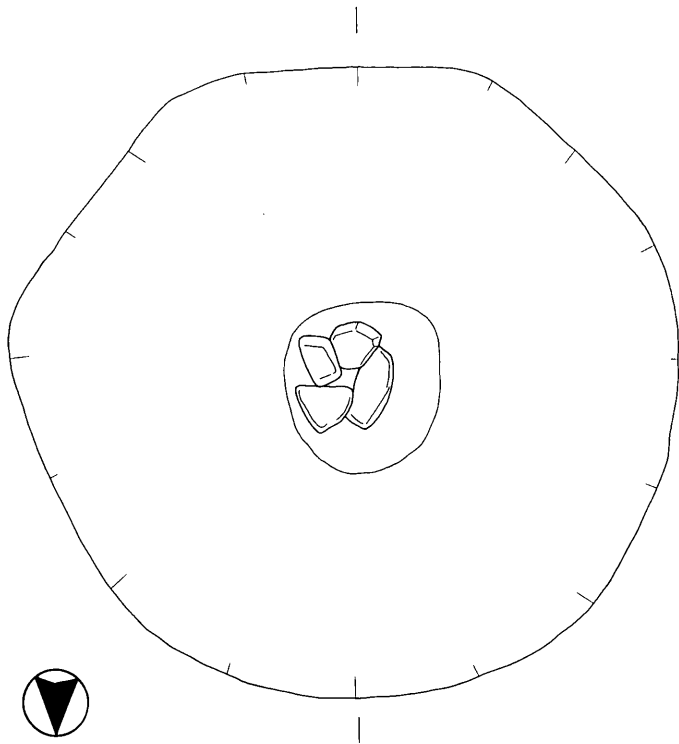




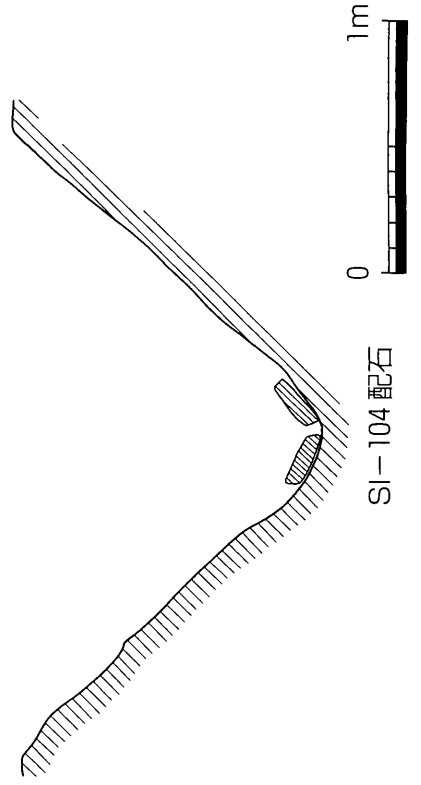
第58图 SI-93・96・97・152実測図 (S= 1/30)



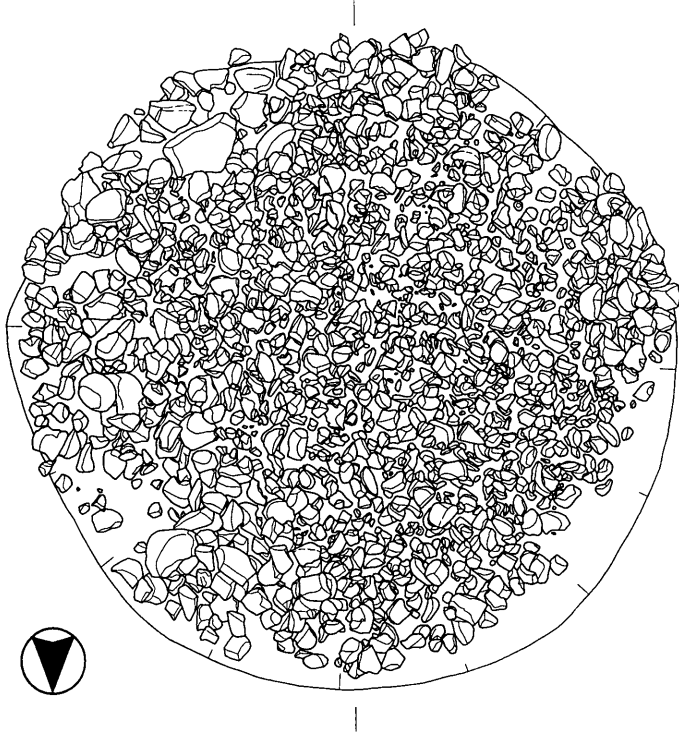
第59図 SI-100・102・103・105・107実測図 (S=1/30)



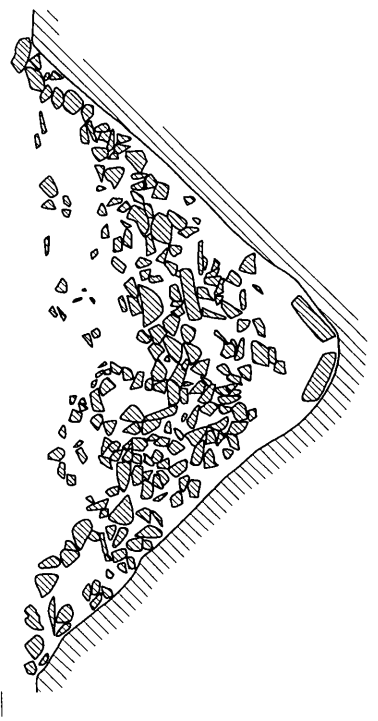
L = 48.70m



SI-104 配石

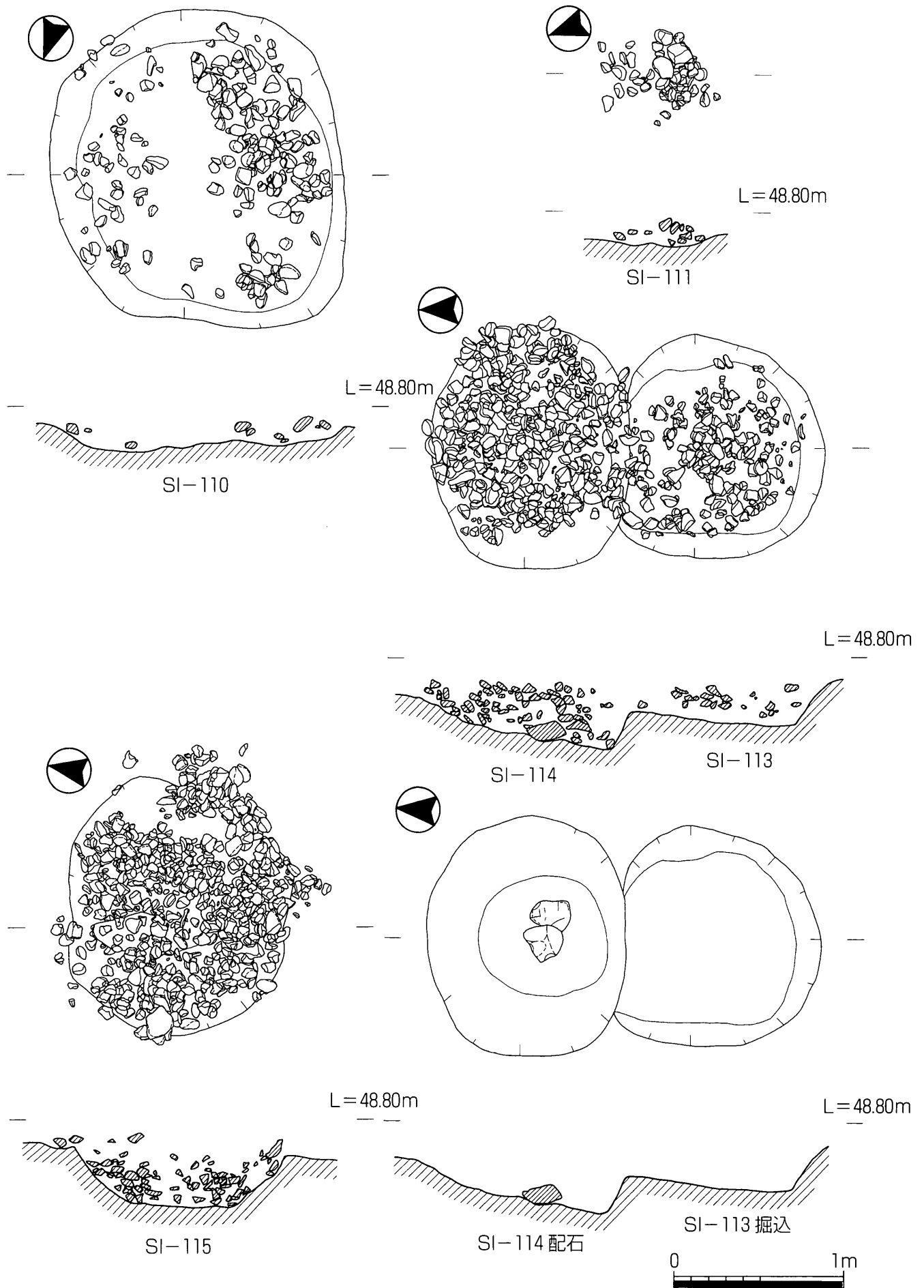


L = 48.70m

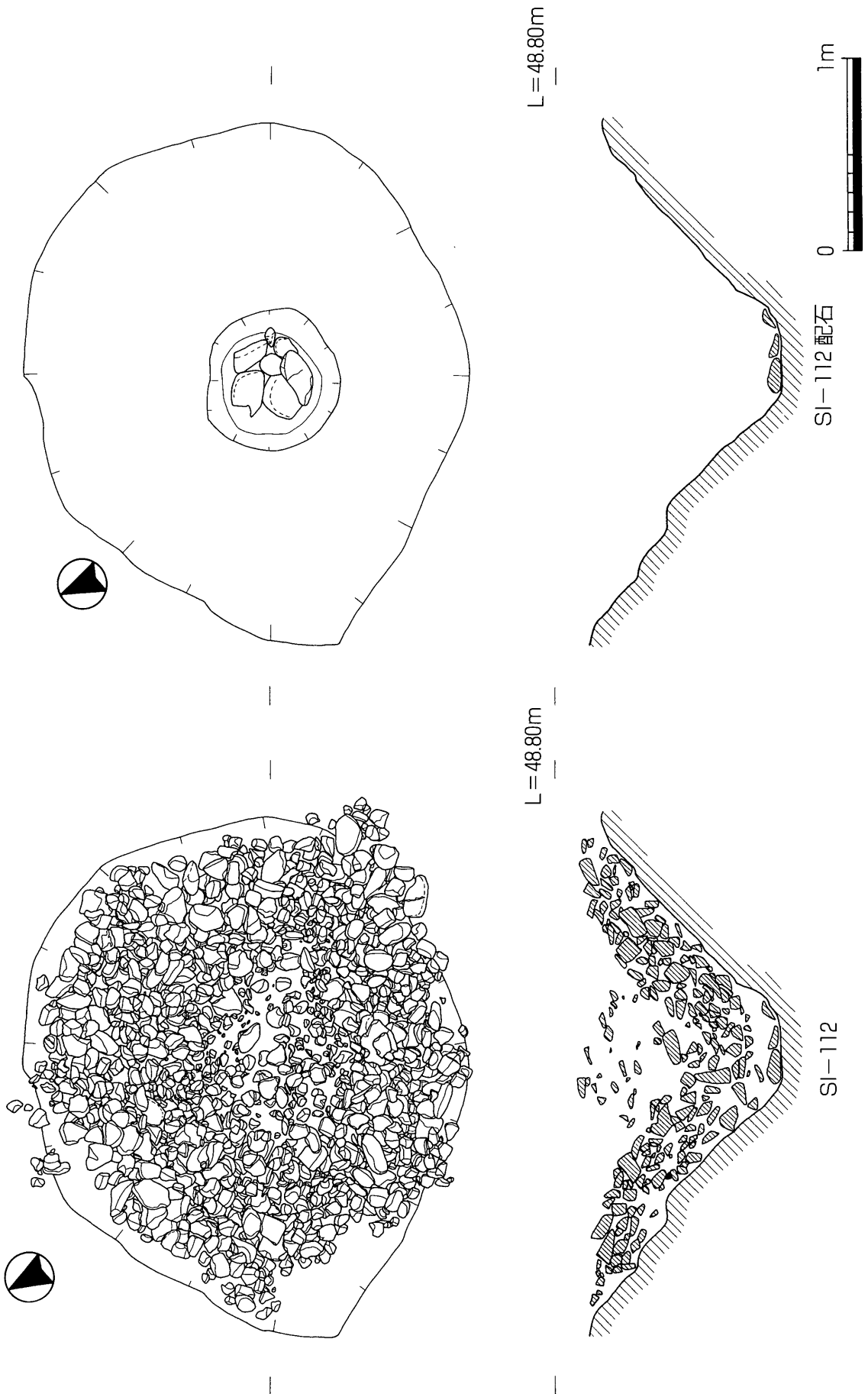


SI-104

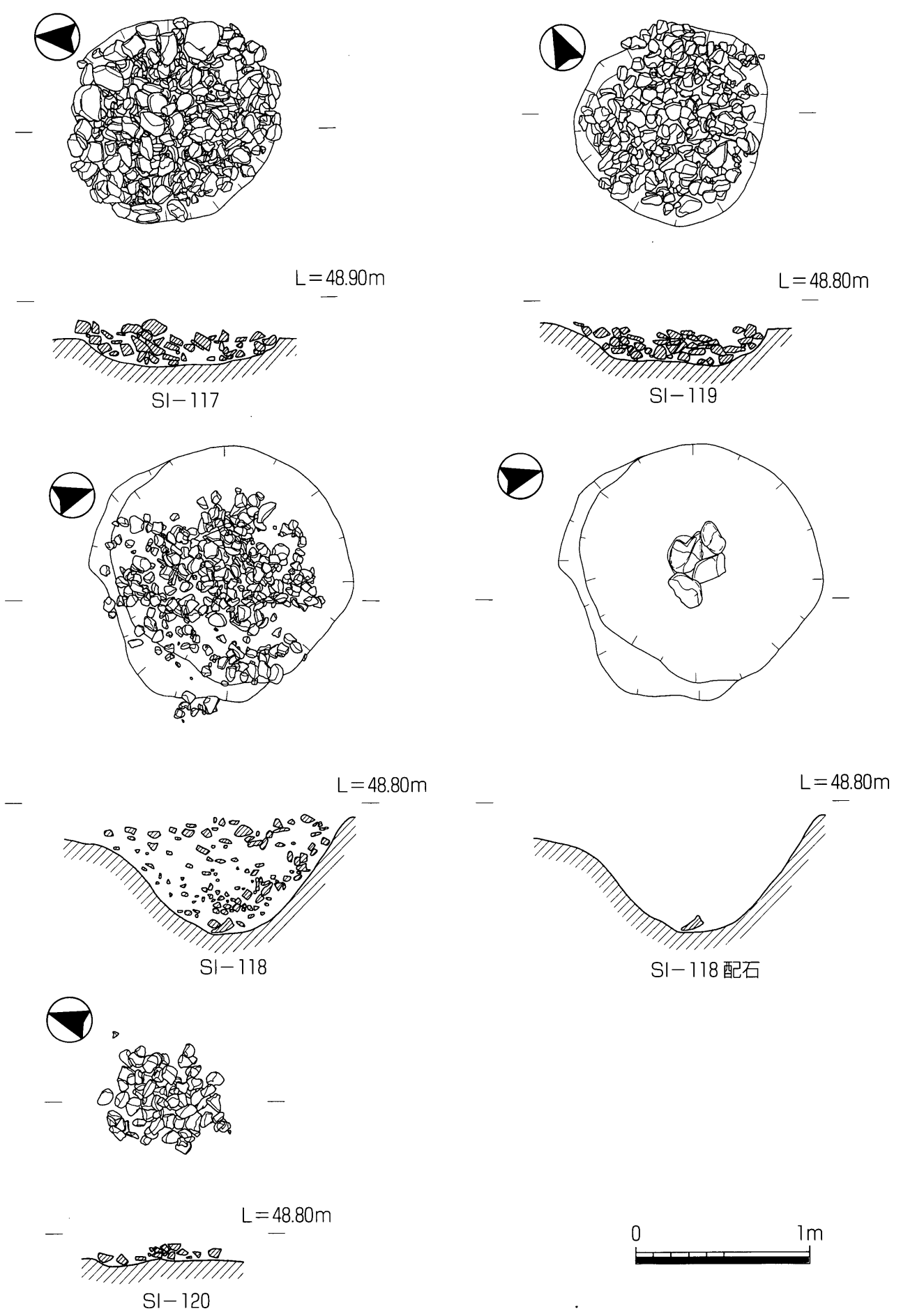
第60図 SI-104実測図 (S= 1/30)



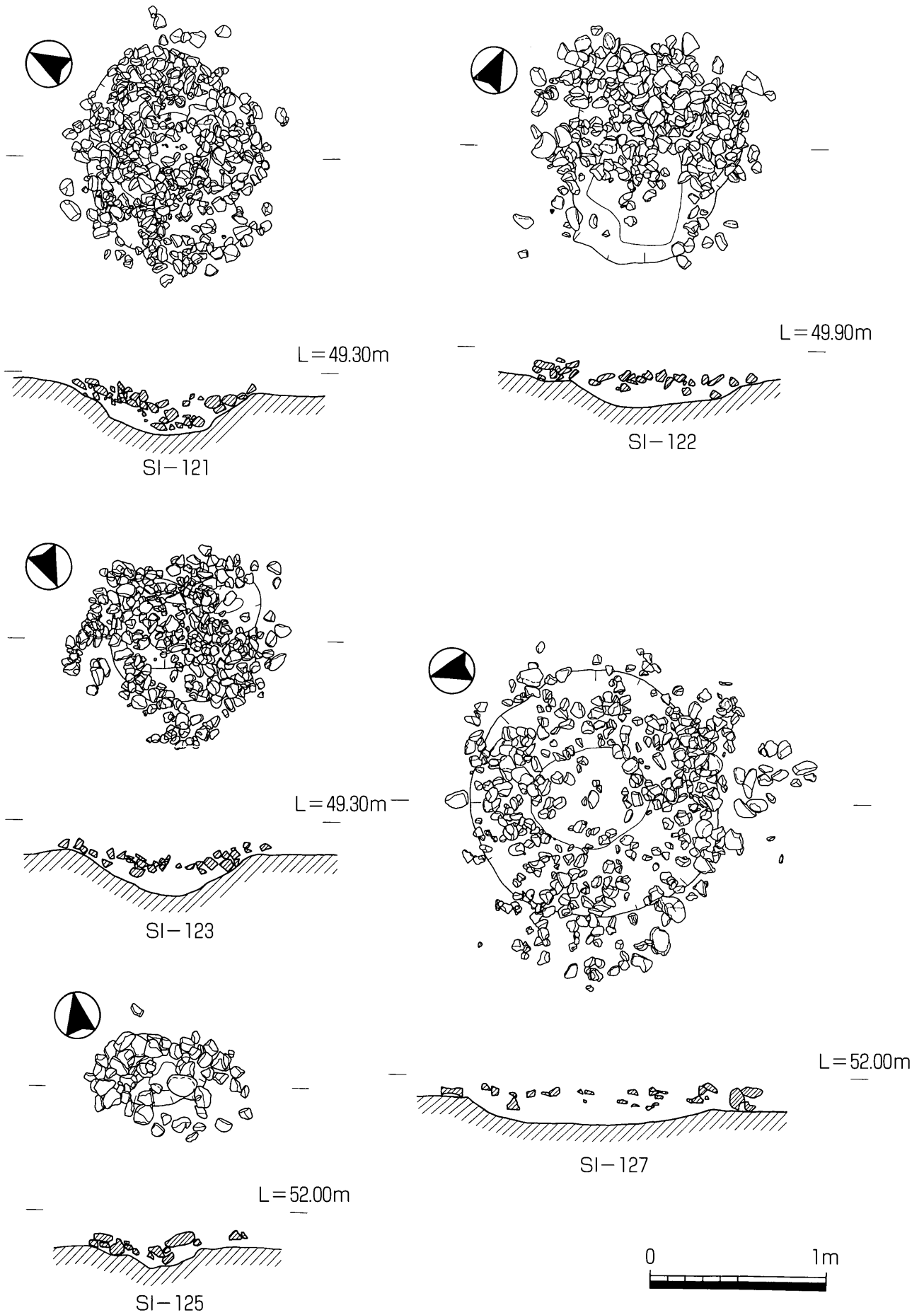
第61図 SI-110・111・113~115実測図 (S=1/30)



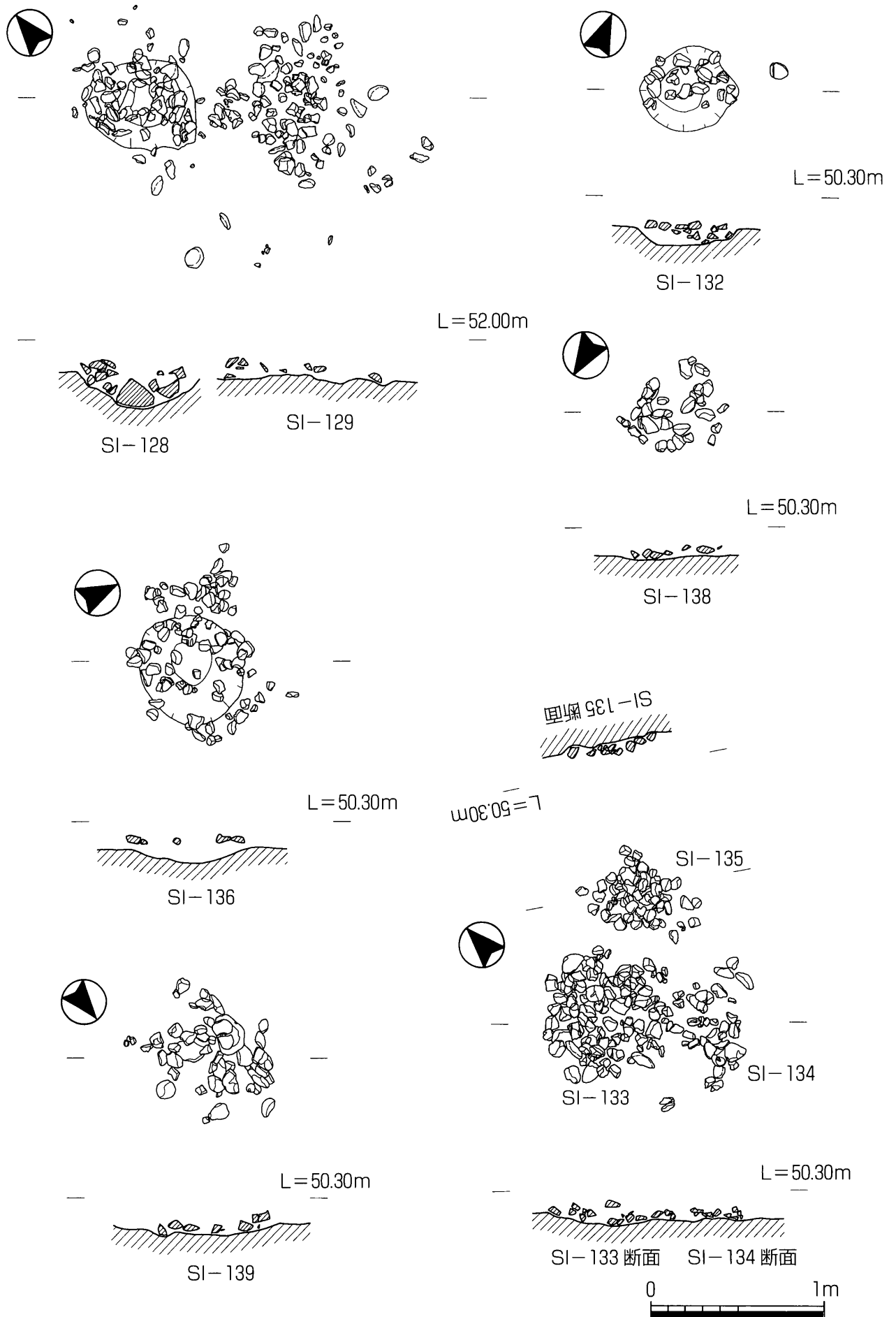
第62図 SI-112実測図 (S= 1/30)



第63図 SI-117~120実測図 (S= 1/30)

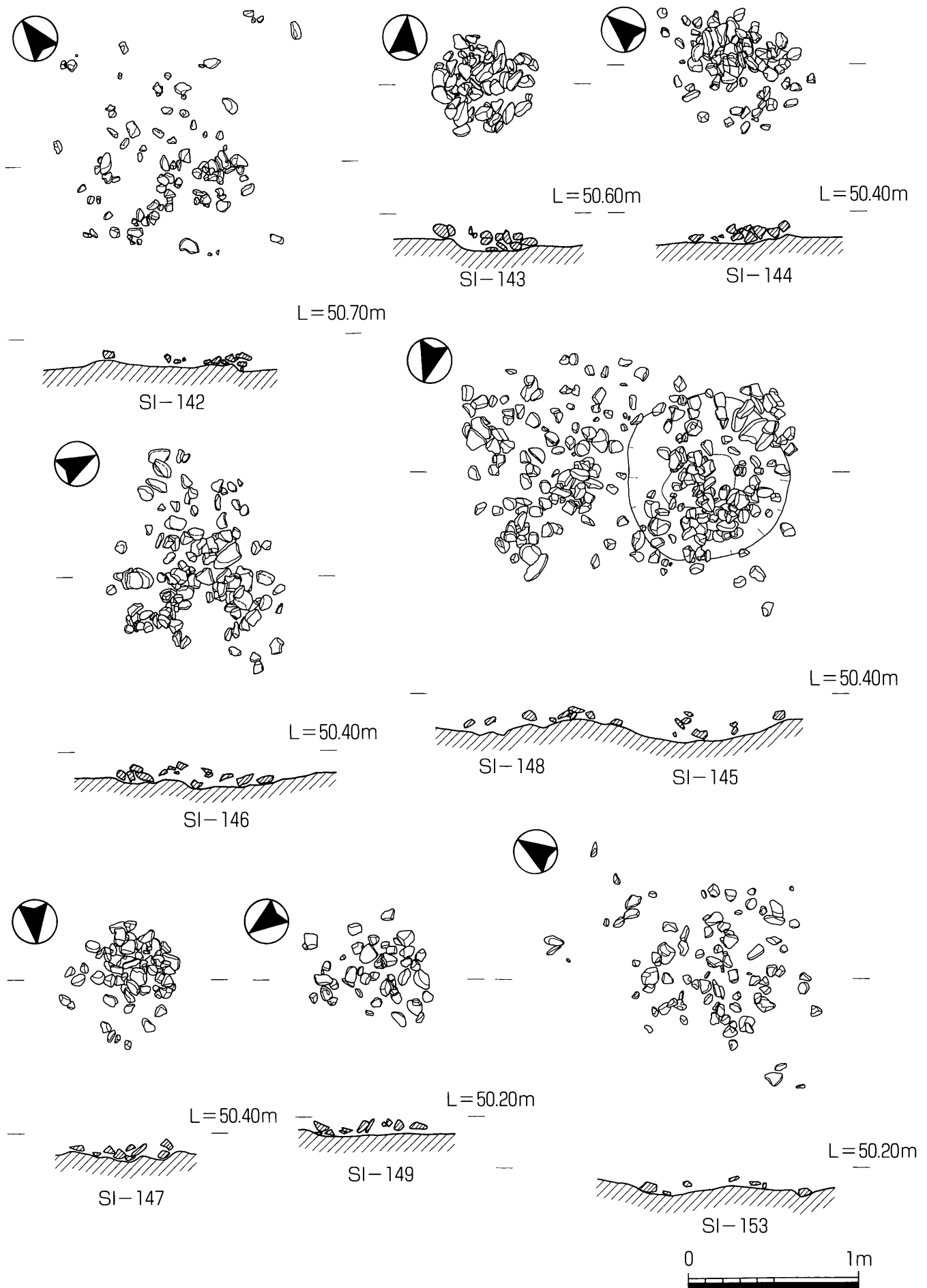


第64図 SI-121~123・125・127実測図 (S=1/30)

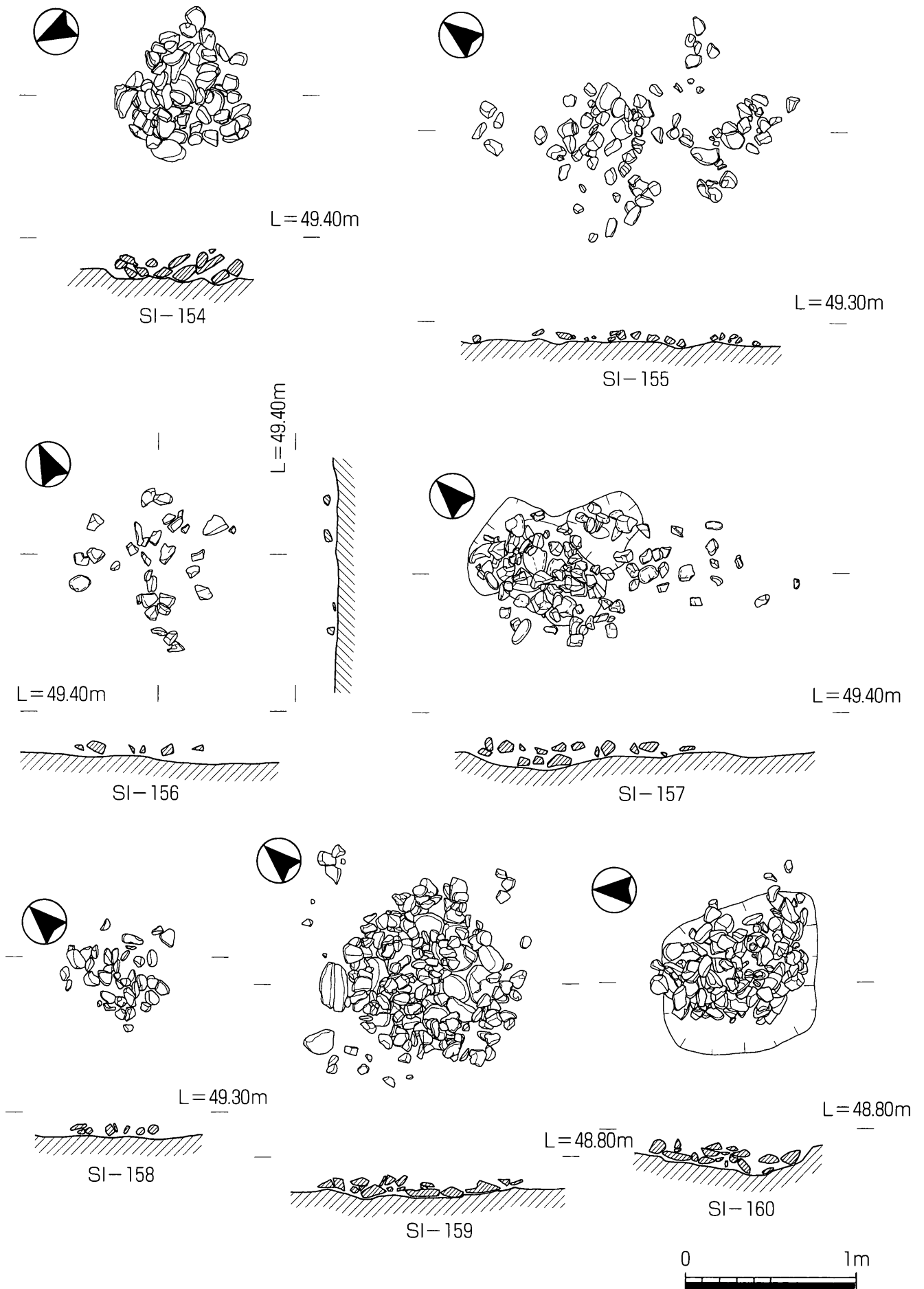


第65図 SI-128・129・132~136・138・139実測図 (S=1/30)

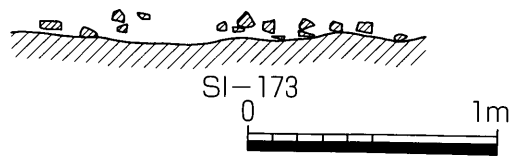
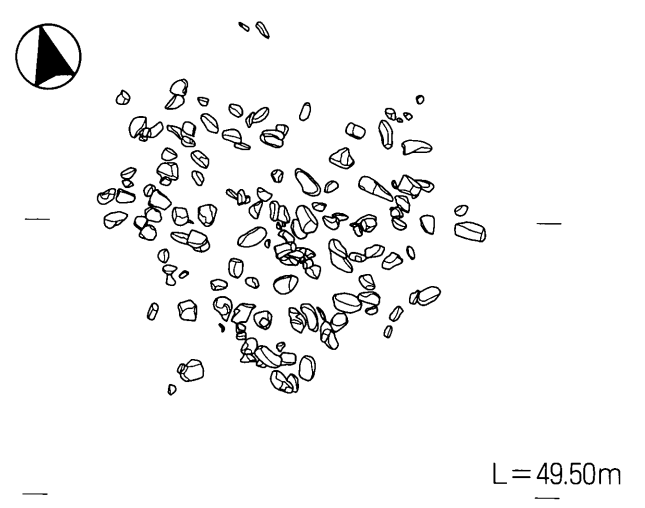
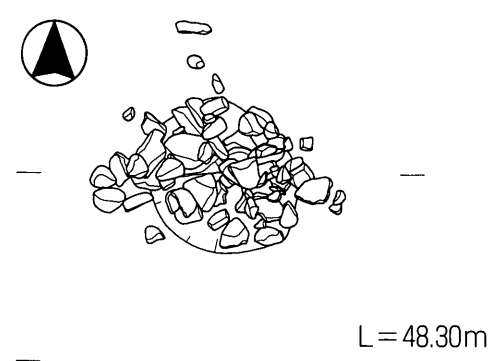
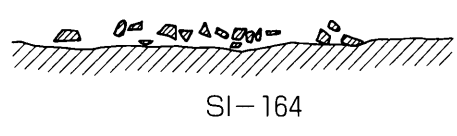
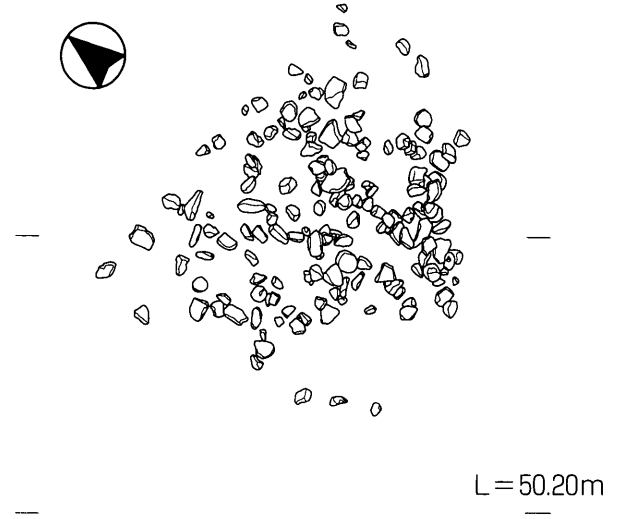
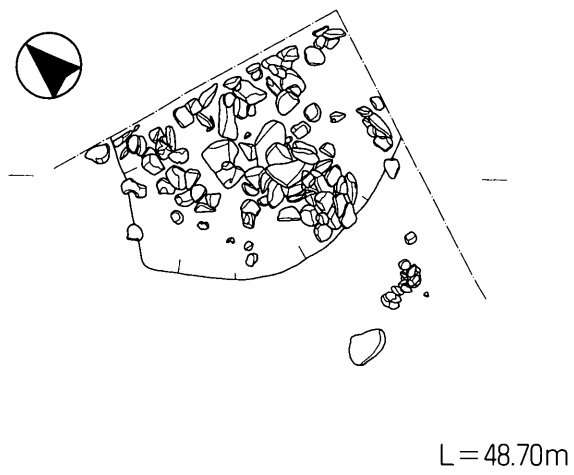
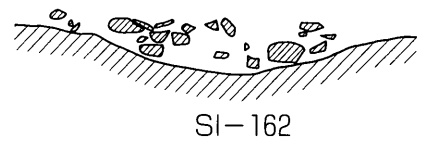
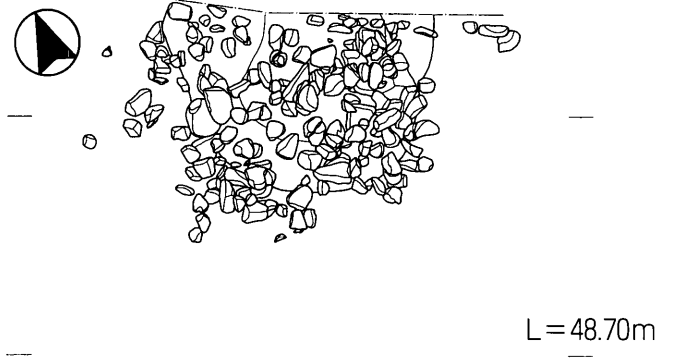
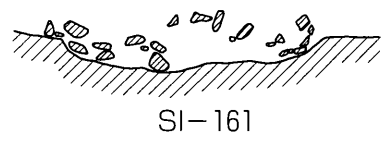
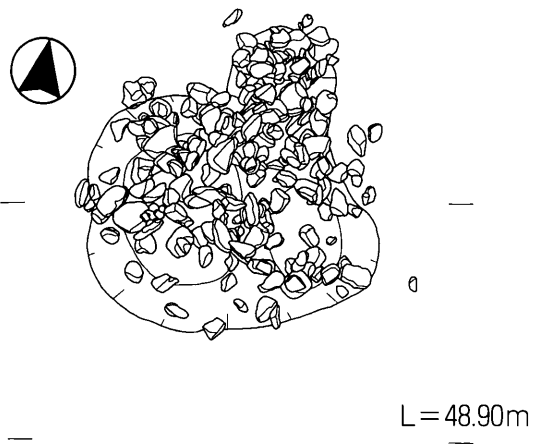




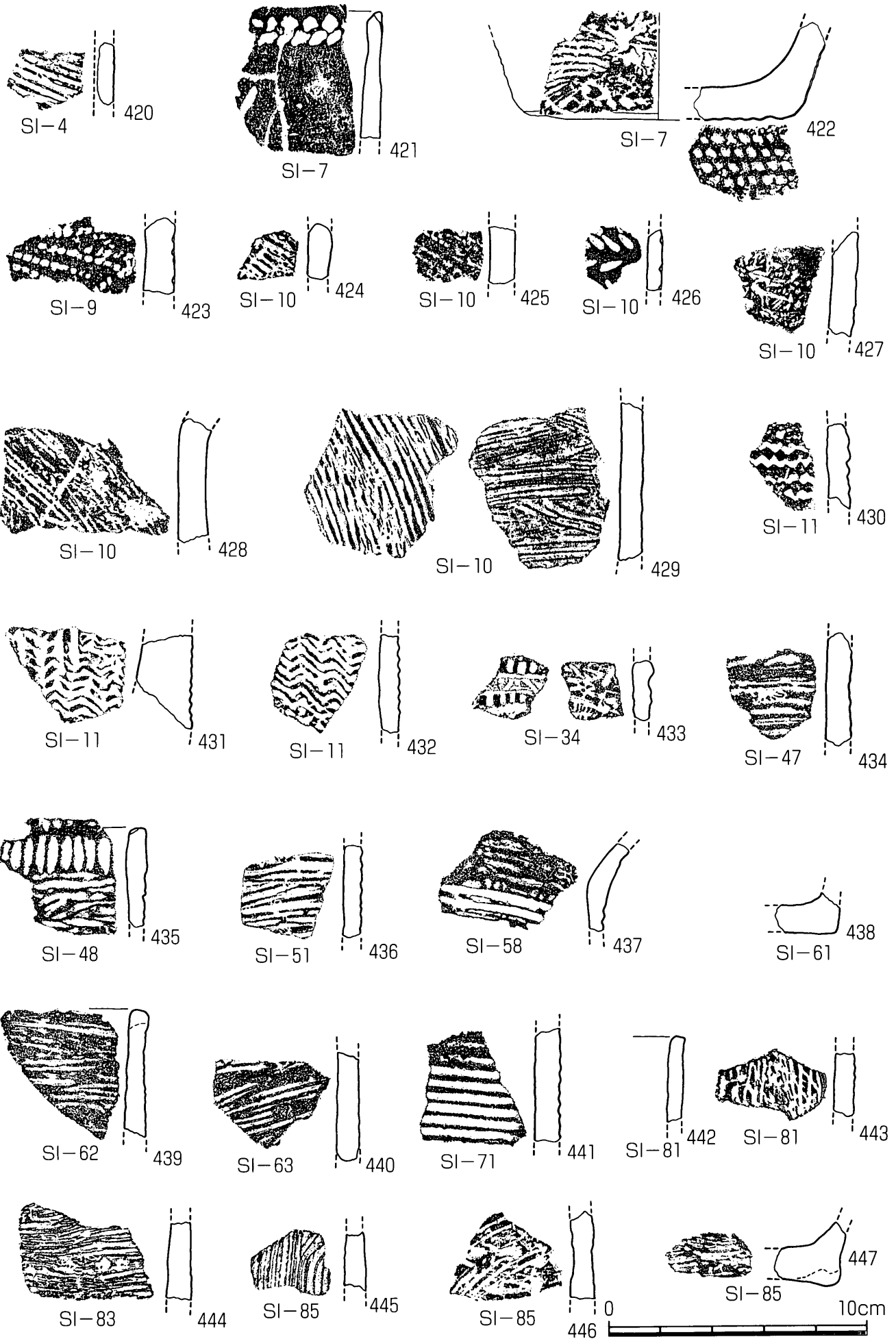
第66図 SI-142~149・153実測図 (S= 1/30)



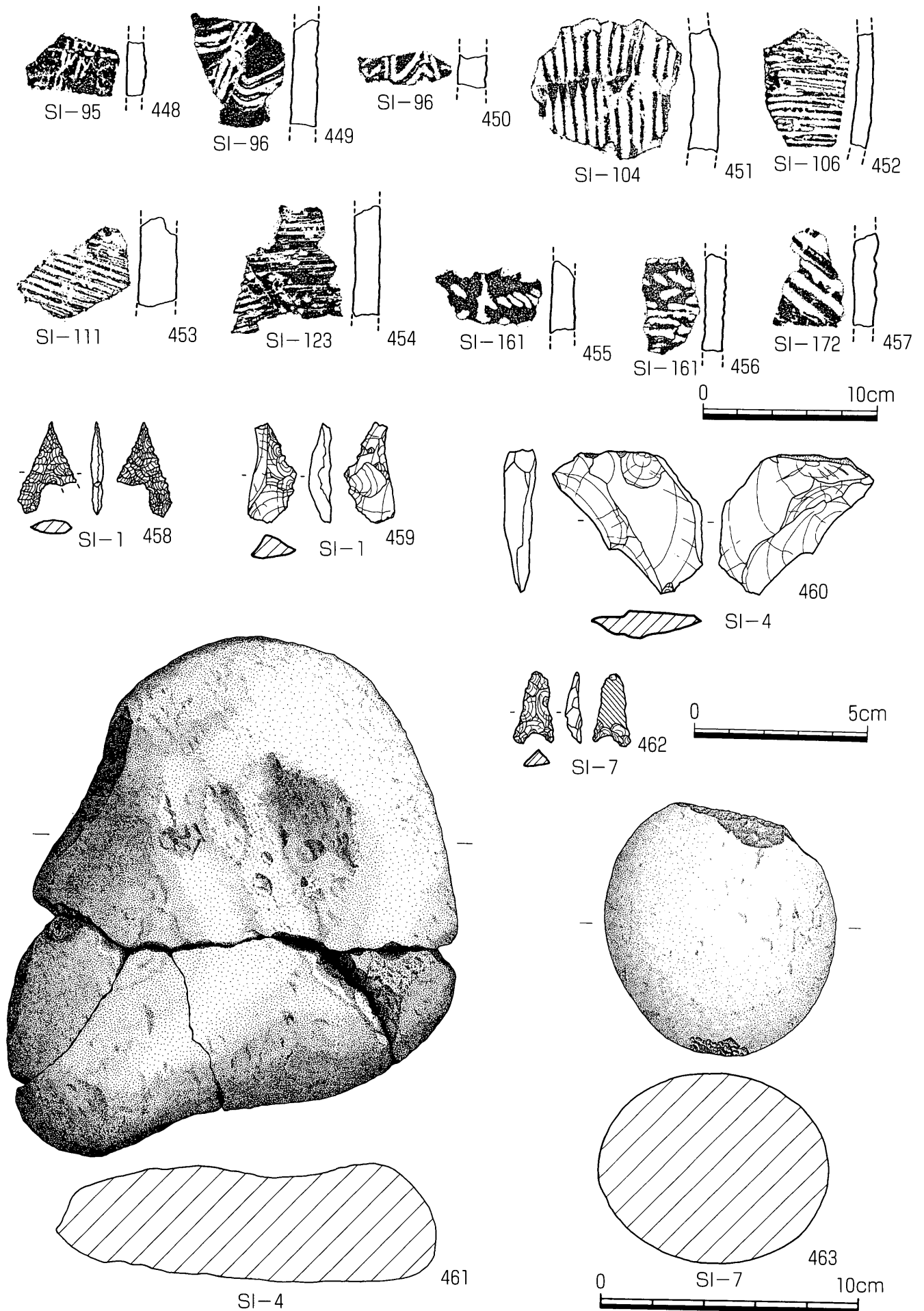
第67図 SI-154~160実測図 (S=1/30)



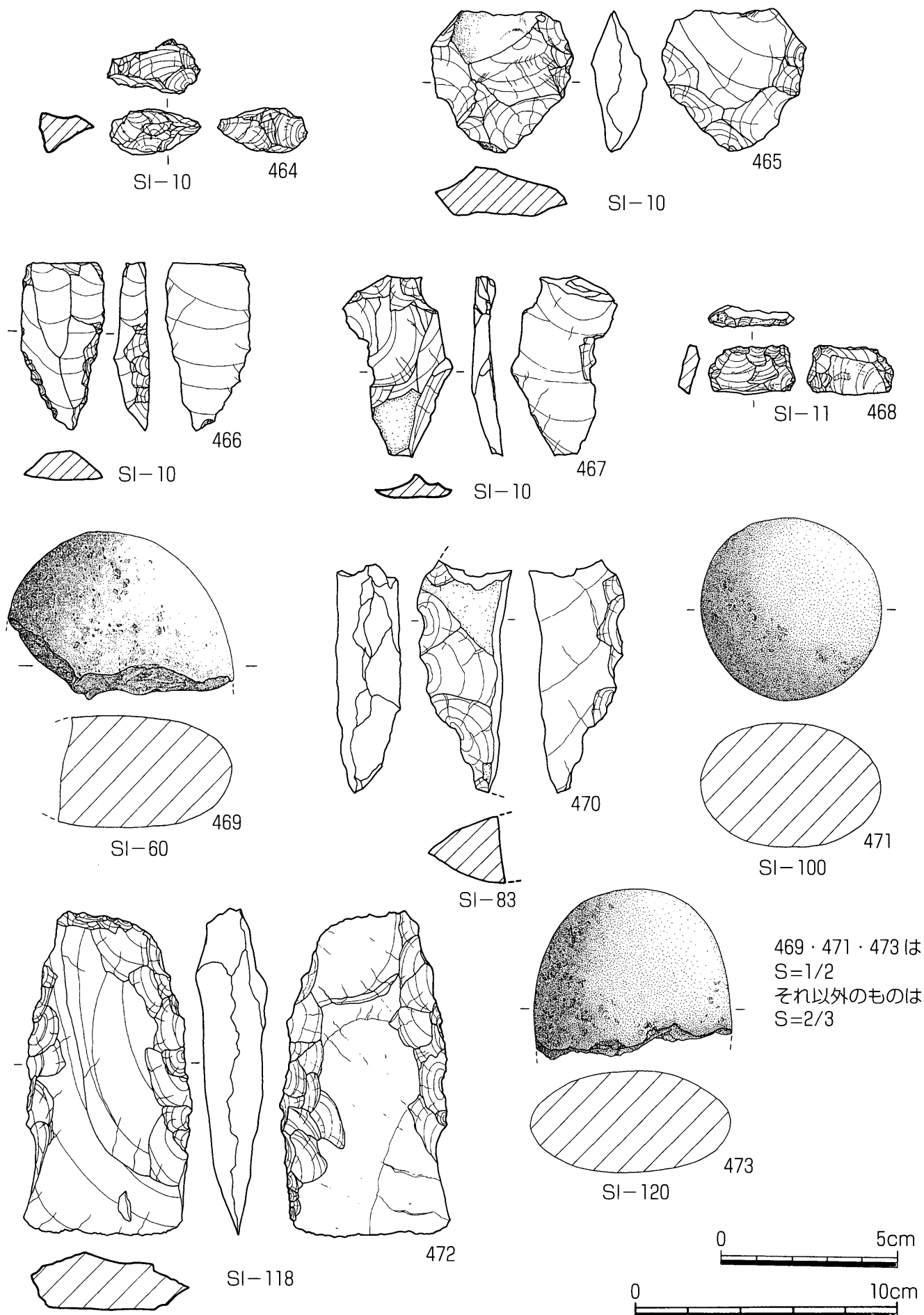
第68図 SI-161~164・171・173実測図 (S=1/30)



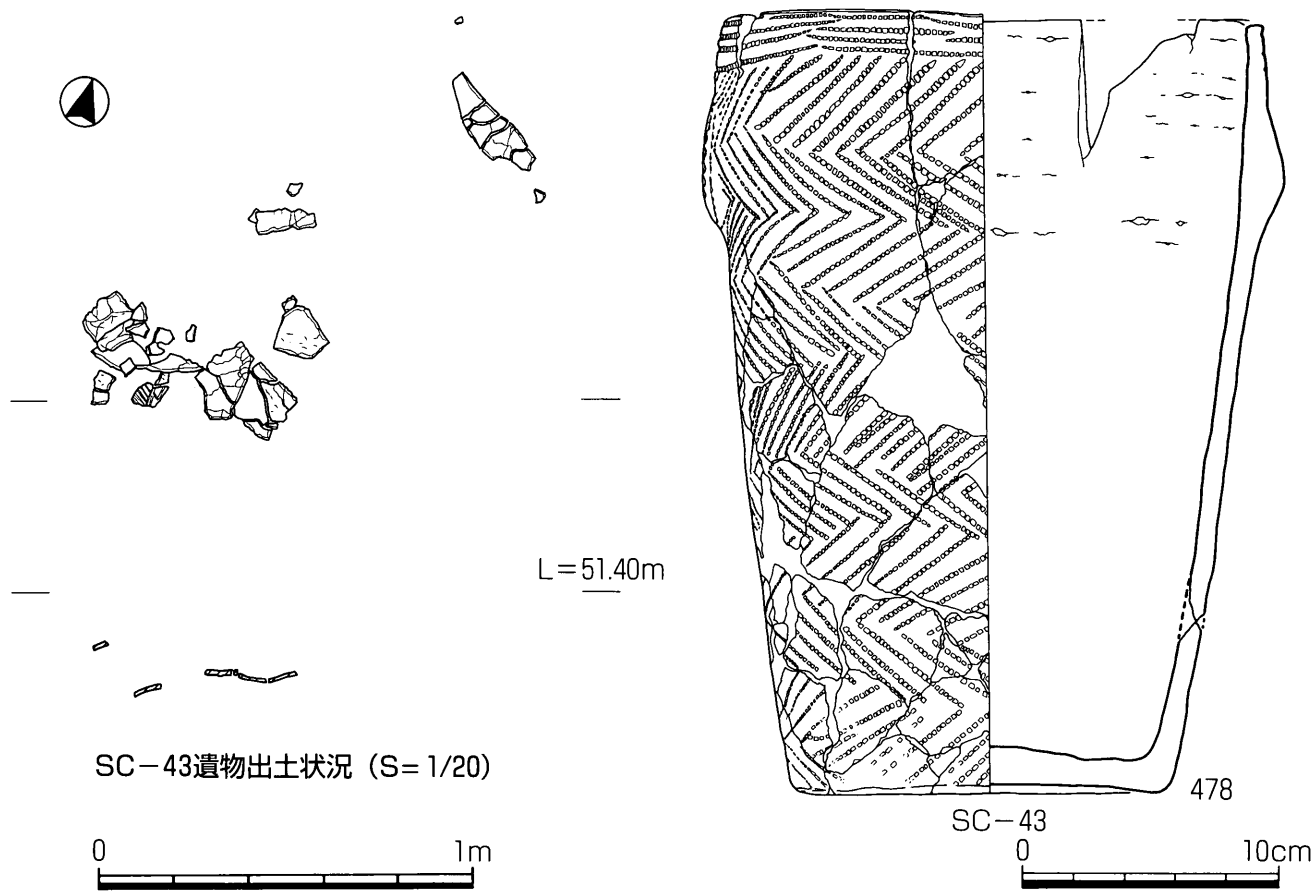
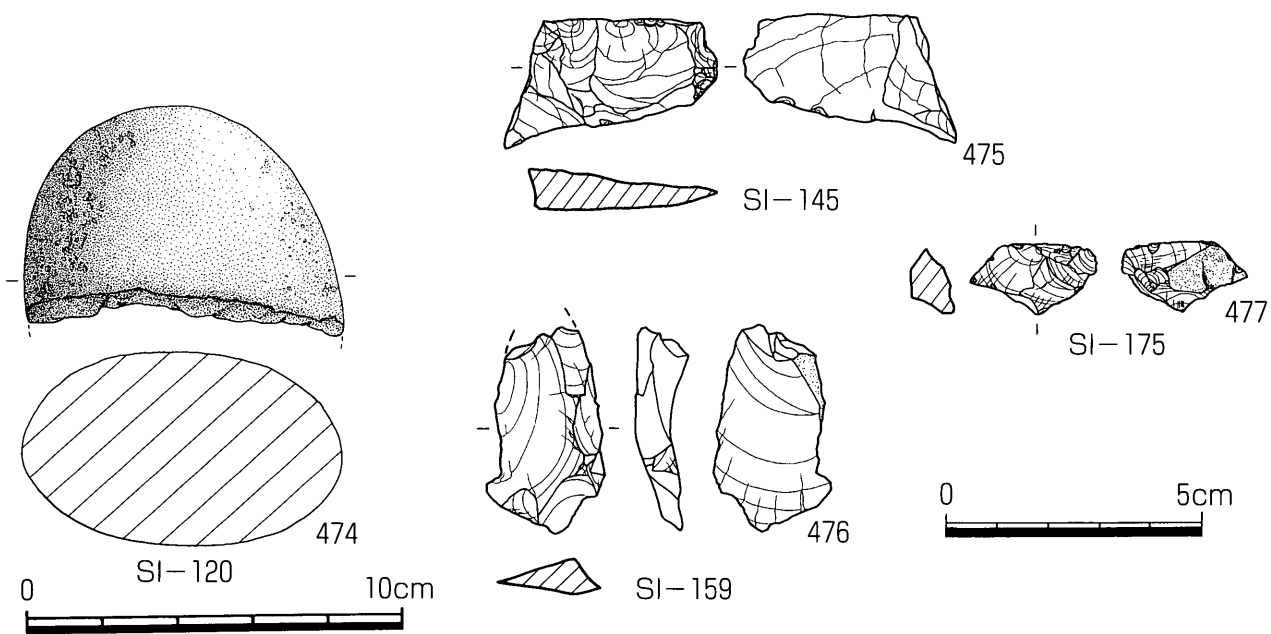
第69図 集石遺構出土遺物実測図① (S=1/2)



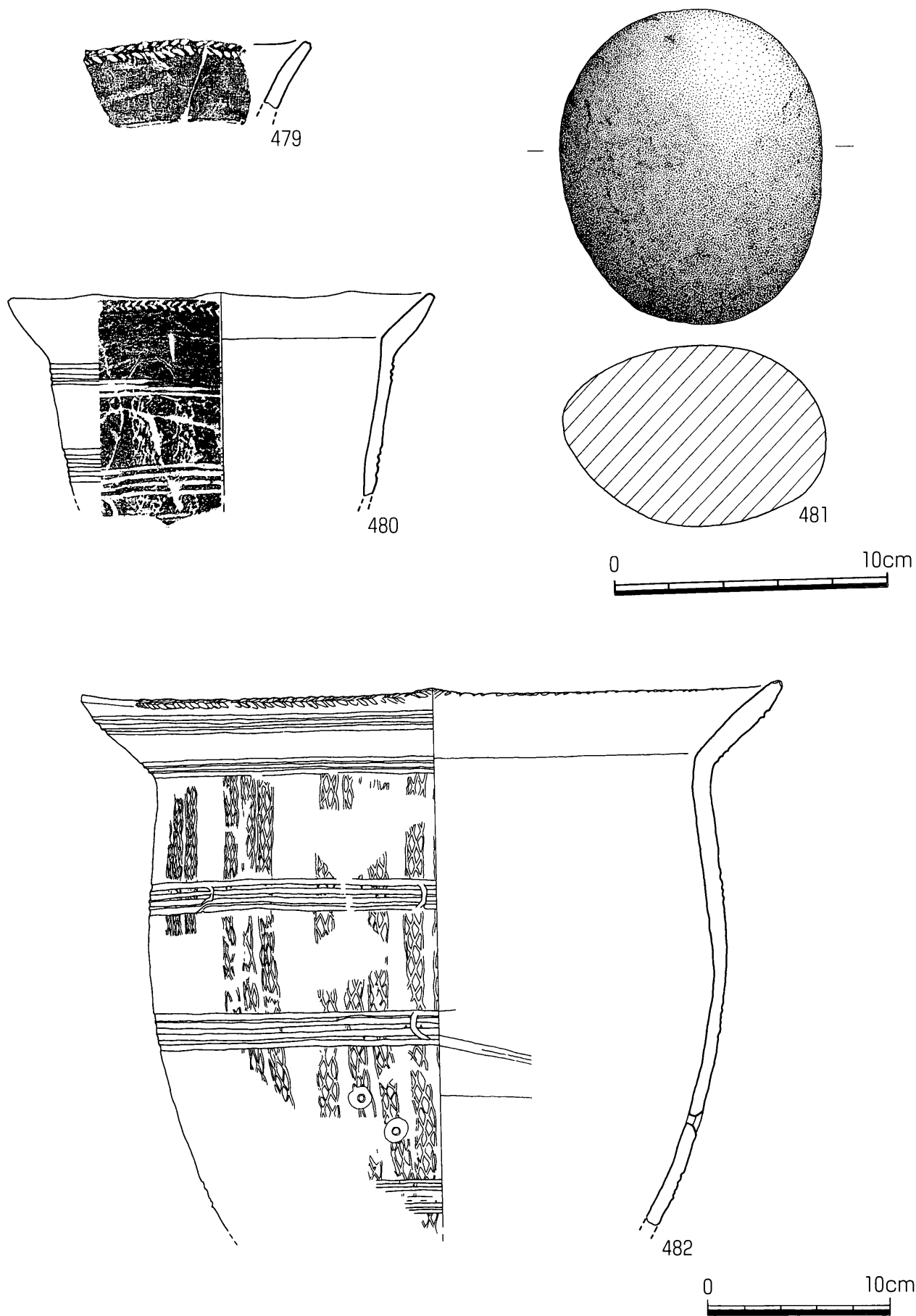
第70図 集石遺構出土遺物実測図② (S= 1/2, 2/3, 1/3)



第71図 集石遺構出土遺物実測図③ (S= 2/3, 1/2)



第72図 集石遺構出土遺物④ SC-43及びSC-43出土遺物実測図 (S=1/2, 2/3, 1/2)



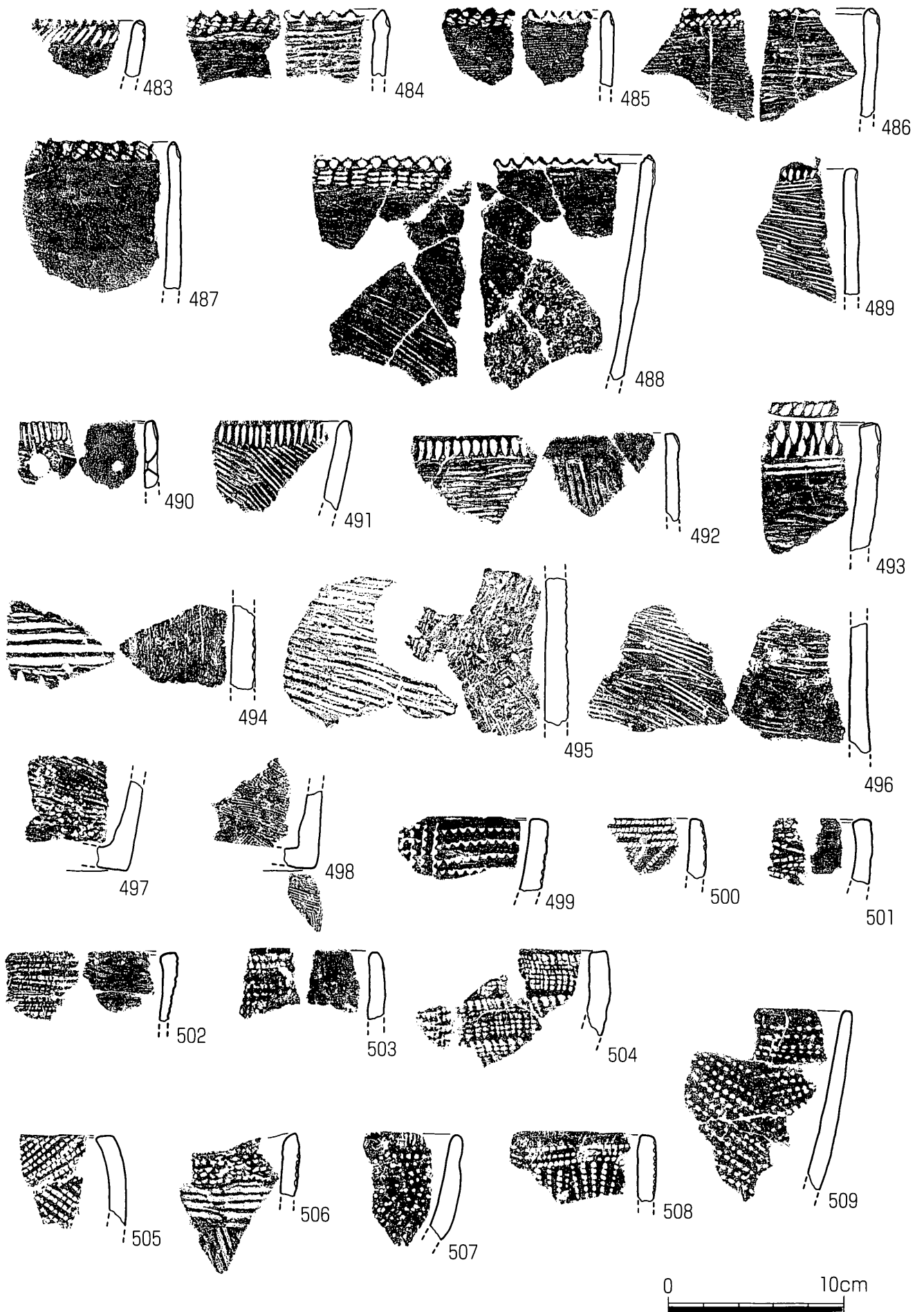
第73図 SC-44出土遺物実測図 (S= 1/3, 1/2)



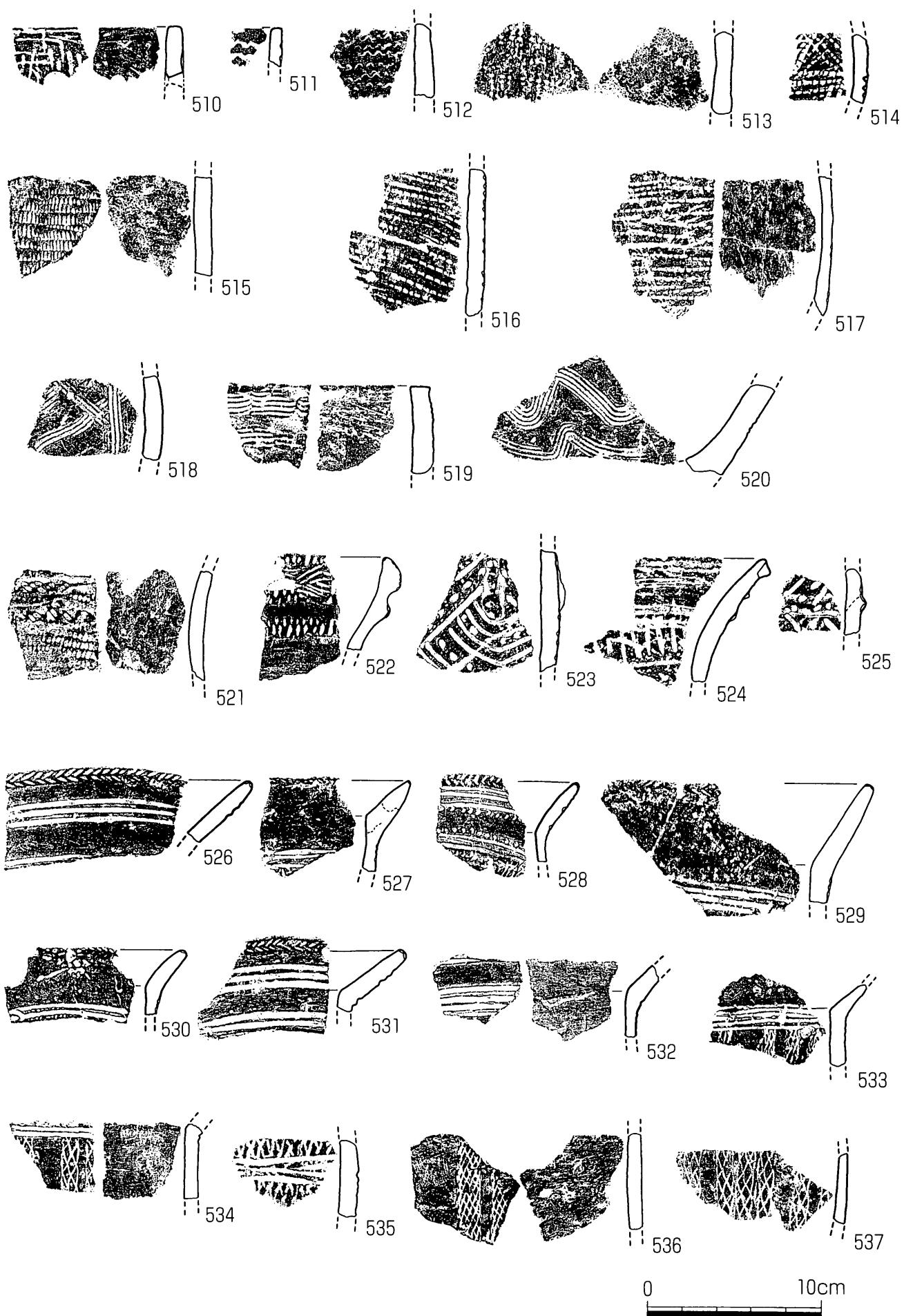
### 第3節 包含層出土の縄文時代早期の土器について

第5層・第6層から縄文時代早期に該当すると考えられる土器が多量に出土ので、ここでまとめて報告を行う。(第86図～93図・表13～15)

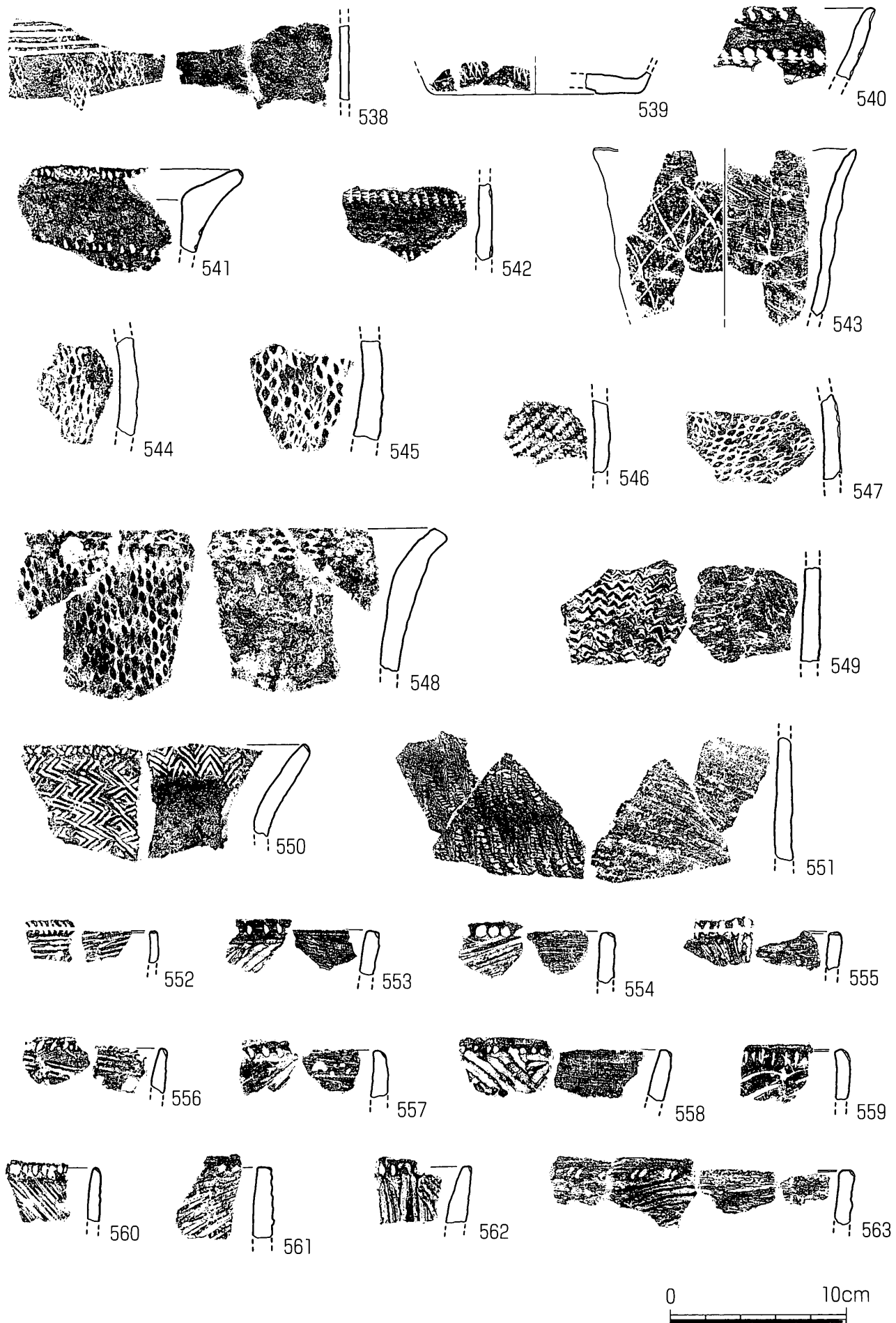
483～520は円筒形の深鉢の破片である。483～489は口縁部片で口唇部に刻み目を持ち、内面には段を有する。また口縁部には貝殻や工具で施文するという特徴をもつ。内外面の調整は貝殻条痕またはナデ調整、貝殻条痕の後ナデ調整を行うものもある。489～493も口縁部片である。口唇部は平坦で口縁部に工具による縦位に刺突文を施す。外面の調整は貝殻条痕で内面の調整は貝殻条痕のものとナデのものがある。494～496は胴部片である。外面に貝殻条痕を施す。内面の調整は貝殻条痕とナデ調整の2種類が見られる。497・498は底部片である。外面に貝殻条痕を施す。内面の調整は丁寧なナデ調整である。499～517までは外面に貝殻や工具で刺突文を施す土器片である。499～511は口縁部片である。499～505まではやや内傾する。506・507は波状口縁を呈する。また507は瘤状突起が見られる。512～517は胴部片である。518～520までは外面を短い貝殻条痕により施文する土器片である。521は地文に縄文を施す。また突帯にも縄文を巡らす。522～525は外面に縦位や横位の突帯を巡らし、凹線文や連点文により施文する土器片である。526～539は外面を沈線文や撚糸文で施文する土器片である。526は口縁部片、527～531は口縁部～頸部片でいずれも口唇部に羽状の刻み目を施す。また頸部はくの字に屈曲し、外面には2条～4条の沈線文を施す。532～534は頸部片、535～538は胴部片、539は底部である。いずれも縦位の撚糸文を施文する。540～542は横位に貝殻による連続刺突文を施す土器片である。543は口縁部～胴部片で、内面に貝殻条痕、外面には貝殻条痕の後にナデ調整を行い、さらに格子状の沈線文を施す。544～548は楕円の押型文を施す土器片である。549・550は山形押型文を施す土器片である。551は内面に貝殻条痕、外面には波状に貝殻刺突文を施す。552～580は内面に貝殻条痕かナデ調整を行い、外面は貝殻条痕を地文とする口縁部片である。いずれも口唇部には刻み目を施す。572の外面は貝殻条痕の後ナデ調整を施し、斜位に長い沈線文で施文する。同じ様に直線的な沈線か条痕により施文するものは567～573、576・577・579である。575は外面の調整後、工具により波状の沈線文を施している。580はおそらく平底の底部片で、内外面には貝殻条痕を施す。581は胴部片である。内外面には貝殻条痕を施し、566などと同様の文様が施されている。582は口縁部片である。外面は口唇部に刻み目を施し、その下に×状の記号文が見られる。また1条の突帯を巡らせ、貝殻条痕を地文とする。内面の調整は貝殻条痕の後ナデ調整を行う。583・584は口縁部片である。両者共に内面はナデ調整、外面には貝殻条痕を施す。585・586は円筒形の深鉢の胴部片であろうか。両者共に内面はナデ調整、外面には貝殻条痕を施す。587～589は外面を羽状の短沈線で施文する土器片である。587は口縁部片で、内面から口唇部にかけては丁寧に磨かれている。588・589は胴部片で、内面に著しい凹凸が見られる。590・591は胴部片である。590は内面に貝殻条痕を施す。外面の調整は刺突文であろう。しかし、施文具は不明である。591は二次的な焼成のためか赤化が著しい。内面はナデ調整である。外面はナデ調整後、一部に590と同様の文様を施す。592・593は壺形土器の口縁部片である。593は外面に沈線文が施文される。594～597は底部片である。594の内面はナデ調整、外面は貝殻条痕の後ナデを施し、底部の縁には刻み目を巡らせる。595は2ヶ所穿孔がある。596・597の外面は丁寧に磨かれている。598・599は不明遺物である。598は耳栓であろうか。端部には刻み目が施されている。599は内面に貝殻条痕を施し、外面を貝殻条痕と貝殻刺突文により施文している。



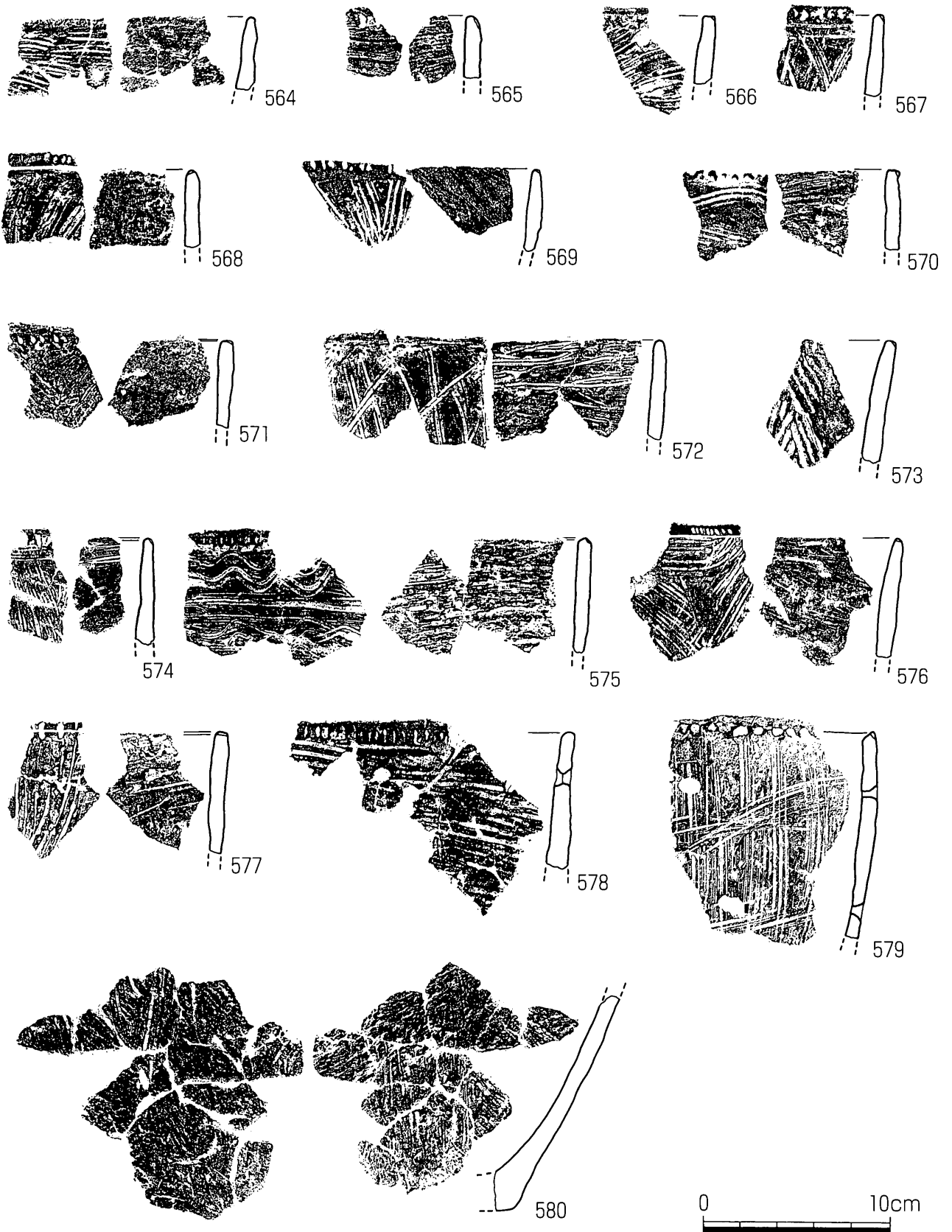
第74図 包含層出土縄文時代早期土器実測図① (S=1/3)



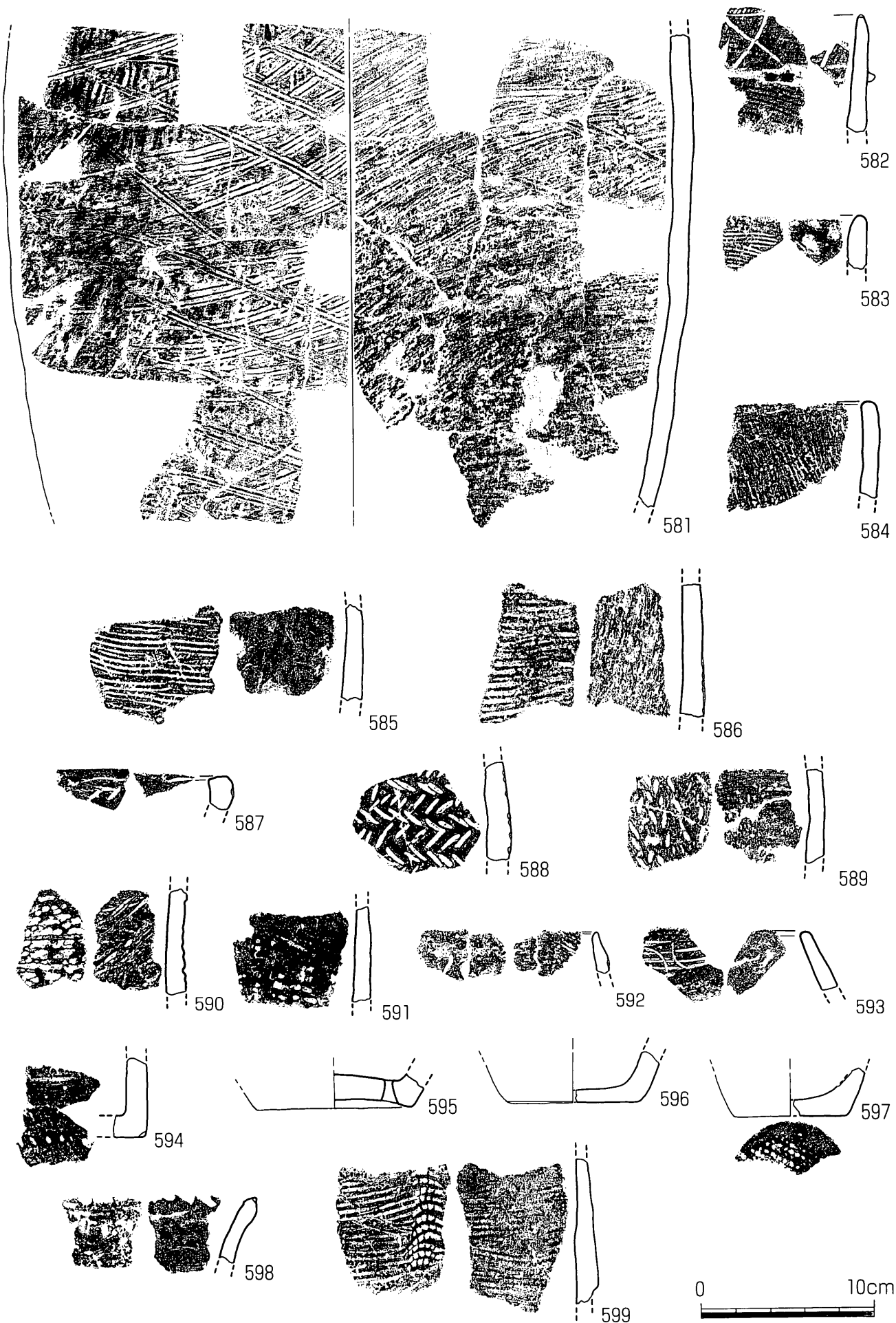
第75図 包含層出土縄文時代早期土器実測図② (S= 1/3)



第76図 包含層出土縄文時代早期土器実測図③ (S=1/3)



第77図 包含層出土縄文時代早期土器実測図④ (S=1/3)



第78図 包含層出土縄文時代早期土器実測図⑤ (S=1/3)

表9 集石遺構計測表①

集石番号	礫の分布範囲 (m)		配石	礫の数 (個)	掘り込みの規模 (m)			出土遺物 (番号は図面番号)	炭化物	備考
	長軸	短軸			長軸	短軸	深さ			
SI-1	1.41	1.11	無	291	1.16	1.01	0.2	458・459の他土器片4点		
SI-2	0.86	0.59	無	450	1.04	0.86	0.26		有	
SI-3								土器片1点・頁岩剥片1点・チャート剥片1点		
SI-4-A	2.86	1.16	有		1.26	1.22	0.16	420・460・461の他に流紋岩礫1点・チャート剥片2点・砕片1点		
SI-5	1.09	1	有		0.93	0.93	0.2	チャート砕片1点		
SI-6	1.05	0.6	無	298	1.09	0.8	0.44	チャート剥片1点・砕片1点		
SI-7	2.06	1.38	無	235	1.69	0.91	0.19	421・422・462・463の他にチャート礫1点		
SI-8	1.28	0.8	有	191	1	0.69	0.2	チャート剥片3点・流紋岩砕片1点		
SI-9	1.41	1.23	有		1.48	1.3	0.53	423の他にチャート剥片1点・砕片3点		
SI-10	2.07	1.55	有	862	0.59	0.57	0.19	464~467・424~429の他にチャート剥片2点・砕片3点・頁岩剥片2点・黒曜石剥片3点・砕片1点		
SI-11	3.23	2.12	無	416	3.62	2.35	0.28	430~432・468の他に土器片9点・チャート剥片3点		
SI-11-A			無	178	1.17	1	0.28			掘込の深い部分を計測
SI-11-B			無	146	1	0.92	0.17			掘込の深い部分を計測
SI-12	2.33	1.85	無		0.76	0.47	0.24			
SI-13				1,457				チャート礫1点		C14年代9500±60BP
SI-14	1.67	1.51	有	1,002	1.52	1.37	0.28	チャート礫1点		
SI-15	0.96	0.86	無	102	0.85	0.75	0.09			
SI-16	1.89	1.12	無	111						
SI-17	2.21	1.98	有	924	2.14	1.7	0.27		有	
SI-19	1.94	1.9	有	526	1.7	1.29	0.18			
SI-20	0.82	0.8	無	123	0.9	0.69	0.29			
SI-21	1.95	1.34	有	571	1.02	0.72	0.17			
SI-22	1.41	0.89	無	256	0.68	0.67	0.1	チャート礫4点		
SI-23	1.86	1.52	無	117					有	
SI-24	2.37	2.3	無	191						
SI-25	1.43	0.64	無	56						
SI-26	0.7	0.38	無	12						
SI-27	0.88	0.52	無	22						
SI-28	1.87	0.66	無	33						
SI-29	0.96	0.41	無		1.22	0.68	0.25			
SI-30	2.05	1.28	無	370	1.64	1.21	0.15			
SI-31	1.22	1.11	無	174	1.3	0.85	0.17			
SI-32	1.62	1.19	無	216	1.5	1.24	0.1			
SI-33	1.33	1.17	無	113	1.26	0.7	0.18			
SI-34	1.95	1.65	無	190				433		
SI-35	1.86	1.23	無	55				土器片1点		アカホヤ層上面にて検出
SI-36	1.87	1.21	無	107						アカホヤ層上面にて検出
SI-37	2.3	1.86	有	1,340	2.04	1.98	0.32			
SI-38	1.44	1.33	無	419	1.37	1.36	0.12			
SI-39	1.85	1.49	有	389	2.4	1.22	0.2	土器片1点・頁岩剥片1点・チャート剥片1点		
SI-40	0.95	0.7	無	41	0.6	0.5	0.1			
SI-41	1.13	0.96	有	451	1.05	1	0.38			
SI-42	0.95	0.61	有	119	0.6	0.5	0.12			
SI-43	0.68	0.39	無	29						
SI-44	1.16	0.83	無	69						
SI-46	0.6	0.31	無	23						
SI-47	0.77	0.4	無	47				434		
SI-48	0.1	0.95	無	533	1.2	1.15	0.22	435		
SI-49	1.12	1.06	無	184						
SI-50	10.1	0.81	無	74						
SI-51	0.62	0.51	無	31				436		
SI-52	0.88	0.81	無	53						
SI-53	0.85	0.8	無	95						
SI-54	1.09	0.73	無	110	1.14	1.09	0.08			
SI-55	0.77	0.69	無	62						
SI-56	1.01	0.43	無	63						
SI-58	0.75	0.66	無	72				437		
SI-59	1.77	1.66	無	1,659	1.56	1.46	0.25	チャート礫1点	有	
SI-60	2.17	1.4	無	501	1.47	1.03	0.2	469の他に土器片2点・チャート礫1点	有	
SI-61	1.13	1.05	無	181				438		
SI-62	0.93	0.74	無	258	1	0.98	0.2	439		
SI-63	1.12	0.89	無	94				440		
SI-64	1.23	1.04	無	129	0.82	0.76	0.09			
SI-65	0.96	0.58	無	50						
SI-66	0.77	0.56	無	38	0.63	0.56	0.08			
SI-67	0.9	0.67	無	243	0.86	0.72	0.27		有	
SI-68	0.83	0.44	無	61						
SI-69	1.57	1.11	無	218	1.51	0.91	0.1			
SI-70	1.32	0.74	無	52						
SI-71	0.88	0.64	無	62				441		
SI-72	1.58	0.82	無	67						
SI-73	1.49	1.21	無	363	1.72	1.65	0.19			
SI-74	0.81	0.61	無	78						

表10 集石遺構計測表②

集石番号	礫の分布範囲 (m)		配石	礫の数 (個)	掘り込みの規模 (m)			出土遺物 (番号は図面番号)	炭化物	備考
	長軸	短軸			長軸	短軸	深さ			
SI-75	1.25	0.8	無	111						
SI-76	0.99	0.8	無	43						
SI-77	0.84	0.75	無	29						
SI-78	1.24	0.74	無							
SI-79	1.62	1.18	無	914	1.53	0.95	0.28			
SI-80	1.63	0.85	無	75						
SI-81	1.32	0.63	無	44				442・443		
SI-82	2.02	1.53	無	1,051	1.11	0.96	0.23		有	
SI-83	0.83	0.63	無	71				444・470		
SI-84	1.29	1.06	無	636	1.12	1.04	0.24			
SI-85	1.41	0.93	無	69				445~447		
SI-86	0.94	0.49	無	58	1.18	0.99	0.1			
SI-87	1.46	0.55	無	63					有	
SI-88	0.93	0.78	無	139	1.03	0.86	0.16			
SI-90	1.71	1.32	有	608	0.92	0.82	0.29		有	
SI-92	1.84	1.46	有	1,358	1.54	1.34	0.65	土器片2点	有	
SI-93	1.93	1.74	無	301	1.37	1.04	0.09		C14年代8860±70BP	
SI-94	2.45	1.7	無	127						
SI-95	1.33	1.14	無	131	0.85	0.57	0.12	448		
SI-96	2.87	2.2	無					449・450の他に土器片3点		
SI-97	2.35	1.32	無	1,046	2.14	1.5	0.35		有	
SI-98	1.15	0.76	無	74						
SI-99	10.2	0.87	無	121	0.65	0.5	0.3			
SI-100	3.25	1.73	無	209				471	有	
SI-101	1.17	0.41	無	18						
SI-102	1.06	0.74	無	195	0.96	0.88	0.23		有	
SI-103	0.76	0.75	有	82						
SI-104	2.67	2.46	有	5,327	2.69	2.51	1.22	451	有	
SI-105	0.99	0.6	無	64					有	
SI-106	1.12	0.88	有	587	不明	不明	不明	452	風倒木により攪乱うける	
SI-107	1.28	1	有	330	1.11	0.94	0.16			
SI-108	1	0.69	無	229	不明	不明	不明		風倒木により攪乱うける	
SI-109	1.08	0.62								
SI-110	1.83	1.59	無	225	2.01	1.87	0.15			
SI-111	0.78	0.5	無	68				453		
SI-112	2.77	2.25	有	5,283	2.76	2.3	0.97	チャート礫1点	有	
SI-113	10.6	0.96	無	339	1.32	1.3	0.19		有	
SI-114	1.36	1.22	有	854	1.4	1.17	0.22		有	
SI-115	1.84	1.31	無	1,012	1.53	1.35	0.32		C14年代7880±80BP	
SI-116	1.07	0.94	有	1,125	1.38	1.27	0.56			
SI-117	1.31	1.02	無	503	1.19	1.15	0.15		有	
SI-118	1.31	1.3	有	1,207	1.52	1.44	0.58	472	有	
SI-119	1.11	1.02	無	488	1.16	1.1	0.22		有	
SI-120	0.89	0.67	無	90				473・474		
SI-121	1.55	1.22	無	651	1.21	0.98	0.26			
SI-122	1.68	1.47	無	353	1.22	0.96	0.18			
SI-123	1.37	1.15	無	435	0.92	0.84	0.24	454の他にチャート礫1点		
SI-124	0.77	0.45	無	53						
SI-125	0.98	0.59	無	83	0.51	0.45	0.11			
SI-126	2.08	1.26		365	1.01	0.71	0.32			
SI-127	2.11	1.9	無	553	1.44	1.41	0.12			
SI-128	1.57	0.79	有	76	0.68	0.55	0.19		有	
SI-129	1.4	1.3	無	99						
SI-130	1.09	0.64	無	82						
SI-131	0.75	0.51	無	52						
SI-132	0.85	0.28	無	40	0.57	0.48	0.1			
SI-133	1.06	0.82	無	132						
SI-134	0.78	0.36	無	531						
SI-135	0.74	0.46	無	55						
SI-136	1.15	0.74	無	84	0.62	0.6	0.8			
SI-137			無	16						
SI-138	0.65	0.51	無	35						
SI-139	0.94	0.67	無	61						
SI-140	1.18	0.7	無	73						
SI-141	1.54	1.03	無	331	1.08	0.85	0.09			
SI-142	1.76	1.27	無	84						
SI-143	0.67	0.65	無	77						
SI-144	0.98	0.65	無	91						
SI-145	1.29	1.11	無	152	1.01	0.98	0.11	475		
SI-146	1.44	0.97	無	137						
SI-147	0.75	0.65	無	83						
SI-148	1.43	1.3	無	154						
SI-149	0.85	0.67	無	63						
SI-150				261	0.82	0.61	0.14	チャート礫1点		
SI-151	2.06	1.09		268	1.25	1.15	0.09		有	
SI-152	0.84	0.59	無	1,046					有	
SI-153	1.88	1.05	無	101						
SI-154	0.9	0.81	無	81						
SI-155	1.92	1.07	無	103						
SI-156	0.95	0.91	無	34						
SI-157	1.93	0.84	無	107	1.07	0.8	0.1			
SI-158	0.71	0.58	無	44						
SI-159	1.57	1.5	有	223				476		



表11 集石遺構計測表③

集石番号	礫の分布範囲 (m)		配石	礫の数 (個)	掘り込みの規模 (m)			出土遺物 (番号は図面番号)	炭化物	備 考
	長軸	短軸			長軸	短軸	深さ			
SI-160	1.12	0.72	無	183	1.16	0.99	0.16		有	
SI-161	1.43	1.34	無	117	1.29	1.23	0.14	455・456の他にチャート礫1点		
SI-162	1.8	0.97	無	233	1.1	0.88	0.16	チャート礫1点		残存部分による計測
SI-163	1.48	1	無	113	1.22	0.89	0.09			残存部分による計測
SI-164	1.64	1.43	無	201						
SI-165	1.61	0.98	無	55						
SI-166	1.19	0.85	無	80				チャート剥片1点		
SI-167	1.04	0.58	無	47						
SI-169	1.75	1.6	無	292						
SI-170	1.33	0.93	有	2,851	2.17	1.98	0.25		有	C14年代8120±60BP
SI-171	1.01	0.71	無	94	0.67	0.56	0.09		有	
SI-172	1.59	1.12	有	850	1.12	0.94	0.24	457		
SI-173	1.56	1.36	無	159						
SI-174	0.9	0.72	無		0.68	0.62	0.15			
SI-175	2.1	1.45	有		1	0.89	0.26	477		
SI-176	2.03	1.72	有	307	2.17	1.87	0.17		有	

表12 縄文時代早期遺構内出土石器計測表

番号	器 種	出土地点	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	石 材	備 考
458	打製石鏃	SI-1	2.7	1.5	0.35	0.9	チャート	鏃形族・脚部欠損
459	打製石鏃	SI-1	2.85	1.3	0.65	2	チャート	
460	2次加工ある剥片	SI-4	4.1	4.45	1.15	12.3	砂岩	
461	石皿	SI-4	20.2	17.35	4.6	1900	砂岩	
462	打製石鏃	SI-7	2.1	1.2	0.45	0.6	チャート	
463	蔽石	SI-7	9.7	9.05	7.3	894.5	砂岩	端部に打痕有り
464	石核	SI-10	1.7	2.4	1.1	3.4	黒曜石	
465	スクレイパー	SI-10	4	4	0.95	21.6	ホルンフェルス	
466	尖頭状石器	SI-10	4.8	2.4	1	11.5	頁岩	
467	剥片	SI-10	5.1	3.1	0.9	7.1	頁岩	
468	剥片	SI-11	1.4	2.5	0.6	1.8	黒曜石	
469	磨石	SI-60	5.3	8.1	4.2	308.7	尾鈴酸性岩	下半部欠損
470	スクレイパー	SI-83	6.5	2.8	1.9	26.7	砂岩	礫器とも考えられる・刃部のみ残存
471	磨石	SI-100	6.8	6.9	4.7	318	流紋岩	
472	打製石斧	SI-118	9.2	4.8	1.6	82.8	頁岩	
473	磨石	SI-120	6.1	7.6	3.9	265.9	尾鈴酸性岩	下半部欠損
474	磨石	SI-120	5.4	8.4	5.1	346.5	尾鈴酸性岩	下半部欠損
475	剥片	SI-145	2.5	4.25	0.95	9.8	チャート	
476	剥片	SI-159	4.1	2.4	1.2	6.1	頁岩	打点部欠損
477	石核	SI-175	1.4	2.5	0.8	2.1	黒曜石	
481	磨石	SC-44	11.4	9.6	6.5	961	砂岩	

表13 縄文早期土器観察表①

番号	器 種	残存部位	出土地点	口径	器高	底部径	外面の調整・文様	内面の調整・文様	外面の色調	内面の色調	備 考
420	深鉢	胴部	SI4				貝殻条痕	剥落しており不明	明褐色	灰白	
421	深鉢(岩本式)	口縁部	SI7				刻目目(口唇部)・ナデ	ナデ	にぶい褐	明褐色	
422	深鉢(石坂上式)	底部	SI7				貝殻条痕・網代痕(底部)	ナデ	にぶい黄橙	灰白	
423	深鉢(下剥峰式)	胴部	SI9				貝殻腹縁刺突	ナデ	にぶい褐	灰白	
424	深鉢	胴部	SI10				貝殻条痕	ナデ	にぶい褐	明褐色	
425	深鉢(下剥峰式)	胴部	SI10				貝殻腹縁刺突	ナデ	にぶい褐	にぶい褐	
426	深鉢(桑ノ丸式)	胴部	SI10				羽状の短沈線文	ナデ	にぶい赤褐	明褐色	
427	深鉢	胴部	SI10				貝殻条痕	ナデ	にぶい赤褐	にぶい赤褐	
428	深鉢	胴部	SI10				貝殻条痕	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	
429	深鉢	胴部	SI10				貝殻条痕	貝殻条痕	にぶい黄褐	明褐色	
430	深鉢(楕円押型文)	胴部	SI11				楕円押型文	ナデ	にぶい赤褐	褐	
431	深鉢(山形押型文)	底部付近	SI11				山形押型文	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄褐	
432	深鉢(山形押型文)	胴部	SI11				山形押型文	風化により不明	にぶい黄橙	明褐色	
433	深鉢(平楯式)	胴部	SI34				刻目突帯	ナデ	にぶい黄褐	にぶい黄褐	
434	深鉢	胴部	SI47				貝殻条痕	ナデ	にぶい黄褐	灰白	
435	深鉢(前平式)	胴部	SI48				縦位の刺突文(口唇部)・ 貝殻条痕	ナデ	にぶい褐	明褐色	
436	深鉢	胴部	SI51				貝殻条痕	ナデ	にぶい黄褐	明褐色	
437	深鉢(塞ノ弁式)	頸部	SI47				沈線文・ナデ	ナデ	にぶい黄褐	灰白	
438	深鉢	底部	SI61				ナデ	ナデ	にぶい褐	明褐色	
439	深鉢	口縁部	SI62				貝殻条痕	ナデ	にぶい褐	明褐色	
440	深鉢	胴部	SI63				貝殻条痕	ナデ	明褐色	にぶい黄橙	
441	深鉢(前平式)	胴部	SI71				貝殻条痕	ナデ	褐	明褐色	
442	深鉢	口縁部	SI81				ナデ	ナデ	灰褐	灰白	
443	深鉢	胴部	SI81				縦位の燃糸文	ナデ	灰褐	灰白	
444	深鉢	胴部	SI83				貝殻条痕	ナデ	にぶい黄褐	明褐色	
445	深鉢(桑ノ丸式)	胴部	SI85				貝殻条痕	ナデ	にぶい褐	灰黄褐	
446	深鉢	胴部	SI85				貝殻条痕	貝殻条痕の後ナデ	にぶい黄橙	灰白	
447	深鉢	底部	SI85				貝殻条痕	ナデ	灰白	灰褐	

表14 縄文早期土器観察表②

番号	器種	残存部位	出土地点	口径	器高	底部径	外面の調整・文様	内面の調整・文様	外面の色調	内面の色調	備考
448	深鉢(塞ノ神式)	胴部	SI95				縦位の燃糸文	ナデ	灰黄褐	灰黄褐	
449	深鉢(桑ノ丸式)	胴部	SI96				貝殻条痕	ナデ	にぶい褐	灰白	
450	深鉢(桑ノ丸式)	胴部	SI96				貝殻条痕	ナデ	にぶい褐	灰黄褐	
451	深鉢	胴部	SI104				貝殻条痕	ナデ	にぶい褐	褐灰	
452	深鉢	胴部	SI106				貝殻条痕	ナデ	灰白	明褐灰	
453	深鉢	胴部	SI111				貝殻条痕	ナデ	にぶい黄橙	明褐灰	
454	深鉢	胴部	SI123				貝殻条痕	ナデ	にぶい褐	明褐灰	
455	深鉢(桑ノ丸式)	胴部	SI161				羽状の短沈線文	ナデ	にぶい褐	明褐灰	
456	深鉢(辻タイプ)	胴部	SI161				貝殻腹縁刺突・羽状の短沈線	ナデ	褐	明褐灰	
457	深鉢(前平式)	胴部	SI172				貝殻条痕	ナデ	にぶい黄橙	灰白	
478	深鉢(下剥峰式)	ほぼ完形	SC43	21.1	30.8	13.4	クシ状工具による刺突	ナデ	にぶい黄褐	灰黄褐	C14年代8960±70BP
479	深鉢(塞ノ神式)	口縁部	SC44				刻み目(口唇部)・ナデ(口縁部)	ナデ	にぶい橙	にぶい褐	
480	深鉢(塞ノ神式)	口縁部～胴部	SC44	22.6			刻み目(口唇部)・ナデ(口縁部)・縦位の燃糸文・沈線文	ナデ	にぶい褐	にぶい褐	波状口縁
482	深鉢(塞ノ神式)	口縁部～胴部	SC44	38.3			刻み目(口唇部)・沈線文(口縁部)・縦位の燃糸文・沈線文	ナデ	灰黄褐	にぶい褐	波状口縁・穿孔有り
483	深鉢(岩本式)	口縁部	V				刻み目(口唇部)・斜位の連続刺突文(口縁部)・貝殻条痕	ナデ	にぶい赤褐	にぶい褐	
484	深鉢(岩本式)	口縁部	III				刻み目(口唇部)・貝殻腹縁刺突文(口縁部)・貝殻条痕	貝殻条痕	にぶい褐	褐	
485	深鉢(岩本式)	口縁部	V				刻み目(口唇部)・貝殻腹縁押し引き文(口縁部)・貝殻条痕	貝殻条痕	にぶい褐	にぶい褐	
486	深鉢(岩本式)	口縁部	V				刻み目(口縁部)・連点文(口縁部)・貝殻条痕	貝殻条痕	にぶい褐	にぶい褐	
487	深鉢(岩本式)	口縁部～胴部	III				刻み目(口唇部)・貝殻腹縁押し引き文(口縁部)・貝殻条痕の後ナデ	貝殻条痕の後ナデ	にぶい黄褐	灰赤	
488	深鉢(岩本式)	口縁部	V				刻み目(口唇部)・貝殻腹縁押し引き文(口縁部)・貝殻条痕	貝殻条痕	にぶい褐	にぶい褐	
489	深鉢(前平式)	口縁部	V				縦位の刺突文(口縁部)・貝殻条痕	ナデ	にぶい橙	にぶい黄褐	
490	深鉢(前平式)	口縁部	VI				縦位の刺突文・貝殻条痕	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄褐	穿孔有り
491	深鉢(前平式)	口縁部	V				縦位の刺突文(口縁部)・貝殻条痕	ナデ	にぶい褐	明赤褐	
492	深鉢(前平式)	口縁部	III				縦位の刺突文(口縁部)・貝殻条痕	貝殻条痕	にぶい褐	にぶい褐	
493	深鉢(前平式)	口縁部	V				縦位の刺突文(口唇部)・口縁部)・貝殻条痕	ナデ	にぶい赤褐	にぶい褐	
494	深鉢(前平式)	口縁部	III				縦位の刺突文(口縁部)・貝殻条痕	貝殻条痕	にぶい褐	褐	
495	深鉢(前平系?)	胴部	V				貝殻条痕	ナデ	にぶい褐	褐	
496	深鉢(前平系?)	胴部	III				貝殻条痕	貝殻条痕	にぶい褐	にぶい褐	
497	深鉢(前平系?)	底部	V				貝殻条痕	ナデ	にぶい赤褐	褐	
498	深鉢(倉園B式)	底部	V				貝殻条痕	ナデ	にぶい橙	灰黄褐	
499	深鉢(下剥峰式)	口縁部	V				貝殻腹縁刺突	ナデ	にぶい褐	にぶい褐	
500	深鉢(下剥峰式)	口縁部	III				クシ状工具による刺突	ナデ	にぶい褐	にぶい黄褐	
501	深鉢(下剥峰式)	口縁部	V				クシ状工具による刺突	ナデ	にぶい赤褐	褐	
502	深鉢(下剥峰式)	口縁部	V				クシ状工具による刺突	ナデ	にぶい黄褐	にぶい黄褐	
503	深鉢(下剥峰式)	口縁部	V				貝殻腹縁刺突	ナデ	にぶい褐	灰黄褐	
504	深鉢(下剥峰式)	口縁部	V				貝殻腹縁押し引き	ナデ	にぶい褐	にぶい褐	
505	深鉢(下剥峰式)	口縁部	VI				クシ状工具による刺突	ナデ	灰黄褐	灰黄褐	
506	円筒(石坂上式)	口縁部	V				貝殻条痕・刺突文	ナデ	にぶい褐	にぶい褐	波状口縁
507	深鉢(下剥峰式)	口縁部	VI				縦位の刺突文・クシ状工具による刺突	ナデ	暗灰黄	灰黄褐	瘤状突起有り
508	深鉢(下剥峰式)	口縁部	III				クシ状工具による刺突	ナデ	明赤褐	にぶい褐	
509	深鉢(下剥峰式)	口縁部	VI				クシ状工具による刺突	ナデ	にぶい黄褐	にぶい黄褐	
510	深鉢(下剥峰式)	口縁部	V				貝殻腹縁刺突	ナデ	にぶい橙	にぶい橙	
511	深鉢(下剥峰式)	口縁部	V				貝殻腹縁刺突	ナデ	にぶい黄褐	にぶい黄褐	
512	深鉢(下剥峰式)	胴部	III				貝殻腹縁刺突	ナデ	にぶい橙	にぶい褐	
513	深鉢(下剥峰式)	胴部	VI				クシ状工具による刺突	ナデ	にぶい黄褐	褐	
514	深鉢(下剥峰式)	胴部	VI				クシ状工具による刺突	ナデ	褐	にぶい褐	
515	深鉢(下剥峰式)	胴部	V				貝殻腹縁押し引き	ナデ	にぶい黄褐	にぶい黄褐	
516	深鉢(下剥峰式)	胴部	V				クシ状工具による刺突	ナデ	にぶい褐	褐	
517	深鉢(下剥峰式)	胴部	VI				クシ状工具による刺突	ナデ	にぶい褐	にぶい褐	
518	深鉢(桑ノ丸式)	胴部	III				貝殻条痕	ナデ	にぶい褐	灰黄褐	
519	深鉢(桑ノ丸式)	口縁部	III				貝殻条痕	ナデ	にぶい褐	にぶい黄褐	
520	深鉢(桑ノ丸式)	胴部	V				貝殻条痕	ナデ	にぶい褐	にぶい赤褐	
521	深鉢(妙見式)	胴部	V				地文に縄文・縄文(突帯)	ナデ	褐	にぶい褐	
522	深鉢(平柵式)	口縁部	V				刻み目(口唇部)・連点文・沈線文	ナデ	褐	にぶい黄褐	
523	深鉢(平柵式)	胴部	VI				縦位の貼付突帯・沈線文・連点文	ナデ	にぶい褐	にぶい黄褐	
524	深鉢(平柵式)	口縁部	III				突帯・沈線文・連点文	ナデ	にぶい黄褐	にぶい黄褐	
525	深鉢(平柵式)	胴部	III				突帯・沈線文・連点文	ナデ	にぶい褐	にぶい褐	
526	深鉢(塞ノ神式)	口縁部	VI				羽状の刻み目(口唇部)・沈線文	ナデ	にぶい黄褐	にぶい褐	
527	深鉢(塞ノ神式)	口縁部	V				羽状の刻み目(口唇部)・沈線文	ナデ	にぶい褐	にぶい褐	
528	深鉢(塞ノ神式)	口縁部～胴部	III				羽状の刻み目(口唇部)・沈線文・連点文	ナデ	にぶい橙	にぶい黄橙	
529	深鉢(塞ノ神式)	口縁部	V				羽状の刻み目(口唇部)・沈線文	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	
530	深鉢(塞ノ神式)	口縁部	V				羽状の刻み目(口唇部)・沈線文	ナデ	にぶい褐	にぶい黄褐	
531	深鉢(塞ノ神式)	口縁部	III				羽状の刻み目(口唇部)・沈線文	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄褐	
532	深鉢(塞ノ神式)	頸部	V				沈線文	ナデ	褐	にぶい黄褐	
533	深鉢(塞ノ神式)	頸部	III				沈線文・縦位の燃糸文	ナデ	にぶい褐	にぶい褐	
534	深鉢(塞ノ神式)	頸部	V				沈線文・縦位の燃糸文	ナデ	灰黄褐	にぶい褐	
535	深鉢(塞ノ神式)	胴部	III				沈線文・縦位の燃糸文	ナデ	にぶい赤褐	にぶい褐	

表15 縄文早期土器観察表③

番号	器種	残存部位	出土地点	口径	器高	底部径	外面の調整・文様	内面の調整・文様	外面の色調	内面の色調	備考
536	深鉢(塞ノ神式)	胴部	V				縦位の燃糸文	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	
537	深鉢(塞ノ神式)	胴部	III				縦位の燃糸文	ナデ	にぶい褐	にぶい褐	
538	深鉢(塞ノ神式)	胴部	V				沈線文・縦位の燃糸文	ナデ	にぶい褐	にぶい褐	
539	深鉢(塞ノ神式)	底部	V				縦位の燃糸文	ナデ	にぶい赤褐	にぶい赤褐	
540	深鉢(塞ノ神式)	口縁部	V				貝殻縁刺突	ナデ	にぶい黄褐	にぶい黄褐	
541	深鉢(塞ノ神式)	口縁部	III				刻み目(口唇部)・ 貝殻縁刺突文	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	
542	深鉢(塞ノ神式)	胴部					貝殻縁刺突	ナデ	にぶい黄褐	にぶい黄褐	
543	深鉢(塞ノ神式)	口縁部～胴部	III	14.8			貝殻条痕の後ナデ・沈線文	ナデ	にぶい褐	灰黄褐	
544	深鉢(楕円押型文)	胴部	V				楕円押型文	ナデ	にぶい赤褐	にぶい赤褐	
545	深鉢(楕円押型文)	胴部	III				楕円押型文	ナデ	にぶい赤褐	にぶい褐	
546	深鉢	胴部	V				無節細文	ナデ	にぶい褐	にぶい赤褐	
547	深鉢(楕円押型文)	胴部	V				楕円押型文	斜方向のナデ	にぶい赤褐	にぶい赤褐	
548	深鉢(楕円押型文)	口縁部	V				楕円押型文	楕円押型文(口縁部)・ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	
549	深鉢(山形押型文)	胴部	V				山形押型文	貝殻条痕	にぶい褐	にぶい黄褐	
550	深鉢(手向山式)	口縁部	III				山形押型文	山形押型文(口縁部)・ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	
551	深鉢(手浜式)	胴部	III				波状の貝殻縁刺突文	貝殻条痕	にぶい褐	にぶい褐	
552	深鉢(条痕文土器)	口縁部	III				刻み目(口唇部)・貝殻条痕	貝殻条痕	黄灰	黒褐	
553	深鉢(条痕文土器)	口縁部	III				刻み目(口唇部)・貝殻条痕	貝殻条痕	にぶい黄褐	にぶい黄褐	
554	深鉢(条痕文土器)	口縁部	III				刻み目(口唇部)・貝殻条痕	貝殻条痕	にぶい黄橙	灰黄褐	
555	深鉢(条痕文土器)	口縁部	III				刻み目(口唇部)・貝殻条痕	ナデ	灰褐	にぶい褐	
556	深鉢(条痕文土器)	口縁部	III				刻み目(口唇部)・貝殻条痕	貝殻条痕	にぶい褐	にぶい褐	
557	深鉢(条痕文土器)	口縁部	III				刻み目(口唇部)・貝殻条痕	貝殻条痕	にぶい黄褐	にぶい黄褐	
558	深鉢(条痕文土器)	口縁部	III				刻み目(口唇部)・貝殻条痕	貝殻条痕	黄灰	黄灰	
559	深鉢(条痕文土器)	口縁部	III				刻み目(口唇部)・貝殻条痕	ナデ	にぶい黄褐	暗灰黄	
560	深鉢(条痕文土器)	口縁部	III				刻み目(口唇部)・貝殻条痕	ナデ	にぶい褐	にぶい黄褐	
561	深鉢(条痕文土器)	口縁部	III				刻み目(口唇部)・貝殻条痕	ナデ	灰褐	にぶい黄褐	
562	深鉢(条痕文土器)	口縁部	III				刻み目(口唇部)・貝殻条痕	ナデ	灰黄褐	にぶい黄橙	
563	深鉢(条痕文土器)	口縁部	III				刻み目(口唇部)・貝殻条痕	貝殻条痕	灰黄褐	暗灰黄	
564	深鉢(条痕文土器)	口縁部	V				刻み目(口唇部)・貝殻条痕	ナデ	にぶい黄褐	灰黄褐	
565	深鉢(条痕文土器)	口縁部	III				刻み目(口唇部)・貝殻条痕	貝殻条痕	にぶい褐	灰黄褐	
566	深鉢(条痕文土器)	口縁部	III				刻み目(口唇部)・貝殻条痕	ナデ	にぶい褐	にぶい褐	
567	深鉢(条痕文土器)	口縁部	III				刻み目(口唇部)・貝殻条痕	ナデ	にぶい褐	灰黄褐	
568	深鉢(条痕文土器)	口縁部	III				刻み目(口唇部)・貝殻条痕	貝殻条痕	にぶい黄褐	にぶい褐	
569	深鉢(条痕文土器)	口縁部	V				刻み目(口唇部)・貝殻条痕	貝殻条痕	にぶい黄褐	にぶい黄褐	
570	深鉢(条痕文土器)	口縁部	III				刻み目(口唇部)・貝殻条痕	貝殻条痕	にぶい褐	にぶい黄褐	
571	深鉢(条痕文土器)	口縁部	V				刻み目(口唇部)・貝殻条痕	貝殻条痕	にぶい黄褐	灰黄褐	
572	深鉢(条痕文土器)	口縁部	III				刻み目(口唇部)・貝殻 条痕の後ナデ・沈線文	貝殻条痕	にぶい黄褐	にぶい黄褐	
573	深鉢(条痕文土器)	口縁部	III				刻み目(口唇部)・貝殻条痕	ナデ	にぶい黄褐	にぶい黄褐	
574	深鉢(条痕文土器)	口縁部	III				刻み目(口唇部)・貝殻条痕	貝殻条痕の後ナデ・ 貝殻条痕(口縁部)	灰褐	灰褐	
575	深鉢(条痕文土器)	口縁部	III				刻み目(口唇部)・波状の沈線文	貝殻条痕	にぶい黄褐	にぶい黄褐	
576	深鉢(条痕文土器)	口縁部	III				刻み目(口唇部)・貝殻条痕	貝殻条痕	にぶい黄橙	暗灰黄	
577	深鉢(条痕文土器)	口縁部	III				刻み目(口唇部)・貝殻条痕	貝殻条痕	灰黄褐	灰褐	
578	深鉢(条痕文土器)	口縁部	III				刻み目(口唇部)・貝殻条痕	ナデ	暗灰黄	灰黄褐	穿孔有り
579	深鉢(条痕文土器)	口縁部～胴部	III				刻み目(口唇部)・貝殻条痕	ナデ	灰黄褐	褐	
580	深鉢(条痕文土器)	胴部～底部	III				刻み目(口唇部)・貝殻条痕	貝殻条痕	にぶ黄	黄灰	スス付着
581	深鉢(条痕文土器)	胴部	III				貝殻条痕	貝殻条痕	灰黄褐	にぶい褐	スス付着
582	深鉢	口縁部	III				刻み目(口唇部)・×状の沈線文 (口縁部)・突帯・貝殻条痕	ナデ	灰褐	にぶい褐	
583	深鉢	口縁部	V				貝殻条痕	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄褐	
584	深鉢	口縁部	V				貝殻条痕	ナデ	灰黄褐	暗灰黄	
585	深鉢(前平系)	胴部	V				貝殻条痕	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄褐	
586	深鉢(前平系)	胴部	V				貝殻条痕	ナデ	にぶい褐	にぶい褐	
587	深鉢(桑ノ丸式)	口縁部	VI				羽状の短沈線文	ナデ	黄褐	にぶい黄褐	
588	深鉢(桑ノ丸式)	胴部	V				羽状の短沈線文	ナデ	にぶい黄褐	にぶい黄褐	
589	深鉢(桑ノ丸式)	胴部	VI				羽状の短沈線文	ナデ	にぶい褐	にぶい褐	
590	深鉢	胴部	III				刺突文	貝殻条痕	にぶい褐	灰褐	
591	深鉢	胴部	III				ナデ・刺突文	ナデ	にぶい赤褐	褐	赤化著しい
592	壺	口縁部	V				ナデ	ナデ	にぶい黄褐	灰黄褐	
593	壺(塞ノ神式)	口縁部	VI				沈線文	ナデ	にぶい橙	にぶい褐	
594	深鉢	底部	V				貝殻条痕の後ナデ	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄褐	底部の縁に刻み目有り
595	深鉢	底部	V		8.6		ナデ	ナデ	にぶい橙	にぶい黄橙	穿孔有り
596	深鉢	底部	V		7.6		ナデ	ナデ	にぶい褐	褐	
597	深鉢	底部	VI		6.4		ナデ・網代底(底部)	ナデ	にぶい黄橙	暗灰黄	
598	耳栓?	口縁部	V				刻み目(口唇部)ナデ	ナデ	にぶい黄褐	にぶい黄褐	
599	不明	不明	V				貝殻条痕・貝殻縁刺突文	貝殻条痕	にぶい黄橙	にぶい黄橙	

## 第6章 その他の遺構・遺物について

### 第1節 その他の遺構（溝状遺構・不明遺構）について

4層上面にて溝状遺構を5条検出した。いずれの溝も様々な時代の遺物が混入しており、時期を明確に示すことはできないが、埋土中におそらく文明軽石と思われる火山灰を含むものが有り（SE-3・4）、その時期にあたる可能性が高い。ここでは各溝状遺構の概要と不明遺構について述べる。

#### ■SE-2（第79図・表16）

南～北方向に伸びる溝状遺構である。数ヶ所攪乱を受ける。長さは約6m、幅は1mで深さは0.2mを測るが、北に向かうにつれて浅くなる。

埋土中からは須恵器片・土師器片・弥生土器片・縄文土器片などが出土した。

#### ■SE-3（第79図・表16・17）

東～西方向に伸びる溝状遺構である。長さは約33m、幅は2.3m、深さは0.55mを測る。西側に向かうにつれて浅くなる。埋土中に文明軽石と思われる火山灰を含む。

埋土中からは土師器片・弥生土器片・打製石鏃などが出土した。

#### ■SE-4（第79図・表16）

SE-3と並列する東～西方向に伸びる溝状遺構である。長さは約20m、幅は1.8m、深さは0.3mを測る。西側に向かうにつれて浅くなる。埋土中に文明軽石と思われる火山灰を含む。

埋土中からは土師器片・弥生土器片・縄文土器片などが出土した。

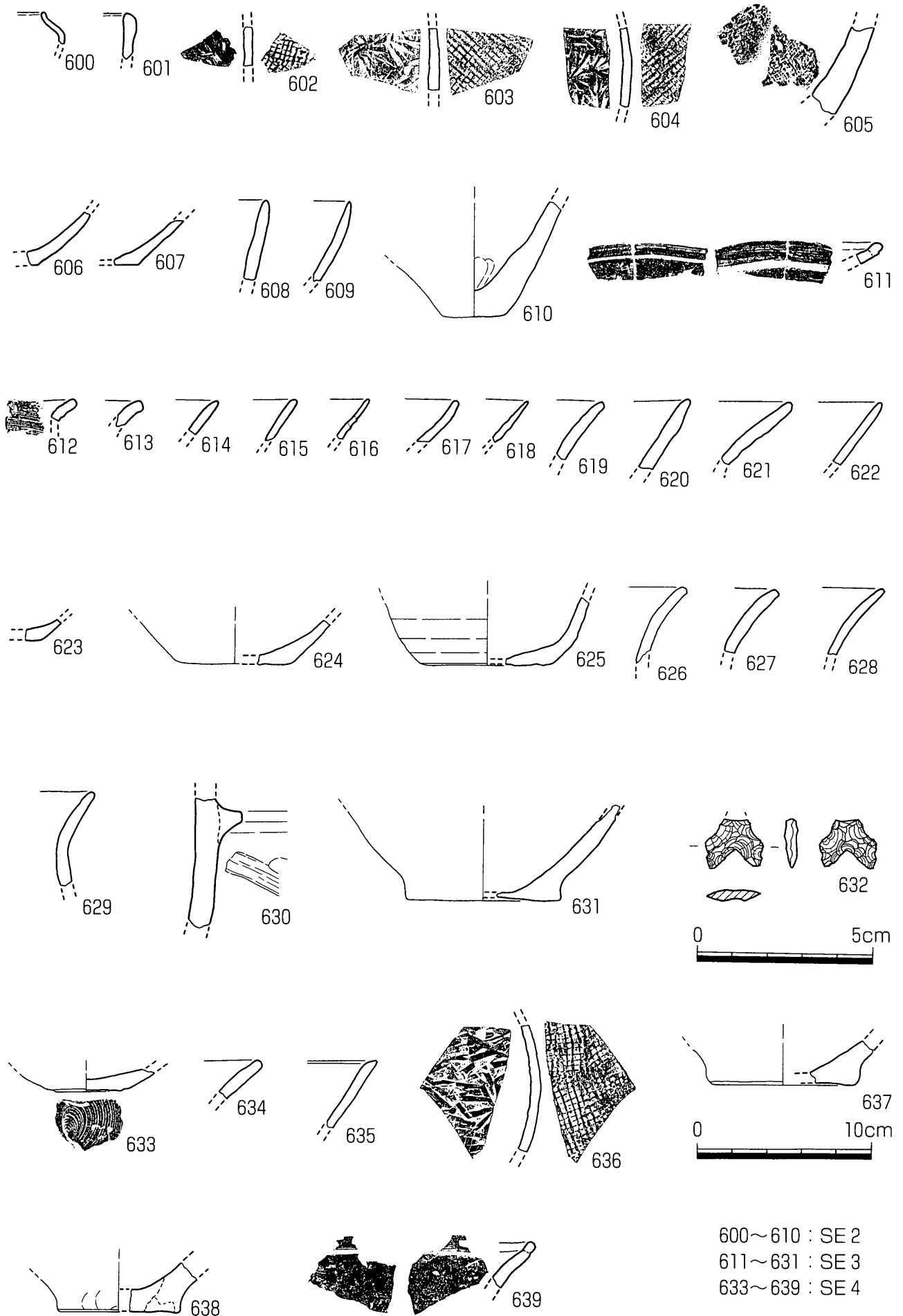
#### ■SX-1（第80図・表16）

畑の耕作による攪乱を受けた不整形なプランの上に須恵器片が焼礫と共に集中して出土していた。この様な状況からSX-1は須恵器の集中箇所と集石が攪乱をうけたものであると考えられる。

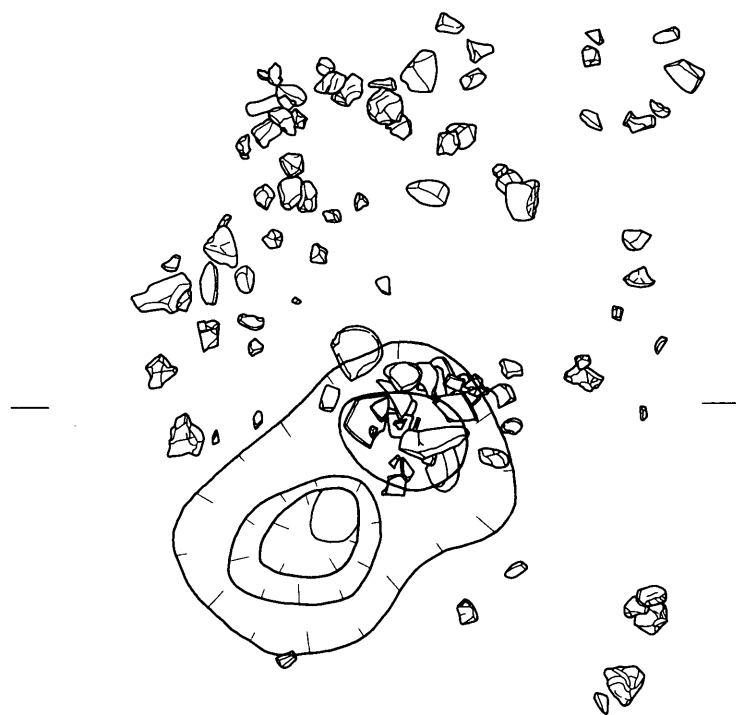
640は須恵器甕の頸部～胴部の破片である。頸部の屈曲は明瞭である。外面には格子状の叩き目を施し、内面は当て具痕をナデ調整により消している。

### 第2節 柱穴について

アカホヤ火山灰層が残存していた調査区の北西部には数多くの柱穴が検出された。しかし、建物跡のように規則的に配列するものなどは特に確認されなかった。当遺跡で検出された柱穴に関しては検出面・埋土状況から全てアカホヤ火山灰降灰以後のものと考えられる。また柱穴の埋土中からは土師器・弥生土器・縄文時代後期の土器などが出土した。ここでは、柱穴から出土した石器と縄文時代後期の土器の図面を提示しておく。（第81図・表16・17）



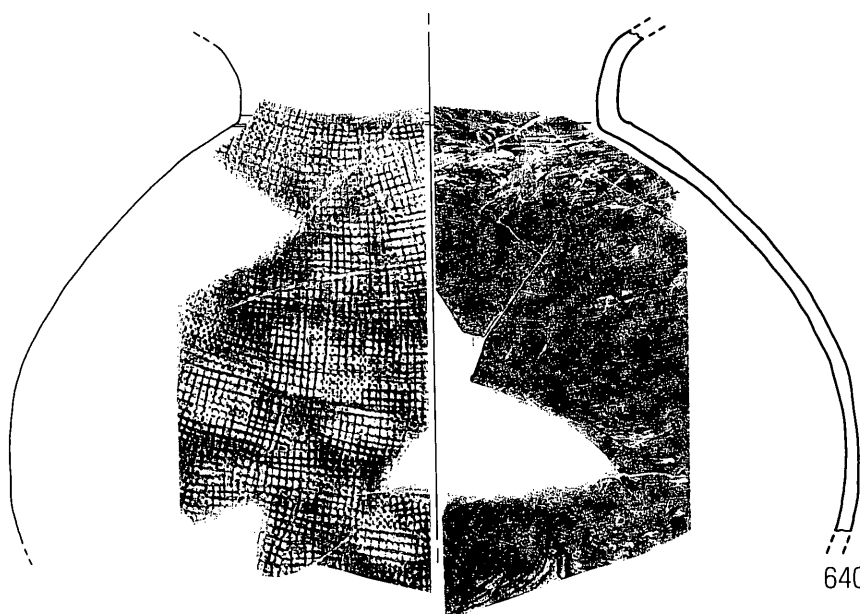
第79図 SE-2~4出土遺物実測図 (S=1/3, 2/3)



L = 50.70m



SX-1



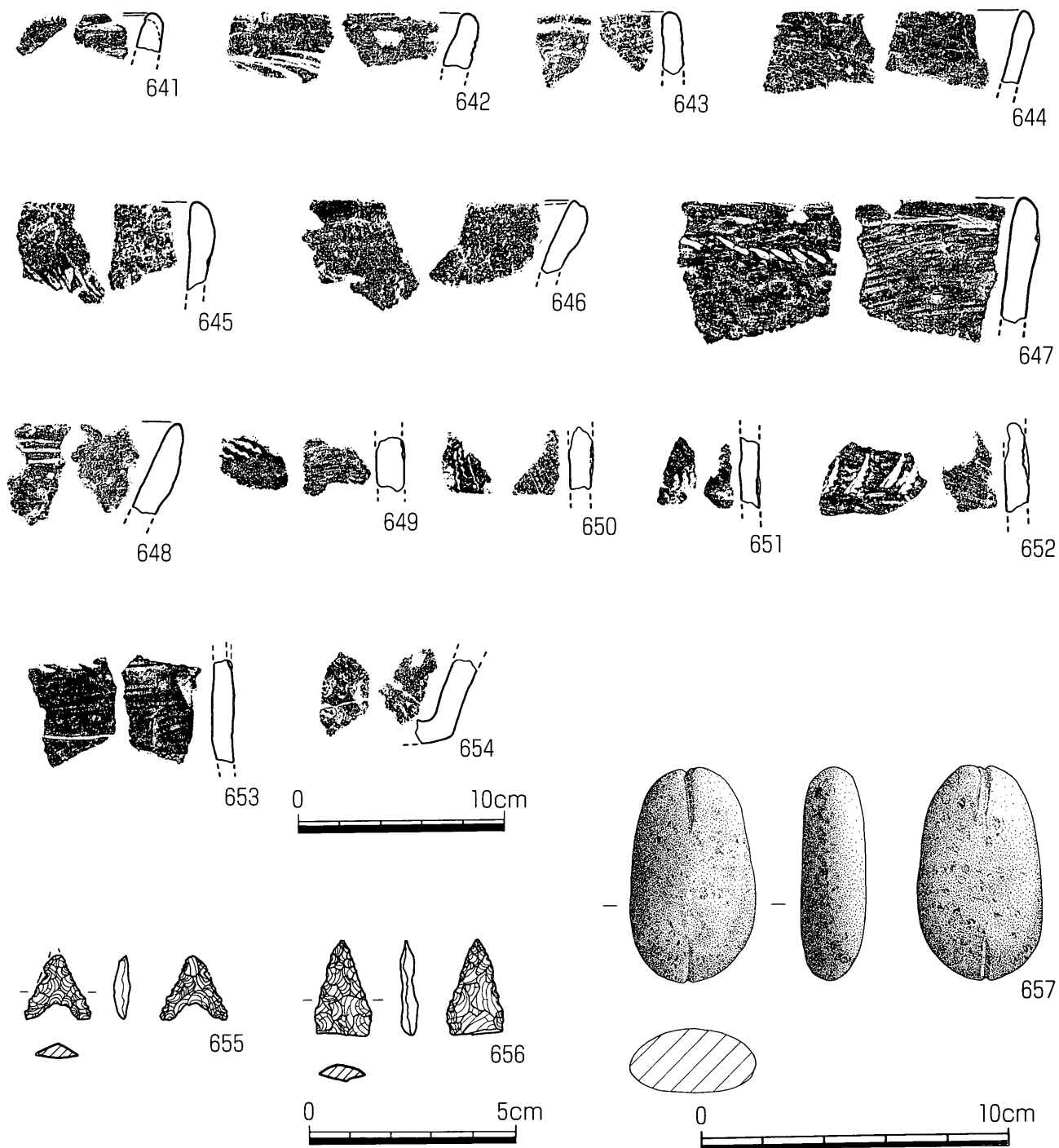
第80図 SX-1 及 SX-1 出土遺物実測図 (S= 1/20, 1/3)

表16 溝状遺構・SX-1・柱穴内出土土器観察表

番号	種類・器種	残存部位	出土地点	口径	器高	底径	外面の調整・文様	内面の調整・文様	外面の色調	内面の色調	備考
600	陶磁器壺	口縁部	SE 2				横ナデ後施釉・貫入	横ナデ後施釉・貫入	灰白	灰黄	
601	須恵器?	口縁部	SE 2				横ナデ	横ナデ	にぶい褐	にぶい褐	
602	須恵器甕	胴部	SE 2				格子目たたき	ナデ	灰	灰黄褐	
603	須恵器甕	胴部	SE 2				格子目たたき	放射状の当て具痕	黄灰	黄灰	
604	須恵器甕	胴部	SE 2				格子目たたき	放射状の当て具痕	黄灰	黄灰	
605	布痕土器	胴部	SE 2				横ナデ	布目圧痕	橙	明褐	
606	土師器杯	体部	SE 2				横ナデ	横ナデ	橙	にぶい橙	
607	土師器杯	底部	SE 2				ナデ	横ナデ・縦ナデ	にぶい橙	明黄褐	
608	弥生土器壺	口縁部	SE 2				ナデ	ナデ	にぶい橙	にぶい橙	
609	弥生土器小型丸底壺	口縁部	SE 2				ナデ	ナデ	にぶい橙	にぶい褐	外面にスス付着
610	弥生土器	底部	SE 2		3.5		ナデ	ナデ	にぶい褐	にぶい黄褐	
611	縄文土器浅鉢	口縁部	SE 3				ミガキ	ミガキ	灰黄褐	暗灰黄	
612	土師器甕	口縁部	SE 3				横ナデ	横ナデ	にぶい褐	橙	
613	土師器甕	口縁部	SE 3				横ナデ	横ナデ	にぶい橙	にぶい橙	
614	土師器杯	口縁部	SE 3				横ナデ	横ナデ	橙	橙	
615	土師器杯	口縁部	SE 3				横ナデ	横ナデ	にぶい橙	にぶい橙	
616	土師器杯	口縁部	SE 3				横ナデ	横ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄褐	
617	土師器杯	口縁部	SE 3				横ナデ	横ナデ	にぶい橙	にぶい橙	
618	土師器杯	口縁部	SE 3				ナデ	ナデ	にぶい橙	にぶい橙	
619	土師器甕	口縁部	SE 3				横ナデ	横ナデ	にぶい橙	にぶい橙	
620	土師器甕	口縁部	SE 3				横ナデ	横ナデ	にぶい褐	にぶい褐	内面に丹塗り有り
621	土師器甕	口縁部	SE 3				横ナデ	横ナデ	にぶい橙	にぶい橙	
622	土師器杯	口縁部	SE 3				横ナデ	横ナデ	橙	にぶい褐	
623	土師器杯	底部	SE 3				ナデ	ナデ	にぶい橙	にぶい褐	
624	土師器杯	底部	SE 3		6.8		横ナデ・ヘラ切り後ナデ(底部)	横ナデ	にぶい橙	にぶい橙	
625	土師器杯	底部	SE 3		7.8		横ナデ・ヘラ切り(底部)	横ナデ	にぶい橙	にぶい褐	
626	弥生土器甕	口縁部	SE 3				ナデ	風化により不明	にぶい橙	にぶい褐	
627	弥生土器甕	口縁部	SE 3				横ナデ	横ナデ	にぶい赤褐	にぶい褐	
628	弥生土器甕	口縁部	SE 3				横ナデ	横ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄褐	スス付着
629	弥生土器甕	口縁部	SE 3				横ナデ・ナデ	横ナデ	にぶい橙	にぶい橙	
630	弥生土器甕	胴部	SE 3				横ナデ・貼付突帯	ナデ	褐	褐	
631	弥生土器壺	底部	SE 3		8.7		ナデ	風化により不明	にぶい黄橙	にぶい黄橙	
633	土師器杯	底部	SE 4		5.1		横ナデ・糸切り	横ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	
634	弥生土器甕	口縁部	SE 4				横ナデ	横ナデ	にぶい橙	にぶい橙	
635	弥生土器甕	口縁部	SE 4				横ナデ	横ナデ	にぶい黄褐	にぶい橙	
636	須恵器甕	胴部	SE 4				格子目たたき	放射状の当て具痕	にぶい黄橙	にぶい黄橙	
637	弥生土器甕	底部	SE 4		8.4		横ナデ	ハゲの後ナデ	にぶい黄褐	灰黄褐	
638	弥生土器甕	底部	SE 4		6.8		横ナデ	ナデ	にぶい橙	褐灰	
639	縄文土器浅鉢	口縁部	SE 4				ミガキ	ミガキ	灰黄褐	にぶい黄褐	
640	須恵器甕	頸部～胴部	SX 1				横ナデ(頸部)・格子目 タタキ(胴部)	横ナデ(頸部)・同心門文の 当て具の後ナデ(胴部)	黄灰	黄灰	
641	縄文土器深鉢	口縁部					ナデ	ナデ	灰褐	灰黄褐	
642	縄文土器深鉢	口縁部					ナデ・貝殻刺突文	ナデ	灰黄褐	褐	
643	縄文土器深鉢	口縁部					ナデ	ナデ	にぶい黄褐	にぶい褐	
644	縄文土器深鉢	口縁部					貝殻条痕	ナデ	にぶい赤褐	にぶい赤褐	
645	縄文土器深鉢	口縁部					ナデ・貝殻刺突文	ナデ	にぶい赤褐	にぶい赤褐	
646	縄文土器深鉢	口縁部					ナデ	ナデ	にぶい赤褐	にぶい赤褐	
647	縄文土器深鉢	口縁部					ナデ・工具による刺突文	貝殻条痕	にぶい赤褐	にぶい赤褐	
648	縄文土器深鉢	口縁部					ナデ・三本の沈線	ナデ	灰黄褐	灰褐	
649	縄文土器	胴部					ナデ・貝殻刺突文	ナデ	にぶい赤褐	明赤褐	
650	縄文土器	胴部					ナデ・貝殻刺突文	ナデ	にぶい赤褐	にぶい赤褐	
651	縄文土器	胴部					ナデ・貝殻刺突文	ナデ	褐	にぶい赤褐	
652	縄文土器	胴部					ナデ・貝殻刺突文	ナデ	灰褐	にぶい赤褐	
653	縄文土器	胴部					ナデ・工具による刺突文	貝殻条痕	にぶい赤褐	にぶい褐	
654	縄文土器深鉢	底部					ナデ	ナデ	にぶい赤褐	褐	

表17 溝状遺構・柱穴内出土土器計測表

番号	器種	出土地点	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石材	備考
632	打製石鏃	SE-3	1.4	1.65	0.35	0.5	黒曜石	
655	打製石鏃	柱穴内	1.55	1.65	0.35	0.5	黒曜石	
656	打製石鏃	柱穴内	2.3	1.4	0.4	1	チャート	
657	石鏃	柱穴内	6.8	4.1	2.05	86.4	砂岩	



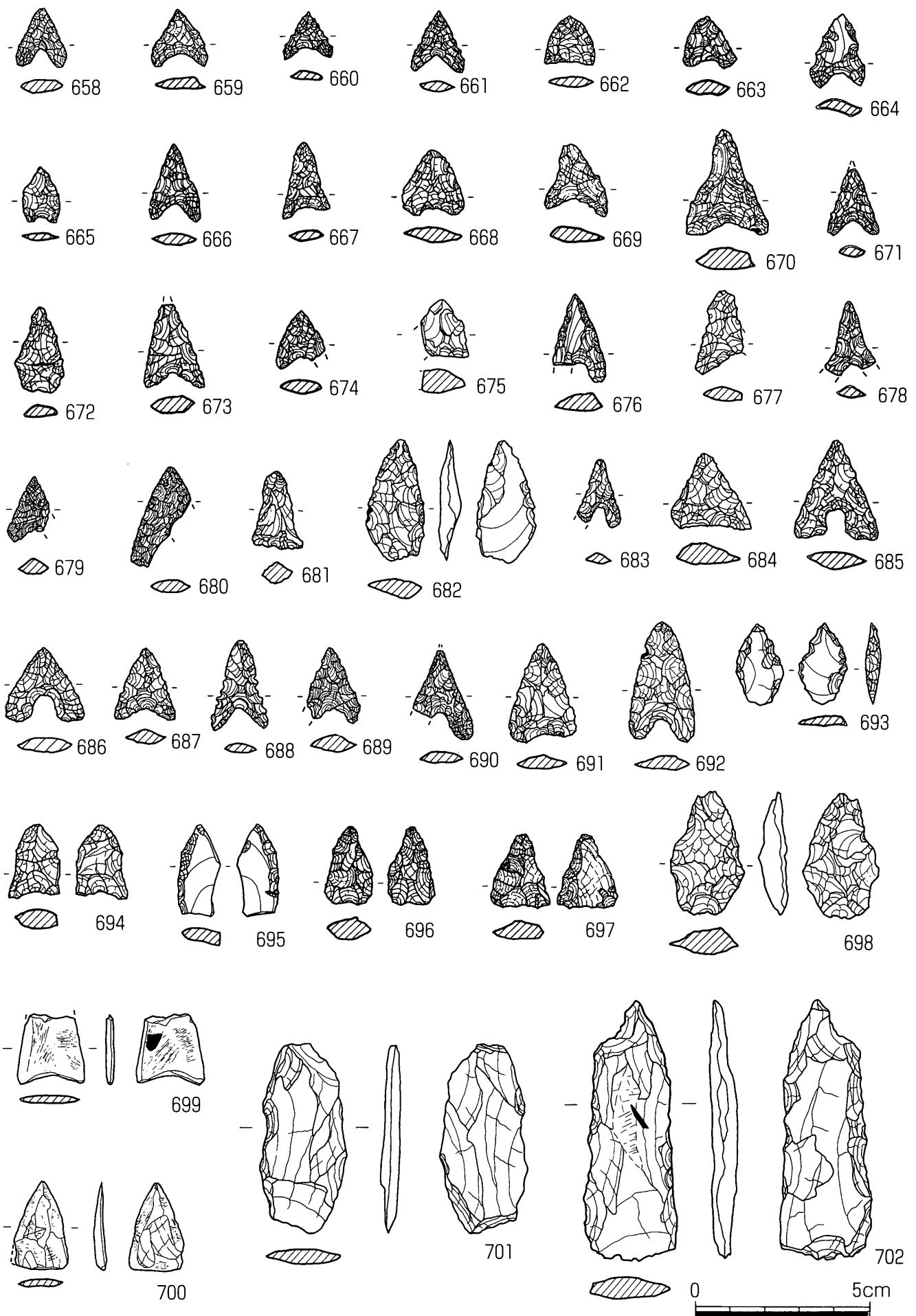
第81図 柱穴内出土遺物実測図 (S= 1/3, 2/3, 1/2)



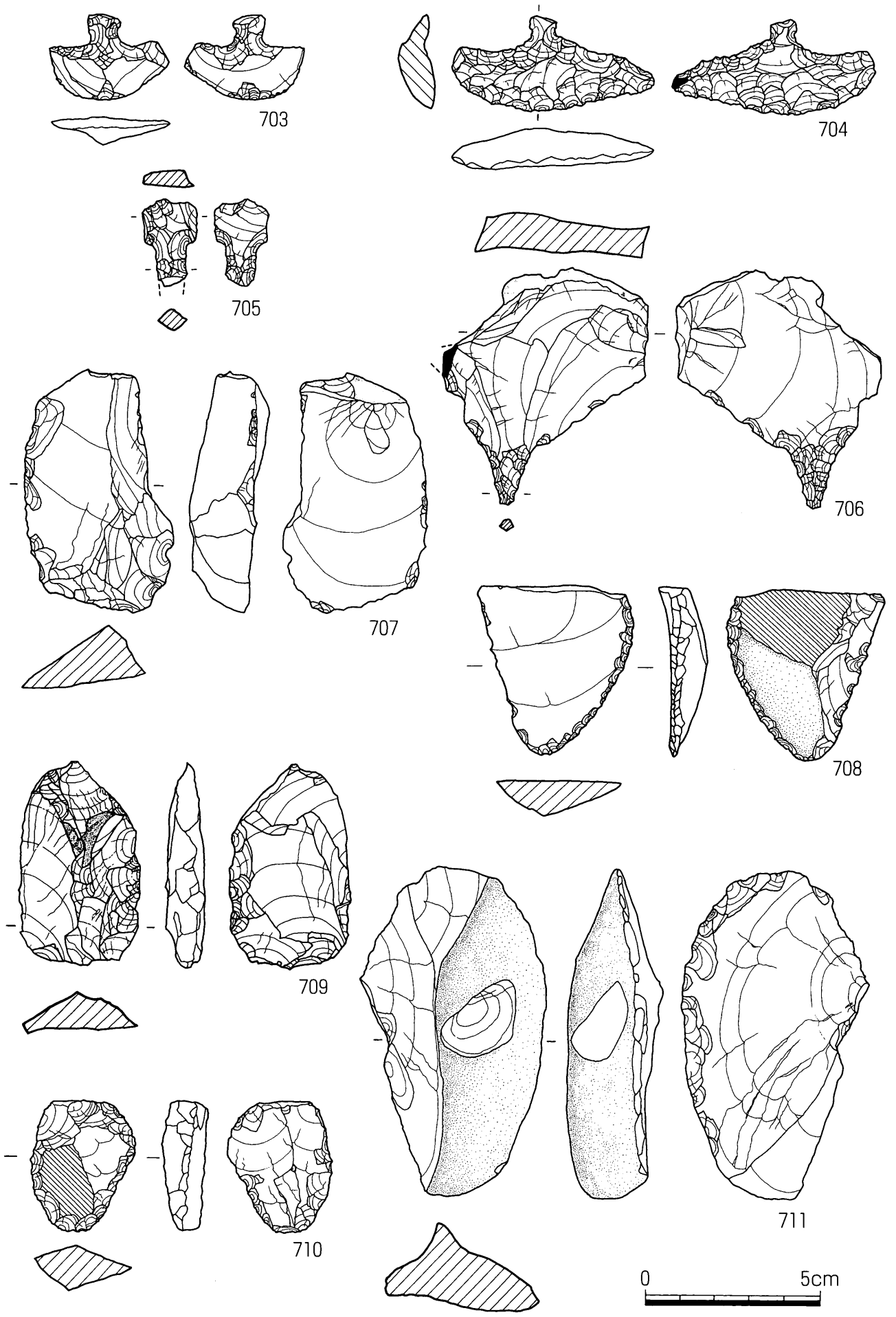
### 第3節 包含層出土の石器について

第3層～6層において石器が多量に出土したのでここでまとめて報告する。(第82～91図・表18～19)

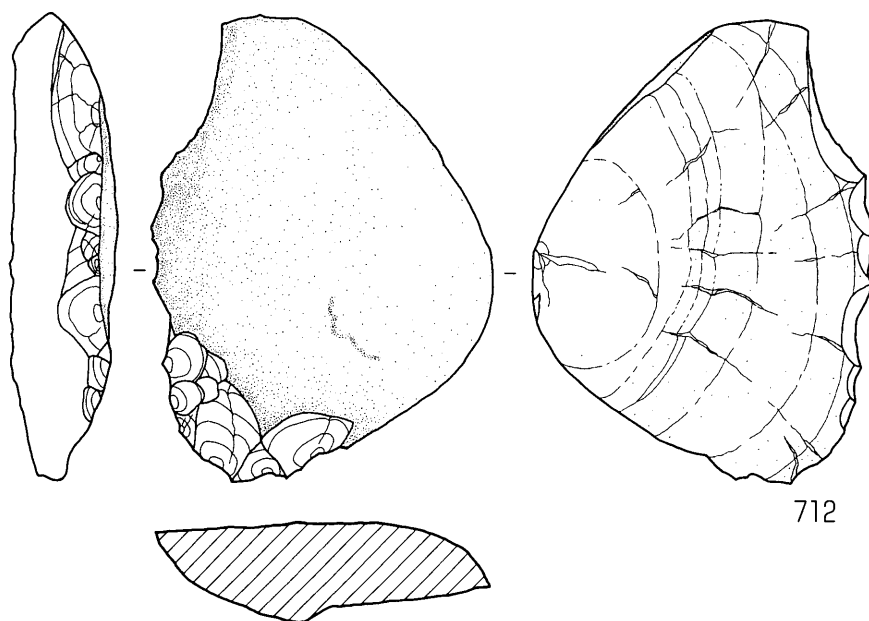
658～692は打製石鏃である。抉りの深いものや浅いもの、側縁が鋸歯状のもの、直線的なものなど様々な形態・規模のものが出土している。665・672は帖地型の範疇に入るものであろうか。682は未製品の可能性もある。片面に剥片の主要剥離面を大きく残す。685・686は鋏形鏃である。693～698は石鏃の未製品である。698は671のような石鏃の未製品であらうか。この他にも石鏃やその未製品は多数出土している。使用石材としては黒曜石・チャートが目立つ。699・700は磨製石鏃である。699は浅い抉りを持ち、700には抉りがない。701・702は磨製石鏃の未製品である。701の中央部には研磨の痕跡が見られる。699～702は弥生時代の遺物であると考えられ、いずれも粘板岩を使用している。703・704は石匙である。704は一端を尖らすものである。705・706は石錐である。706は幅広の不定形な縦長剥片の一端を調整し、錐部を作り出す。707～713はスクレイパーである。711・712は片面に自然面を多く残す剥片を素材とし、粗く刃部調整をおこなったものである。712の刃部は鋸歯状を呈する。714～718は剥片である。714・715は縦長剥片である。716と717は折れた剥片の接合資料である。717は716と接合する箇所にも二次加工が見られるので、もともと大きな剥片であったものが二つ以上に折れた後、リダクションを行ったものであろう。718は自然面を多く残す厚手の剥片で712のようなものの素材となるものではないかと考えられる。719～726は石核である。いずれも打面調整は行っていない。723・725・726は作業面を転回しながら剥片剥離を行っている。石核の使用石材としては砂岩・黒曜石が目立つ。砂岩製の石核は大きく、作業面も単面であり剥片剥離を行っていないという特徴に対し、黒曜石製のものは作業面を複数もち、小さいものが多いという特徴が見られる。727～736は磨製石斧である。727・728は完形品である。729～732は磨製石斧の基部の破片である。729は端部に打痕がみられ、石斧として使用し、欠損した後、敲石に転用されたものである。731・732は基部の先端が尖るものである。733～736は磨製石斧の刃部の破片である。737・738は打製石斧である。土掘り具(石鏃)として使用されたものであろう。738には部分的に研磨痕が見られる。739～749は敲石である。739～742・746・748は素材となる礫の一面もしくは両面の中央部に凹みを持つもの(凹み石)である。743～745・747・749は長い棒状の礫の端部に打痕が見られるものである。敲石の使用石材のほとんどは砂岩である。750～752は磨石である。図示しているものの使用石材は砂岩であるが、他には尾鈴山酸性岩を使用するものも多く見られる。753～758は石皿である。いずれも砂岩を使用する。759～761は軽石製の石製品である。759・760は不明瞭であるが、表面に研磨の痕跡が確認される。762は棒状石製品である。乳白色の石材を使用し、研磨をおこない両端部がにぶく尖った棒状に仕上げている。同様の資料は高千穂町の五ヶ村遺跡・神殿遺跡B地区で出土している。763は打ち欠き石錘である。赤化した砂岩礫を使用する。764は溝砥石である。砂岩礫を使用し、両面ともに数条の溝が確認される。



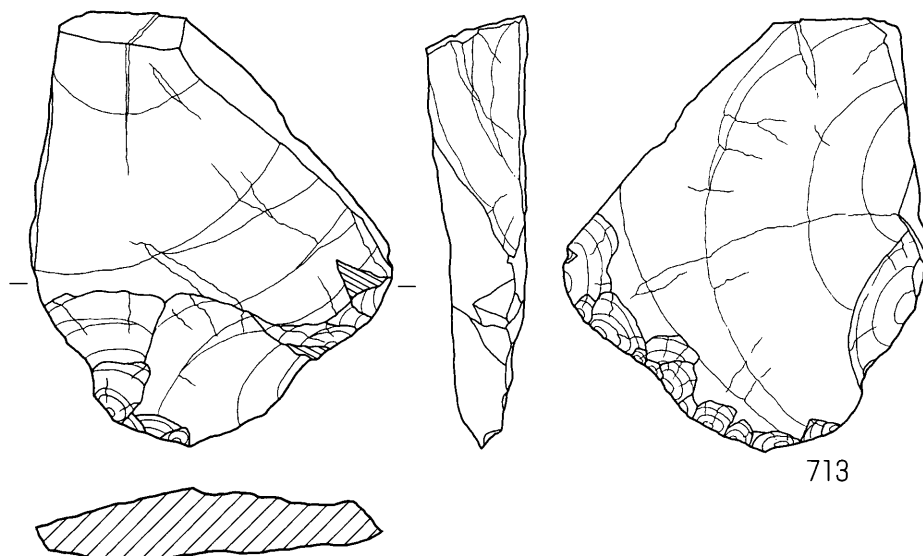
第82图 包含层出土石器实测图① (S=2/3)



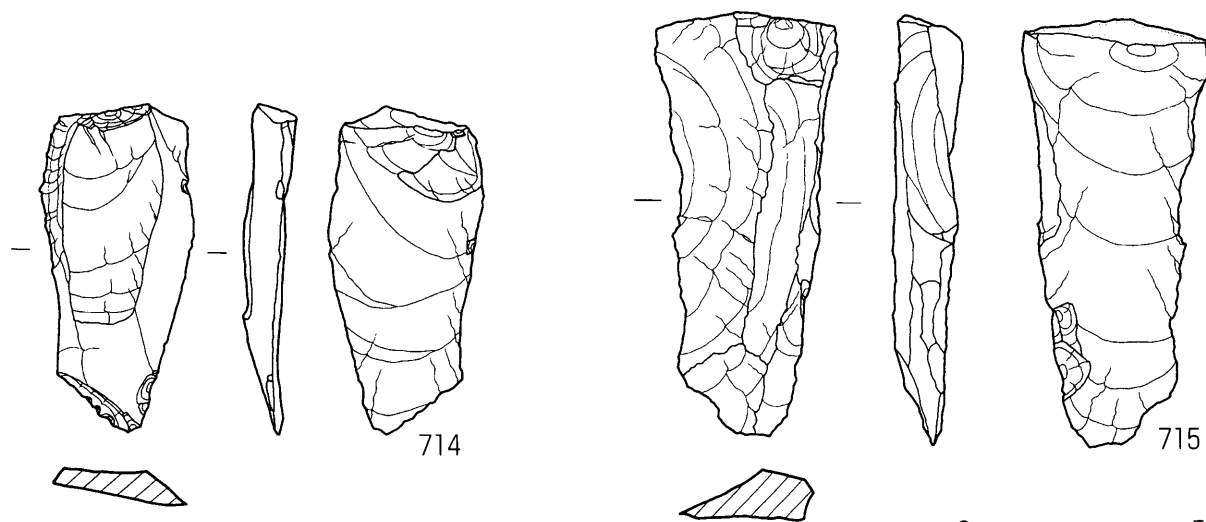
第83图 包含層出土石器実測図② (S=2/3)



712



713

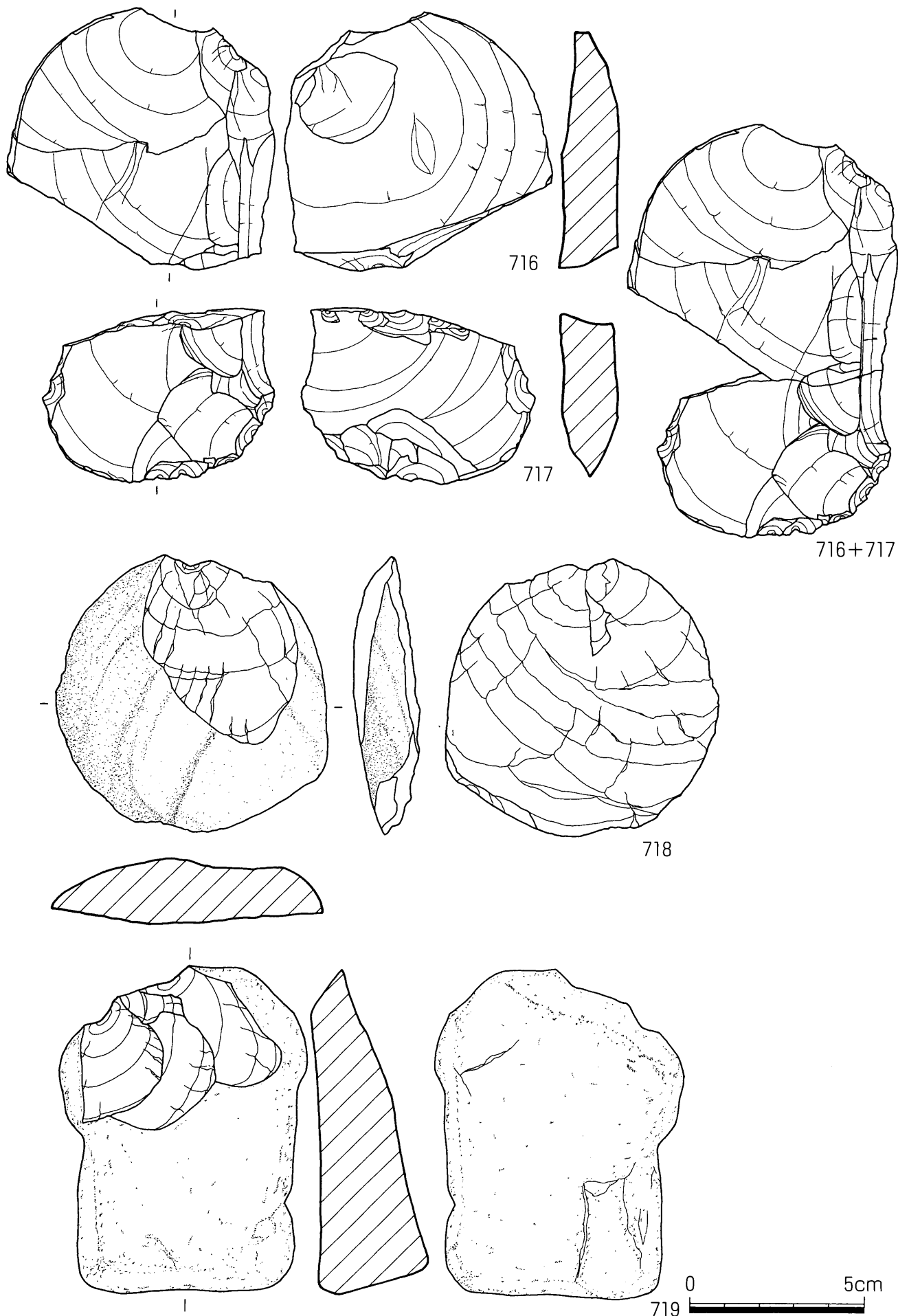


714

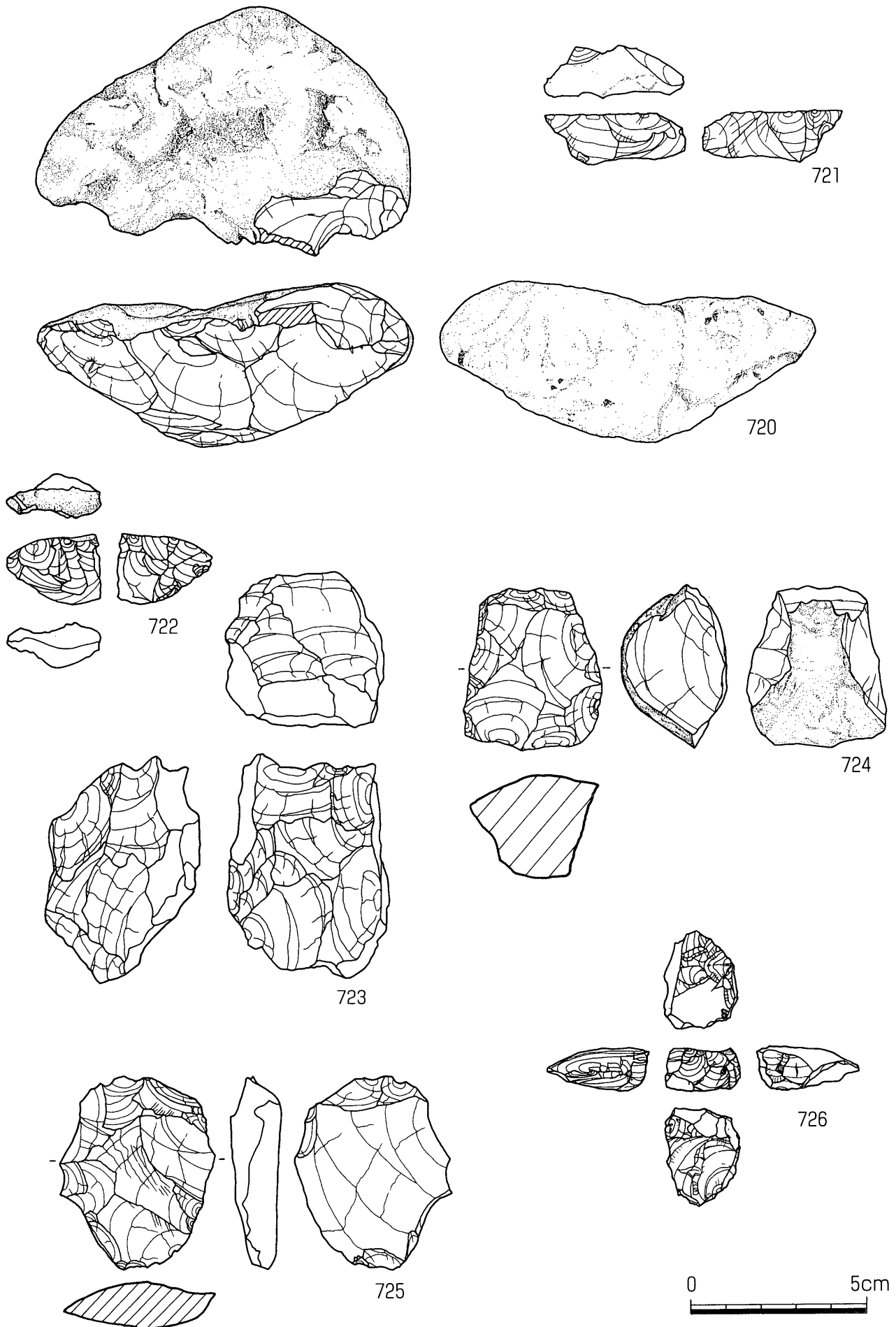
715



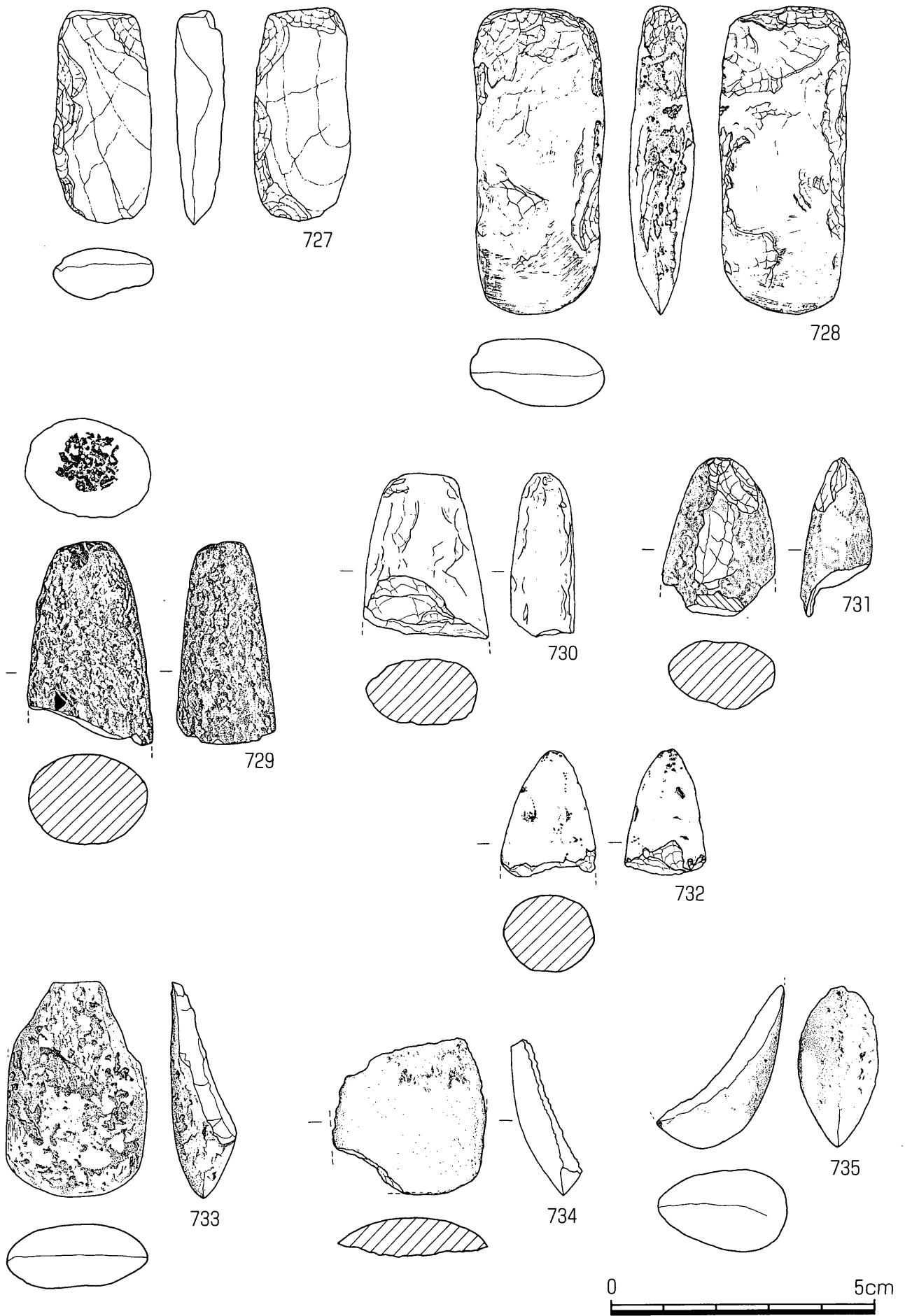
第84图 包含層出土石器実測图③ (S=2/3)



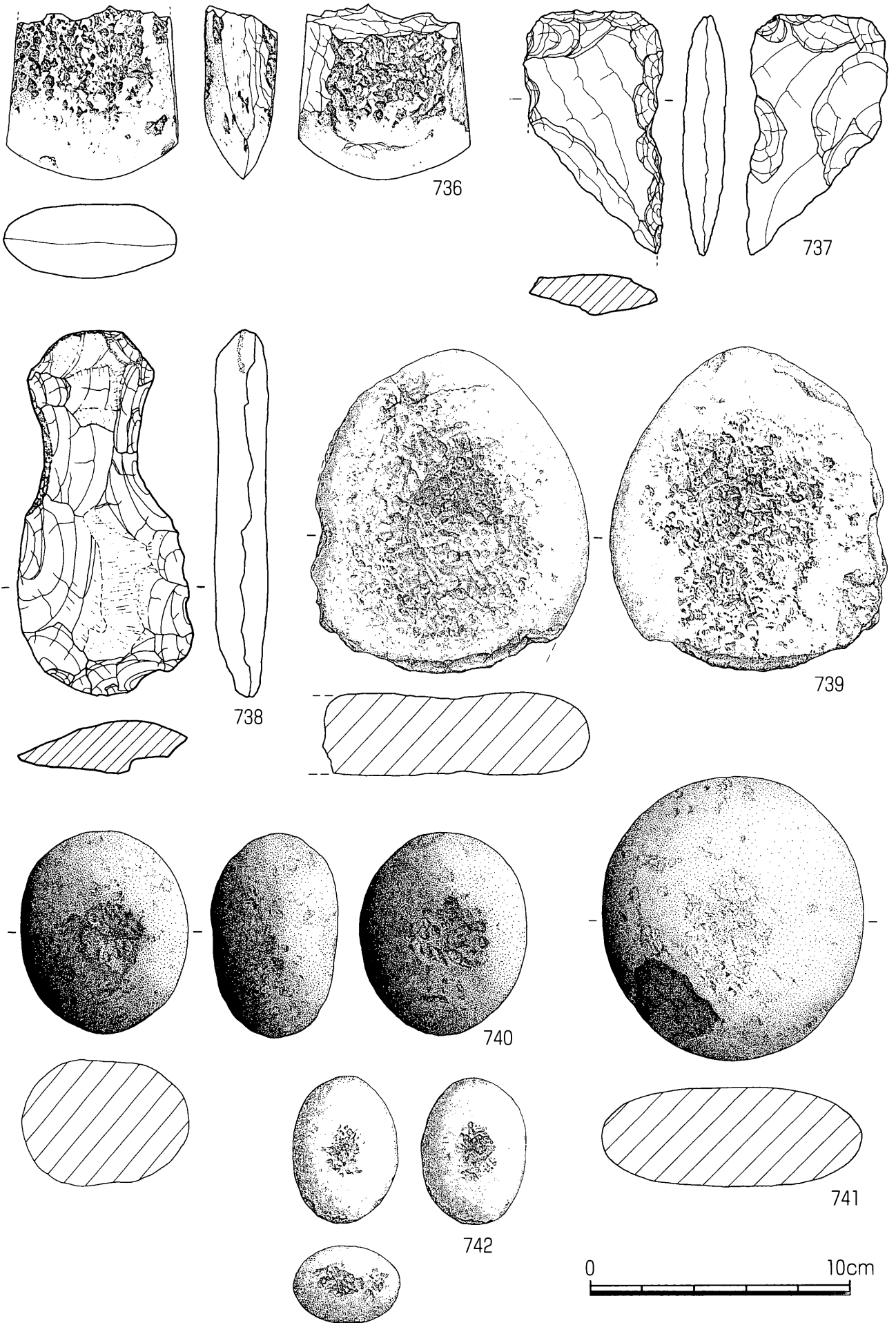
第85图 包含層出土石器実測図④ (S=2/3)



第86图 包含層出土石器実測图⑤ (S=2/3)

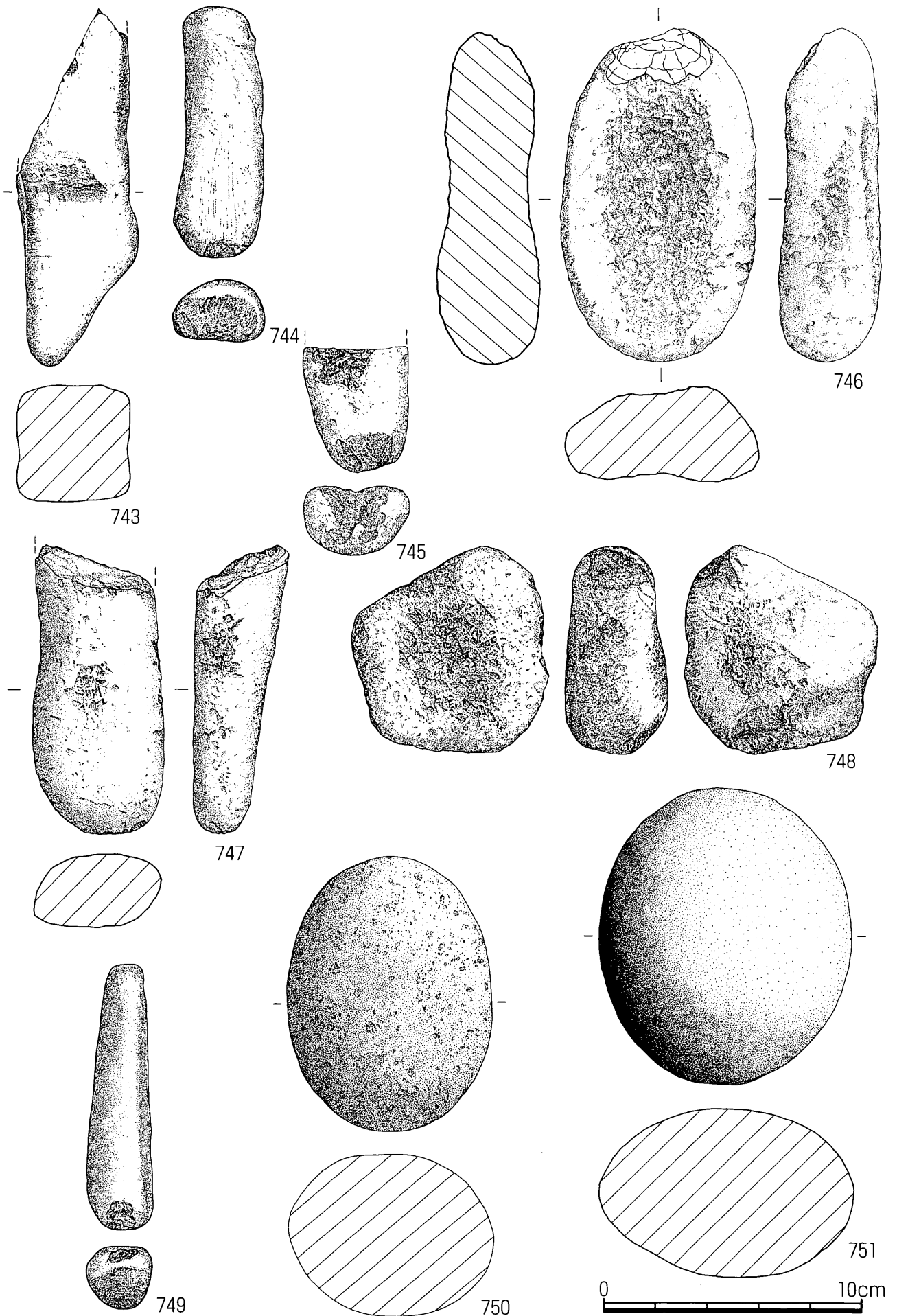


第87图 包含層出土石器実測図⑥ (S=1/2)

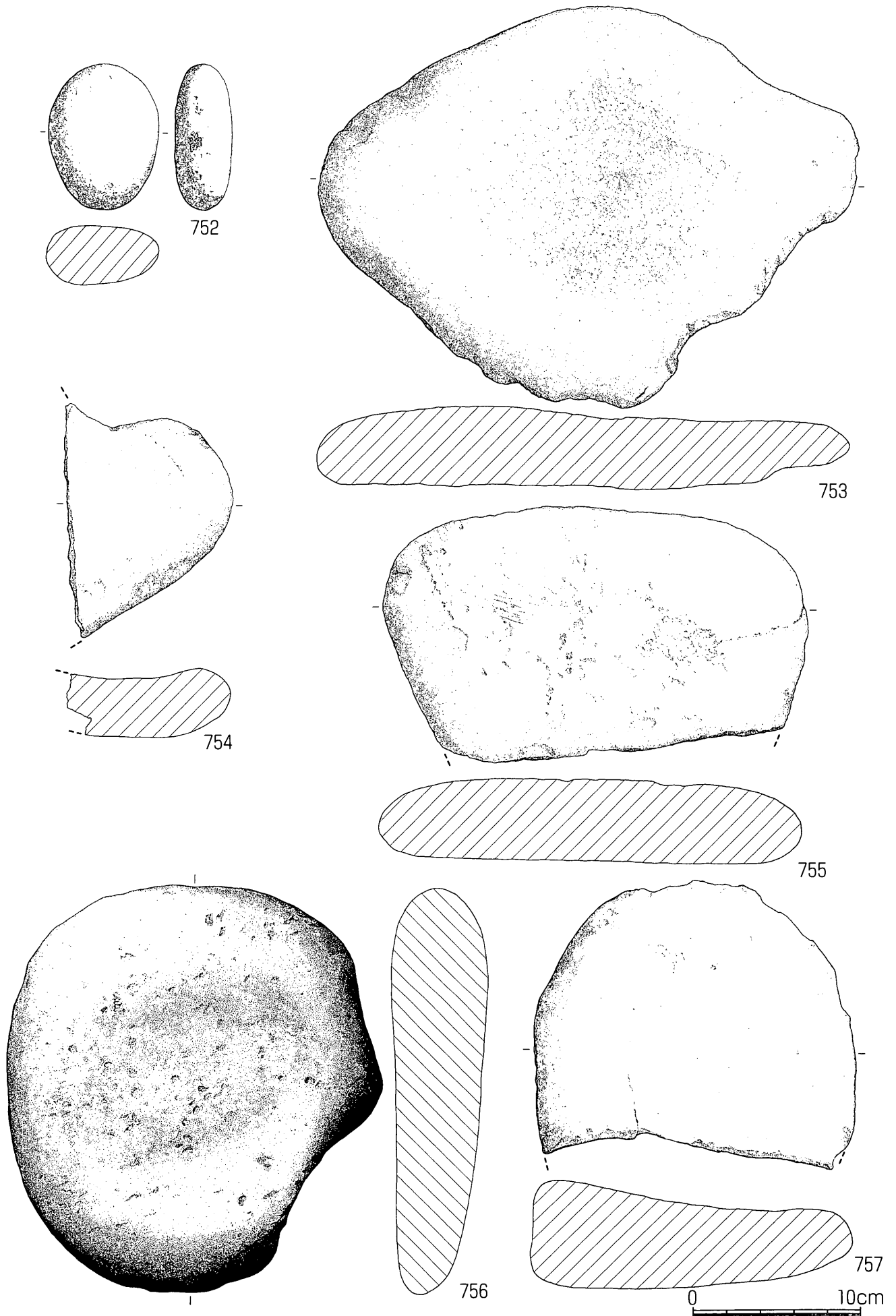


第88图 包含層出土石器実測図⑦ (S=1/2)

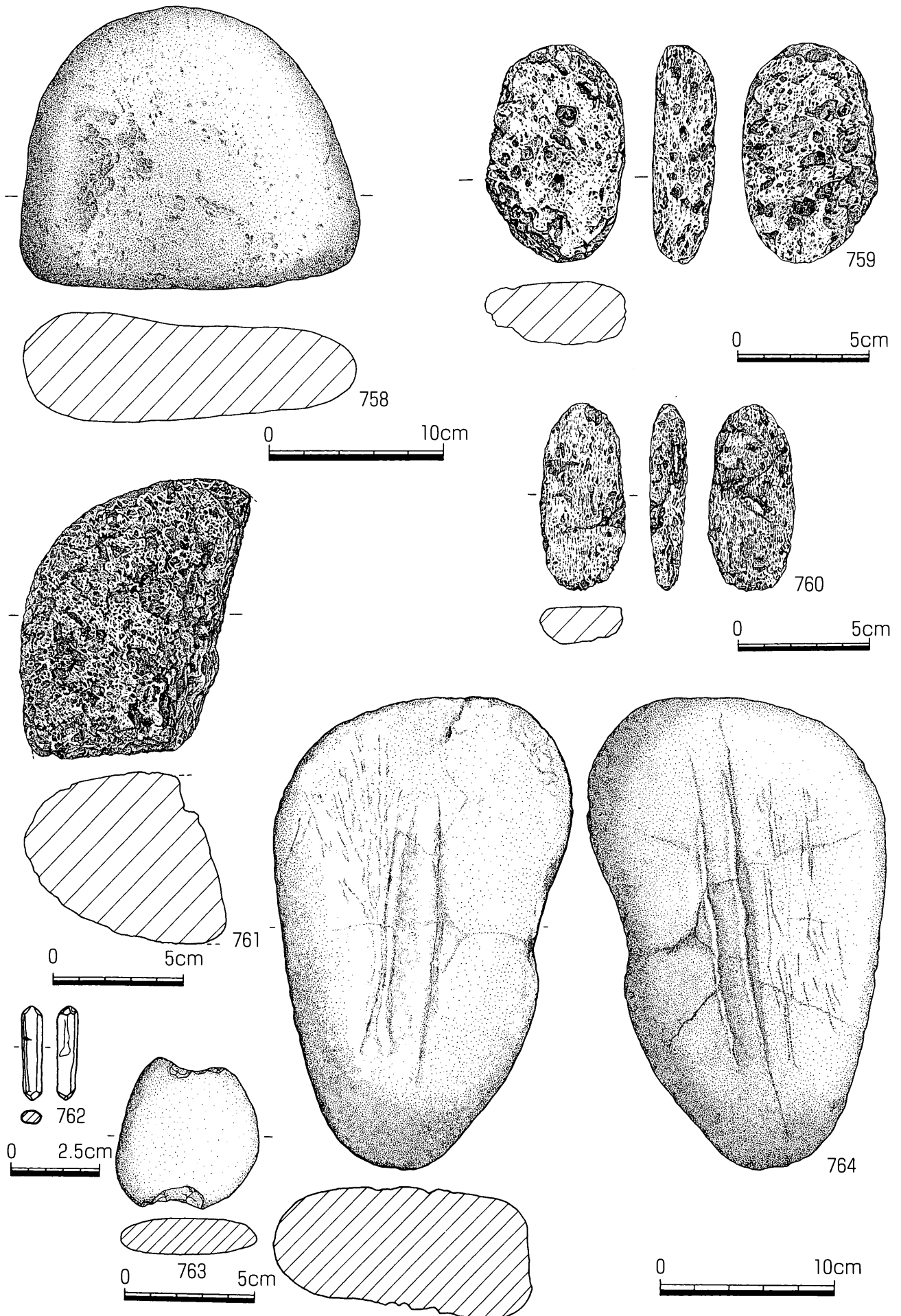




第89图 包含層出土石器実測图⑧ (S=1/2)



第90图 包含層出土石器実測図⑨ (S= 1/3)



第91图 包含層出土石器実測図⑩ (S= 1/3, 1/2, 2/3)

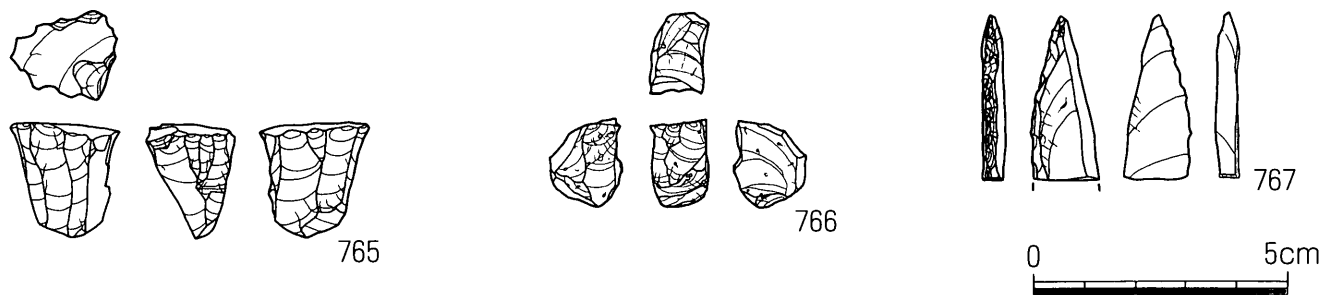
## 第4節 旧石器時代の遺物について

調査区内に旧石器時代の包含層の確認トレンチを数ヶ所設定してみたが、どのトレンチからも遺物を確認することはできなかった。しかし、縄文・弥生時代の遺構などから旧石器時代の遺物がわずかではあるが出土しているため、当遺跡内において旧石器時代の文化層が局所的には存在していたと考えられる。ここでは旧石器時代の該当すると考えられる遺物を報告する。(第92図・表20)

765は包含層より出土した青灰色の流紋岩製の細石核である。打面調整は特に行われず、細石刃の剥離は側面全てにおよんでいる。形状は円錐形を呈している。同様の細石核は延岡市赤木遺跡などでも出土している。

766はSI-9から出土した黒曜石製の細石核である。分割礫を素材とし、打面調整を特に行わず細石刃を剥離している。作業面は1面にのみ認められる。

767はSA-6から出土した黒色の頁岩製のナイフ形石器である。基部側を大きく欠損している。プランディング加工は背面左側に腹面方向からの加撃により行われている。



第92図 旧石器時代遺物実測図 (S=2/3)

表18 包含層出土石器計測表①

番号	器 種	出土地点	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石 材	備 考
658	打製石鏃	Ⅲ	1.7	1.45	0.39	0.4	黒曜石	
659	打製石鏃	Ⅲ	1.6	1.7	0.35	0.5	安山岩	
660	打製石鏃	Ⅲ	1.35	1.4	0.21	0.4	黒曜石	
661	打製石鏃	Ⅲ	1.75	1.55	0.3	0.5	黒曜石	
662	打製石鏃	Ⅲ	1.45	1.42	0.3	0.4	チャート	
663	打製石鏃	Ⅲ	1.4	1.6	0.4	0.7	黒曜石	
664	打製石鏃	Ⅲ	1.7	1.35	0.35	0.8	チャート	
665	打製石鏃	Ⅲ	1.6	1.1	0.2	0.4	玉髄	帖地形
666	打製石鏃	Ⅲ	2.2	1.5	0.3	0.6	黒曜石	
667	打製石鏃	Ⅲ	2.2	1.4	0.3	0.5	安山岩	節理面有り
668	打製石鏃	Ⅲ	1.85	1.8	0.4	1.3	チャート	
669	打製石鏃	Ⅲ	2.05	1.8	0.4	0.8	安山岩	
670	打製石鏃	Ⅲ	3	2.4	0.6	2.5	安山岩	
671	打製石鏃	Ⅲ	1.9	1.5	0.3	0.6	黒曜石	先端をわずかに欠する
672	打製石鏃	Ⅲ	2.4	1.4	3.5	1	チャート	帖地形
673	打製石鏃	Ⅲ	2.3	1.8	4.5	1.1	黒曜石	先端を欠する
674	打製石鏃	Ⅲ	1.6	1.4	0.4	0.5	黒曜石	脚部を欠する
675	打製石鏃	Ⅲ	1.6	1.4	0.7	1.2	黒曜石	
676	打製石鏃	Ⅲ	2.5	1.55	0.5	1	黒曜石	基部を欠する
677	打製石鏃	Ⅲ	2.35	1.4	0.45	0.9	黒曜石	
678	打製石鏃	Ⅲ	2.1	1.45	3.5	0.5	黒曜石	脚部を欠する
679	打製石鏃	V	1.85	1.5	0.5	0.6	黒曜石	
680	打製石鏃	V	2.8	2.2	0.4	1.1	黒曜石	
681	打製石鏃	Ⅵ	2.15	1.9	0.55	1.2	黒曜石	
682	打製石鏃		3.5	1.7	0.6	2.6	流紋岩	
683	打製石鏃		2	1.25	0.3	0.4	チャート	
684	打製石鏃		2.2	2.3	0.7	2.1	チャート	
685	打製石鏃		2.8	2.4	0.45	1.8	チャート	
686	打製石鏃		2.15	2.25	0.45	1.4	チャート	
687	打製石鏃	V	2.1	1.75	0.4	0.9	チャート	
688	打製石鏃		2.65	1.6	0.35	0.9	黒曜石	
689	打製石鏃		2.2	1.5	0.45	0.9	黒曜石	
690	打製石鏃		2.5	1.8	0.3	0.9	チャート	
691	打製石鏃		2.8	1.9	0.4	1.7	流紋岩	
692	打製石鏃		3.4	1.9	0.4	2.2	安山岩	
693	石鏃未製品	Ⅲ	2.35	1.4	0.35	1	チャート	
694	石鏃未製品	Ⅲ	2.1	1.5	0.55	1.2	チャート	
695	石鏃未製品	Ⅲ	2.55	1.1	0.4	1.6	頁岩	
696	石鏃未製品	Ⅲ	2.12	1.39	0.61	1.5	黒曜石	
697	石鏃未製品	Ⅲ	2.1	1.7	0.5	1.5	チャート	
698	石鏃未製品	Ⅵ	3.5	2.15	0.8	5	チャート	
699	磨製石鏃	Ⅲ	2	1.95	0.2	1.1	粘板岩	先端部を欠する
700	磨製石鏃		2.5	1.6	0.3	1.2	粘板岩	基部の一部を欠する
701	磨製石鏃未製品		5.4	2.5	0.5	6.9	粘板岩	
702	磨製石鏃未製品	Ⅲ	7.5	2.7	0.8	16	粘板岩	
703	石匙	Ⅲ	2.4	3.5	0.8	755.9	頁岩	
704	石匙	Ⅲ	2.8	5.8	1.05	11.2	頁岩	
705	石錐	Ⅲ	2.45	1.6	0.5	2.2	砂岩	先端部を欠する
706	石錐	Ⅲ	6.8	5.9	1.1	36.5	サヌカイト	
707	スクレイパー	V	6.95	4.4	1.95	55.5	頁岩	
708	スクレイパー	V	4.9	4.55	1	22.1	流紋岩	
709	スクレイパー	Ⅲ	4.81	3.55	1.5	25.4	チャート	
710	スクレイパー	Ⅵ	3.8	3	1.3	14.2	チャート	
711	スクレイパー	Ⅲ	9.5	5.5	2.2	100.8	砂岩	
712	スクレイパー	Ⅲ	9.1	6.8	1.8	129.9	砂岩	
713	スクレイパー	Ⅲ	8.5	7.2	2	112.6	頁岩	
714	剥片	V	6.55	3.05	0.75	15.5	流紋岩	
715	剥片	V	8.3	3.65	0.8	35.3	砂岩	
716	剥片	Ⅲ	7.4	7.8	1.7	114	流紋岩	717と接合
717	2次加工ある剥片	Ⅲ	5	6.8	1.7	64.7	流紋岩	716と接合
718	剥片	Ⅲ	7.9	7.9	1.85	128	砂岩	
719	石核	Ⅲ	9.45	7.2	3.5	330.4	砂岩	
720	石核	Ⅲ	4.6	10.7	7.1	293.7	砂岩	
721	石核	Ⅲ	1.45	4	1.5	5.5	黒曜石	
722	石核	Ⅲ	2	2.7	1.3	5	黒曜石	
723	石核	Ⅵ	6.3	4.6	4.25	136.4	チャート	
724	石核	V	4.5	4	3	55.7	玉髄	
725	石核	Ⅵ	5.45	4.5	1.5	34.9	頁岩	
726	石核	Ⅲ	1.2	2.1	1.2	6.8	黒曜石	
727	局部磨製石斧	V	7.95	3.75	1.9	74.8	ホルンフェルス	
728	磨製石斧	Ⅲ	11.5	5.1	2.5	201.2	頁岩	
729	磨製石斧		7.7	4.8	3.8	156.3	ホルンフェルス	
730	磨製石斧	Ⅲ	6.2	4.45	2.45	100	ホルンフェルス	
731	磨製石斧	Ⅲ	6	4.3	2.65	65	ホルンフェルス	
732	磨製石斧	Ⅲ	4.85	3.6	3.1	62.4	ホルンフェルス	
733	磨製石斧	Ⅲ	8.2	5.4	2.4	107.2	砂岩	
734	磨製石斧	Ⅲ	5.5	5.85	1.4	60.8	ホルンフェルス	
735	磨製石斧	Ⅲ	6.1	4.9	3.05	41	頁岩	
736	磨製石斧	Ⅲ	6.6	6.65	2.8	180.1	玄武岩	
737	打製石斧	Ⅲ	9.1	5.5	1.6	74.6	頁岩	
738	打製石斧	Ⅲ	13.8	6.7	2.1	201.6	ホルンフェルス	
739	敲石	Ⅲ	12.2	10.7	3.15	640	砂岩	

表19 包含層出土石器計測表②

番号	器種	出土地点	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石 材	備 考
740	敲石	V	7.6	6.4	4.9	289.8	砂岩	
741	敲石	VI	10.8	10	4.8	575.6	砂岩	
742	敲石	III	5.6	3	4.1	92.6	砂岩	
743	敲石	III	13.6	4.8		408.2	砂岩	
744	敲石	III	9.5	3.5	3.5	116.4	砂岩	
745	敲石	III	4.7	4.1	4.1	67.4	砂岩	
746	敲石	III	12.7	7.5	3.6	507.3	砂岩	
747	敲石	III	11.2	5.6	2.8	254.7	砂岩	
748	敲石	III	7.9	7.6	4	323	砂岩	
749	敲石	III	10.2	2.6	2.6	87.4	砂岩	
750	磨石	V	10.5	8	6.2	755.9	尾鈴酸性岩	
751	磨石	V	11.2	9.8	6.3	993.7	砂岩	
752	磨石	III	8.5	6.6	3.5	295.3	尾鈴酸性岩	
753	石皿		23.3	32.2	5.1	4300	砂岩	
754	石皿	III	13.65	10.5	4	612.9	砂岩	
755	石皿	III	14.9	25.2	4.8	2780	砂岩	
756	石皿	V	12.2	24	5.7	4150	砂岩	
757	石皿	III	11.9	19.1	7	2720	砂岩	
758	石皿	V	16	19.7	6.15	2660	堆積岩	
759	軽石製石製品	III	8.3	5.45	2.55	27.3	軽石	
760	軽石製石製品	III	7.02	3.4	1.4	11.6	軽石	
761	軽石製石製品	III	10.4	8.8	6.6	124.1	軽石	
762	棒状石製品		2.7	0.6	0.35	1.1	チャート	
763	石錘		5.8	5.6	1.45	67.6	砂岩	
764	砥石	III	27	17.2	7.6	4500	砂岩	

表20 旧石器時代遺物計測表

番号	器種	出土地点	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石 材	備 考
765	細石核		2.3	1.7	2.1	6.9	流紋岩	
766	細石核	SI-9	1.7	1.2	1.5	3.3	黒曜石	
767	ナイフ形石器	SA-6	3.2	1.35	0.4	6.9	頁岩	

## 第7章 まとめ

### ■古代の遺構・遺物について

古代に該当する遺構として竪穴住居跡1軒・土坑4基・多数の柱穴を検出した。遺物は各遺構内・包含層から土師器・須恵器・土製品・鉄器などが出土した。土師器杯の特徴は底部の切り離しがヘラ切りであるが、資料の多くにはその後ナデを施している。また底部～口縁部まではほぼ直線的な体部を呈しており、曲線的な体部を持つものは存在していない。土師器甕は体部外面に叩き目を有するものが存在する。当遺跡内の古代の遺構や包含層から出土した土師器はいずれも同様の特徴をもっているところから、古代の遺構については時間的に大きな差異はみられないと考えられる。

129の須恵器の耳付き壺は焼成時にひび割れを受け、かなり焼けひずんでいる。しかし、図面上にて復元したところ(129)、佐賀県杵島郡北方町の牧古窯跡群に同様の資料が見られ、この窯跡は9世紀代に比定されている。また、供膳用の須恵器をほとんど伴っていないこと、少量ではあるものの黒色土器A類が出土していること、前述の土師器類の特徴などから当遺跡の古代の遺構については9世紀後半に位置付けられるものと考えられる。

また、本遺跡から出土した須恵器は破損品(窯での焼成時に焼けひずみをおこしたものや割れたものなど)が非常に多くみられる。このような製品を遠方の窯跡から運び込んだとは考えにくい。このことから本遺跡の須恵器は本遺跡から東方向に直線距離にて約2kmしか離れていない宮崎市の松ヶ迫窯跡(群)から運ばれたものではないかと考えられる。

### ■弥生時代の遺構・遺物について

弥生時代の遺構は竪穴住居跡5軒・土坑22基・多数の柱穴が検出された。遺物は各遺構内・包含層から弥生土器・石器(磨製石鏃とその未製品など)が出土した。

竪穴住居の出土遺物を観察するとSA-2からは断面がくの字状の口縁部を持つ上げ底の甕及び凹線文土器の影響を受けた短頸壺・長頸壺が出土している。SA-3からは断面がなだらかなくの字状を呈し、単位の細かい刷毛目調整を施した甕が出土しており、本遺跡において新しい様相を示す。SA-4からは口縁部が逆L字形の甕・口縁部を肥厚させ、円形浮文を施した多重突帯の壺と共に記号文を施した壺が出土しており、出土資料に時期幅が見られる。SA-5からは多重突帯を持つ壺、胴部中央よりやや上に最大径を持つ壺が出土している。SA-6からは下城式土器の口縁部片や口縁部を肥厚させた壺の口縁部片などが出土しているが、口縁部が緩やかに外反し、細かい刷毛目調整をほどこす甕が主体を占め、また免田式長頸壺が出土しており、SA-3と同様に新しい様相を示している。

以上のように弥生時代の竪穴住居跡については各住居跡全て時間幅のある資料が混在する様相を示しており、素直に住居跡の時期を決定することは難しい。住居跡から出土した弥生土器を概観すると中期後半から弥生時代終末までの資料が出土しているようである。だが、前述した各住居跡の出土資料の様相からSA-2・4・5とSA-3・6の間には時期差が存在するということが指摘できるだろう。

土坑については残念ながらほとんどその性格を把握できるものはなかった。ただしSC-34については甕形土器が1個体完形で出土しており、土坑自体もこの資料が納まる程度の規模であった。この

ことからこの甕形土器を埋設した施設であったと考えられる。また土坑内から出土した甕については突帯を巡らすもの・巡らさないもの、中溝式土器などと各種類があるが、断面がL字状またはくの字状の甕形土器が中心に出土しているという状況であり、竪穴住居跡（SA-2・4・5）と時期的に一致する資料が多く出土している。

包含層から出土した弥生土器は前述の竪穴住居跡と同じ時期のものが出土している。注目すべき資料としては384～387の凹線文土器の破片である。同一固体と思われる脚台付き壺の破片で、その施工方法から安芸地域の凹線文土器の特徴を持つものであると思われる。

## ■縄文時代後期・晩期について

縄文時代後期に該当する遺構としてはSC-33・多数の柱穴が検出された。本遺構とは時期が異なるが前述のSC-34と同様の様相を呈することから、388の深鉢形土器を埋設した施設であったと考えられる。

柱穴から出土した縄文土器のほとんどが口縁部をやや肥厚させ、貝殻や工具の刺突文を施しており、388と同様の特徴が見られる。388も含めこれらの土器は、納曽式土器の範疇に入るものであろう。

包含層から出土した磨研土器はほとんどが浅鉢である。その特徴として口縁部は外反気味に伸び内外面に1条の沈線を施すこと、胴部の屈曲が明瞭であることなどがあげられ、晩期前半頃の時期に納まる資料であろうと思われる。

## ■縄文時代早期について

須田木遺跡における主体となる時代と遺構は縄文時代早期である。これは過去の削平などによりアカホヤ層上が攪乱されてきた経緯も要因だと思われ、調査結果上の主体である。

遺構は集石遺構が大半であり、172基を数える。調査区のはほぼ全体から検出された。形態的には、掘り込みを有するものと有さないものに大別され、掘り込みを持つものは、浅いものと深いもの、さらに掘り込みの底部に配石を有するものと有さないものに細分される。そしてそれぞれに大きさの差や内部礫の密度差が存在する。内部礫は円礫で本遺跡下を流れる清武川において採取可能なものであるが、被熱により赤化してヒビが生じ、割れているものがほとんどである。

形態的に分類は可能であるが、配石を持つ持たないは抜き取られた可能性を考慮しなければならず、大きさや内部礫の密や疎は程度の差でしかないことも事実で、これら形態分類については1982年に大分県天ヶ瀬町平草遺跡で試みられ、以後基本的にこれに沿った分類が行われているが、明確に時期差や使用行程に結びついた結果は今のところ得られていない。

本遺跡においては本文中でも述べたとおり集石遺構の集中する傾向も捉えられた。しかしながら形態毎の分布については第40図のCとEの集中区については掘り込みの無いタイプの集石遺構の集中が顕著であり、それ以外のものも掘り込みを有し配石を持たないタイプのみという傾向を見る事が出来る以外に明確に捉えることは出来ず、集中部分にいくつもの形態が混在している。そして直径が1.5mを超えるような大型の集石は単体で検出されることは無く、形態を異にする集石とともに群集する傾向が捉えられている。

この様な中で、特徴的な形態の集石が検出されている。SI-104と112に代表されるすり鉢状の掘



り込みを持ち、すばまる底部に配石を有する大型のもので、SI-104、112は底部の炭化物による放射性炭素年代測定（加速器測定）によりそれぞれ8360±70BP、8240±90BPの測定値を示した。関東地方において山根坂上型とされる集石に大変様相が似ているが、山根坂上型は中期とされており、内部礫中に焼成時の炭化材が入り込むという特徴もある。時期的にも一致しないものであるが、その形態の類似は無視できないものと思われ、使用行程など何らかの共通する要因に起因するものと思われる。

SI-104と112の内部礫の状況は上層で内部が凹み何らかの被熱対象物を取りだした状況を残したものであると思われる。この部分は礫が疎であり、あきらかに他の礫とは大きさの異なった礫である。大型ゆえに看取できる状況であると思われ、集石内部礫の充填の差が廃棄後の状況を示している可能性を示唆した例として注目したい。

集石遺構がその機能を果たす為に礫が必要なことは疑う余地はないが、土はどのようなであろうか。遺跡から確認される集石遺構の内部状況は礫が密なものと同様に疎なものも存在する。疎なものに関しては、埋積土中に礫が混在するといった状況であり、すくなくとも自然埋積にせよ人為的にせよ最終段階において礫と土が同時に混入した状態でないとこの状況は説明できない。密なものは礫と礫は接し、この状況に同時に土の入り込む余地は無く、礫と礫の隙間に埋土が入り込んだ状況を示していると考えられる。礫を熱することによりその機能が発揮されるなら、熱を奪う土の存在は非効率的であり、最初に掘り込みの面を覆うように礫が配されたSI-104や112の状況は加熱効果を上げるために非常に効果のあるものと思われる。

ポリネシア地方の民俗例のなかで、最後に集石全体を土で覆う場合や、さらに注水を行い蒸しあげることがあるようであり、二次的に土を利用することは否定できないが、加熱時に非効率なことには違いないと思われる。

疎な状態はこのあと調理の対象物なりを取り出す際にかぶせた土と礫が混在する場合や礫も含めて取り出し、再度掘り込み内に周囲に散在する土や礫が自然なり人為的に流れ込んだ状況が想像される。使用後に礫を一部なりすべてなり取り出す可能性は、黒色化した範囲として確認される掘り込みを完掘してもほとんど礫が含まれない集石や底部に配石のみ確認される集石遺構が存在すること、比熱して割れた円礫がその状況を維持せず充填されていることから想定されることである。また、船引地区遺跡滑川第1遺跡SI-39は取り出した上部の礫が一方向から再度内部に流し込まれた状況を残している。

以上の考察から検出される集石遺構で礫同士が接するほど密なもの以外は使用の状況をとどめていないと判断され、加えて配石の有無は使用後の抜き取りを考慮すると、内部礫が極めて密であり、配石がない場合は配石をもたないものとして判断できる根拠となろう。

集石遺構以外の早期遺構は土坑である。調査区内からはSC-43と44の2基が検出されている。しかしながら、本文中で説明したとおり遺構自体は検出出来なかったもので、いずれも大型土器片の出土によりその存在が想定されたものである。

町内におけるこれまでの調査において検出された早期の遺構は集石遺構、炉穴、土坑であるが、土器を明確に伴う遺構の検出例は極めて少なく、船引地区遺跡群内の坂元遺跡において押型文土器片が礫中に混在した集石遺構、滑川第2遺跡において塞ノ神式土器を包含した土坑、滑川第3遺跡におい

て桑ノ丸式土器をともなった土坑の3例のみである。このうち滑川第2遺跡の例は上層では遺構の存在は確認できず霧島－小林軽石風化層まで掘り下げた段階で捉えられもので遺構も浅いものであったが、内部遺物とプラン範囲の上層遺物間の接合が認められている。滑川第3遺跡例は埋土中に炭化物が多量に含まれていたことから確認されたものである。

本遺跡の場合も大型土器片の出土によって確認されたもので、遺物の出土が無ければ捉えようのないものである。これは土坑だけに限らず、集石遺構についても同じことが言える。本遺跡の集石遺構中の埋土は他の遺跡に比べ炭化物の混入が少なく、地山との色調差が無い、このため礫の集まりにより確認されても、掘り込みの検出が明確に出来ない状況のものが多数存在し、このような状況のなかでSC-44が確認されている。

町内における遺構の検出についてはアカホヤ層上の遺構はアカホヤ層を、アカホヤ層下の遺構は霧島－小林軽石風化層を遺構確認面としているが、アカホヤ層と霧島－小林軽石風化層間は約80cm程あり、多数の火山灰層を持つ鹿児島県下と違い、相当深く掘り込まれた遺構でない限り確認は不可能である。加えて本遺跡ではアカホヤ直下の暗褐色土層や小林軽石層が明確で無く、さらに遺構の検出が難しい堆積を示していた。

早期における遺構としては、鹿児島県上野原遺跡に代表されるように集石遺構、炉穴、土坑、竪穴式住居跡というように一応のセットが捉えられている。県内においても田野町又五郎遺跡、芳ヶ迫遺跡、西都市鴨目原遺跡などで竪穴式住居跡が集石遺構や炉穴などと共に検出されているが、同時性までは確定出来ていない。本遺跡をはじめ、町内においては相当数の集石遺構が検出されているにも関わらず竪穴式住居跡の検出は皆無である。

この要因については、竪穴式住居が存在しなかった。存在するが検出できない。この二通りが想定されるが、以上の状況を勘案すれば、後者の可能性が高いものと思われる。

この見えない遺構が存在するという問題は、遺物の出土層位による編年に混乱を招き、集石遺構も掘り込み面では無く、内部礫により確認されている以上、検出高低差による時期差や、遺物分布の重なりによる同時性に言及することも危険であると言わざるを得ない。

集石遺構の掘り込みもまた遺物包含層への攪乱であり、内部礫の出し入れが何度も行われる状況が捉えられている以上、集石内からの出土遺物から時期をはじき出すことにも慎重な姿勢が必要であろう。

多数の集石遺構が出土すれば、その内在する情報量と裏腹に、記録作業に多大な時間や経費が必要となり、忙殺されて十分に対峙できないという状況に陥る。この早期調査の普遍的な状況のなかで何らかの結論を導きだすには、単に可能性を乱発するのではなく、否定できる要因を認識し、精査されて残った僅かな情報の積み重ねしかないものと思われる。

# 自然科学分析調査報告書

— 清武町、須田木遺跡 —

株式会社 古環境研究所

## 清武町、須田木遺跡における放射性炭素年代測定結果

株式会社 古環境研究所

## 1. 試料と方法

試料名	地点・層準	種類	前処理・調整	測定法
No. 1	SI-13 集石遺構内	炭化物	酸-アルカリ-酸洗浄 ベンゼン合成	$\beta$ 線法 (長時間測定)
No. 2	SI-92 集石遺構内	炭化物	酸-アルカリ-酸洗浄 石墨調整	加速器質量 分析 (AMS) 法
No. 3	SI-104 集石遺構内	炭化物	酸-アルカリ-酸洗浄 ベンゼン合成	$\beta$ 線法
No. 3'	SI-104 集石遺構内	炭化物	酸-アルカリ-酸洗浄 石墨調整	加速器質量 分析 (AMS) 法
No. 4	SI-112 集石遺構内	炭化物	酸-アルカリ-酸洗浄 ベンゼン合成	$\beta$ 線法
No. 4'	SI-112 集石遺構内	炭化物	酸-アルカリ-酸洗浄 石墨調整	加速器質量 分析 (AMS) 法
No. 5	SI-115 集石遺構内	炭化物	酸-アルカリ-酸洗浄 ベンゼン合成	$\beta$ 線法
No. 6	SI-170 集石遺構内	炭化物	酸-アルカリ-酸洗浄 ベンゼン合成	$\beta$ 線法
No. 7	SC-43 土坑内出土 土器附着炭化物	炭化物	酸-アルカリ-酸洗浄 石墨調整	加速器質量 分析 (AMS) 法

## 2. 測定結果

試料名	$^{14}\text{C}$ 年代 (年BP)	$\sigma^{13}\text{C}$ (‰)	補正 $^{14}\text{C}$ 年代 (年BP)	暦年代 交点 ( $1\sigma$ )	測定No. (Beta-)
No. 1	9520 $\pm$ 60	-25.8	9500 $\pm$ 60	BC8555 (BC8620~8465)	105048
No. 2	8850 $\pm$ 70	-24.6	8860 $\pm$ 70	BC7950 (BC7990~7910)	105049
No. 3	7970 $\pm$ 60	-29.3	7900 $\pm$ 60	BC6670 (BC6765~6610)	105050
No. 3'	8400 $\pm$ 70	-27.4	8360 $\pm$ 70	BC7475 (BC7525~7335)	138479
No. 4	8250 $\pm$ 60	-25.9	8230 $\pm$ 60	BC7265 (BC7310~6065)	105051
No. 4'	8310 $\pm$ 90	-29.2	8240 $\pm$ 90	BC7300 (BC7455~7395, 7370~7090)	138480
No. 5	7930 $\pm$ 80	-28.0	7880 $\pm$ 80	BC6640 (BC6765~6580)	105052
No. 6	8160 $\pm$ 60	-27.6	8120 $\pm$ 60	BC7040 (BC7075~7020)	105053
No. 7	8980 $\pm$ 70	-26.3	8960 $\pm$ 70	BC8005 (BC8045~7965)	105054

#### 1) $^{14}\text{C}$ 年代測定値

試料の $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比から、単純に現在（1950年AD）から何年前（BP）かを計算した値。 $^{14}\text{C}$ の半減期は5,568年を用いた。

#### 2) $\sigma^{13}\text{C}$ 測定値

試料の測定 $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比を補正するための炭素安定同位体比（ $^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$ ）。この値は標準物質（PDB）の同位体比からの千分偏差（‰）で表す。

#### 3) 補正 $^{14}\text{C}$ 年代値

$\sigma^{13}\text{C}$ 測定値から試料の炭素の同位体分別を知り、 $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ の測定値に補正值を加えた上で算出した年代。

#### 4) 暦年代

過去の宇宙線強度の変動による大気中 $^{14}\text{C}$ 濃度の変動を補正することにより算出した年代（西暦）。補正には年代既知の樹木年輪の $^{14}\text{C}$ の詳細な測定値を使用した。この補正は10,000年BPより古い試料には適用できない。暦年代の交点とは、補正 $^{14}\text{C}$ 年代値と暦年代補正曲線との交点の暦年代値を意味する。1 $\sigma$ は補正 $^{14}\text{C}$ 年代値の偏差の幅を補正曲線に投影した暦年代の幅を示す。したがって、複数の交点が表記される場合や、複数の1 $\sigma$ 値が表記される場合もある。



須田木遺跡全景①



SI-101~120・170①



SI-112



SI-112半截



SI-104

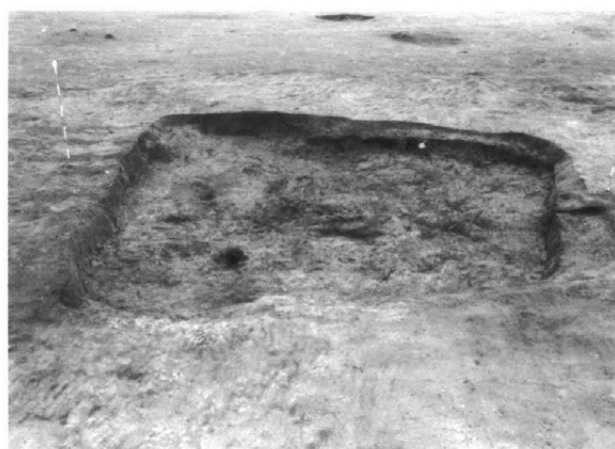


SI-104調査風景





調査区北側(アカホヤ層上面)



SA-1



SC-50



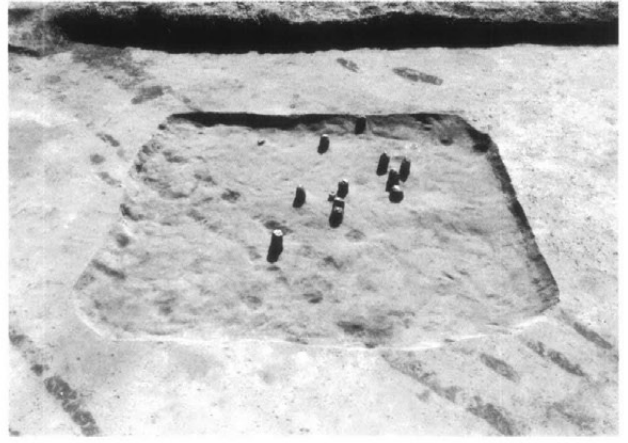
SC-6



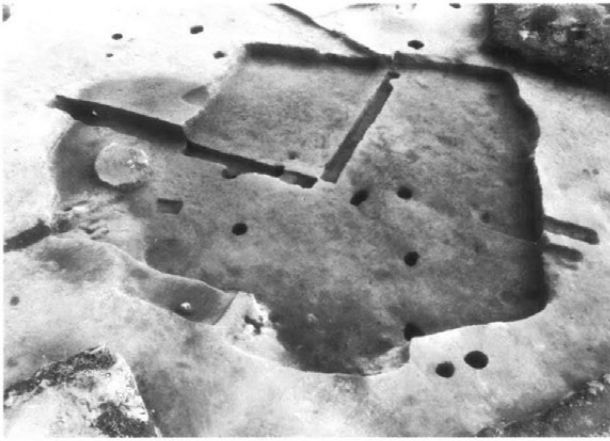
SC-7



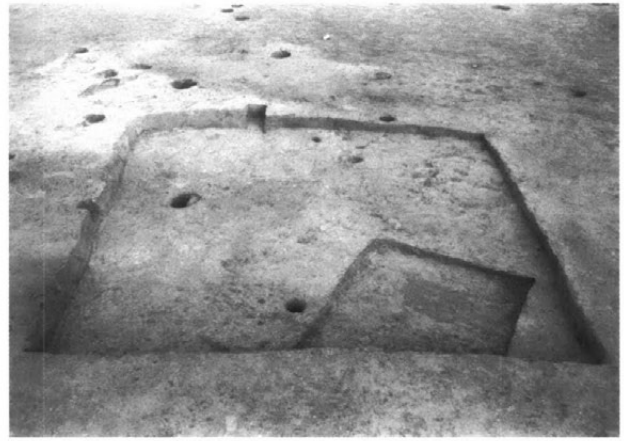
SA-2



SA-3



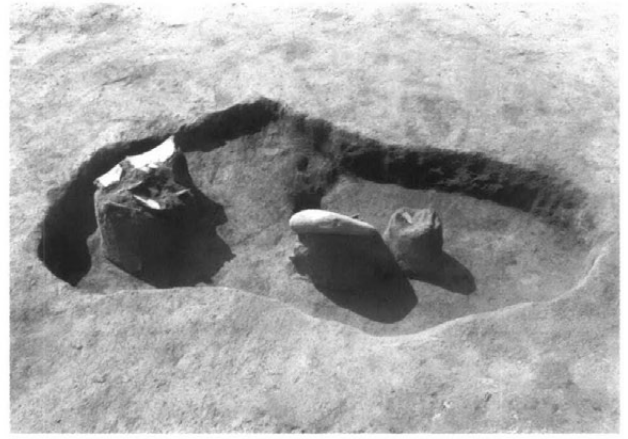
SA-4



SA-5



SA-6



SC-1



SC-34



SC-39



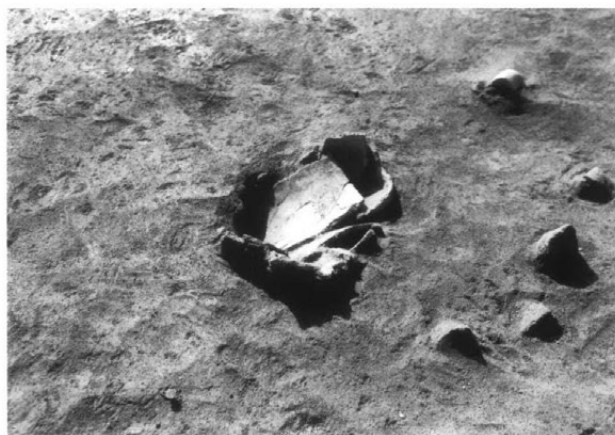
SC-40



SC-41



柱穴検出状況



SC-33



SE-3土層断面



SI-1



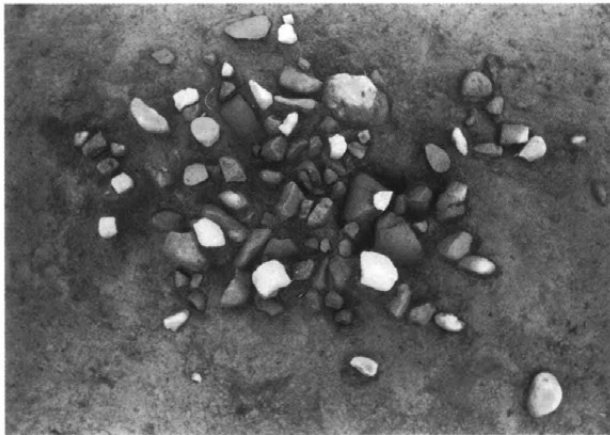
SI-2



SI-3



SI-5



SI-8



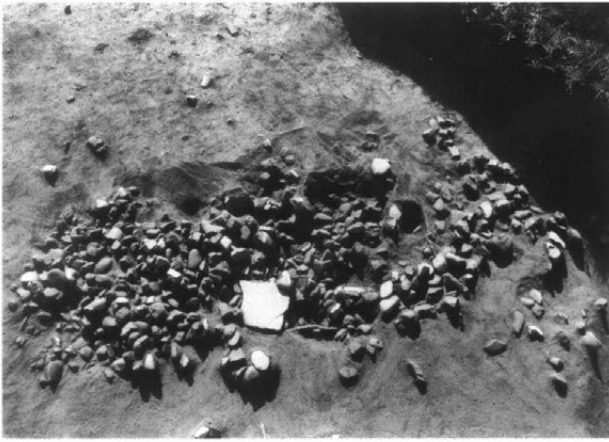
SI-9



SI-11



SI-12



SI-13



SI-14



SI-15



SI-17



SI-19



SI-19 上部礫除去後



SI-23



SI-24



SI-30



SI-31



SI-33



SI-35



SI-37



SI-37 配石



SI-38



SI-39



SI-41



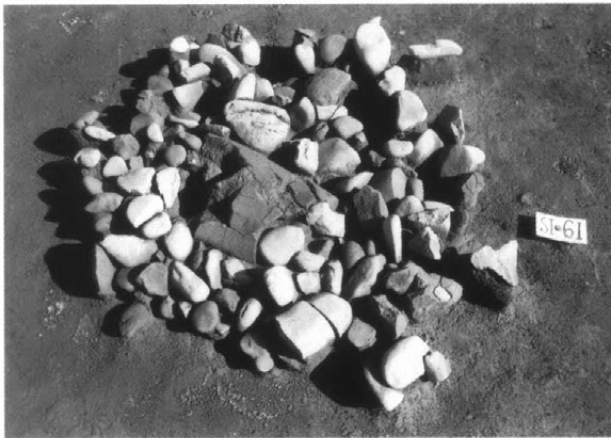
SI-50



SI-59



SI-60



SI-61



SI-64



SI-73



SI-78



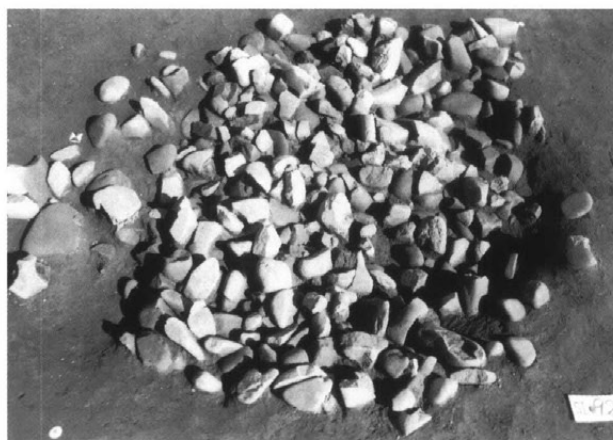
SI-79



SI-82



SI-90



SI-92



SI-93



SI-97



SI-98



SI-99





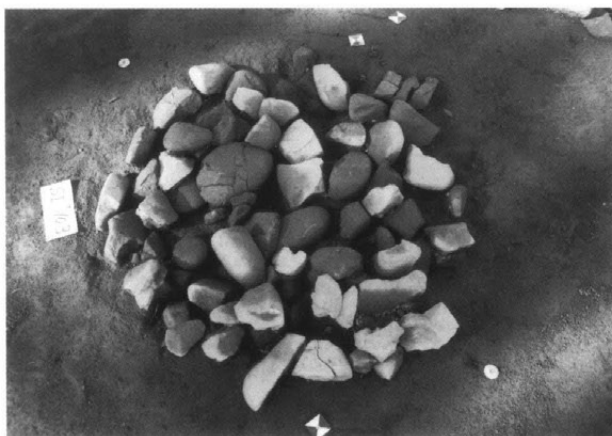
SI-101~120・170②



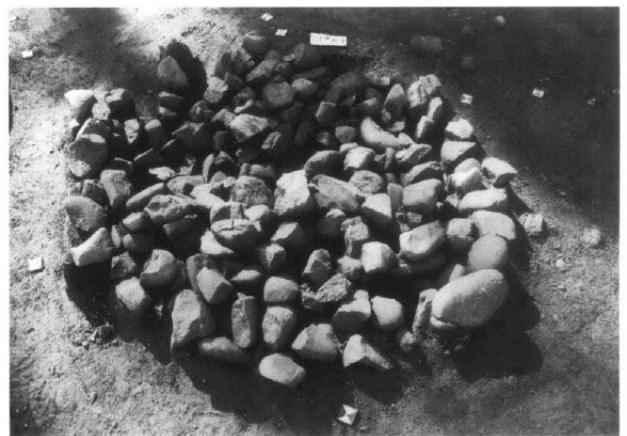
SI-100



SI-102



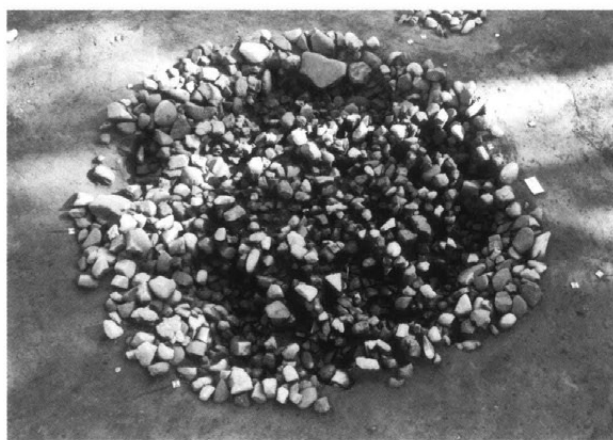
SI-103



SI-107



SI-104半截



SI-104



SI-104配石



SI-112半截



SI-112配石



SI-113 · 114



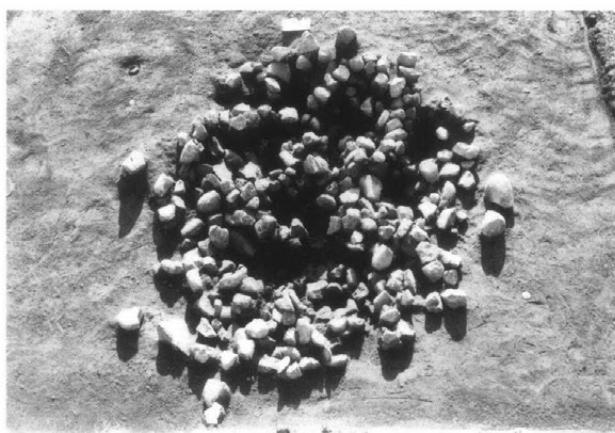
SI-115



SI-118



SI-119



SI-121



SI-122



SI-133~135



SI-144



SI-147



SI-149



SI-151



SI-154



SI-155



SI-157



SI-158



SI-159



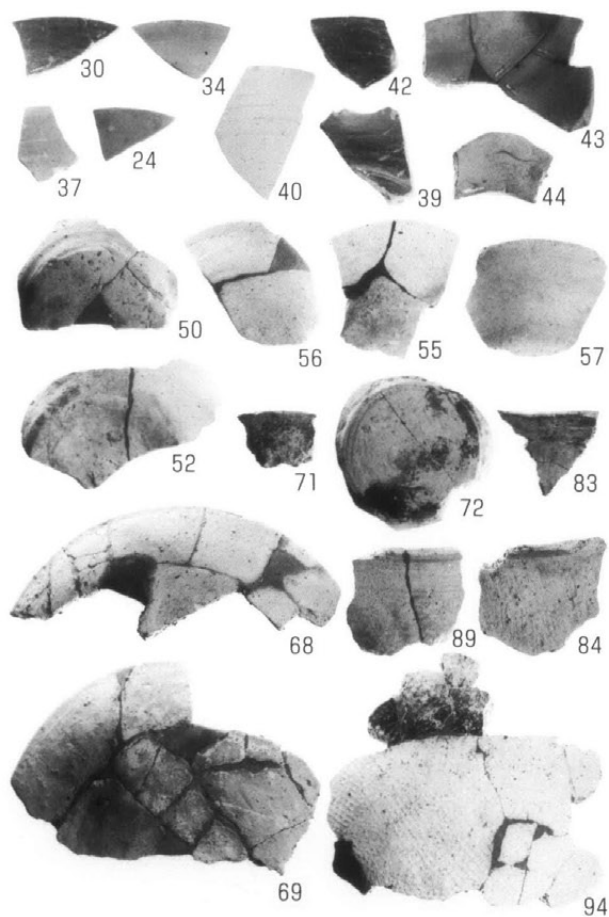
SI-160



SI-164



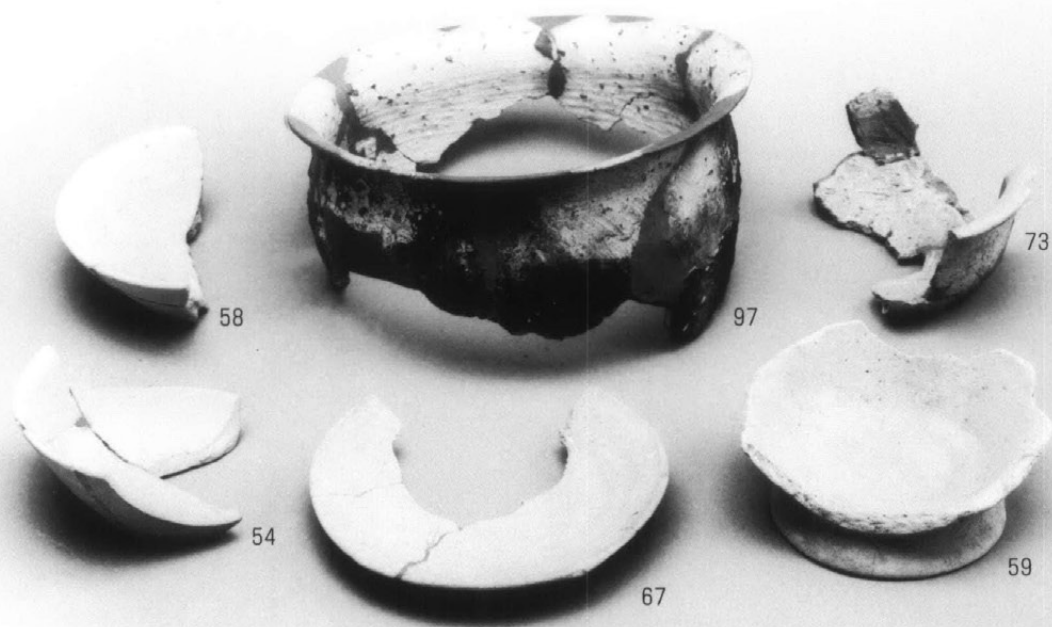
須田木遺跡全景②



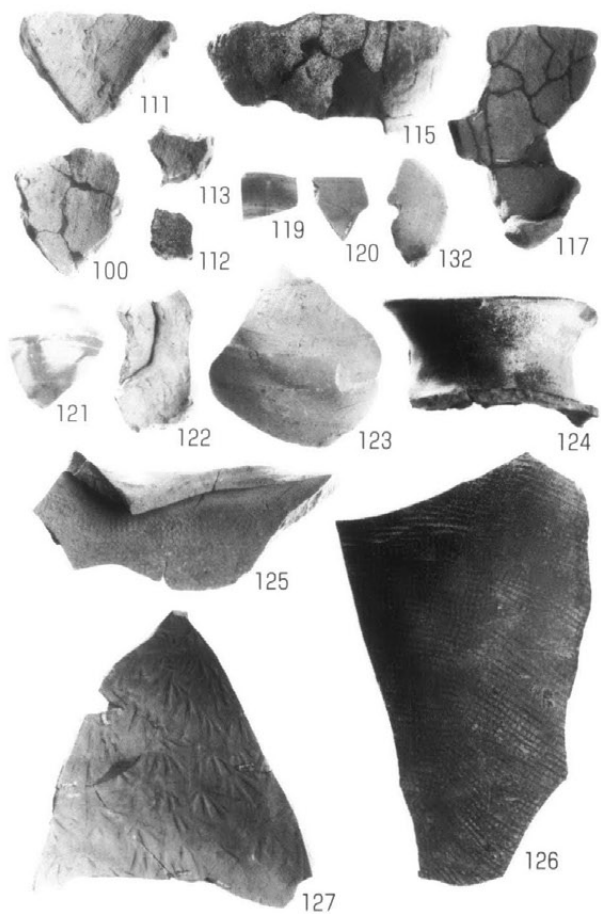
SA-1 出土遺物①



SA-1 出土遺物②



SA-1 出土遺物③



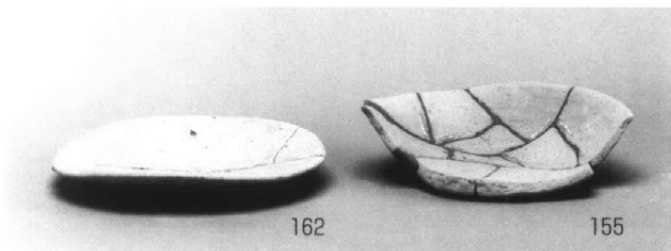
SA-1 出土遺物④



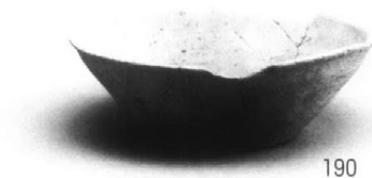
SA-1 出土遺物⑤



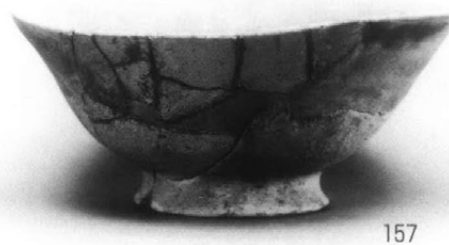
SC-50 出土遺物①



SC-50 出土遺物②



SC-7 出土遺物①

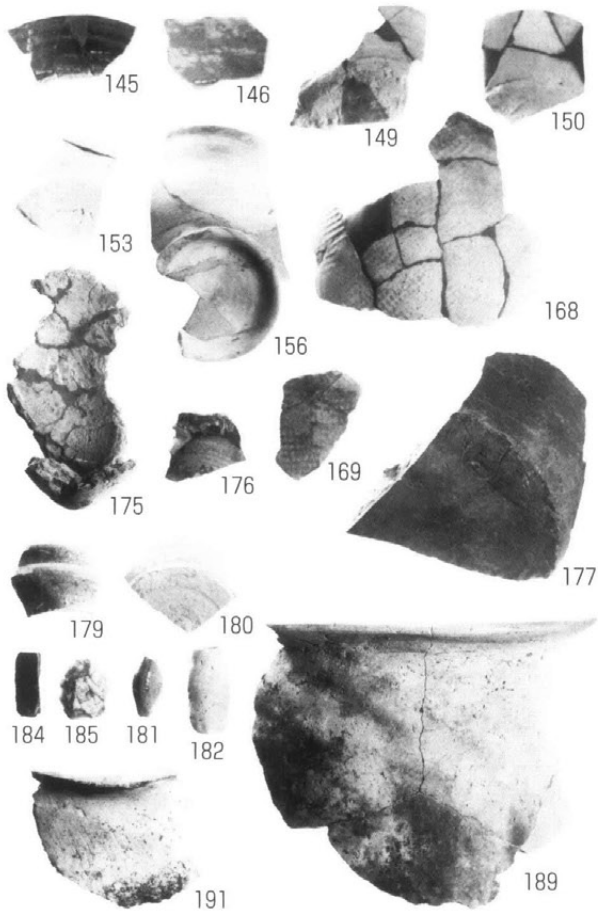


SC-50 出土遺物③

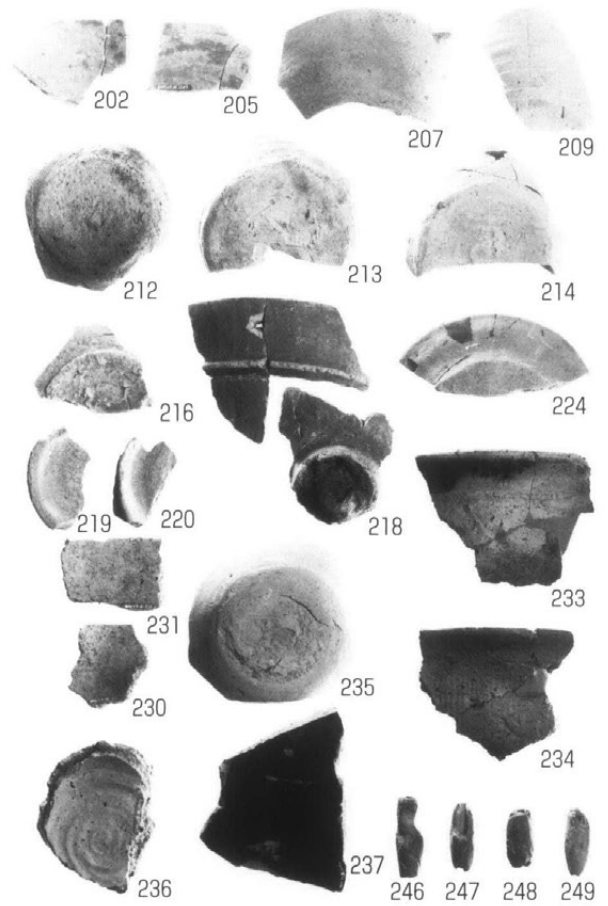


SC-50 出土遺物④

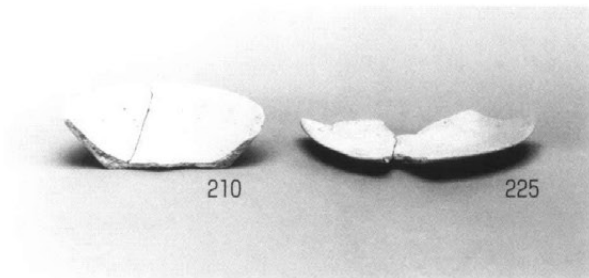
包含層出土土師器①



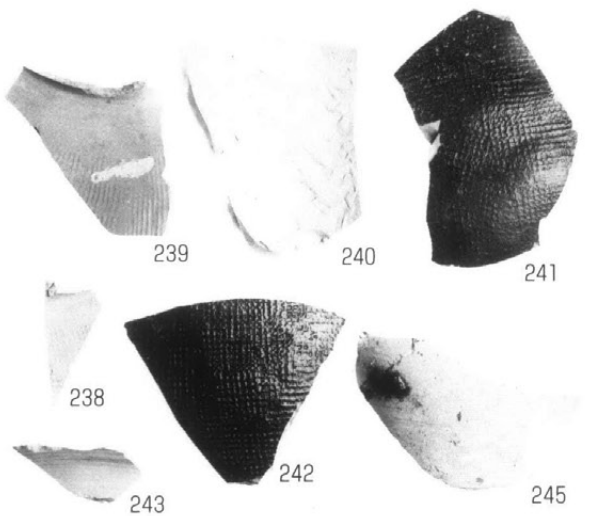
SC-50・5・6・7 出土遺物



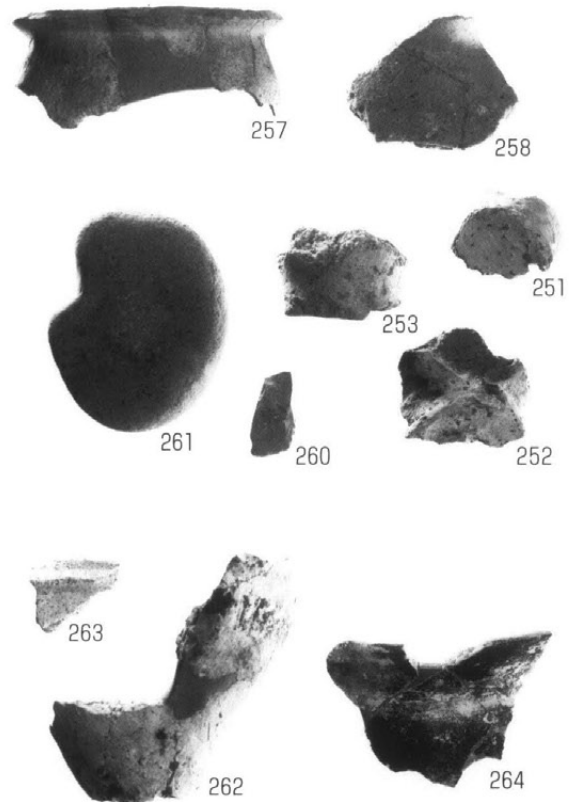
包含層出土土師器・土製品



包含層出土土師器②



包含層出土須恵器



SA-2・3出土遺物





259

250

254

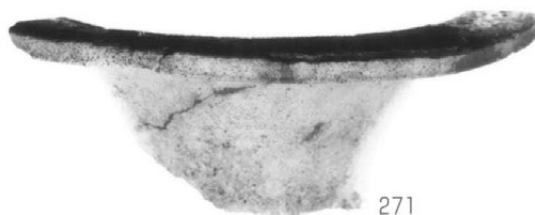
265

SA-2 出土遺物



279

SA-4 出土遺物①

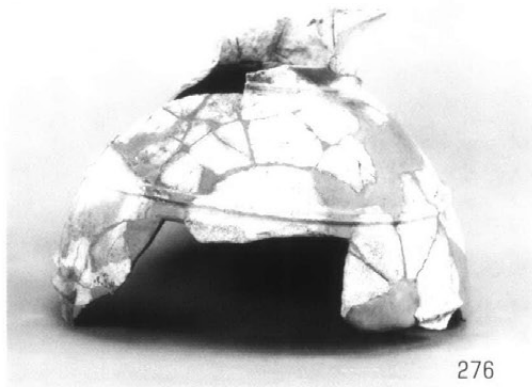


271

SA-4 出土遺物②

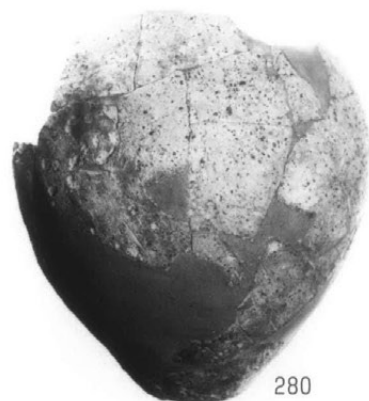


268



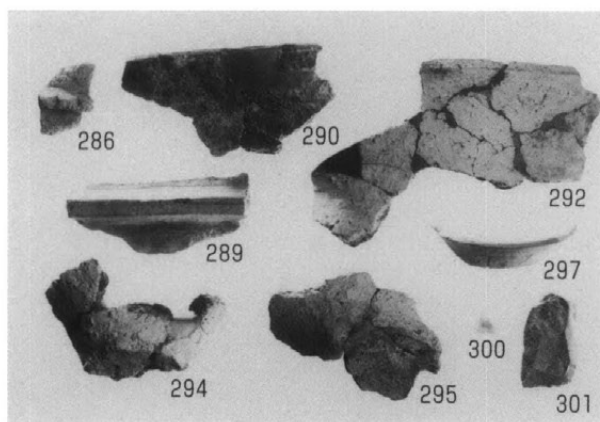
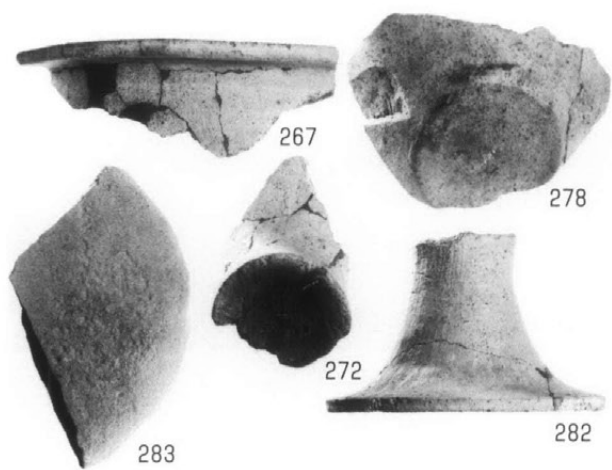
276

SA-4 出土遺物③



280

SA-4 出土遺物④



SA-6 出土遺物①



SA-4.5 出土遺物



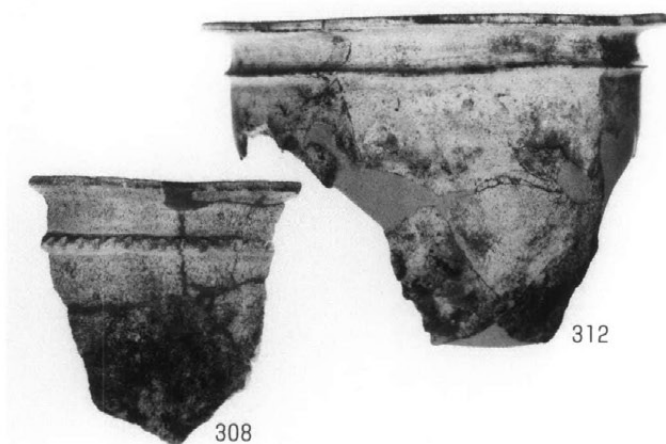
SA-6 出土遺物②



SA-6 出土遺物③



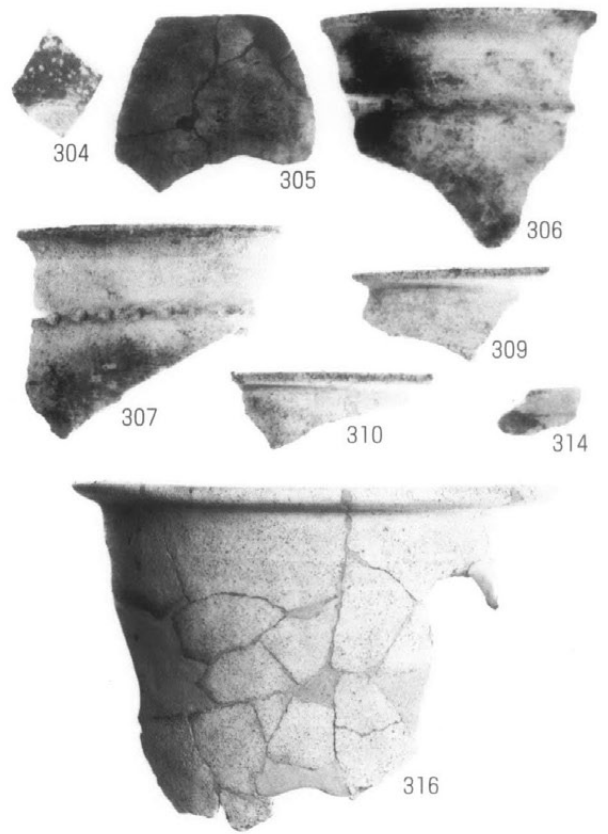
SC-34 出土遺物



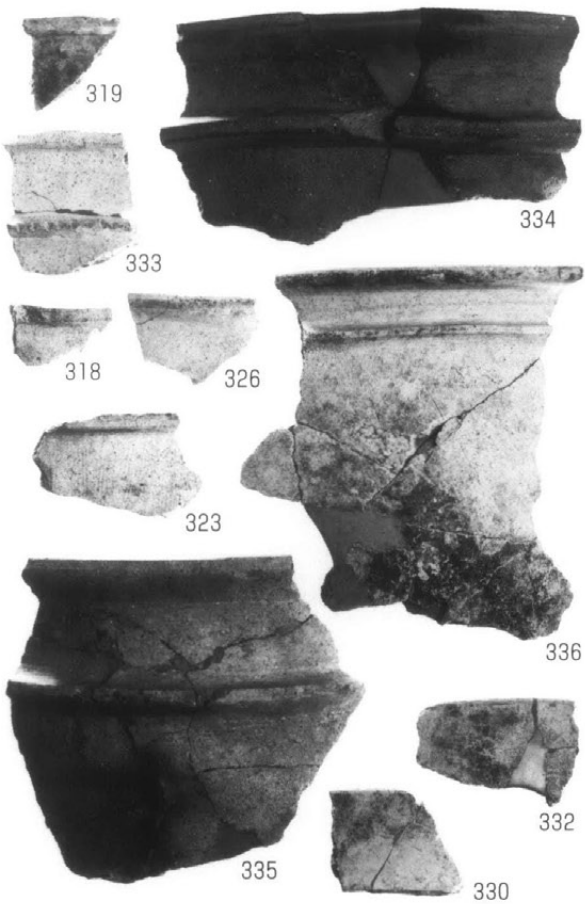
SC-38.41 出土遺物



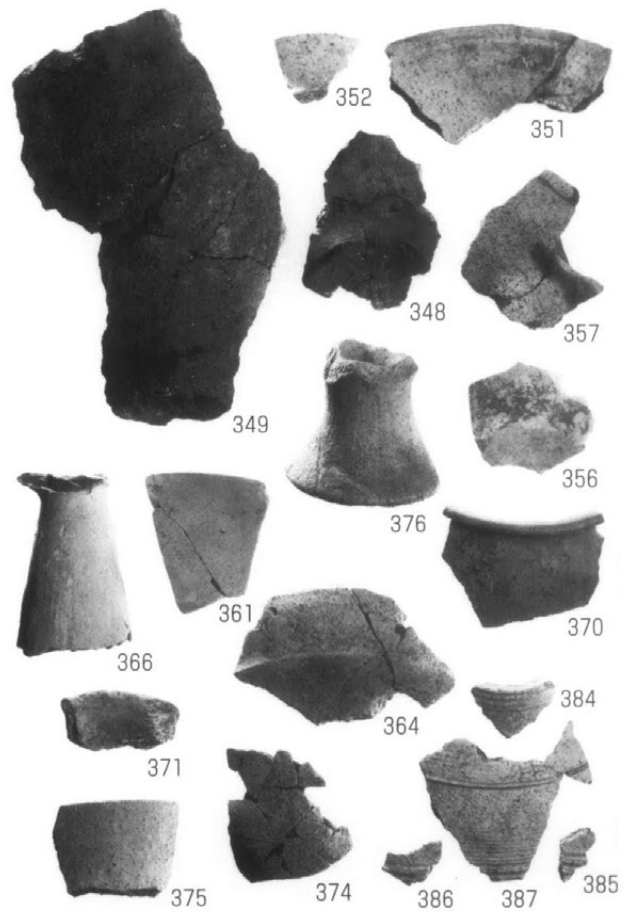
SC-41 出土遺物



SC-35·36·1 出土遺物



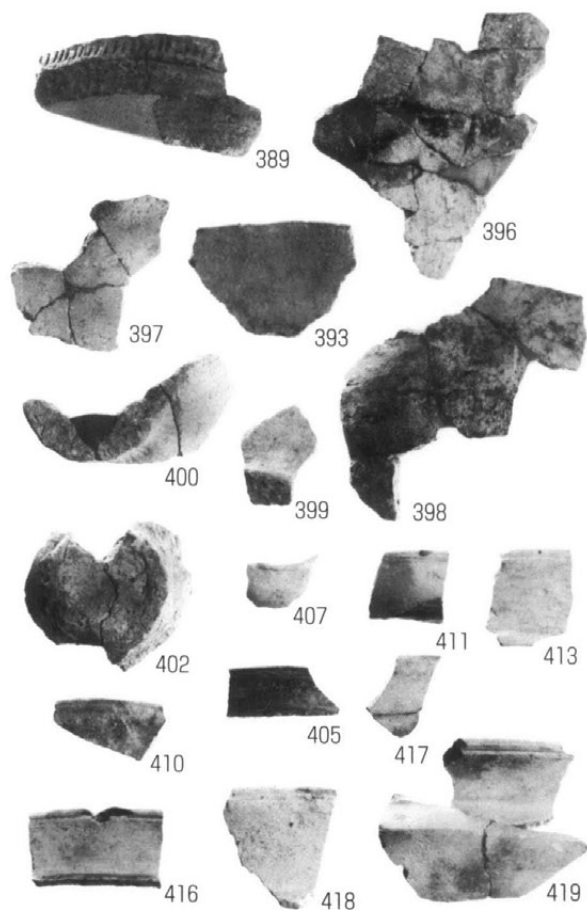
包含層出土弥生土器①



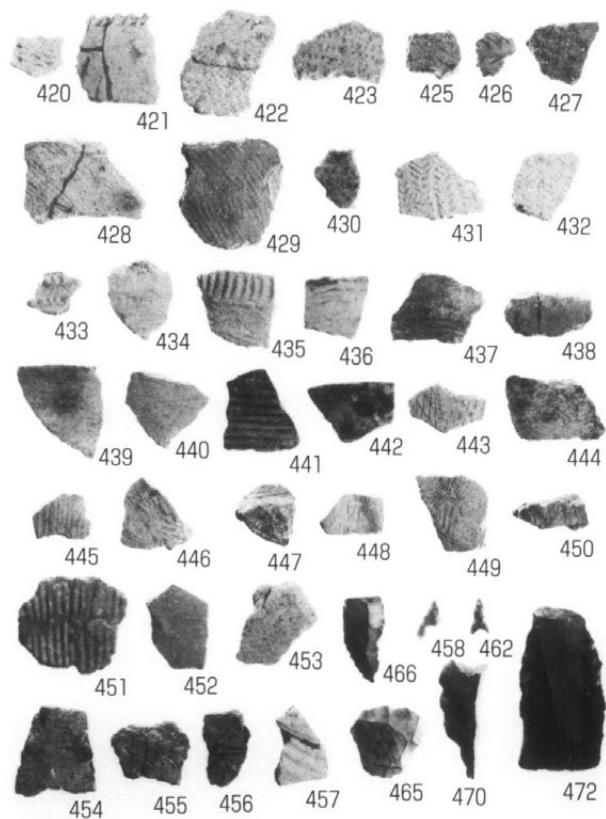
包含層出土弥生土器②



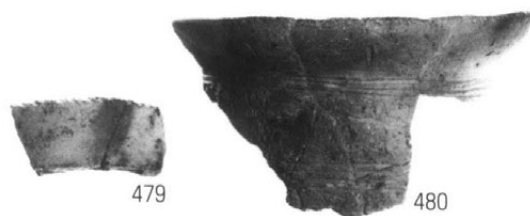
SC-33 出土遺物



包含層出土縄文後・晩期土器



集石遺構内出土遺物



SC-44 出土遺物①

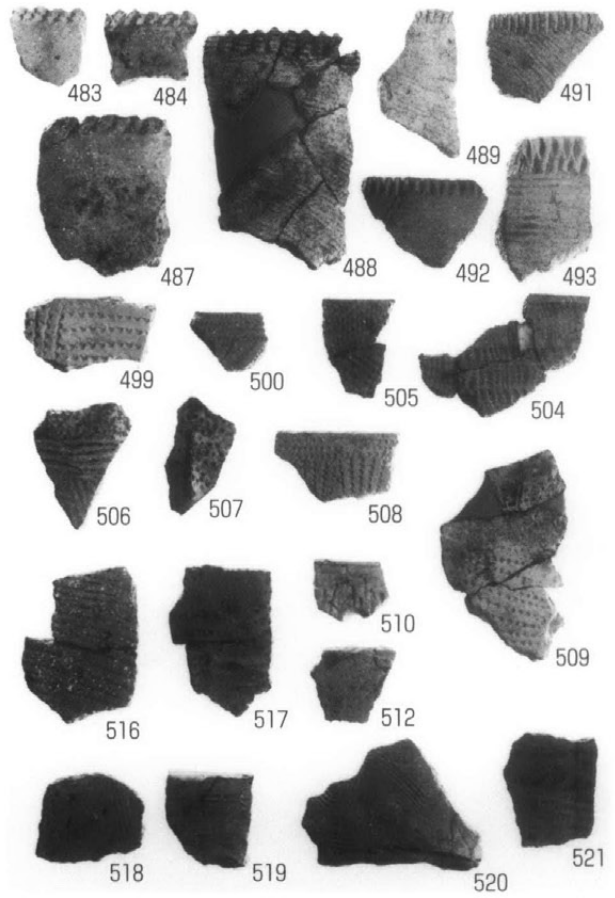


SC-44 出土遺物②

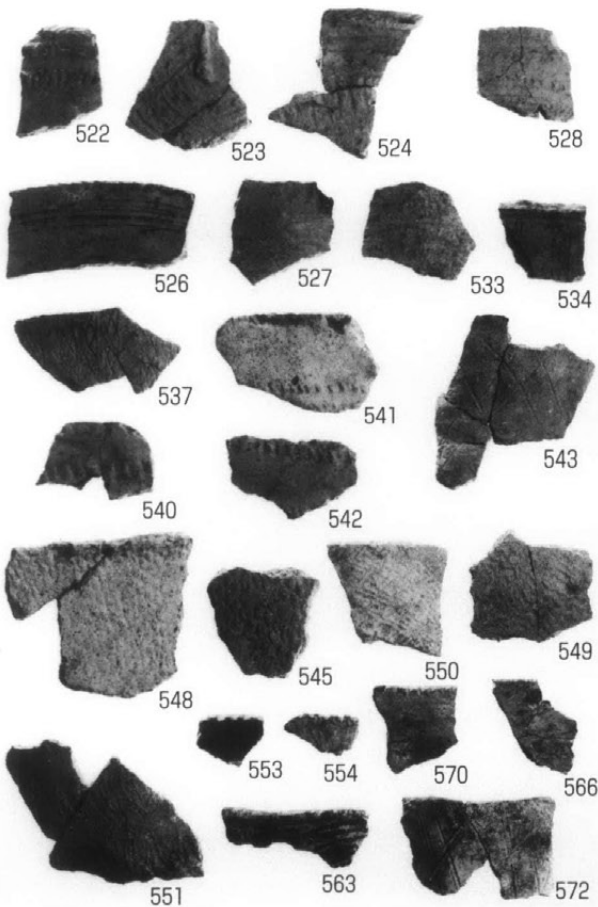


478

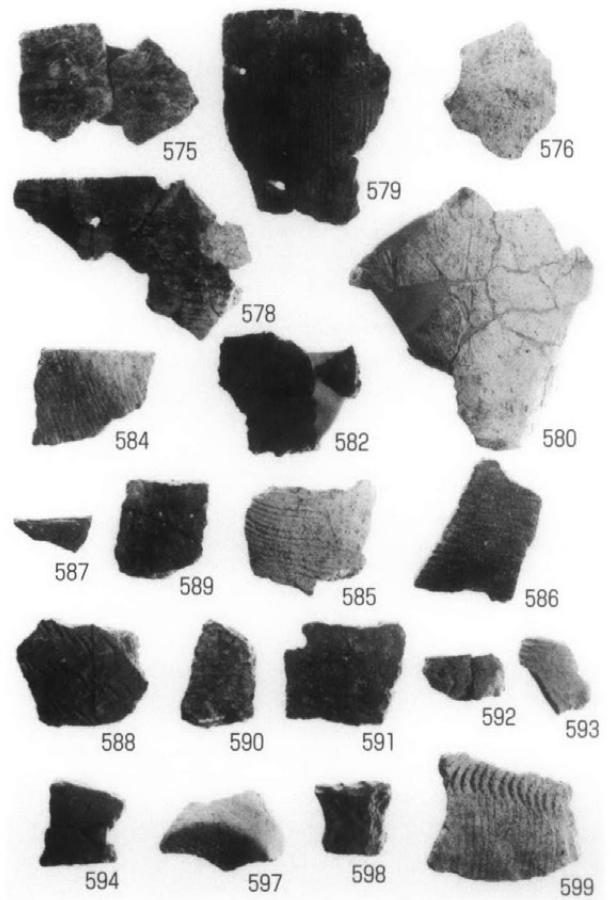
SC-43 出土遺物



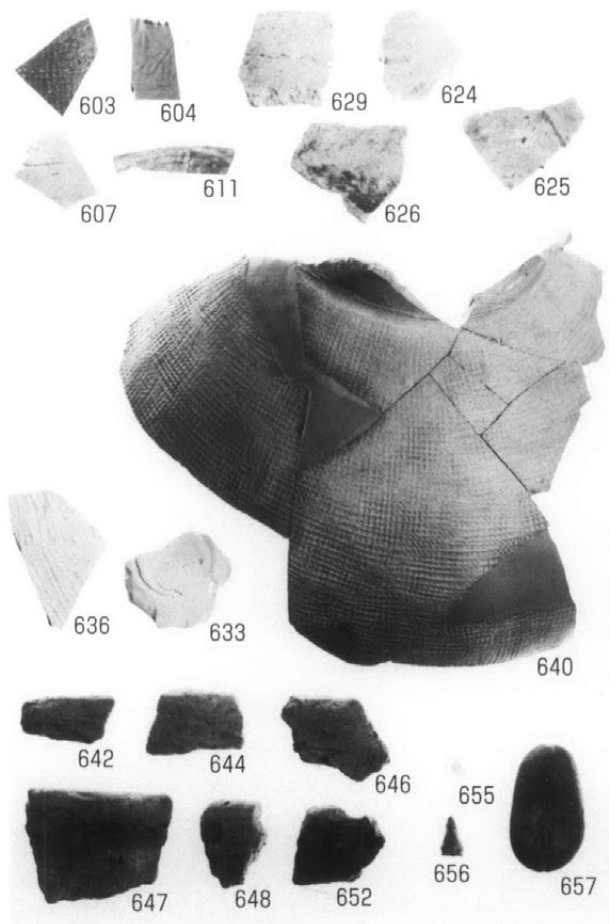
包含層出土縄文早期土器①



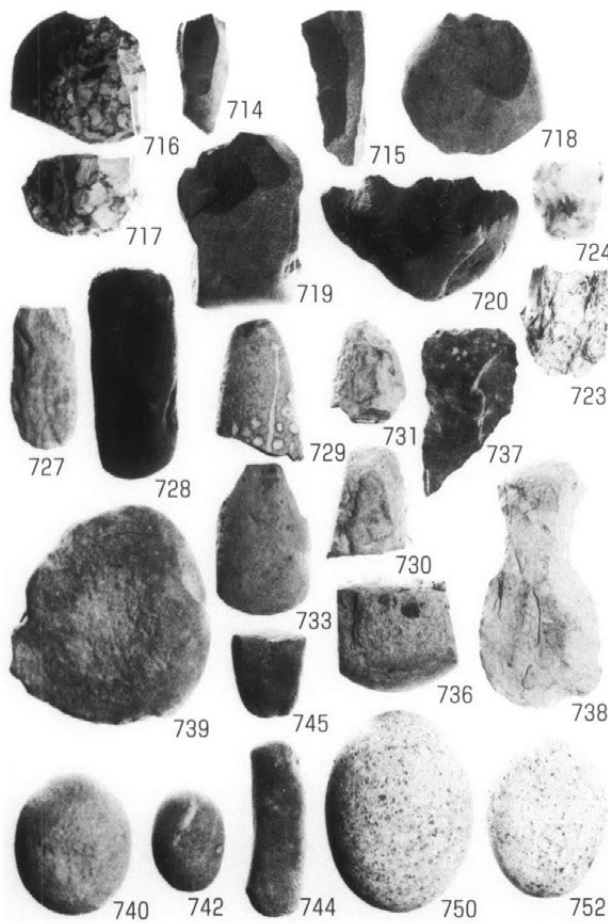
包含層出土縄文早期土器②



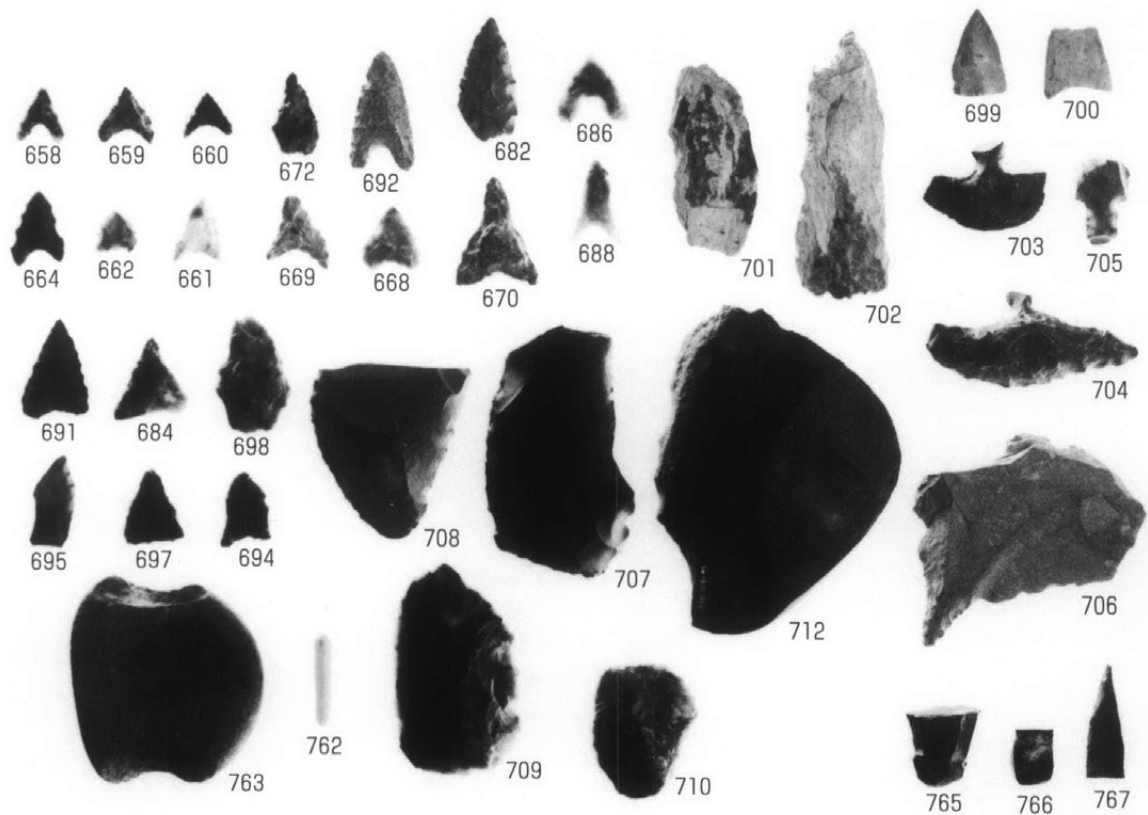
包含層出土縄文早期土器③



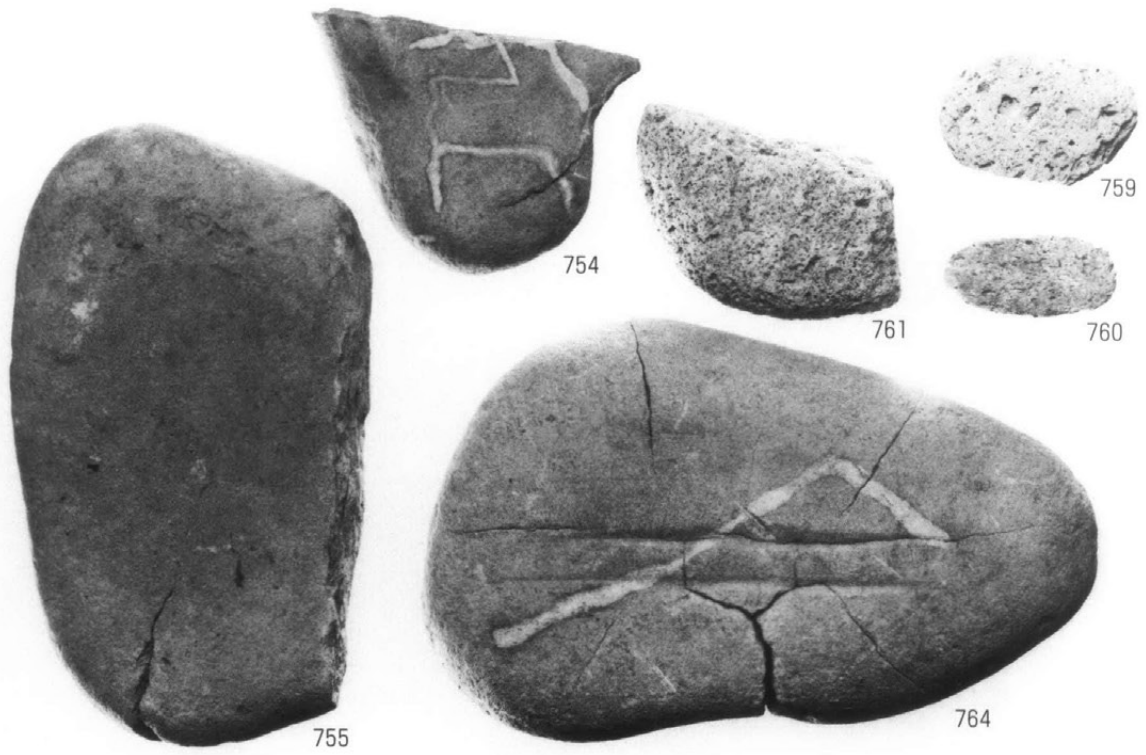
SE-2~4・SX-1・柱穴内出土遺物



包含層出土石器①



包含層出土石器②



包含層出土石器③



SI-101~120・170 調査風景

## 調 査 抄 録

フリガナ	スダキ				
書名	須田木遺跡				
副書名	清武町第2工業団地造成工事に伴う埋蔵文化財調査報告書				
巻次	第1集				
シリーズ名	清武町埋蔵文化財調査報告書				
シリーズ番号	第12集				
編集者名	秋成雅博・伊東但				
発行機関	清武町教育委員会				
所在地	宮崎県宮崎郡清武町大字船引204番地				
発行年月日	2004年3月				
所在遺跡名	所在地	市町村：遺跡番号	北緯	東緯	調査期間
須田木遺跡	清武町大字加納字須田木	清武町：121	31° 51' 31"	131° 24' 23"	1997/9/2 ┆ 1998/2/20
調査面積	調査原因	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物
18,000m <sup>2</sup>	工業団地造成	集落	古代・弥生 縄文後期・ 早期	竪穴住居・土 坑・集石遺構	土師器・須恵 器・弥生土器 ・縄文土器
<b>特記事項</b>					
国内最大級の集石遺構へ検出事例					



---

清武町埋蔵文化財調査報告書 第12集

# 須田木遺跡

清武町第2工業団地造成工事に伴う  
埋蔵文化財調査報告書

発行年月日 平成16年3月29日

編集発行 清武町教育委員会  
〒889-1696 宮崎県宮崎郡清武町大字船引204  
TEL 0985-85-1111

印刷 田中印刷有限公司  
〒880-0022 宮崎市大橋3丁目110番地  
TEL 0985-28-4724

---

